

東京藝術大学キャンパスマスタープラン2025 上野キャンパス編

TOKYO UNIVERSITY OF THE ARTS

CAMPUS MASTER PLAN 2025

UENO CAMPUS





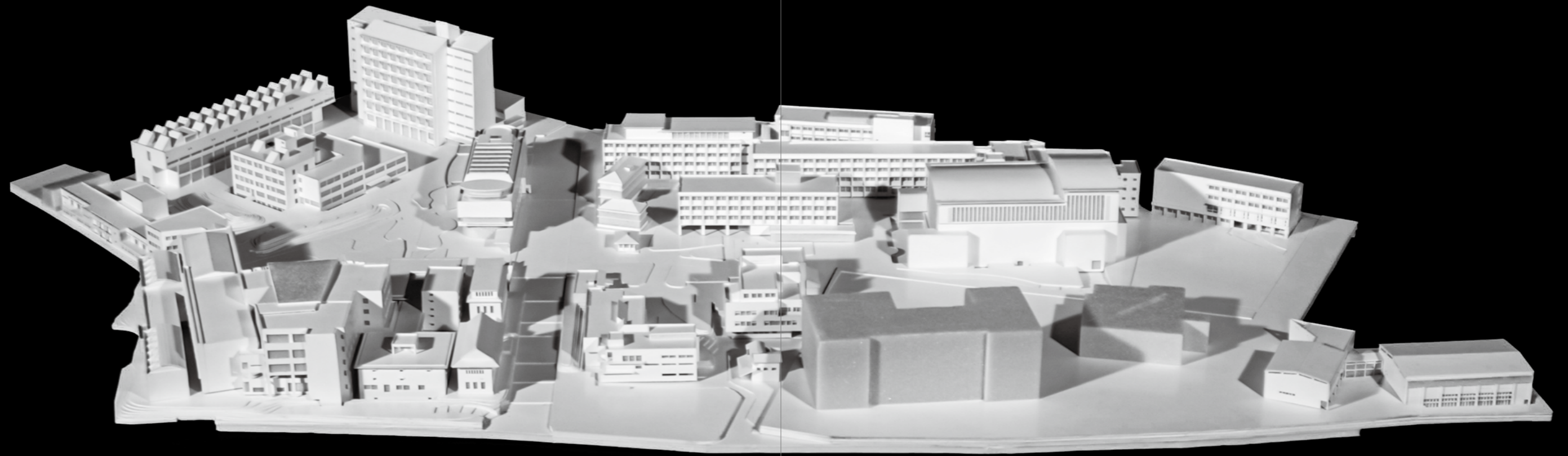
東京藝術大学キャンパスマスタープラン2025 上野キャンパス編

TOKYO UNIVERSITY OF THE ARTS CAMPUS MASTER PLAN 2025 UENO CAMPUS



東京藝術大学キャンパスマスタープラン2025 上野キャンパス編

TOKYO UNIVERSITY OF THE ARTS CAMPUS MASTER PLAN 2025 UENO CAMPUS



ご挨拶

芸術と社会をつなぐ 新たな教育研究の場としての東京藝術大学

日比野克彦 [東京藝術大学長]



東京藝術大学では、2013年に『東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン2013』を策定して以来、「社会に開かれた大学」の実現に向けて、着実な取り組みを進めてまいりました。この10余年で、キャンパスは地域社会とのつながりを深め、教育研究の成果を多様な形で社会に還元する場として大きく進展しました。特に、上野周辺の文化機関との連携、地域住民との協働、さらには全国に広がるアートプロジェクトの展開を通じて、大学が社会と交差し、新たな価値を創出する「共創」の姿が確かなものとなっています。

2013年の策定時にはまだ構想段階にあった「社会との交流」は、その後「共創」へと発展し、この10年余りで大きく進展しました。上野キャンパスとともに、取手・横浜・千住の3つのキャンパス、さらに芸術未来研究場をはじめ、上野桜木、瀬戸内、有楽町など全国各地での実践へと発展を遂げています。これらは、芸術が社会課題に寄与し、人や地域を育て、新しい価値をもたらす可能性を示すものであり、本学の社会的役割は確実に広がっています。

一方で、この10年余りの社会の変化は極めて大きく、かつ急速でした。デジタル技術の革新により芸術表現の領域は一段と拡張し、AIやXR技術の登場は芸術と科学の関係を再定義しつつあります。また、新型コロナウイルス感染症の経験、環境問題や社会的分断、多様性への意識の高まりなど、世界規模の課題が顕在化するなかで、芸術が果たすべき社会的役割も一層重みを増しています。これらの変化は、芸術教育のあり方、大学キャンパスの役割や機能にも見直しを求めるものになります。

上野キャンパスは、本学の中核として教育・研究・創作活動の基盤であると同時に、上野公園をはじめとする都市文化環境と密接に関係しながら、その可能性を常に拡張してきました。しかし、建物配置や動線、景観、施設機能など、歴史を積み重ねるなかで生じた空間的齟齬も少なくありません。これからの社会を担う学生が創造力を最大限に発揮し、研究者が新たな知を生み出し、市民がアートと出会う環境を確保するためには、これらを丁寧に再構成し、未来を担う表現者にふさわしいキャンパス環境を整えていくことが不可欠です。

今回策定する『東京藝術大学キャンパスマスタープラン2025 上野キャンパス編』は、このような社会の変化と本学の歩みをふまえ、学び・創造・交流を支える場として、次世代の表現者を育てるためにふさわしいキャンパス像を明確にするものです。本マスタープランは、教育・研究、地域連携、国際交流、文化創出を強力に支える基盤づくりを進めるための指針として、上野キャンパスのポテンシャルを最大限に引き出すことを目的としています。

より良い芸術教育・研究環境の実現に向け、本学は今後も全学的に取り組むを進めてまいります。本マスタープランの推進にあたり、関係各位の一層のご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

005	ご挨拶	芸術と社会をつなぐ新たな教育研究の場としての東京藝術大学 日比野克彦	
009	00 序		
	00-1	本学の使命と目標	010
	00-2	各キャンパスと附属施設	012
	00-3	上野キャンパスを構成する組織	014
	00-4	プラン策定のための「4つの基本軸」	017
019	01 キャンパスの概要と現状		
	01-1	キャンパスの概要	020
	01-2	施設と取り組みの現状	022
	01-3	各施設の概要	024
	01-4	キャンパス面積表	034
	01-5	各施設の利用状況	038
	01-6	キャンパス全体の主な行事	056
057	02 上野キャンパスマスタープラン2013の検証		
	02-1	上野キャンパスマスタープラン2013アップデートへの取り組み方	058
	02-2	上野キャンパスマスタープラン2013の検証	060
	02-3	上野キャンパスマスタープラン2013策定後に顕在化した事象	064
	02-4	変えてはいけないもの、変えていくもの	066
	02-5	引き続き取り組むべき課題と新たな課題の提示	068
071	03 将来のキャンパスに向けて		
	03-1	「4つの基本軸」と上野キャンパスの方向性	072
	03-2	上野キャンパスが目指す「イノベーション・コモンズ」	073
	03-3	「共創」のための「場」と「人」との関係	074
077	04 4つの計画目標と全体計画		
	04-1	計画目標	078
	04-2	ゾーニング計画	080
	04-3	動線計画	084
	04-4	ランドスケープ	088
	04-5	コミュニティスペース	091
	04-6	全体計画	093

099	05 具体的な整備計画		
	05-1	持続可能な教育研究環境の追求	100
	05-2	広く社会に開かれたキャンパスの展開	102
	05-3	社会との共創	108
	05-4	多様な教育研究活動と快適な環境に向けて	121
127	06 エネルギー管理とCO2削減に向けた計画		
	06-1	取り組みの現況	128
	06-2	今後の方向性	131
133	07 防災と安全対策		
	07	防災と安全対策	134
137	08 大規模改修と改築時期		
	08-1	流れと優先順位	138
	08-2	大規模改修と改築時期の明確化	140
	08-3	各施設の整備履歴	141
	08-4	音楽学部施設建替え	148
151	09 スペースマネジメント		
	09-1	スペースマネジメントの基本的な考え方と方針	152
	09-2	施設の有効活用	154
157	10 付属資料		
	10-1	藝大SDGsへの取り組み	158
	10-2	主要棟現状平面図	160
	10-3	キャンパスグランドデザイン検討組織と名簿	174



00

序

- 00-1 | 本学の使命と目標
- 00-2 | 各キャンパスと附属施設
- 00-3 | 上野キャンパスを構成する組織
- 00-4 | プラン策定のための「4つの基本軸」

本学の使命と目標

「上野キャンパス編」策定の前提として

『東京藝術大学キャンパスマスタープラン2025 上野キャンパス編』は、東京藝術大学(以下「本学」とする)の下記のミッション遂行において、適切なキャンパスの構築を検討するために策定された。これは、上野キャンパスの前回のマスタープランである2013年の策定から12年が経過し、将来に向けてさらなる高度な教育研究活動が展開できるキャンパスを築くための具体的な計画である。

本学の概要

東京藝術大学は、国立学校設置法(昭和24年法律第150号)の公布施行により、東京美術学校(現在の美術学部)、東京音楽学校(現在の音楽学部)を包括して、昭和24年5月に設置され、美術学部(絵画科・彫刻科・工芸科・建築科・芸術学科)、音楽学部(作曲科・声楽科・器楽科・指揮科・楽理科)の2学部10学科と附属図書館が置かれました。

その後何度かにわたって学部の拡充改組が行われ、現在は美術学部(絵画科・彫刻科・工芸科・デザイン科・建築科・先端芸術表現科・芸術学科)、音楽学部(作曲科・声楽科・器楽科・指揮科・邦楽科・楽理科・音楽環境創造科)の2学部14学科と、附属図書館、大学美術館、演奏芸術センター等の施設で構成されています。

大学院は、美術研究科・音楽研究科・映像研究科・国際芸術創造研究科の4研究科において修士課程・博士後期課程を設置しています。

また、大学別科、及び音楽学部附属する教育・研究施設として音楽高等学校を設置しています。

本学の使命と目標

本学では使命と目標を以下のように掲げている。

東京藝術大学は、その前身である東京美術学校、東京音楽学校の創立以来130余年間、我が国の芸術教育研究の中枢として、日本文化の伝統とその遺産を守りつつ、世界の芸術思想及び技術を摂取、融合を図り幾多の優れた芸術家、中等教育から高等教育に亘る芸術分野の教育者・研究者を輩出してきました。

こうした歴史的経緯をふまえつつ、総合芸術大学として、創立以来の自由と創造の精神を尊重し、我が国ひいては世界の芸術文化の発展を担い、社会とともに芸術の多様な価値を創出することが、東京藝術大学の使命であると考えています。

また、この使命の遂行のため、以下のことを基本的な目標としています。

- ・世界最高水準の芸術教育を行い、高い専門性と豊かな人間性を有した芸術家、芸術分野の教育者・研究者及び芸術に携わる全ての実践者を養成する。
- ・国内外の芸術教育研究機関や他分野との交流等を行いながら、伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進する。
- ・心豊かな活力ある社会の形成にとって芸術のもつ重要性への理解を促す活動や、全ての人が芸術に親しむ機会の創出に努め、芸術をもって社会に貢献する。

この使命と目標を実現するため、持続可能なキャンパスの形成を図ることが、本マスタープランの目的である。



各キャンパスと附属施設

4つのキャンパスと4つの附属施設について

本学のキャンパスは、東京都台東区上野公園内、茨城県取手市、神奈川県横浜市、足立区千住に所在し、大部分の学科やその他の施設は上野キャンパスに集中しています。また、取手キャンパスでは美術学部2年以上の先端芸術表現科、大学院の一部（壁画・ガラス・先端芸術表現・グローバルアートプラクティス）、横浜キャンパスでは大学院映像研究科、千住キャンパスでは音楽学部音楽環境創造科と大学院音楽研究科音楽文化学専攻の研究分野及び大学院国際芸術創造研究科の多くの学生が学んでいます。

その他附属施設として、奈良県奈良市に美術学部附属古美術研究施設、東京都足立区に藝心寮、東京都新宿区に美術愛住館、東京都台東区に上野桜木地域連携棟（藝大部屋）を設置し、教育研究活動にあたっている。

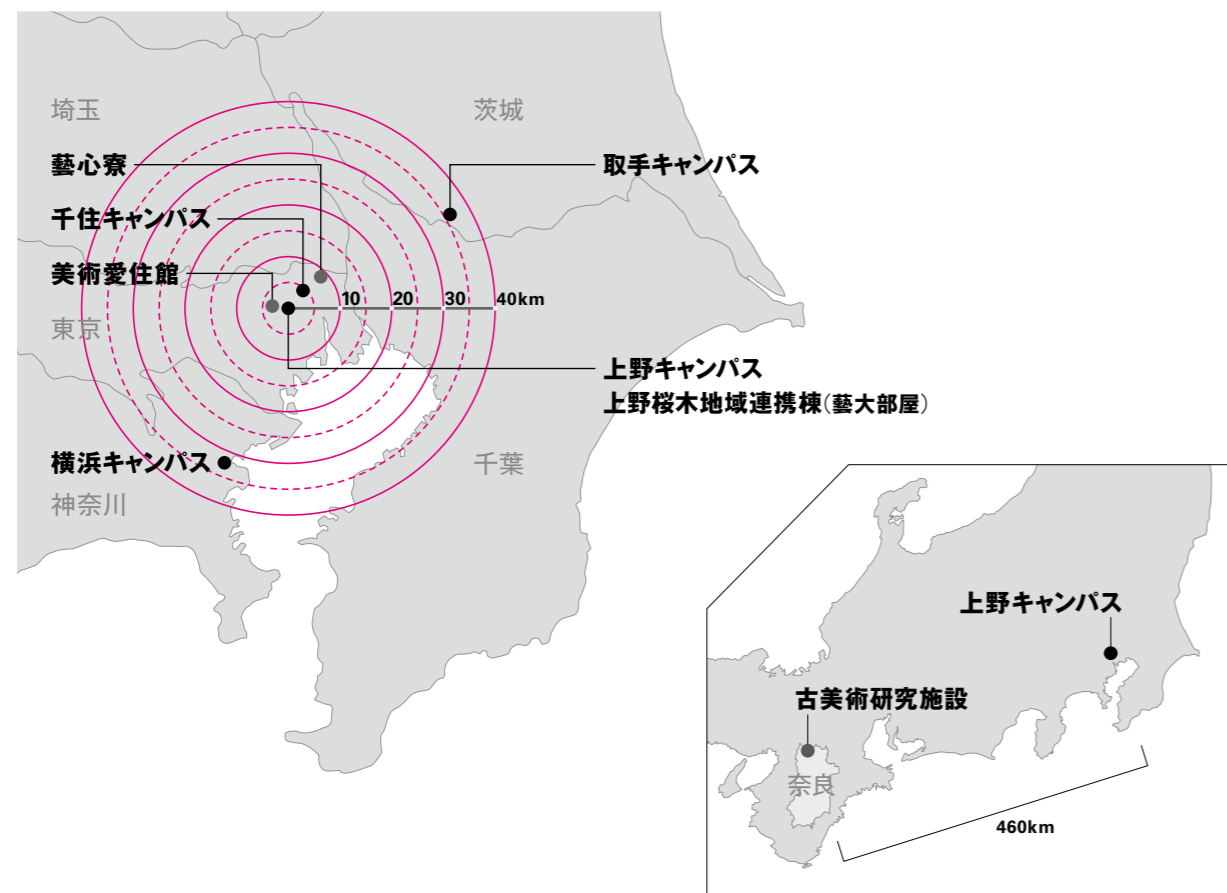
キャンパス

- ・ 上野キャンパス | 東京都台東区
- ・ 取手キャンパス | 茨城県取手市
- ・ 横浜キャンパス | 神奈川県横浜市
- ・ 千住キャンパス | 東京都足立区

附属施設

- ・ 美術学部附属古美術研究施設 | 奈良県奈良市
- ・ 藝心寮 | 東京都足立区
- ・ 美術愛住館 | 東京都新宿区
- ・ 上野桜木地域連携棟（藝大部屋） | 東京都台東区

fig.01 | 4つのキャンパスと4つの附属施設の位置関係



上野キャンパスを構成する組織

本キャンパスでは、以下の教育研究組織、附属機関および各センターが連携し、一体となって教育研究活動に取り組んでいる。さらに、これらの組織を複合的に組み合わせることで、本学ならではの特色ある共創の場づくりを目指している。

美術学部・大学院美術研究科

絵画科・絵画専攻、彫刻科・彫刻専攻、工芸科・工芸専攻、デザイン科・デザイン専攻、建築科・建築専攻、先端芸術表現科(1年生)、芸術学科・芸術学専攻、文化財保存学専攻、附属写真センター、保健体育

音楽学部・大学院音楽研究科

作曲科・作曲専攻、声楽科・声楽専攻、オペラ専攻、器楽科・器楽専攻、指揮科・指揮専攻、邦楽科・邦楽専攻、楽理科・音楽文化学専攻、音楽環境創造科、音楽総合研究センター、早期教育リサーチセンター、国際交流担当、広報強化担当、附属音楽高等学校、藝大フィルハーモニア管弦楽団、大学別科

大学院映像研究科

ゲーム・インタラクティブアート専攻(2026年度開設)

大学院国際芸術創造研究科

アートプロデュース専攻(一部)

附属機関・センター等

附属図書館、大学美術館、社会連携センター、未来創造継承センター、言語・音声トレーニングセンター、演奏芸術センター、保健管理センター、芸術情報センター(AMC)、藝大アートプラザ、学生相談室、グローバルサポートセンター、教養教育センター、特別修学支援室、教職支援センター、キャンパスランドデザイン推進室、芸術教科研修推進室、アートキャリア・オフィス、共創拠点推進機構、キュレーション教育研究センター、SDGs推進室、芸術未来研究場

事務局

企画総務課、経営改革プロジェクト課、人事労務課、財務会計課、社会連携課、学生課、施設課

その他

同窓会組織、福利厚生

芸術未来研究場

芸術未来研究場は、人が生きる力であるアートを根幹に据え、人類と地球のあるべき姿を探求するための組織として2023年4月に創設されました。閉じた施設としての「研究所」ではなく、様々なプレイヤーが集い、つながり、社会に開かれたアートを実践し、未来を共につくっていく場だから「研究場」と名付けています。東京藝術大学は、伝統の継承と新しい表現の創造のための教育研究機関であると同時に、アートの未来を常に考え、様々なステークホルダーと共に社会を形づくる主体でもあります。アートの礎である「いまここがないものをイメージする力」は、世界を変え、未来をつくる力です。これまでも、学部、学科、研究室単位では様々な学外の組織との協働がありましたが、今後は全学横断的にこれを推進していくことで、企業・官公庁・他の教育研究機関との連携を強化し、社会の様々な領域におけるアートの新たな価値や役割を増やしていきます。



また、こうした連携を実践する基盤として、芸術未来研究場では次の6つの横断領域を設定しています。

ケア&コミュニケーション

医療、福祉や地域コミュニティをはじめとするWell-beingな社会づくりにおけるアートの社会的価値を探求します。

アートDX

デジタル技術やICT技術を活用した教育研究を推進し、アートの可能性を拓きます。

クリエイティブアーカイヴ

多様化する表現手法に対応した、アートの保存・継承と、新たな創造への活用に関する研究を推進します。

キュレーション

対話と協働を通してアートと現代社会との関係性を紡ぎ上げる人材の育成と実践的な研究を行います。

アート×ビジネス

教育研究成果の社会実装・事業化を推進し、芸術産業の創出・発展に寄与します。

芸術教育・リベラルアーツ

東京藝大における教育のあり方を探究しながら、より幅広い対象に芸術教育を拓き、地域や年齢、社会的属性に関係なく、誰もが自身の人生の中にアートを感じられる社会づくりを推進します。

これらが互いに領域の枠を超えて混じり合い、芸術と社会の未来を切り拓く新たなプラットフォーム「芸術未来研究場」が、今ここからはじまります。

「イノベーション・commons(共創拠点)」とは

- ・あらゆる分野、あらゆる場面で、あらゆるプレーヤーが共に創造活動を展開する「共創」の拠点
- ・教育研究施設の個別の空間だけでなく、食堂や寮、屋外空間等も含めキャンパス全体が有機的に連携した「共創」の拠点
- ・対面とオンラインのコミュニケーションが融合し、ソフトとハードが一体となって取り組まれる「共創」の拠点

→多様な学生・研究者や異なる研究分野の「共創」、地域・産業界との「共創」の促進等により、
教育研究の高度化・多様化・国際化、地方創生や新事業・新産業の創出に貢献

———文部科学省「次期国立大学法人等施設整備計画策定に向けた最終報告」(令和2年12月22日)より

本計画では上記文部科学省の定義をもとに、上野キャンパスの特徴をいかした共創の場(共創拠点)を、「上野キャンパス イノベーション・commons」というキーワードにすることで、将来の方向性のひとつとして設定している。

プラン策定のための「4つの基本軸」

『東京藝術大学キャンパスマスタープラン2025 上野キャンパス編』では、『東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン2013』(以下『上野キャンパスマスタープラン2013』とする)の整備方針の方向性を継承しつつ、下記の通り「基本的方向性」、「策定の手順」、「策定のための検討の枠組」を明確化した「4つの基本軸」(全キャンパスマスタープランに共通するものとして、第166回教育研究評議会(平成31年3月7日)にて報告されたもの)を新たに設定している。

1— 基本的方向性

前述の「本学の使命と目標」を実現するための持続可能なキャンパスを目指す。

2— 策定の手順

本学に課せられた「使命と目標」に沿ったキャンパスの特性や方針の構築を行い、各キャンパス・施設の役割の整理と検討、および改修計画の道筋の具体的策定を示すものとする。

3— 策定のための検討の枠組

検討の枠組みとしての「4つの基本軸」を設定し、検討すべき事項を対応させると以下ようになる。

キャンパスマスタープラン策定は、これら「4つの基本軸」に沿って課題の方向性を整理する。

4つの基本軸

芸術系に特化した教育と創造のためのキャンパス

- ・世界最高水準の芸術教育の環境
- ・高い専門性の確保
- ・芸術家に求められるリベラルアーツの充実
- ・公開発表空間の提供

創造性を広げる交流の場としてのキャンパス

- ・大学に集う多様な人々の交流:
学生・教員・職員・地域住民・見学者/国籍/性別/年齢
- ・多様なアクティビティに対応する機能の設定

地域社会の核としてのキャンパス

- ・各キャンパスの立地条件に対応した役割の設定
- ・地域社会との交流を可能とする場の設定
- ・各キャンパスの景観特性に応えるデザイン

持続可能な総合芸術拠点としてのキャンパス

- ・計画的な施設の維持管理(長期的展望に立ったマネジメント)
- ・大学経営の視点
- ・改修時等への柔軟な対応
- ・施設維持の低コスト・低負荷の推進
- ・効率と多様性が両立する集約化の検討
- ・安全・安心なキャンパス
- ・学内一元的な管理体制の確立(キャンパスランドデザイン推進室の役割の明確化)

キャンパスマスタープラン策定の方向性の明確化

前項をふまえ、基本的に以下の方法を用いて各キャンパスの課題の整理・検討を行い、キャンパスマスタープラン策定への大きな方向性を明確化する。

多様で複雑な各キャンパスの施設や教育研究活動の関係を整理・検討するために、下図のように「キャンパスの特性や方向性」を中心に4つの基本軸を四方に構え、「場・空間」「共創」「人・団体」を同心円状に配置した図を用いる。

キャンパス内の既存施設や空間、必要とする共創の場、教育研究組織、地域住民等の要素を、関係する軸の方向へプロットする(重複もある)ことで、将来の方向性を大きな視点で捉える。

1— 施設の現状:

各施設の調査と分析により現状を把握する



2— 施設の課題:

「施設の現状」より課題を整理する



3— 将来の方向性:

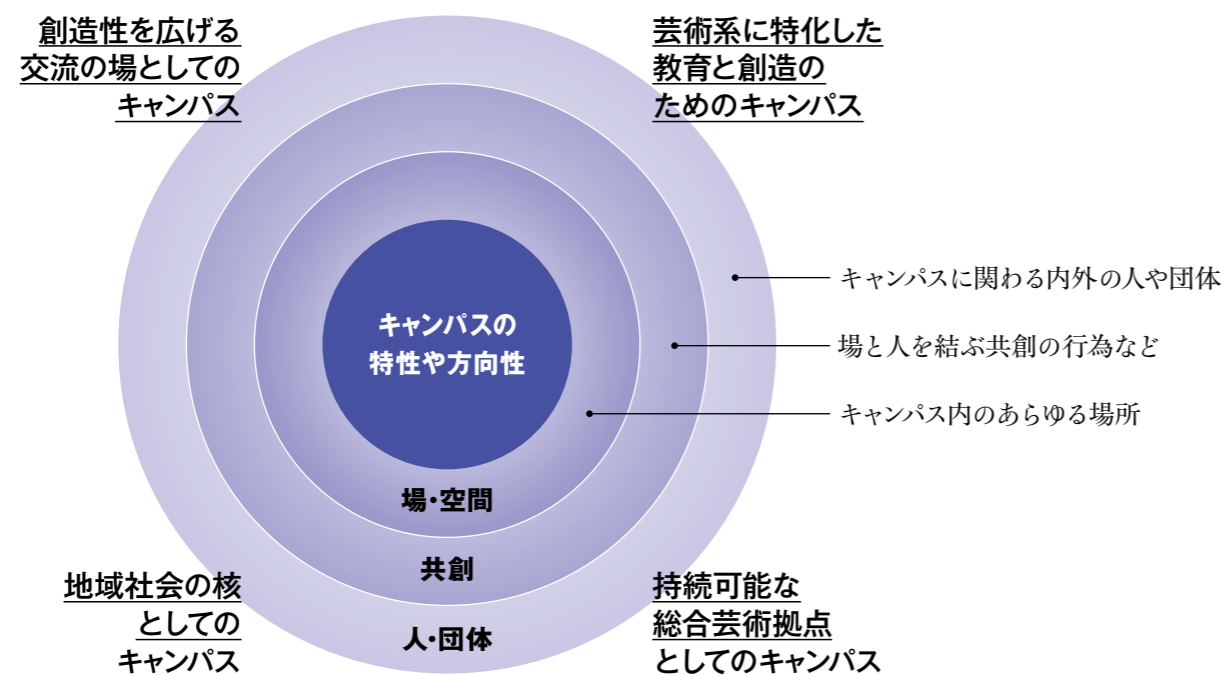
「施設の課題」を「4つの基本軸」に沿って検討し、将来の方向性を示す

「イノベーション・コモンズ(共創の場)」としての目標を示す

「4つの基本軸」に基づいて具体的な「場・空間」「共創」「人・団体」の関係を以下の概念図のように整理する

上記の検討を経て、計画目標・全体計画・各施設の整備計画等の道筋の具体的策定へと展開していく。

fig.02 | 「4つの基本軸」に基づいた「場・空間」「共創」「人・団体」の関係(基本概念図)



01

キャンパスの 概要と現状

- 01-1 | キャンパスの概要
- 01-2 | 施設と取り組みの現状
- 01-3 | 各施設の概要
- 01-4 | キャンパス面積表
- 01-5 | 各施設の利用状況
- 01-6 | キャンパス全体の主な行事

01-1

キャンパスの概要

本キャンパスは3つの敷地に分かれ、「本学の使命と目標」を実践するための施設が整備されている。

主な施設として絵画棟、彫刻棟、金工棟、総合工房棟、中央棟、国際芸術リソースセンター(IRCA)、大学美術館、正木記念館、陳列館、音楽学部1号館～5号館、音楽学部練習ホール館、音楽学部附属音楽高等学校、奏楽堂、大学会館、大学本部棟、国際交流棟、Arts&Science LAB.、赤レンガ1・2号館、招聘教員宿泊施設、体育館などがある。

これらの施設は、制作や練習などの教育研究の場をはじめ、研究・展示・発表といった専門性に特化した施設に加え、歴史的建造物や国際交流を目的とした施設など、多様な機能を備えている。

各施設の詳細については、^{p.024}[01-3 | 各施設の概要]で述べる。

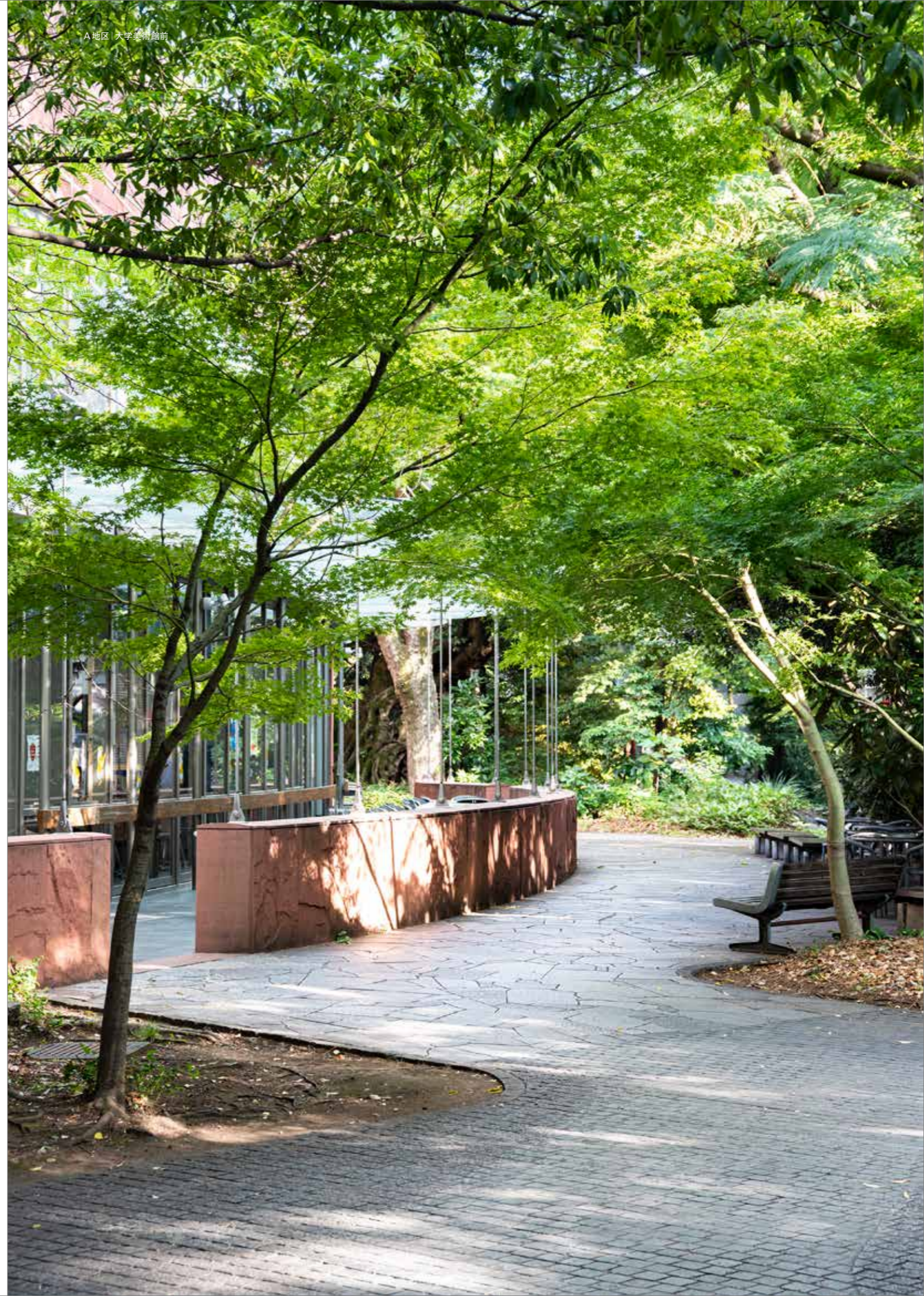
さらに、本キャンパスは、本学の4つのキャンパス(上野・取手・千住・横浜)および4つの附属施設(美術学部附属古美術研究施設、藝心寮、美術愛住館、上野桜木地域連携棟(藝大部屋))の中で、中心的な役割を担っている。

fig.03 | 施設の配置



上野キャンパスは、JR上野駅から10分程の場所に位置し、学生、教職員計約3500人が利用する本学の主要なキャンパスである。

敷地概要 (2025年現在)	実態調査に基づく
設置年度:	1949年
所在地:	東京都台東区上野公園12-8
敷地面積:	69,549㎡
建築面積:	30,339㎡
延べ面積:	100,209㎡
都市計画法等の規定:	市街化区域、文教地区、高層住居誘導地区、特定用途誘導地区、特定防災街区整備地区、風致地区、第一種中高層住宅専用地域、準防火地域、高度地区、景観地区
日影規制:	GL+4.0m 4-2.5時間

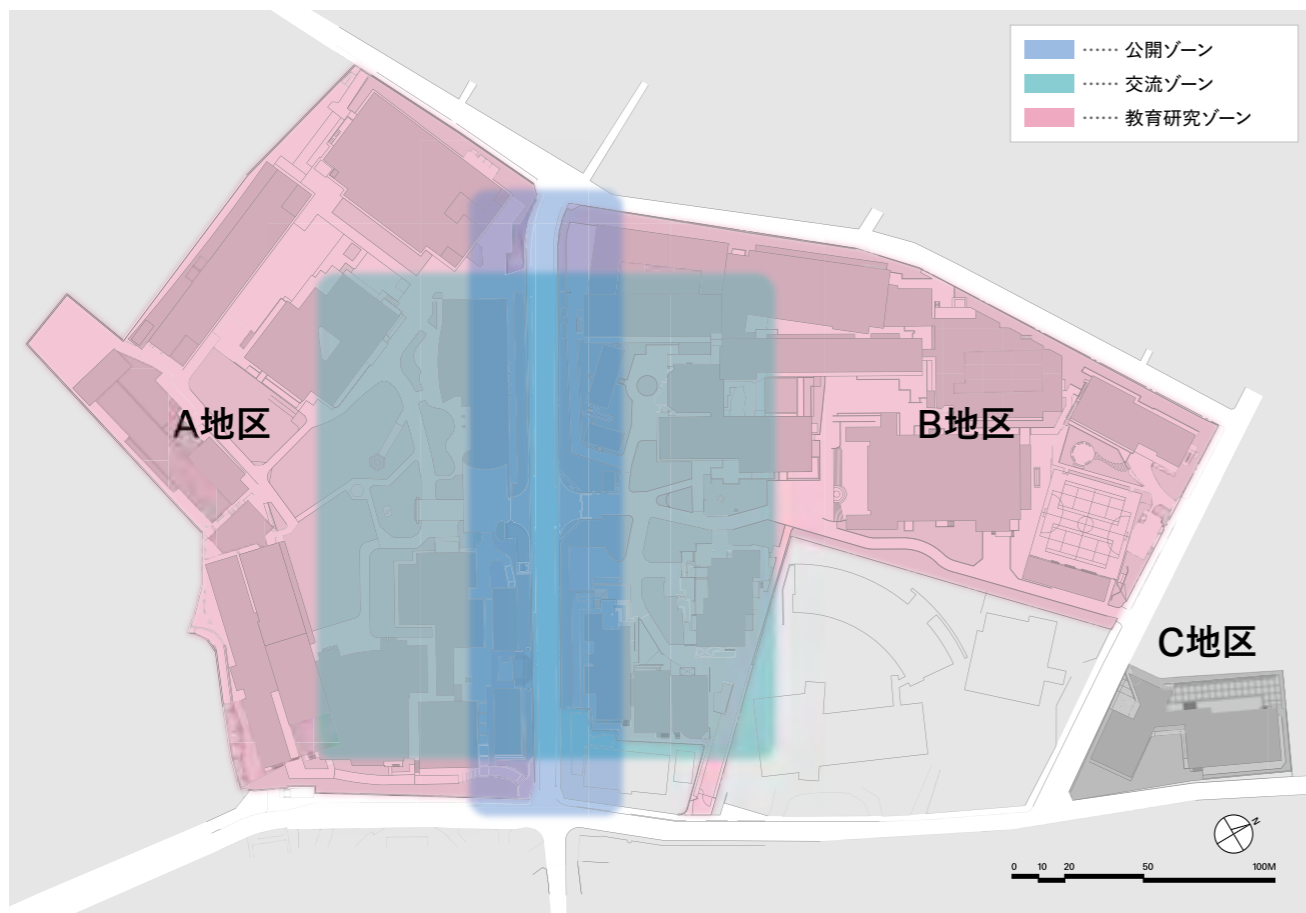


施設と取り組みの現状

前項を背景として、本キャンパスは前身である東京美術学校、東京音楽学校以来、教育研究組織の変遷とともに、施設に関しても建て替えや増改築を繰り返し行い現状に至っている。そのため、各種設備や空間構成において、本学の特徴である専門性に特化した教育研究活動や制作発表、学生同士の交流の場という観点からみると、現在の教育研究活動との齟齬がみられるようになっている。特に大学美術館や演奏堂は、本学を象徴する専門性の極めて高い施設であり、展覧会やコンサート等の公開の場として社会への発信を行うため、常に最先端の機能と性能が求められている。また敷地面積は広いとは言えず、A・B・C地区の3つに分割されている。そのため分散している科もあり存在や活動が見えづらい状況も続いている。教育研究の活動の場としての最適化、外構を含めた環境のあり方、さらにセキュリティ、サイン、国際化、ICT、ダイバーシティ、LGBTQ+対応等も十分な整備が行き届いているとは言えず、拡充していかなければならない。

2013年には『上野キャンパスマスタープラン2013』が策定された。A地区とB地区の中央を縦断する道路を中心に開放的な空間の広がりや交流空間とし、その奥に教育研究活動が見え隠れする緩やかな空間構造として、公開、

fig.04 | 3つのゾーン | 『東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン2013』より

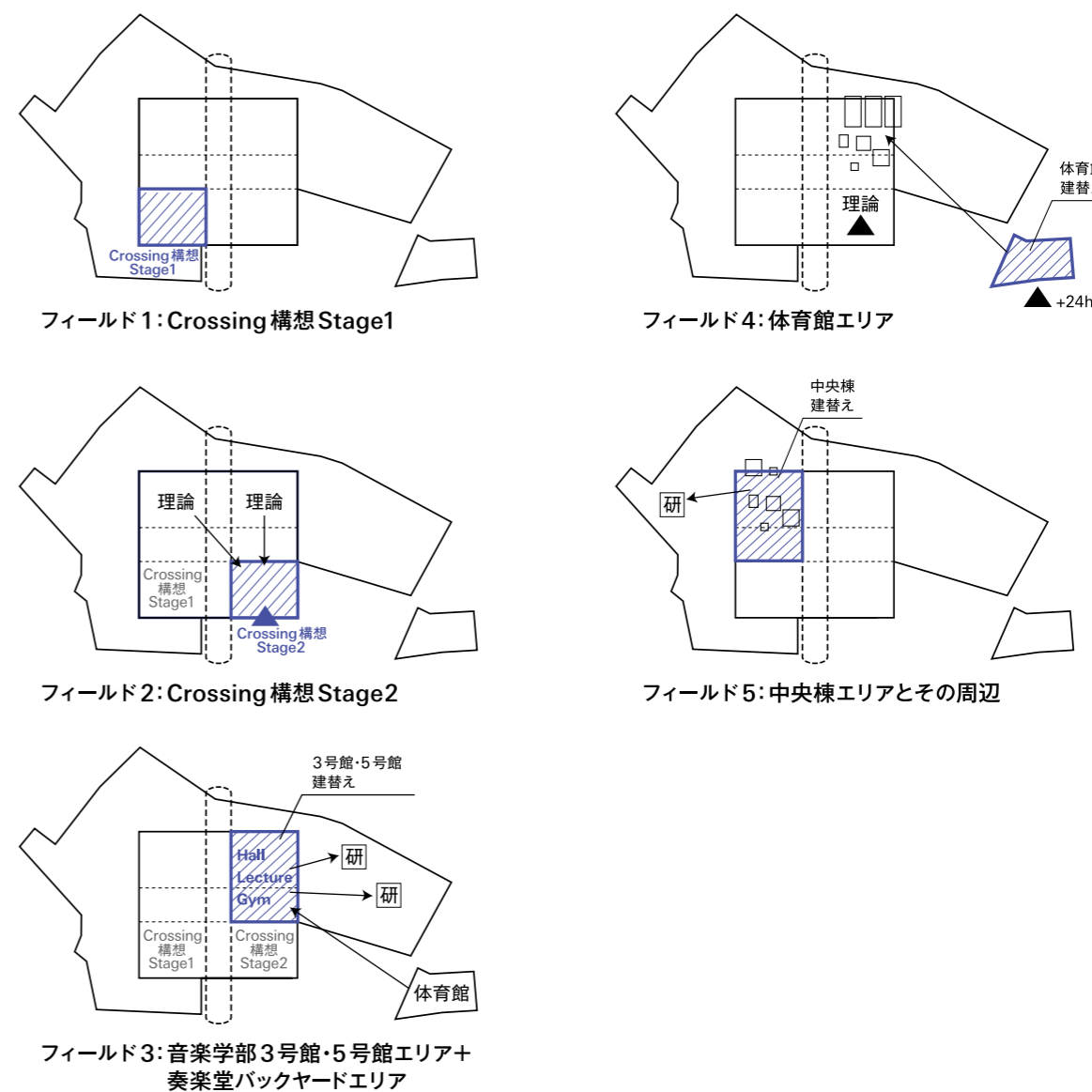


交流、教育研究の3つのゾーンを定めた。さらに機能強化の必要な施設を含んだ戦略的整備フィールド(1~5)を設定。既存施設を含む多角的なつながりによって、キャンパスに空間的連続性をもたらす計画としてキャンパスの骨格をつくりあげた。

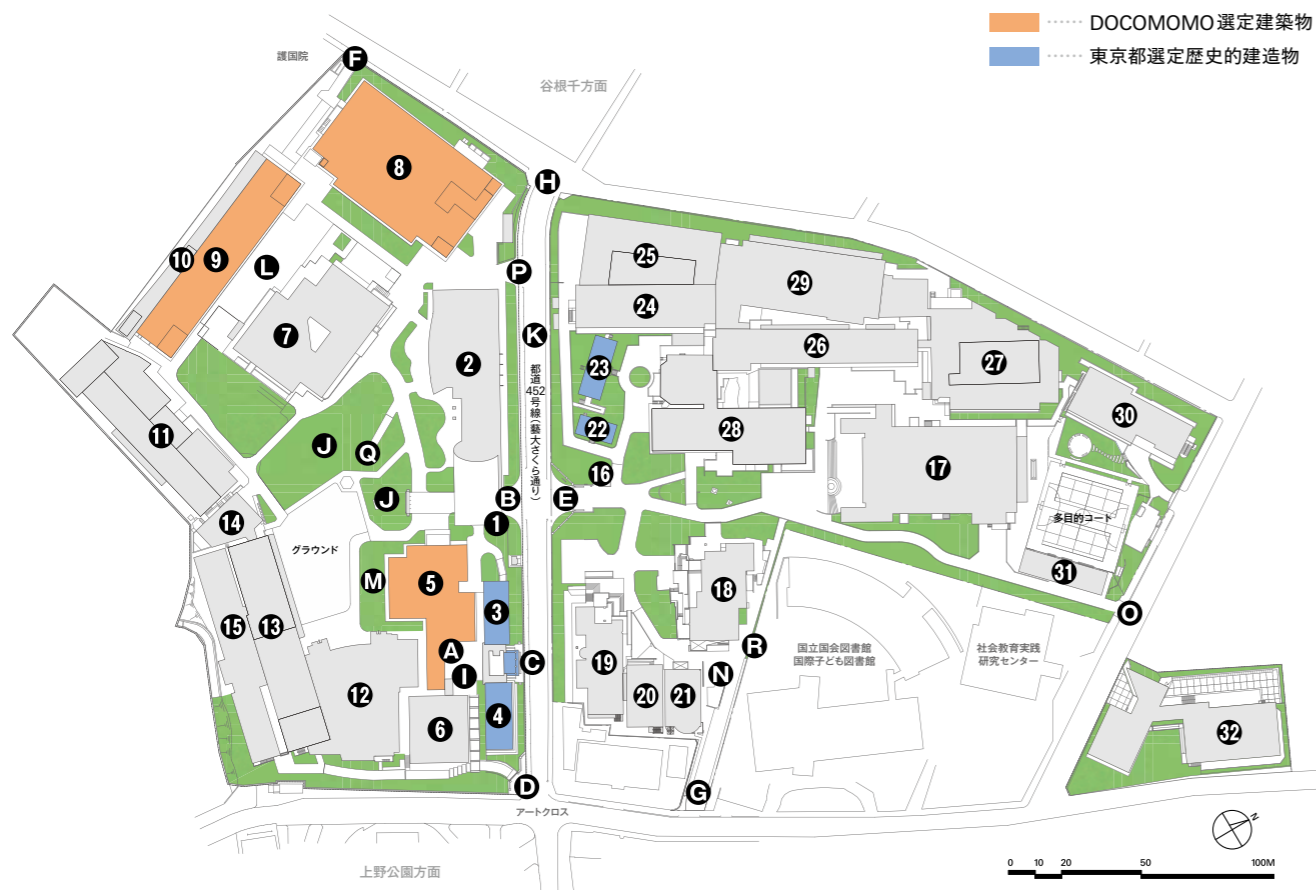
その後2013年のマスタープランに基づき、2018年に国際芸術リソースセンター(IRCA)が竣工し、フィールド1は概ね完成している。フィールド2では、2015年に産学連携及び異分野融合による研究開発と支援のためのアートイノベーション施設としてのArts&Science LAB.の竣工、2021年に藝大SDGs推進室の設置、2022年にはアートを通じて留学生との交流を深めるための国際交流棟が完成すると同時に、「変化し続けるパブリックアート」が展開している。更に2024年には様々なステークホルダーとの共創の場として、芸術未来研究場の拠点が創設された。同時に本キャンパスから徒歩3分ほどの場所に上野桜木地域連携棟(藝大部屋)が設置され、芸術未来研究場のケア&コミュニケーション領域(p.015およびp.033参照)の活動を中心に、地域との交流による研究、実践や企業人向け研修の場として活用されている。

今後はこれらの施設や場、組織を連動させて課題を整理し、将来的な教育研究の機能強化と、地域・社会・世界への貢献に対するビジョンをふまえ、学内的に優先順位を定めて、計画的かつ持続的に改修や改築を実施していく必要がある。

fig.05 | 5つのフィールド | 『東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン2013』より



各施設の概要



※ DOCOMOMOとは、20世紀の近代建築を対象に、その記録と保存を目的とする国際的な組織である。DOCOMOMOへの選定は、当該建築物が近代建築として高い価値を有し、国際的に評価されていることを示すものである
 ※ 東京都選定歴史的建造物とは、歴史的な価値を持ち、かつ景観上重要な建築物または土木構造物を、東京都が景観条例に基づき認定する建造物である

- | | | |
|------------------------------|--------------|---------------------------|
| ① 第1守衛所 | ⑬ 赤レンガ2号館 | ⑲ 西門 |
| ② 大学美術館本館 | ⑭ 音楽学部1号館 | ⑳ 南門 |
| ③ 陳列館 | ⑮ 音楽学部2号館 | ㉑ 谷根千方面 門柱エリア |
| ④ 正木記念館 | ⑯ 音楽学部3号館 | ㉒ プロムナード |
| ⑤ 国際芸術リソースセンターA棟(IRCA)／附属図書館 | ⑰ 音楽学部4号館 | ㉓ 藝大保存林 |
| ⑥ 国際芸術リソースセンターB棟(IRCA)／附属図書館 | ⑱ 音楽学部5号館 | ㉔ 藝大ヘッジ |
| ⑦ 中央棟 | ⑲ 音楽学部練習ホール館 | ㉕ 屋外デッキ |
| ⑧ 絵画棟 | ㉑ 招聘教員宿泊施設 | ㉖ 屋外デッキ |
| ⑨ 彫刻棟 | ㉒ 体育館 | ㉗ 屋外デッキ(旧不忍荘広場) |
| ⑩ 彫刻棟 差し掛け | | ㉘ 東門 |
| ⑪ 金工棟 | | ㉙ 大学美術館搬出入口 |
| ⑫ 総合工房棟A棟 | | ㉚ 岡倉天心六角堂 |
| ⑬ 総合工房棟B棟 | | ㉛ 国立国会図書館
国際子ども図書館 連絡口 |
| ⑭ 総合工房棟B棟2 | | |
| ⑮ 総合工房棟C棟 | | |

主な施設



① 第1守衛所
用途：守衛室、控室
竣工年：1999年



② 大学美術館本館
用途：エントランスホール、展示室、ギャラリー、収蔵庫、食堂(ホテルオークラ、藝大食楽部)、ショップ(画翠)、売店、教員研究室、図書室、X線撮影室、館長室、事務室、会議室、応接室、未来創造継承センター
竣工年：1999年



③ 陳列館
用途：陳列室(ギャラリー)、倉庫
竣工年：1929年
東京都選定歴史的建造物：2009年



④ 正木記念館
用途：未来創造継承センター、和室
竣工年：1935年
東京都選定歴史的建造物：2009年



⑤ 国際芸術リソースセンターA棟(IRCA)／附属図書館
用途：閲覧室、図書館館長室、事務室、ラウンジ、視聴覚室、資料室、作業室、収蔵庫、演習室、書庫、教員室、研究室、院生室、ギャラリー、ショップ(藝大アートプラザ)
竣工年：1965年
DOCOMOMO選定：2008年



⑥ 国際芸術リソースセンターB棟(IRCA)／附属図書館
用途：図書館(開架・閉架書庫)、ラーニングコモンズ
竣工年：2017年

主な施設



⑦ 中央棟

用途：学部長室、事務長室、事務室、会議室、講義室、演習室、教員研究室、実習室、実験室、調査資料室、図書資料室、紀要編集室、写真センター

竣工年：1974年



⑧ 絵画棟

用途：大石膏室、研究室、実習室、アトリエ、スタジオ、工房、Art Space、教員室、石膏保管室

竣工年：1970年

DOCOMOMO選定：2008年



⑨ 彫刻棟

用途：教員研究室、金属実習室、石彫実習室、木彫実習室、実習室、アトリエ、モデル室、資料室

竣工年：1971年

DOCOMOMO選定：2008年



⑩ 彫刻棟 差し掛け

用途：彫刻棟の屋外制作スペース、ポリトリ室、塗装室、窯場

竣工年：2022年



⑪ 金工棟

用途：工房、学生室、教員室、実習室、木工室、メッキ室、ブース室、ギャラリー、研究室

竣工年：1956年



⑫ 総合工房棟A棟

用途：オープンアトリエ、オープンファクトリー、教員室、準備室、会議室、ゼミ室、ロクロ室、研究室、実験室、演習室、コンピューターアトリエ、工房、スタジオ、ギャラリー、実習室、屋外デッキ

竣工年：2004年

主な施設



⑬ 総合工房棟B棟

用途：教員室、実習室、ロクロ室、釉薬室、絵付室、原型室、研究室、共用アトリエ、多目的ラウンジ、会議室、助手室、教室、スタジオ、蒸箱室、ギャラリー

手前にはグラウンドが広がっている

竣工年：1960年



⑭ 総合工房棟B棟2

用途：ロクロ工房、着色室、窯場、工房、準備室、教室

竣工年：1979年



⑮ 総合工房棟C棟

用途：窯場、粘土製土室、石膏埋没室、実習室、石膏室、工作室、教員室、工房

竣工年：2004年



⑯ 第2守衛所

用途：守衛室、仮眠室

竣工年：1977年



⑰ 奏楽堂

用途：コンサートホール、ホワイエ、ロビー、映写室、音響調整室、調光室、楽屋、楽器庫、スタッフルーム

竣工年：1997年



⑱ 大学本部棟／芸術未来研究場拠点

用途：芸術未来研究場、保健管理センター、学長室、理事室、事務室、会議室、学生相談室、研究室

竣工年：1978年

主な施設



⑱ 大学会館

用途：講義室、会議室、展示室、学生相談室、特別修学支援室、食堂 (GEIDAI LIVING)、喫茶室、事務室、部室
竣工年：1979年



⑳ 国際交流棟 Hisao & Hiroko TAKI PLAZA University Hall

用途：コミュニティサロン、コモンスペース、ショップ(生協)、学食 (GEIDAI LIVING)、茶室、講義室、教員室、研究室、事務室、パブリックアート
竣工年：2022年



㉑ Arts & Science LAB.

用途：ギャラリー、研究工房、研究室、球形ホール
竣工年：2015年



㉒ 赤レンガ1号館

用途：事務室、談話室
竣工年：1880年
東京都選定歴史的建造物：2009年



㉓ 赤レンガ2号館

用途：教員室、助手室、応接室、研究室、演習室、装演室
竣工年：1886年
東京都選定歴史的建造物：2009年



㉔ 音楽学部1号館

用途：講義室、教員研究室、オペラ立稽古室、レッスン室、スタジオ、譜面室、合奏室、練習室、演習室、録音調整室
竣工年：1966年

主な施設



㉕ 音楽学部2号館

用途：教員室、練習室、レッスン室、研究室、会議室、調律師室、合奏室、音響ラボ、未来創造継承センター
竣工年：1963年



㉖ 音楽学部3号館

用途：教員研究室、練習室、レッスン室、アンサンブル室、楽器庫、合奏室、楽譜・レコード室
竣工年：1954年



㉗ 音楽学部4号館

用途：第5ホール(オペラ)、第6ホール、練習室、レッスン室、教員室、教員控室、研究室、調整室、楽屋、作業室、演習室、ラウンジ、会議室、合奏室、譜面室、未来創造継承センター
竣工年：1977年



㉘ 音楽学部5号館

用途：学部長室、事務長室、事務室、会議室、講義室、教員研究室、楽器庫、演習室、院生室
竣工年：1979年



㉙ 音楽学部練習ホール館

用途：第1・2ホール、第3ホール(オペラ)、第4ホール(能ホール)、レッスン室、練習室、教員研究室、合奏室
竣工年：1962年



㉚ 音楽学部附属音楽高等学校

用途：校長室、副校長室、職員室、会議室、保健室、実習室、練習室、ホール、ステージ、普通教室、図書室、理科室、生徒会室、アンサンブル室、レッスン室
竣工年：1995年

主な施設



㊸ 招聘教員宿泊施設

用途: 宿泊室、アートサロン(多目的ホール)、防災倉庫
国際交流促進のため、海外から招聘した教員等に宿泊施設を提供し、教育研究活動の遂行を支援する施設
手前には多目的コートが広がっている
竣工年: 2018年



㊹ 体育館

用途: 体育室、更衣室、シャワー室、サークル室、研究室、事務室
竣工年: 1980年

その他の施設および屋外環境



㊺ 藝大アートプラザ

本学と小学館の共同事業により、展示および販売機能を強化し、情報発信の拠点としてリニューアルされた。



㊻ 美術学部側正門

旧美術学部側正門に代わり、大学美術館と一体的に整備。

竣工年: 1999年



㊼ 旧東京美術学校本館玄関

1972年に美術学部本館玄関を現状の位置に移築保存。エンタシスを持つ木製の列柱や格子天井が特徴である。

東京都選定歴史的建造物: 2009年



㊽ 旧美術学部側正門

(旧東京美術学校美術部正門)

1914年頃に、美術学部側正門として設置。2004年に現在の位置へ移築保存。



㊾ 音楽学部側正門

(旧東京美術学校工芸部正門)

旧美術学部正門と同時期に設置。2019年、東京藝大正門再生プロジェクトにより耐震化。



㊿ 西門

学内関係者がカードキーで管理し、試験的に利用している。地下鉄根津駅方面に近い位置にある。



㊿ 南門

長期間にわたり未利用であったが、2024年の芸術未来研究場の設置に伴い、南門が新たに整備され、学内関係者が利用している。



㊿ 谷根千方面 門柱エリア

2024年、藝大ヘッジおよび門柱の耐震化に加え、ベンチを併設することで、本学と上野公園の谷根千方面をつなぐ導入口の「顔」となるパブリックな場を整備した。



㊿ プロムナード

美術学部側正門に加え、2018年には旧東京美術学校本館玄関と旧美術学部側正門が活用開始になったことで、国際芸術リソースセンター(IRCA)、藝大アートプラザ、正木記念館、陳列館に沿った新たな道が形成された。

その他の施設および屋外環境



⑩ 藝大保存林

古くからの武蔵野の照葉樹林の面影を残す雑木林。中央の窪地は通称「奥の細道」と呼ばれ、植生の再生実験を行っている。手前にはA地区側のグラウンドが広がっている。



⑪ 藝大ヘッジ

本学敷地周囲の塀や柵を、緑による柔らかな境界へと置き換える環境改善の取り組み。2016年から2024年にかけて、地域との協働により段階的に実施し、道に沿って地域に開かれた緑のキャンパスを形成している。



⑫ 屋外デッキ

中央棟と彫刻棟の間に設置。ベンチ兼デッキを屋外の数か所に点在させ、憩いの場をつくり出す取り組み。同時に、建物同士や自然をつなぐ役割も担っている。



⑬ 屋外デッキ

附属図書館の傍らに設置。災害時に活用する、防災かまどや簡易トイレ器具を収納している。



⑭ 屋外デッキ(旧不忍荘広場)

Arts&Science LAB、大学本部棟、南門の中間に設置。不忍荘の跡地に、車道を確保しながら、既存のエノキと一体となるデッキを構成。



⑮ 東門

主にB地区から体育館へ向かう際に利用される。JR 鶯谷駅方面に近い。



⑯ 大学美術館搬出入口

大学美術館と一体的に整備された。



⑰ 岡倉天心六角堂

1932年に金澤庸治が設計。平櫛田中作の岡倉天心像が鎮座している。

⑱ 国立国会図書館
国際子ども図書館 連絡口

本学と国際子ども図書館をつなぐ扉。将来的に国際子ども図書館と一体化することを意図して設けられた。

上野桜木地域連携棟

上野桜木地域連携棟(藝大部屋)は、2023年、芸術未来研究場の地域中核・特色のある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)関連事業の谷根千支部として、上野キャンパスに近い立地の上野桜木に設置された。ここでは、本学の共創の場事業と連携し、一体的な研究開発を行う。



組織： 芸術未来研究場、共創拠点推進機構

設置年： 2023年

名称： 上野桜木

建物名称： 上野桜木地域連携棟

通称： 藝大部屋

用途： **コミュニティスペース、ワークショップスタジオ：**
地域との交流による研究・実践や企業人向け研修の場所として活用
共同研究ラボ
スタッフルーム
共通スペース



敷地概要

住所 東京都台東区上野桜木2丁目14-3

敷地面積： 298.27㎡
近隣商業地域・防火地域
第3種高度地区

建ぺい率 80%

容積率 300%

建築概要

竣工年 2012年

建築面積： 221.76㎡

延床面積： 539.60㎡

構造： 鉄骨造

用途： 事務所

空調設備： 2024年更新

キャンパス面積表

ここでは、2025年における全キャンパスの面積表を提示し、各キャンパスの床面積を比較する。

上野キャンパスは、約69,500㎡の敷地に約100,200㎡の延床面積を有しており、これは取手キャンパス(約20,300㎡)、横浜キャンパス(約4,600㎡)、千住キャンパス(約6,500㎡)を合わせた全体の延床面積約131,600㎡のうち、約76%を占めている。2013年度時点の全キャンパス延床面積は約126,500㎡であり、2025年までの12年間で約5,100㎡の増床となっている。

上野キャンパスの容積率は法定300%に対して、144.1%にとどまっており、さらなる増床の余地はある。一方で、建ぺい率は法定45%に対して43.7%まで利用されており、建築面積の増加は難しい状況であることがわかる。

2013年以降の主な施設の変化として、増床にあたるものは、上野キャンパスでは招聘教員宿泊施設、Arts&Science LAB.、国際芸術リソースセンターB棟(IRCA)、彫刻棟差し掛け、国際交流棟の新設、取手キャンパスでは取手取蔵棟の新設、横浜キャンパスでは元町中華街校舎の借用が挙げられる。一方、減床にあたるのは、上野キャンパスでの社会連携センターおよび不忍荘の解体、横浜キャンパスの新港校舎の返還である。

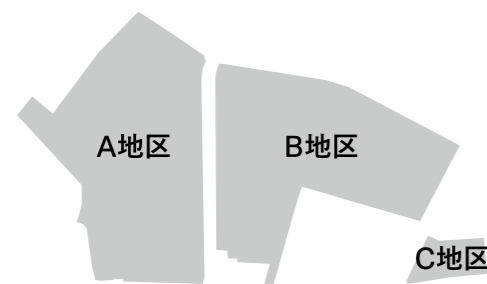
附属施設では、藝心寮、美術愛住館、上野桜木地域連携棟が新たに加わり、上石神井、馬込、那須、松戸が手放されている。

次項の上野キャンパス施設面積表一覧では、各棟の延床面積、建築面積、建築年、改修年等を記載する。

全キャンパス面積表

団地番号	団地名	敷地面積 [㎡]		延床面積 [㎡]		建築面積 [㎡]		容積率 [%]		建ぺい率 [%]		
								2025年度	許容	2025年度	許容	
1	上野	A地区	33,861	69,549	53,718	100,209	15,108	30,339	158.6	300	44.6	45
		B地区1	31,799		43,142		13,668		135.7		43.0	
		B地区2	544		579		229		106.4		42.1	
		C地区	3,345		2,770		1,334		82.8		39.9	
2	奈良	1,792		1,036		548		58.7	400	30.6	40	
8	取手	164,095		20,316		8,888		12.4	400	5.4	70	
14	藝心寮	7,811		8,846		1,446		113.3	300	18.5	60	
17	美術愛住館	351		579		201		165	160	57.3	60	
18	上野桜木地域連携棟	298		540		222		181.2	300	74.5	80	
所有面積合計		243,896		131,526		41,644						
10	横浜	馬車道	825	1,926	1,517	4,667	557	183.9	800	67.5	80	
11		万国橋	-		794		794	-	-	-	-	
16		元町中華街	1,101		2,356		731	214	600	66.4	80	
12	千住	4,045		6,546		2,428		161.8	400	60	80	
借地面積合計		5,971		11,213		4,510						
使用全面積合計		249,867		142,739		46,154						

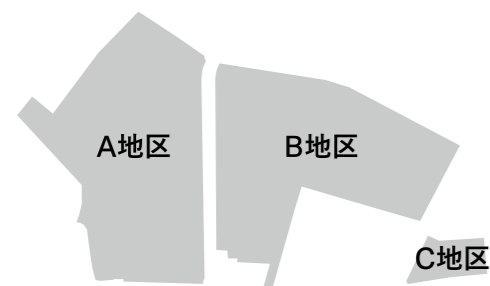
(実態調査による)



上野キャンパス施設面積表-A地区

団地番号	団地名と敷地面積 [㎡]	棟番号	棟名称	延床面積 [㎡]	建築面積 [㎡]	建築年	構造	階数		大規模改修年			基準年	
								地上階	地下階	外部改修年	内部改修年	耐震改修年		
1	上野	A地区 33,861	001	絵画棟	11,001	2,083	1970	SRC	8	1	2009	2009	2009	2009
									2	0	2009	2009	2009	
			002	彫刻棟	4,306	1,747	1971	RC	3	0	2007	-	2007	1971
											2022	-	-	2022
			003	中央棟	5,940	1,534	1974	RC	4	1	2014	2014	2014	2014
											032	国際芸術リソースセンターA棟	2,740	1,047
			033	陳列館	569	215	1929	RC	2	0	-	-	2010	1929
			034	正木記念館	473	237	1935	RC	2	0	2026	2026	-	2026
			065	大学美術館	8,673	1,690	1999	SRC	4	4	-	-	-	1999
			066	廃棄物集積所	29	29	1999	RC	1	0	-	-	-	1999
			067	総合工房棟A棟	6,431	1,620	2004	RC	5	1	-	-	-	2004
											1960	RC	4	0
			068	総合工房棟B棟	5,047	1,231	1961	RC	4	0	2004	2004	2004	1961
											1962	RC	4	0
			069	総合工房棟B棟2	1,373	304	1979	RC	4	1	2009	2009	2009	2009
			070	総合工房棟C棟	1,529	1,065	2004	S	2	0	-	-	-	2004
			071	金工棟	2,428	1,687	1956	RC	2	0	2004	2004	2004	1956
											2004	RC+S	2	0
			072	排水処理施設	148	12	2008	RC	0	1	-	-	-	2008
			074	国際芸術リソースセンターB棟	2,979	576	2017	RC	3	1	-	-	-	2018
076	国際芸術リソースセンター接続部	41	20	2018	SRC	2	1	-	-	-	2018			
								自動販売機	5	5				
	ATM	6	6											
A地区 床面積合計				53,718	15,108									

(実態調査による)



上野キャンパス施設面積表-B地区1

団地番号	団地名と敷地面積 [㎡]	棟番号	棟名称	延床面積 [㎡]	建築面積 [㎡]	建築年	構造	階数		大規模改修年			基準年					
								地上階	地下階	外部改修年	内部改修年	耐震改修年						
1	上野	B地区1 31,799	041	1号館	4,266	874	1966	RC	5	1	2008	2008	2008	2008				
									2007	RC	2	0	-	-	-	2007		
			042	2号館	2,311	1,155	1963	RC	2	1	2007	2007	2007	2007				
											1964	RC	2		1	2007	2007	2007
											1966	RC	2		1	2007	2007	2007
											2007	RC	2		0	-	-	-
			043	3号館	3,826	870	1954	RC	4	0	2004	2004	2004	1954				
											1956	RC	4	0	2004	2004	2004	1956
											1957	RC	4	1	2004	2004	2004	1957
											1966	RC	5	0	2004	2004	2004	1966
											1962	RC	2	1	2004	2005	2004	1962
			044	練習ホール館	5,208	1,623	2004	SRC	5	0	-	-	-	2004				
											1977	RC	4	1	2014	2014	2014	2014
			045	4号館	5,757	1,947	2003	RC	4	1	2014	2014	-	2003				
											1979	RC	4	1	2021	2008	2008	2008
			046	5号館	4,592	1,752	1984	RC	1	0	2021	2008	-	2008				
											1978	RC	4	1	2009	-	2009	1978
			051	大学本部棟	2,418	838	1984	RC	1	0	2009	-	-	1984				
											1979	RC	2	1	-	-	-	1979
			052	大学会館	1,690	674	1979	RC	2	1	-	-	-	1979				
055	第2守衛所	33	33	1977	W	1	0	-	-	-	1977							
056	赤レンガ1号館	186	93	1880	B	2	0	-	2005	2005	1880							
057	赤レンガ2号館	372	186	1886	B	2	0	-	2010	2010	1886							
062	附属音楽高等学校	3,055	746	1995	RC	4	1	-	-	-	1995							
064	奏楽堂	6,540	2,170	1997	SRC	5	2	-	-	-	1997							
073	Arts&Science LAB.	1,498	334	2015	RC+S	5	1	-	-	-	2015							
077	国際交流棟	1,483	373	2022	S+W	5	0	-	-	-	2022							
B地区1 床面積合計				43,142	13,668													

(実態調査による)

上野キャンパス施設面積表-B地区2

団地番号	団地名と敷地面積 [㎡]	棟番号	棟名称	延床面積 [㎡]	建築面積 [㎡]	建築年	構造	階数		大規模改修年			基準年	
								地上階	地下階	外部改修年	内部改修年	耐震改修年		
1	上野	B地区2 544	075	招聘教員宿泊施設	579	229	2018	RC	3	0	-	-	-	2018
B地区2 床面積合計				579	229									

(実態調査による)

上野キャンパス施設面積表-C地区

団地番号	団地名と敷地面積 [㎡]	棟番号	棟名称	延床面積 [㎡]	建築面積 [㎡]	建築年	構造	階数		大規模改修年			基準年	
								地上階	地下階	外部改修年	内部改修年	耐震改修年		
1	上野	C地区 3,345	061	体育館	2,770	1,334	1980	RC	2	1	2009	2019	2009	2009
C地区 床面積合計				2,770	1,334									

(実態調査による)

各施設の利用状況

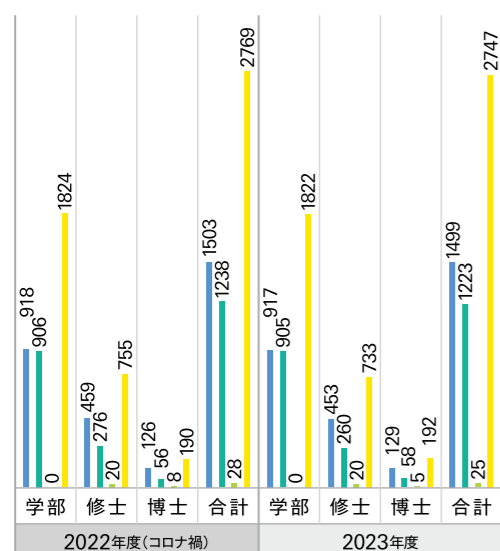
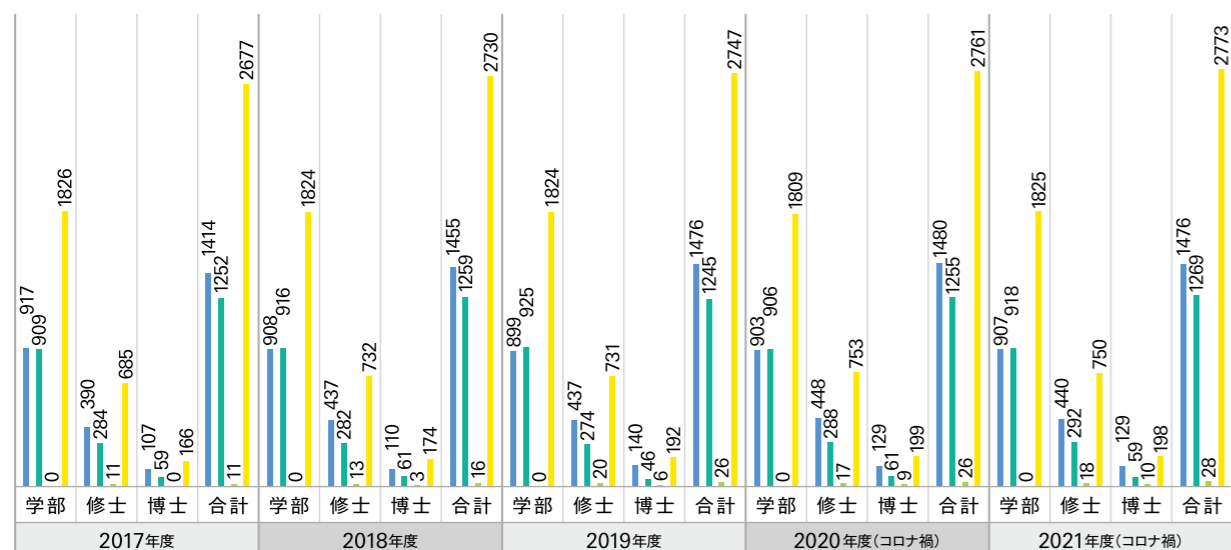
各施設の利用状況については、原則として2017年度から2023年度までの5年間のデータを用いている。

これは、2020年4月の緊急事態宣言以降から2023年5月に新型コロナウイルス感染症の法的分類が5類に移行するまでの約3年間のデータが、通常の施設利用状況を反映していないためである。

ただし、施設によってはデータが欠如しているものも見受けられ、また比較しやすいデータを提示している場合もあるため、全体のデータとして統一性が必ずしも確保されていないことをここに留意していただきたい。

上野キャンパス全体の学生数(2017~2023年度) ※附属音楽高校は除く

■美術学部 ■音楽学部 ■国際芸術創造研究科 ■合計



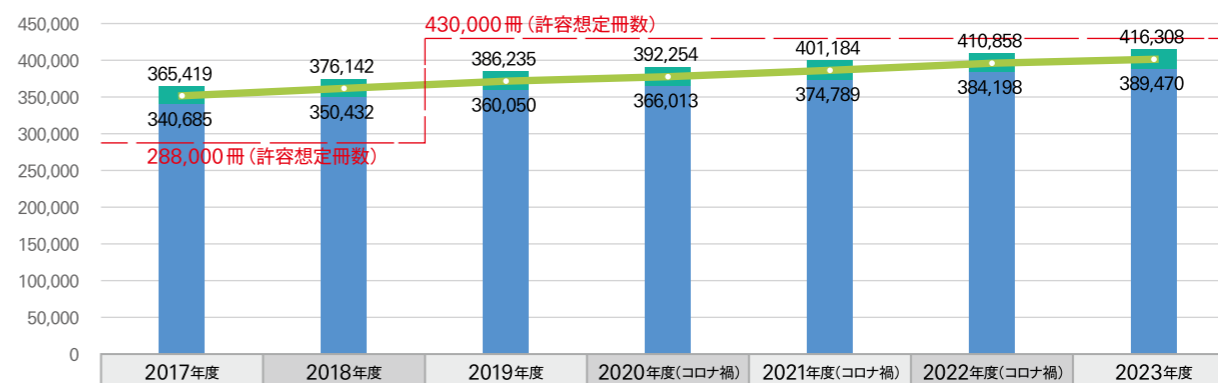
コロナ禍の時期も含めて、全体として2700人前後で安定していることがわかる。2020~2022年度のコロナ禍では、修士課程の学生数が若干増えている傾向がある。

近年の教育研究組織の変遷

- ・2016年 先端芸術表現科1年生が、取手から上野キャンパスへ移る
- ・2016年 大学院国際芸術創造研究科修士課程(アートプロデュース専攻)を上野キャンパスに設置
- ・2018年 大学院国際芸術創造研究科博士後期課程(アートプロデュース専攻)を上野キャンパスに設置
- ・2026年 大学院映像研究科ゲーム・インタラクティブアート専攻の設置

附属図書館の利用状況(保管蔵書数)

■上野附属図書館蔵書数 ■取手附属図書館分室蔵書数 ■本学全体の蔵書数



全体としての増加冊数は、6,000~10,000冊/年であり、その増冊数のほとんどは、上野キャンパスの附属図書館に保管されていることがわかる。

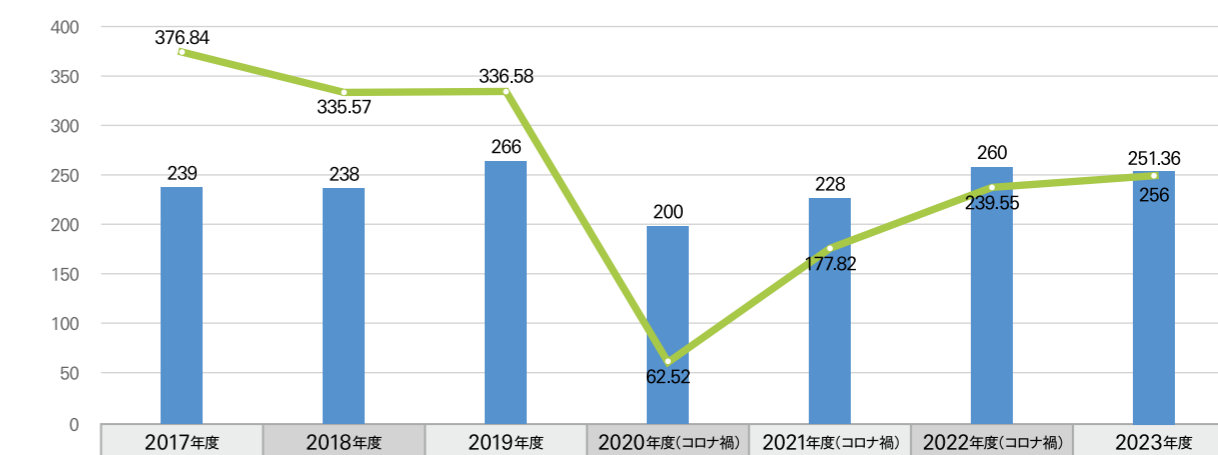
国際芸術リソースセンター(IRCA)の完成前(2018年以前)の図書収容可能冊数は、約288,000冊であったが、既に77,000冊が許容範囲を超えている。国際芸術リソースセンター(IRCA)完成によって現状の図書収容可能冊数は増加し、約430,000冊と想定している。この増加した許容想定冊数でも2026年には許容を超えることになってしまうため、許容想定冊数については改めて精査が必要である。具体的には国際芸術リソースセンター(IRCA)3階と、附属図書館取手分室の余剰スペースに追加の棚の設置が可能である。図書の保管スペースについては全学的な問題であり、同時に保管場所には限りがあるため、保管の選定基準を明確にするルール化が求められている。

近年の附属図書館に関する出来事

- ・2017年 国際芸術リソースセンターB棟(IRCA)附属図書館 竣工
- ・2018年 国際芸術リソースセンターA棟(IRCA)附属図書館 耐震改修

附属図書館の利用状況(利用人数)

■開館日数 ■1日平均入館者数

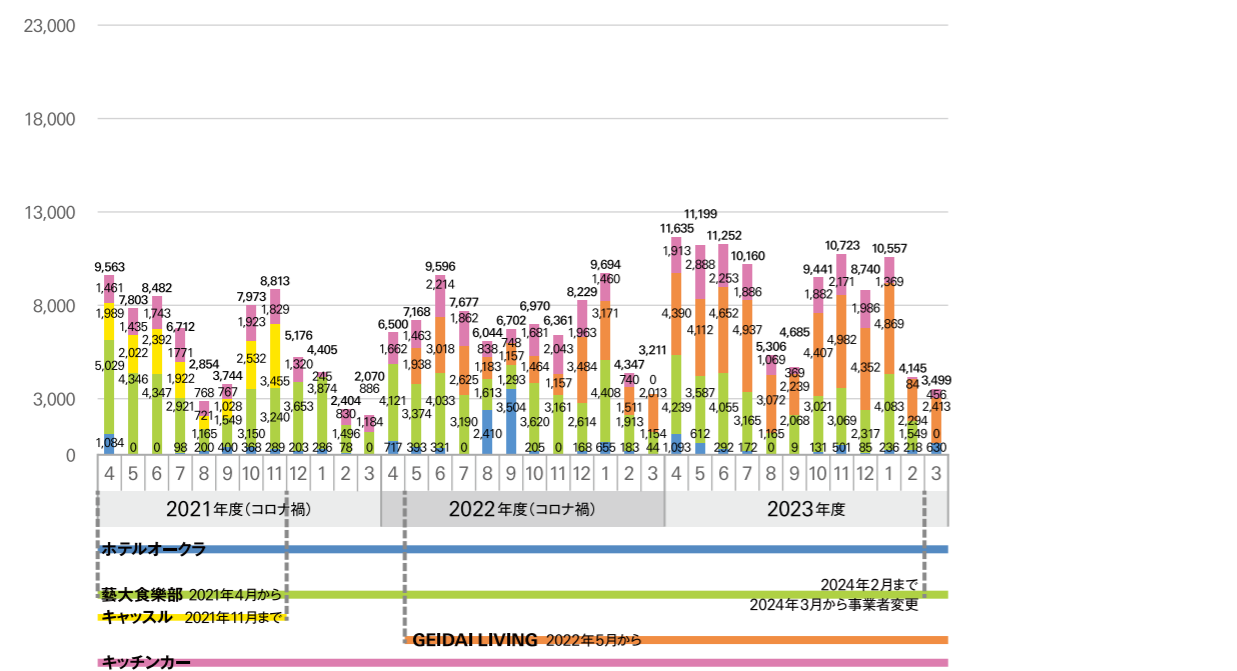
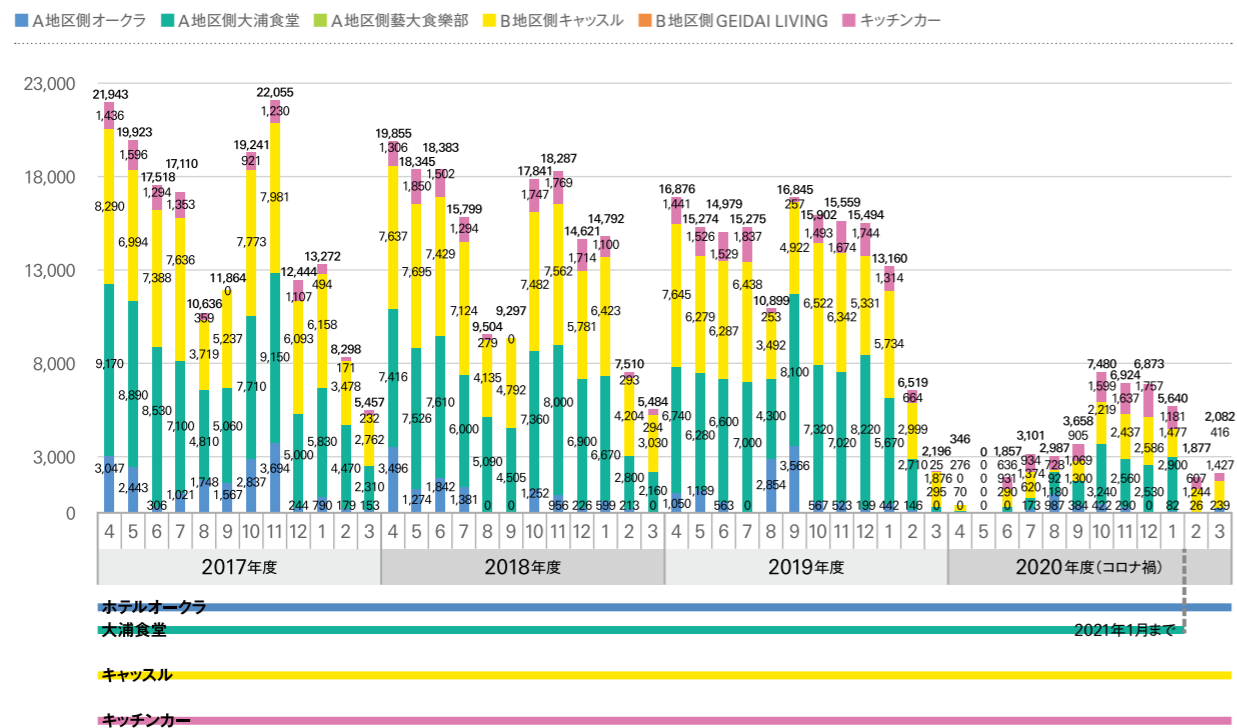


入館者数のカウントは、2018年7月まではカウントアイ、9月以降は入館ゲート(無断での侵入不可)による。2017年7月27日(木)~8月31日(木):休館(B棟への移転作業のため)。2018年7月27日(金)~9月9日(日):休館(A棟への移転作業・リニューアル準備のため)。2020年~2022年は、新型コロナウイルス対応のため、館内施設の一部利用休止及びサービス縮小(10の区分を設定し、段階的にステップを踏んで、新型コロナウイルス流行以前同様の全面開館を進めている)。

2022年度と2023年度は、学外者の利用を事前予約制としている。

2023年には、新型コロナウイルス流行以前の開館日数に戻っている。1日平均入館者数は、コロナ禍で急激に減少し徐々に回復しているが、まだコロナ禍前の人数に戻っていない原因は、学外者の利用が事前予約制のためと思われる。

学食の利用状況

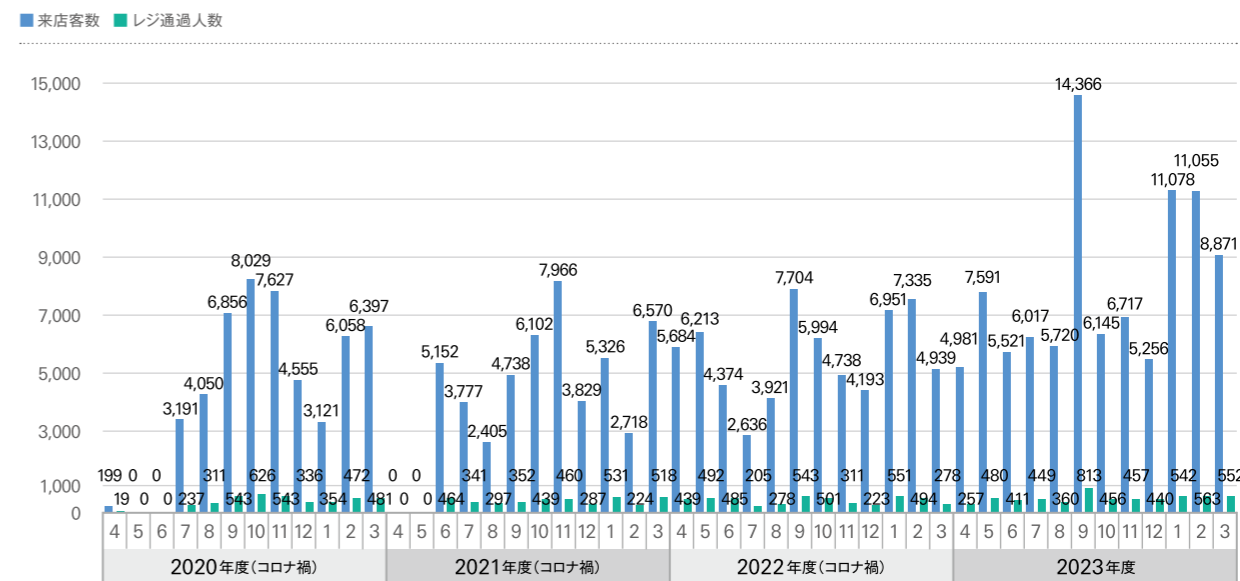


A地区側では、2021年1月まで大浦食堂、2021年4月から2024年2月までは藝大食堂、B地区側では2021年11月までキャッスル、2022年5月からはGEIDAI LIVINGが始まり、事業者が更新されている。ホテルオークラは、原則、大学美術館が展覧会を開催している期間に営業している。

コロナ禍ではキッチンカーの需要が高まり、コロナ禍以後も引き続き利用者が定着している。コロナ禍以前と以後では、学食の藝大食堂とGEIDAI LIVINGの利用者は、コロナ禍前の約半分までの回復に留まっていることがわかる。考えられることは、コロナ禍を経て食の多様化が進んだため、他からの食事の持ち込み(お弁当など)が増えたことが考えられる。

備考:上記の数値は食堂の来客数と、食を提供するキッチンカー(ネオ屋台村)の食数による。よって、売店の購買客数と飲み物を提供するキッチンカーの食数は除いた数値である。

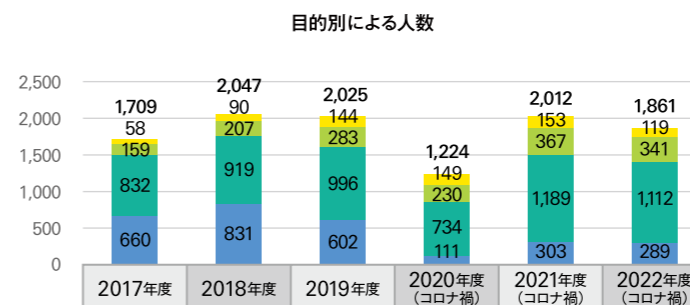
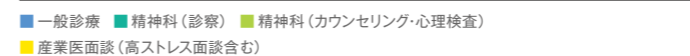
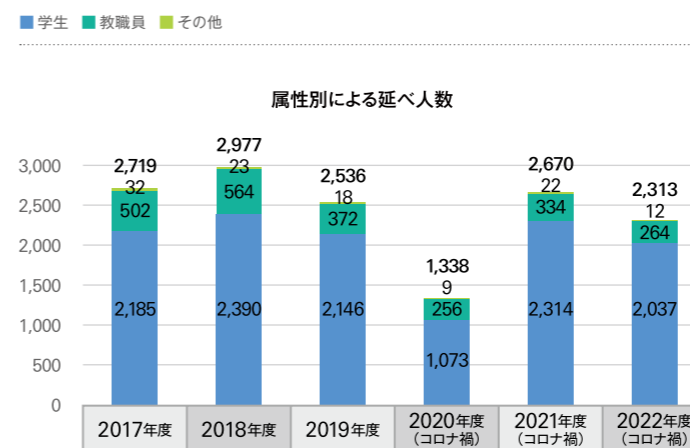
藝大アートプラザの来客数とレジ通過数



2020年度~2022年度のコロナ禍を経て、2023年度では9月の藝祭、1~2月に行った卒業制作展、企画展、藝大アートプラザ・アワード受賞者展、店内の音楽会、3月には大吉原展、店内の音楽会、上野公園のサクラフェスティバルの開催などで来客数が増えている。レジ通過数では、コロナ禍後の藝祭があった2023年9月が最も多い数値となっている。

2019年7月から入店カウンターの導入を開始、来客数とレジ通過数をデータ化している。ただし2019年は7月から2020年1月まで、2020年5月、6月、2021年4月1日~25日のデータは揃っていない。2021年4月26日~5月31日の休業期間は新型コロナウイルス流行に伴う緊急事態宣言発令のためである。

保健管理センター利用者(予防接種を除く延べ人数)



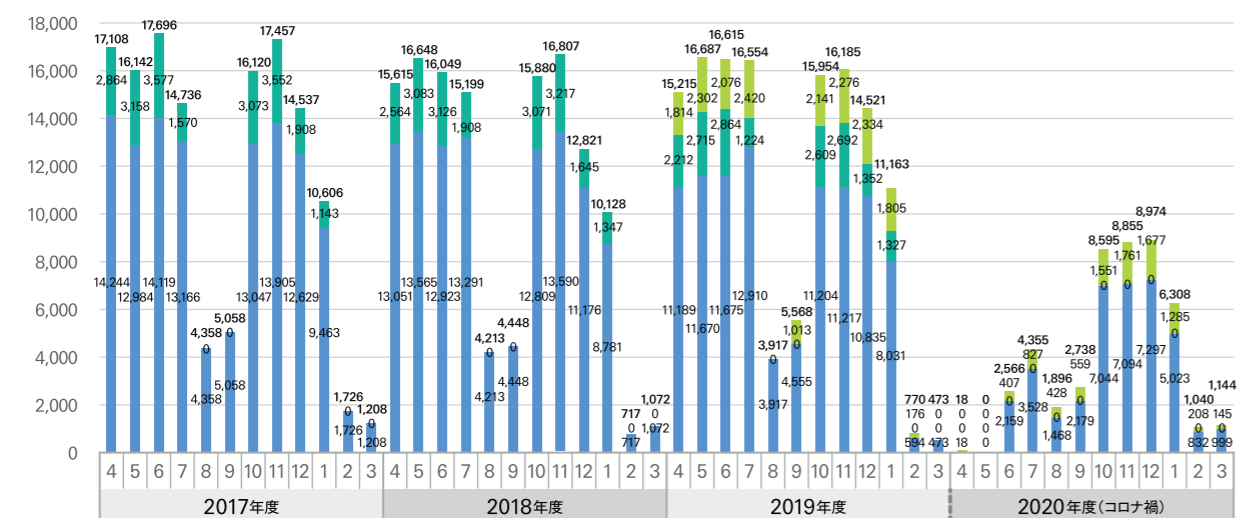
保健管理センターは大学本部棟1階にて大学構成員の健康相談・健康管理にあっている。

利用者数(グラフ上)は新型コロナウイルス感染症流行の影響による変動があった。2020年は学生の登校禁止と職員の在宅勤務シフトにより校地の入構者数が減少していたこと、発熱・感冒症状の者については感染者動線との分離不十分なセンター外来ではなく学外の発熱外来を受診するよう誘導したことにより、利用者数が減少している。教職員の利用者数が先に回復したのは、教職員が学生に先立って学内での勤務を再開していったためと考えられる。受診目的(グラフ下)別では、学生の精神科外来の利用が増えた一方で、2021年および2022年に一般診療が減少しているのは、オンライン講義や密を避ける体制の中で実技による外傷・熱傷例が減っていたことも一因と考えられる。

限られたスペースの中で、保健室・休養室・診療外来(精神科・一般診療・心理検査・カウンセリング)、学校・事業所としての健康管理を行うのに加え、感染症流行時には学内での保健所業務も遂行する。特に、精神科外来を受診する学生の疾患は幅広い。学校保健として一般的な発達障害やストレス反応への支援に加えて、市中の精神科診療機関相当の治療を要する統合失調症・うつ病・双極性障害の学生も診療している。個人の特性、専攻領域の専門性、環境側のストレス要因などにも配慮した修学支援的な適応支援、指導助言を行い、各支援部門(学生相談室・特別修学支援室)や指導教員とも連携している。

生協と画翠の購入状況

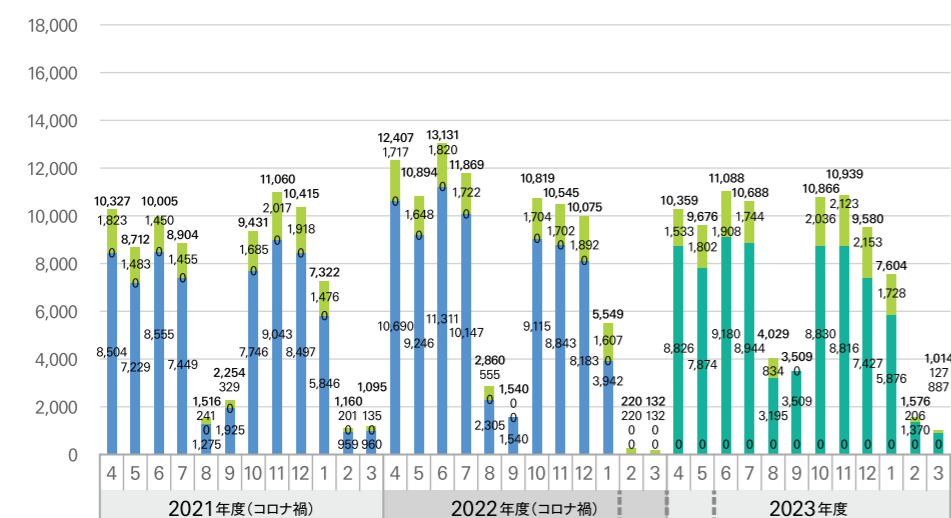
■ A地区側生協 ■ B地区側生協 ■ 画翠



■ B地区側(学生会館2F)

■ A地区側(大学美術館地階)

■ 画翠



■ B地区側(国際交流棟1F)

■ A地区側(大学美術館地階)

■ 画翠

生協はA地区側(大学美術館本館地階)とB地区側(学生会館2階)の2箇所に設置されていた。B地区側は8・9月、2・3月の期間は定期的に休業して営業していた。B地区側の生協は、2020年4月から2023年3月までのコロナ禍の期間は全て休業し、A地区側の生協のみの営業としていた。さらにA地区側の生協は2023年1月に閉店し、2023年4月から国際交流棟1階のみで、新たに営業を開始している。

画翠は、2019年度からのデータである。2023年6月より、今までのB104室(32㎡)から105室(19㎡)に面積を縮小しショップを移動している。

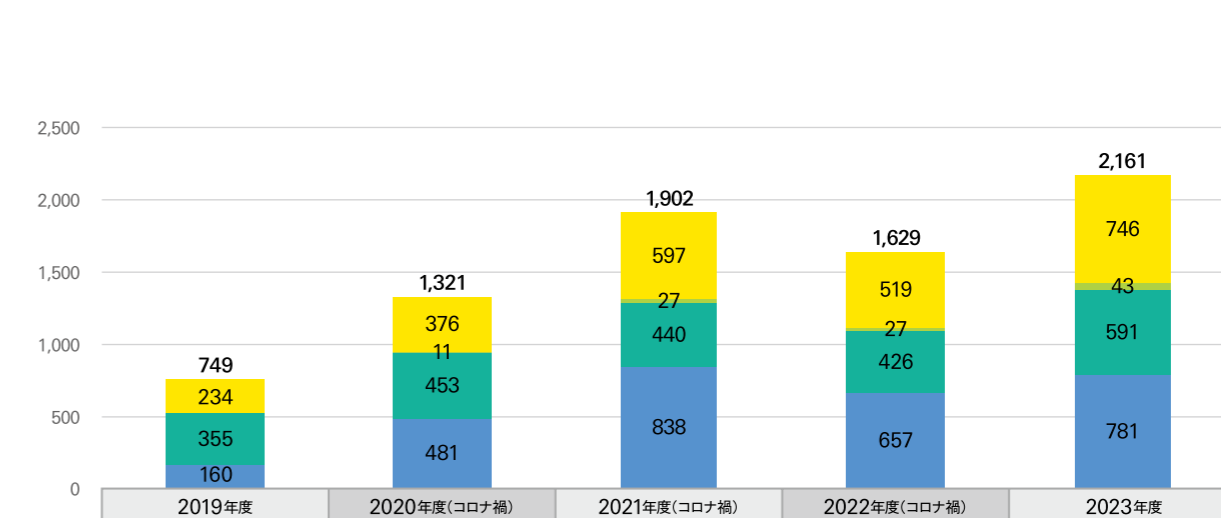
上の表よりコロナ禍前では、A地区側の生協での購入件数が非常に多いことが目立つ。その背景には、B地区側の生協販売スペースが限られていたこと、音楽学部の学生より美術学部の学生が頻繁に利用していたことが考えられる。またコロナ禍の3年間では、購入件数はコロナ禍前に比べて半分以下まで一旦落ち込んでいる。2023年4月から、B地区側の国際交流棟1階に生協が1か所となって移転したが、購入件数はコロナ禍の期間と同様に横ばいのままである。この要因としては、コロナ禍前には美術学部の学生が生協をより頻繁に活用していたにも関わらず、音楽学部の敷地内に生協が移ったため、利用しにくくなったという点が挙げられる。公共の道路を渡って生協に行くという行動が、足が向かなくなった原因であると推測できる。

画翠の購入者数は、生協や他の施設と同様に、コロナ禍における緊急事態宣言や登校禁止の影響で一時的に減少しているが、その後は概ね回復している。ただし、若干の購入者数の減少が見られるが、これは2023年6月に移転した際、売店面積が約4割減少したことが1つの要因とも考えられる。

[画翠データなし：2018年度まで、2019年8月、2022年9月、2023年9月]

学生相談室・特別修学支援室のハラスメント相談・就職相談の件数

■ 学生相談室 ■ 特別修学支援室 ■ ハラスメント相談窓口 ■ 就職相談



学生相談は2019年では160件だったものが、コロナ禍の2020年には3倍の480件に増えている。さらに2021年にはその1.7倍に及んでいる。また、コロナ禍後の2023年になっても相談件数が増加していることがわかる。

これはコロナ禍において相談の対応方法を、それまでの対面のみから、オンライン・電話・メール相談可能とした結果、潜在的な相談需要が顕在化したためと考えられる。また相談件数の増加は開室日数に比例して増加しており、2023年の時点でも潜在需要を網羅しきれていない。相談件数増加により、2024年より相談員が複数人に対応しているため、今後は受付カウンターを備え、面接室が2部屋ある構造が必要になると考えられる。そのため2025年度より、従来の学生会館の部屋に加え、大学本部棟においても開室を行っている。

特別修学支援室の利用件数では、2019年では355件であったが、2020年には100件増え453件。2023年になると591件と、コロナ禍後になっても増える傾向が続いている。障害のある学生の支援について理解が深まり、学生からの相談や教員による紹介が増えている。また2024年には障害者差別解消法の改正法施行もあり、今後も増えることが予想される。

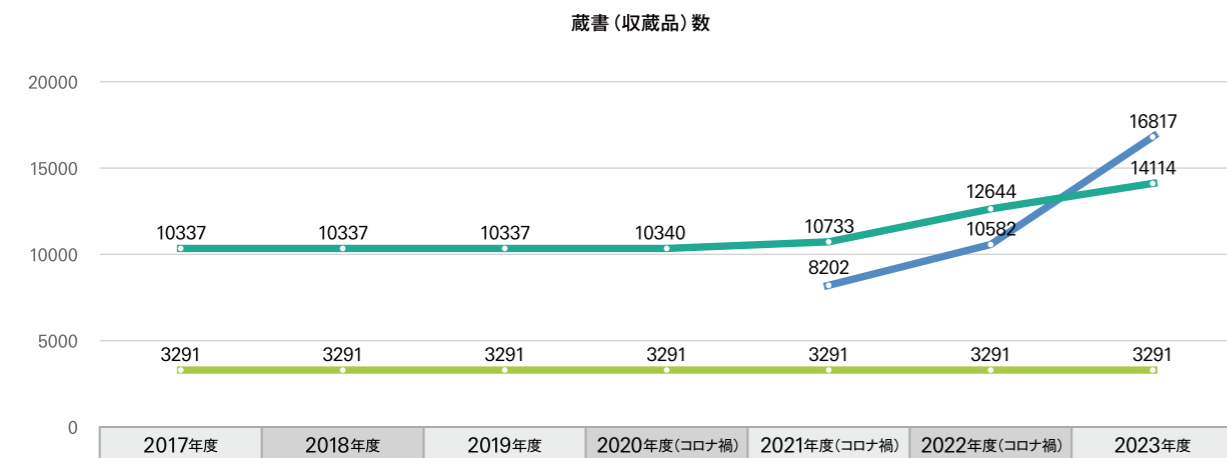
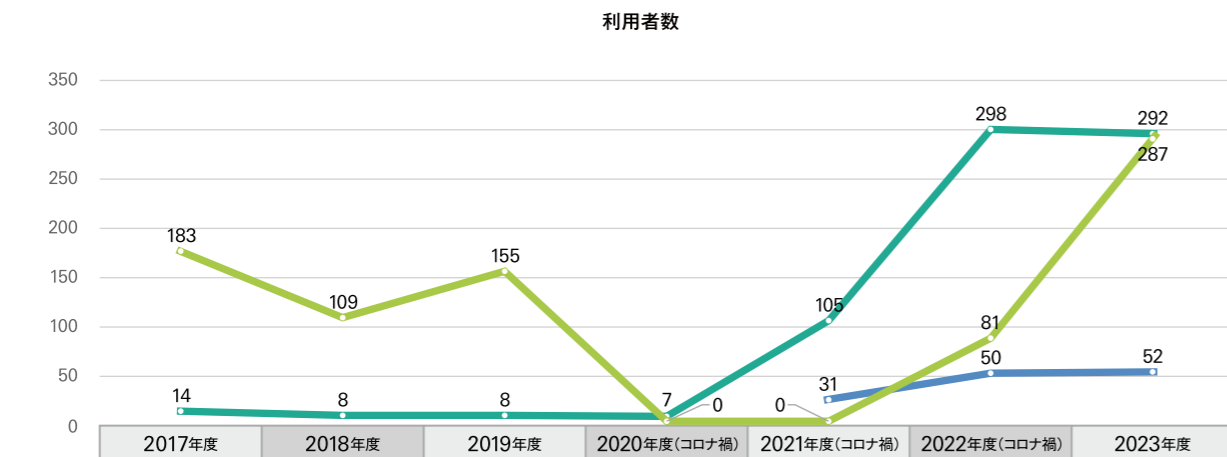
ハラスメント相談窓口の利用状況は、コロナ禍後の2023年には前年より1.6倍に上昇している。ハラスメントや人権意識に対する学生の受け止め方が変化してきていることや、コロナ禍を経て教員や助手と学生との間で意思疎通が取りづらいう状況があったことなどが一因として考えられる。

就職相談の件数は、2019年の234件が、コロナ禍3年目の2022年には519件に達し、2.2倍となった。さらに2023年には746件にまで増加している。これはアートキャリアオフィスの地道な周知活動が、学生の潜在的な需要に結びつきつつあることが原因である。2023年度からキャリアアドバイザーを3人(週3日)から4人(週4日)に増やしており、体制的な整備が必要に応えつつあると言える。

以上のように、学生相談室、特別修学支援室、アートキャリアオフィス、保健管理センターでの相談件数は増加傾向にあり、今後も引き続き増加すると予想される。

未来創造継承センター

大学史料室(旧制東京音楽学校部門) 大学史料室(旧制東京美術学校部門) 小泉文夫記念資料室



2018年(平成30年)に設置された文化財保存修復センター準備室(美術学部)を起点とする未来創造継承センターは、2021年(令和3年)に芸術資源保存修復研究センターへと発展し、学内資源の恒久的なアーカイブ基盤となるべく、2022年(令和4年)に設置された。さらに、2023年(令和5年)には、音楽学部音楽総合研究センターに属していた大学史料室(現 大学史料室(旧制東京音楽学校部門))と小泉文夫記念資料室が統合され、2024年(令和6年)には、美術学部近現代美術史・大学史研究センター(GACMA)(現 大学史料室(旧制東京美術学校部門))が統合された(詳しくは[05-3-2 | アーカイブゾーンの設定]-p.113を参照)。設置場所は、正木記念館1階、大学美術館地下1階、音楽学部2号館・4号館と分散している。

コロナ禍の閉鎖期間は、以下の通りである。

- ・大学史料室(旧制東京音楽学校部門): なし
- ・大学史料室(旧制東京美術学校部門): 2020年度~2021年度前期
- ・小泉文夫記念資料室: 2020年度~2021年度の2年間

このようにコロナ禍の閉鎖期間が異なるのは、当時はそれぞれ個別の組織であるため、各室の判断で対応していたためである。

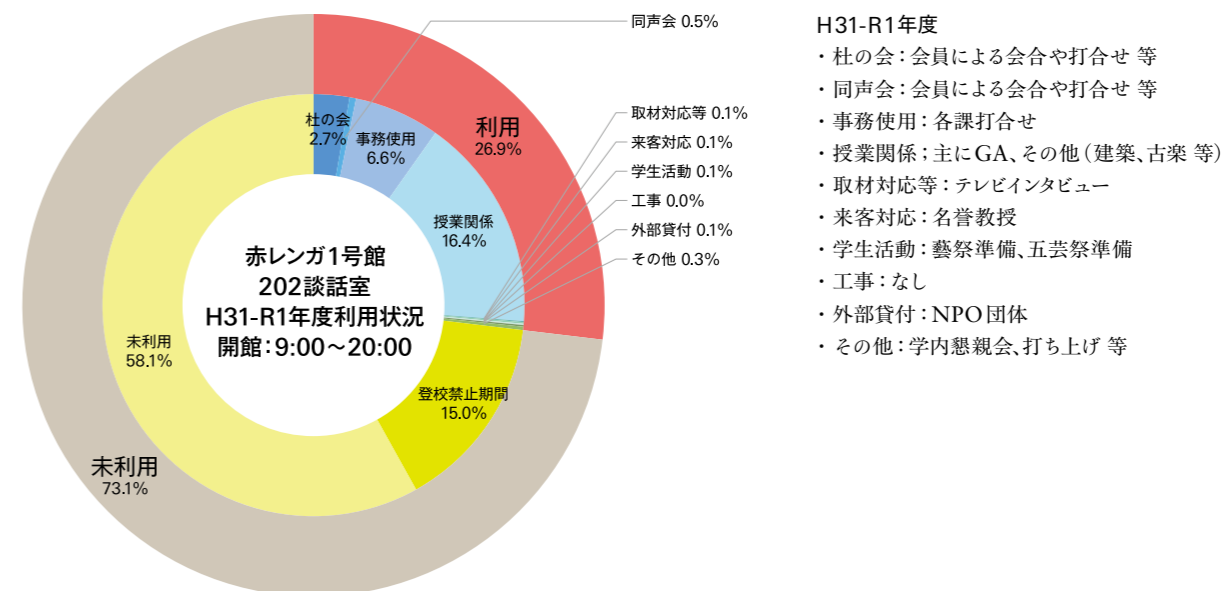
また、大学史料室(旧制東京美術学校部門)は、前々身である美術学部教育資料編纂室から前身の美術学部近現代美術史・大学史研究センターへ改組されたタイミングでもあり、それに伴う開室準備期間であったことも閉室の理由である。2020年度以降(GACMAへの改組後)、利用者数は急増し、2022年度には298人に達している。これはミニ展示の観覧などによる、室の利用者が増えたことが要因である。

大学史料室(旧制東京音楽学校部門)において、利用者数と書籍類のデータ未記録の年度があるのは、常勤教員がいない不安定な体制であったことによるものである。また、大学史料室(旧制東京美術学校部門)の所蔵資料には、整理未着手の段ボール44箱相当分の資料がある。小泉文夫記念資料室は、蔵書および楽器資料等は2018年度以降増加していないことがわかる。

大学史料室(旧制東京美術学校部門)では、2020年度に蔵書(収藏品)数が3点増え2021年度から増加している。それは、前々身である教育資料編纂室は閉ざされた組織だったところ、2020年に前身の近現代美術史・大学史研究センターへの改組をきっかけに、歴史資料等保有施設の指定を目指して書庫を整備するとともに、ホームページを開設するなど、体制が整備されたことで、美術学部の歴史資料を扱う施設として周知が進んだことが、資料数増加の主な要因と考えられる。

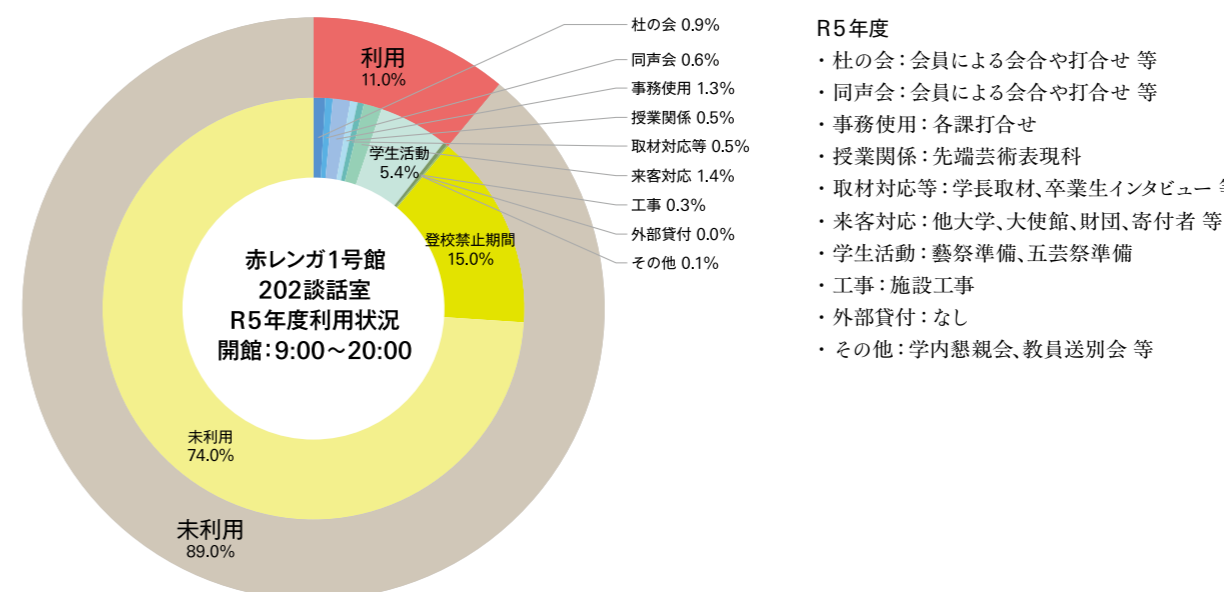
赤レンガ1号館 202談話室

杜の会 同声会 事務使用 授業関係 取材対応等 来客対応 学生活動 工事 外部貸付 その他 登校禁止期間 未利用



H31-R1年度

- ・杜の会: 会員による会合や打合せ等
- ・同声会: 会員による会合や打合せ等
- ・事務使用: 各課打合せ
- ・授業関係: 主にGA、その他(建築、古楽等)
- ・取材対応等: テレビインタビュー
- ・来客対応: 名誉教授
- ・学生活動: 藝祭準備、五芸祭準備
- ・工事: なし
- ・外部貸付: NPO団体
- ・その他: 学内懇親会、打ち上げ等



R5年度

- ・杜の会: 会員による会合や打合せ等
- ・同声会: 会員による会合や打合せ等
- ・事務使用: 各課打合せ
- ・授業関係: 先端芸術表現科
- ・取材対応等: 学長取材、卒業生インタビュー等
- ・来客対応: 他大学、大使館、財団、寄付者等
- ・学生活動: 藝祭準備、五芸祭準備
- ・工事: 施設工事
- ・外部貸付: なし
- ・その他: 学内懇親会、教員送別会等

- ・登校禁止期間: 夏期休業、大学院入試期間、冬期休業、共通テスト、学部入試期間(音楽学部に準ずる)

赤レンガ1号館1階の使い方

- ・[杜の会事務室] 平日10:00~16:00
- ・[同声会事務室] 月火木金10:00~16:00

赤レンガ1号館2階の使い方

- ※利用規約として杜の会HPより
- ・[大学の休日を除く] 平日9:00~20:00
- ・入学試験等、登校禁止期間の利用は不可
- ・美術学部杜の会会員を含む個人・団体・グループ
- ・[使用料金](9:00~17:00)800円/h、(17:00~20:00)1,200円/h

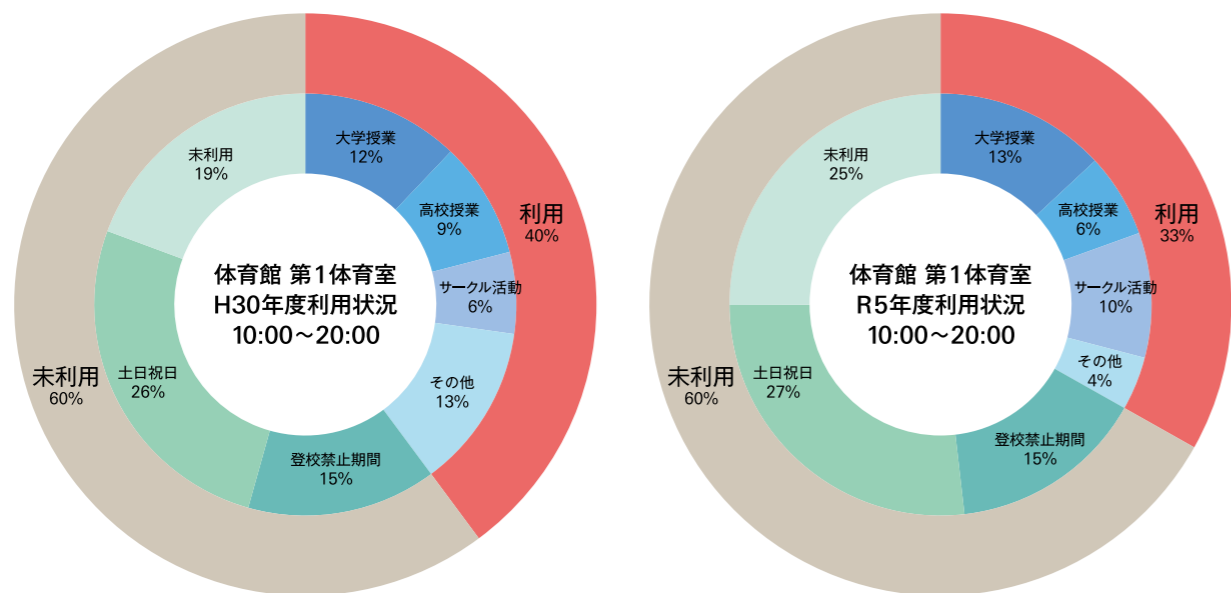
202談話室

令和5年度は、未利用が大部分を占めている状況である。「利用」の割合は11.0%で、そのうち「学生活動」が5.4%を占めている。一方、「未利用」の割合は89.0%であり、「登校禁止期間」の15.0%を除いた場合でも、未利用率は74.0%にのぼる。赤レンガ1号館は、東京都選定歴史的建造物であり、公開ゾーンに位置する正門付近に立地することから、利便性と象徴性を兼ね備えた建築物である。今後は、外部への貸付も視野に入れた活用が求められる。しかし、階段がありバリアフリー整備がされていないため、高齢者の利用には課題がある点も考慮すべきである。

体育館(第1・2体育室)

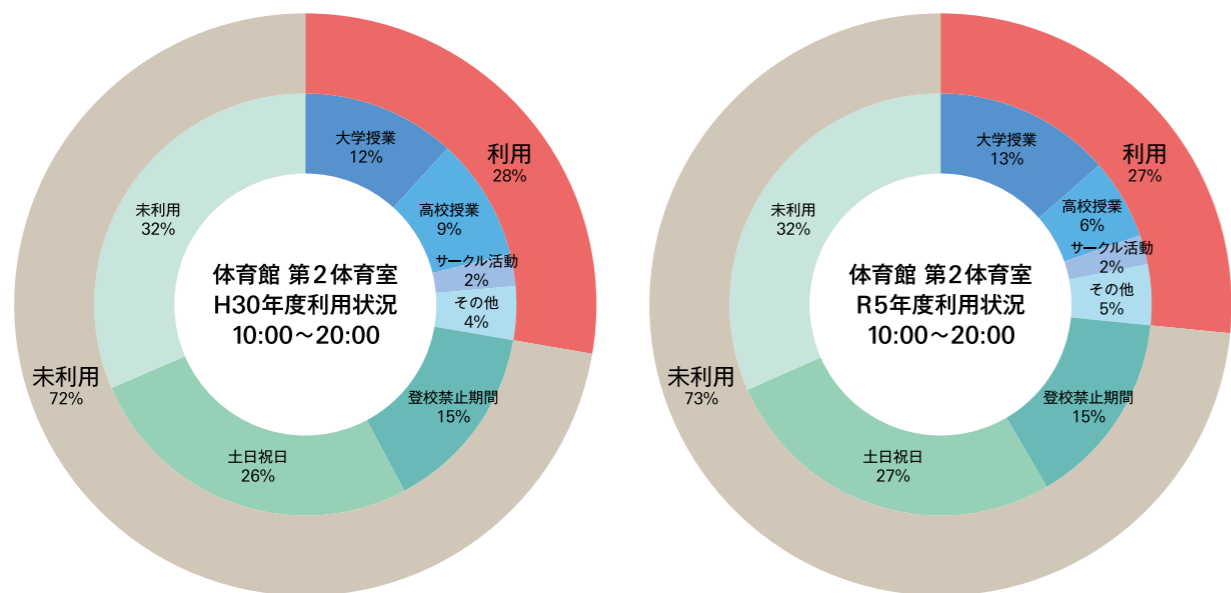
第1体育室

■ 大学授業 ■ 高校授業 ■ サークル活動 ■ その他 ■ 登校禁止期間 ■ 土日祝日 ■ 未利用



第2体育室

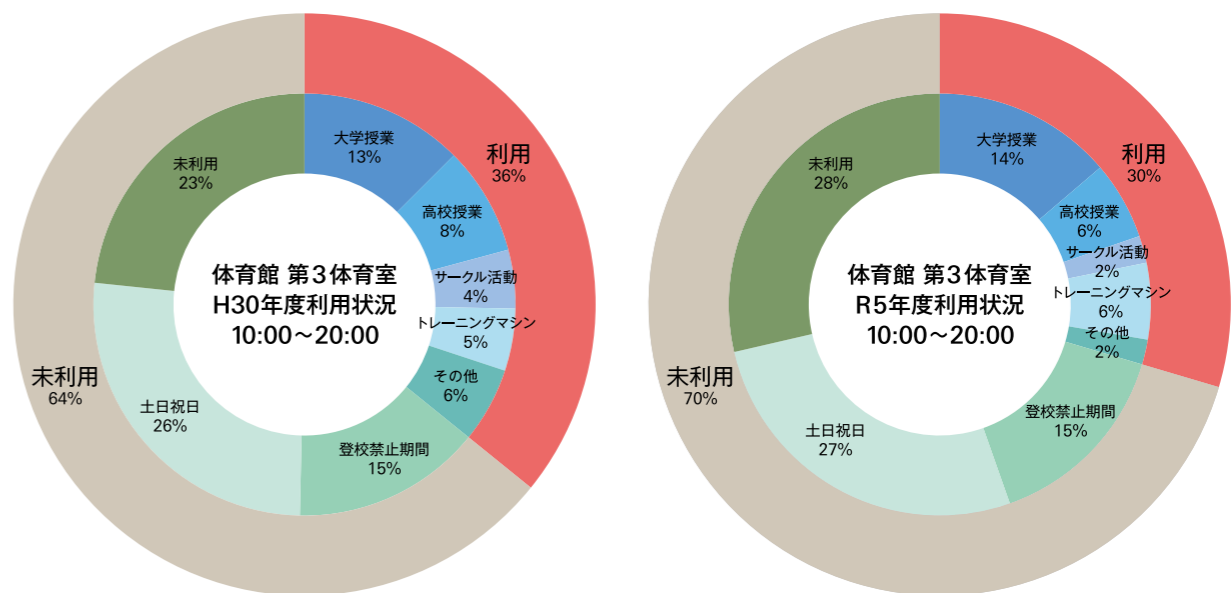
■ 大学授業 ■ 高校授業 ■ サークル活動 ■ その他 ■ 登校禁止期間 ■ 土日祝日 ■ 未利用



体育館(第3体育室)

第3体育室

■ 大学授業 ■ 高校授業 ■ サークル活動 ■ トレーニングマシン ■ その他 ■ 登校禁止期間 ■ 土日祝日 ■ 未利用



体育館の現状の使い方

- ・ [通常授業期間] 平日 10:00~20:00 (内、課外活動) 18:00~20:00
- ・ [授業なし期間] 平日 10:00~17:00
- ・ [休日] 10:00~17:00 ※通常学生への貸し出しはしていない
- ・ 附属音楽高校は、年度により異なるが週3日程度授業で使用している
- ・ 大学授業
- ・ 高校授業
- ・ サークル活動
- ・ その他(藝祭準備等)

第1・2・3体育室は、ほぼ同様の利用状況となっており、「利用」は30%前後で、「大学授業」、「高校授業」、「サークル活動」が主な利用内容である(第3体育室はトレーニングマシンの需要もある)。「未利用」の期間は、登校禁止期間に加えて、土日祝日を含めると全体の約60~70%に達している。体育館の敷地は独立したエリアにあり、学内の入試期間などの制約を受けることなく、さらに土日祝日も含めて24時間利用可能な立地条件を備えている。今後は、さらなる有効活用が求められる。

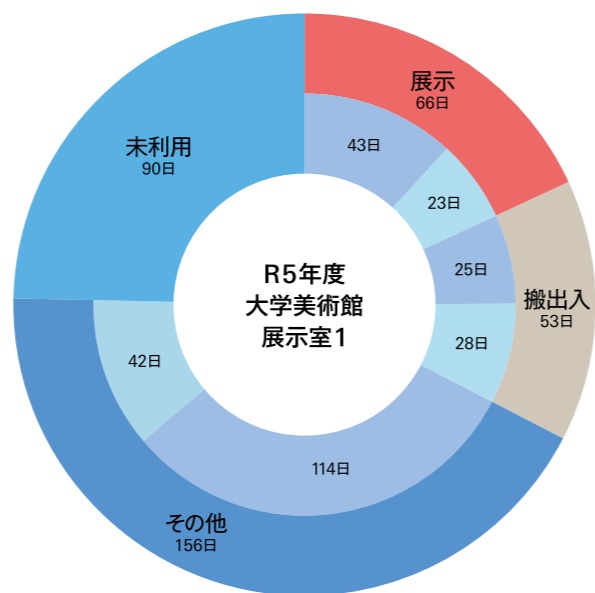
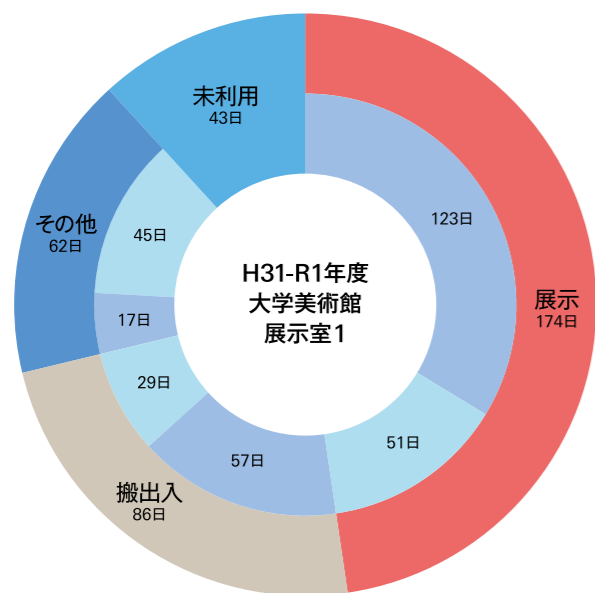
大学美術館本館 展示室1・2

展示室1

■ 展示 ■ 展示・搬出入 ■ 大学美術館 ■ 美術学部 ■ その他 ■ 未利用

その他：美術館実習、入試会場

その他：美術館実習、AMCによる美術館3Dモデル化

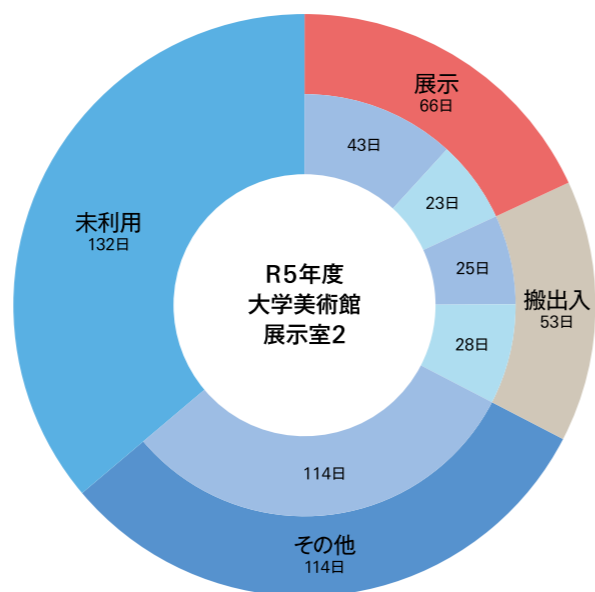
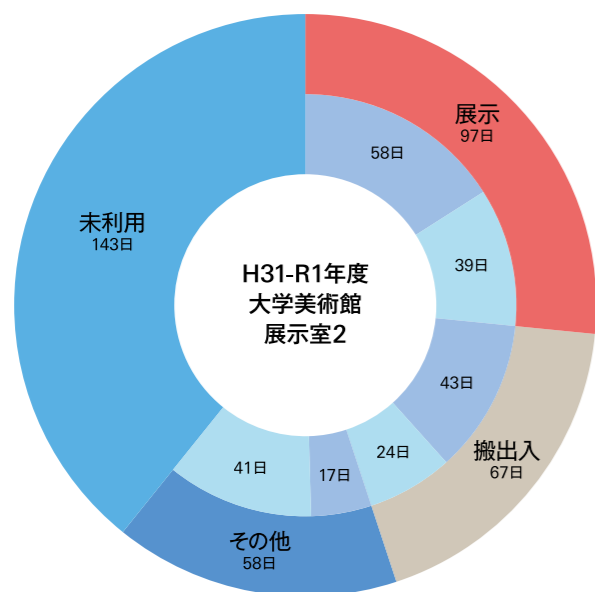


展示室2

■ 展示 ■ 展示・搬出入 ■ 大学美術館 ■ 美術学部 ■ その他 ■ 未利用

その他：授賞式、入試会場

その他：AMCによる美術館3Dモデル化



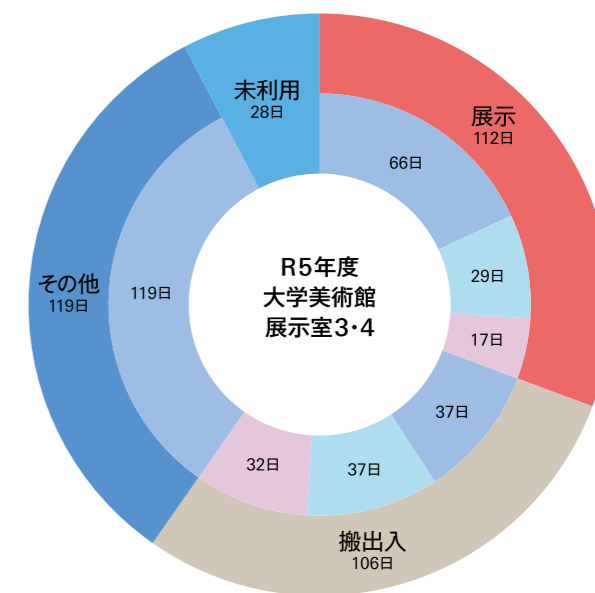
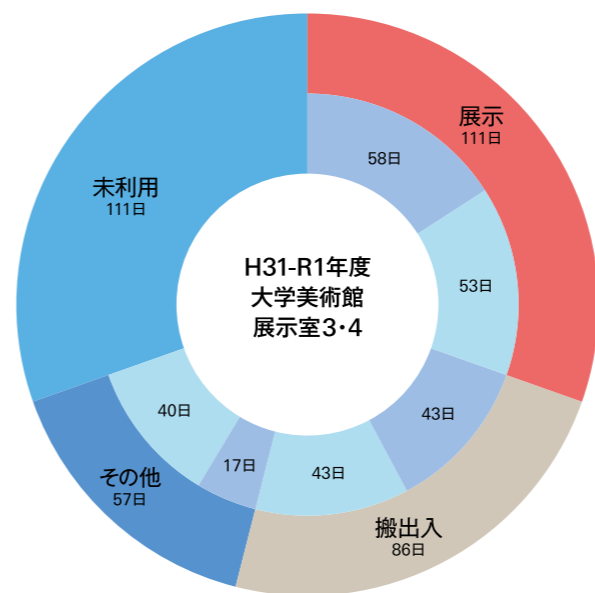
大学美術館本館 展示室3・4

展示室3・4

■ 展示 ■ 展示・搬出入 ■ 大学美術館 ■ 美術学部 ■ 芸術未来研究場 ■ その他 ■ 未利用

その他：入試会場

その他：美術館実習、AMCによる美術館3Dモデル化



大学美術館本館 展示室1～4の使い方（「利用指針」から抜粋）

- ・ [開館時間]
 - 10:00～17:00（入館は閉館の30分前まで）
 - 夜間開館は20時まで。夜間開館、休館日の開館は事前に要相談
- ・ [休館日] 月曜日
- ・ 搬出入や陳列等の作業は、原則平日（月～金）9:00～17:00 延長は20時まで、要相談
- ・ 展覧会場内の撮影は、原則休館日（月曜日）、平日の開館前後（9:00～10:00、17:00～18:00）とする
- ・ 規則では別に定めるとしているが、上野校地内の陳列館と正木記念館は大学美術館本館と同様の運用をしている。
- ・ 入試期間について、9月の修士入試期間が登校禁止になったのは最近であり、これまでも展覧会をしていたことから、制限を設けておらず開館している。2月～3月の修士・博士・学部入試期間は、開館しない。入試後の展覧会準備のための搬入等で使用するケースはある。
- ・ 令和3年度までは、大学美術館は先端芸術表現科および建築科の入試会場として主に使用されていたが、令和4年度、令和5年度は入試に使用されていない。令和4年度より、先端芸術表現科は取手キャンパスで、建築科は大学美術館外で入試を実施する運用へと変更している。なお、大学美術館で入試を実施する場合は、机・照明等の設営を外部委託していたことから設営費が発生していた。今後も大学美術館は入試会場として使用しない方向で進められている。
 - ※入試期間の日数については、グラフでは[その他—美術学部]の項目に含めて示している。

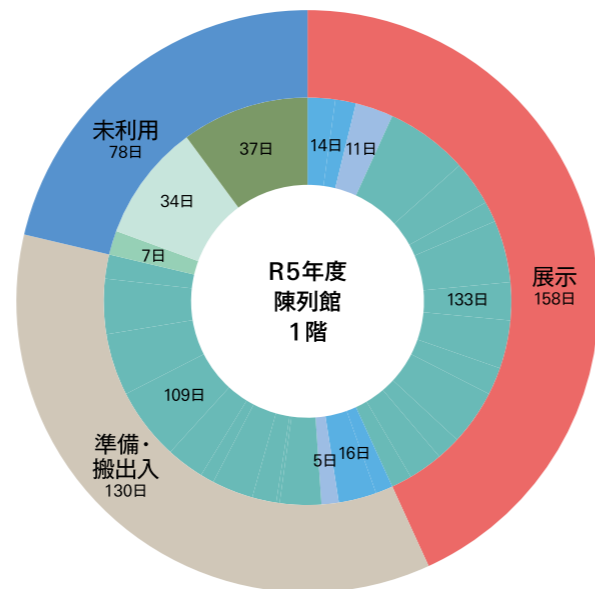
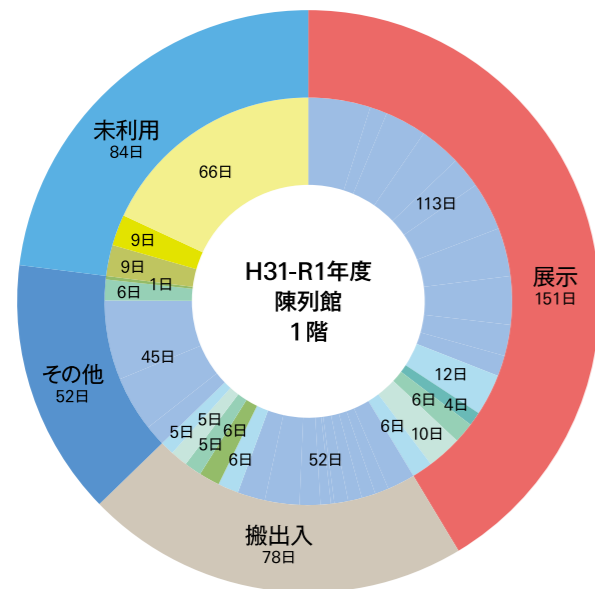
グラフを見ると、展示室1・2と展示室3・4は、それぞれ同じ階に配置されているため、利用状況もほぼ同程度であることがわかる。展示室1・2では、「展示」と「準備・搬出入」において「大学美術館」と「美術学部」が主に利用している。令和5年度において、展示室3・4では「芸術未来研究場展」が開催され、展示日数112日のうち約15%を占めている。また同年度には、展示室1～4において「瀋陽展」の開催を予定していたが、新型コロナウイルス流行および国際情勢の影響により中止となった。なお、グラフ上では、このうち90日分を[その他—大学美術館]に含めて示している。中止となり空いた期間に施設の一時貸付を検討したが相手企業と条件が折り合わなかった。いずれの展示室も新しい取り組みなどを検討し、さらなる有効活用が求められる。

陳列館

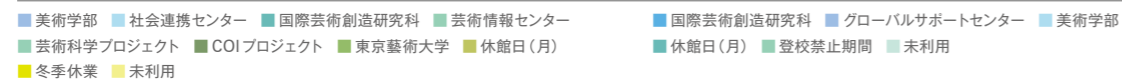
1階



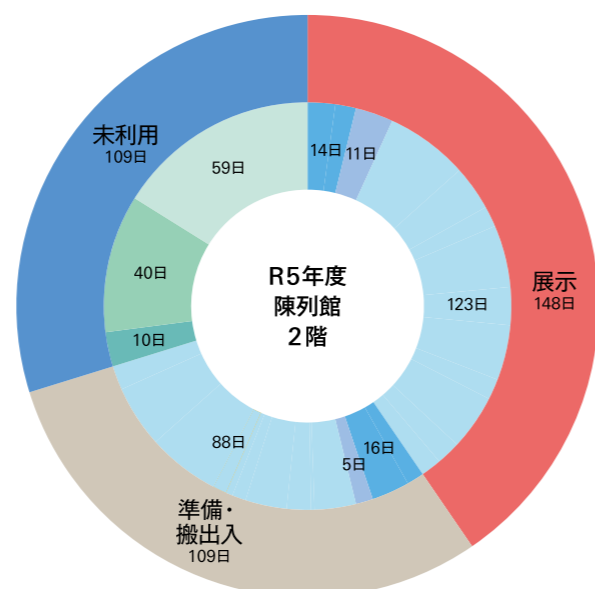
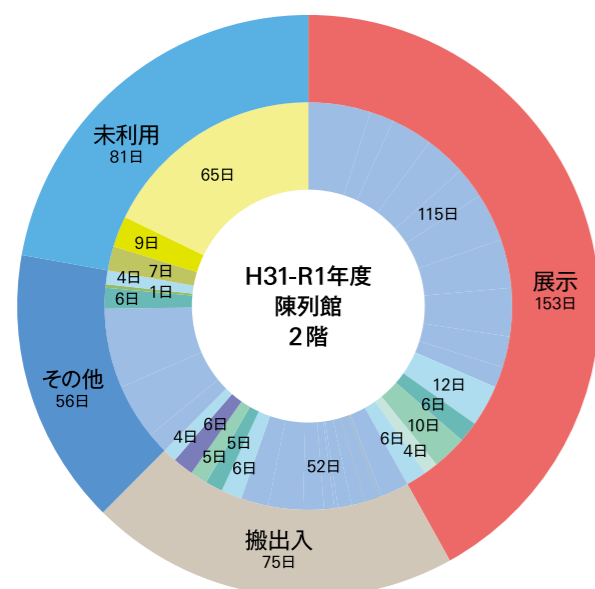
その他：講評会、キャンパスツアー



2階



その他：講評会、キャンパスツアー



陳列館の使い方

- ・ [開館時間] 火～日曜 10:00～17:00
夜間開館は 20:00まで
- ・ 月曜日は原則休館日。ただし、使用者の責任において月曜開館も可能
- ・ 鍵の貸し出しは 9:00～17:30

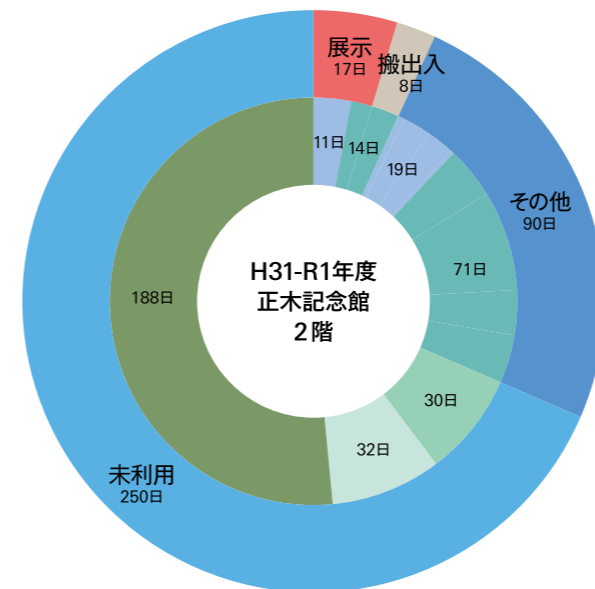
利用率は非常に高く、主に「美術学部」と「国際芸術創造研究科」の教育研究活動が多くを占めている。令和5年度のデータを見ると、「未利用」のうち、「登校禁止期間」と「休館日(月)」を除いた「未利用」は、1階で37日(10%)、2階で54日(16%)にとどまっている。本学を象徴する歴史的建造物の一つであり、展示空間の広さや採光の良さといった質的特徴から、長年にわたり好まれて利用されてきたことがうかがえる。

正木記念館

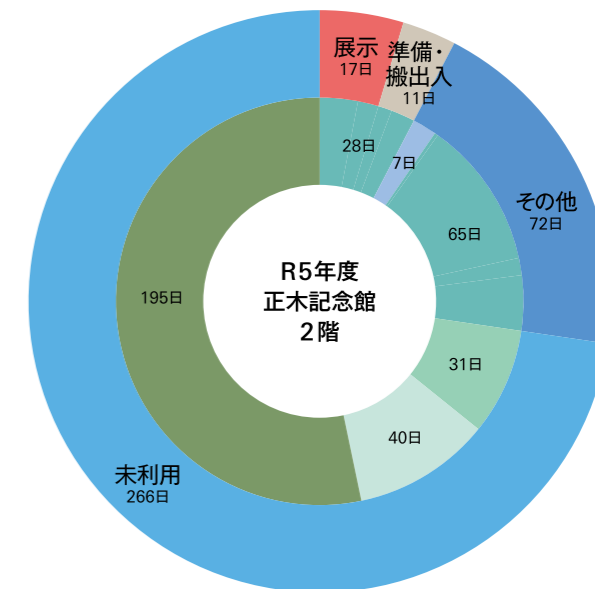
2階



その他：報道発表会、実習・日本画臨写、文化交流事業等



その他：協定調印式、美術実習、授業、講評会



正木記念館の使い方

- ・ [開館時間] 火～日曜 10:00～17:00
夜間開館は 20:00まで
- ・ 月曜日は原則休館日
- ・ 鍵の貸し出しは 9:00～17:30

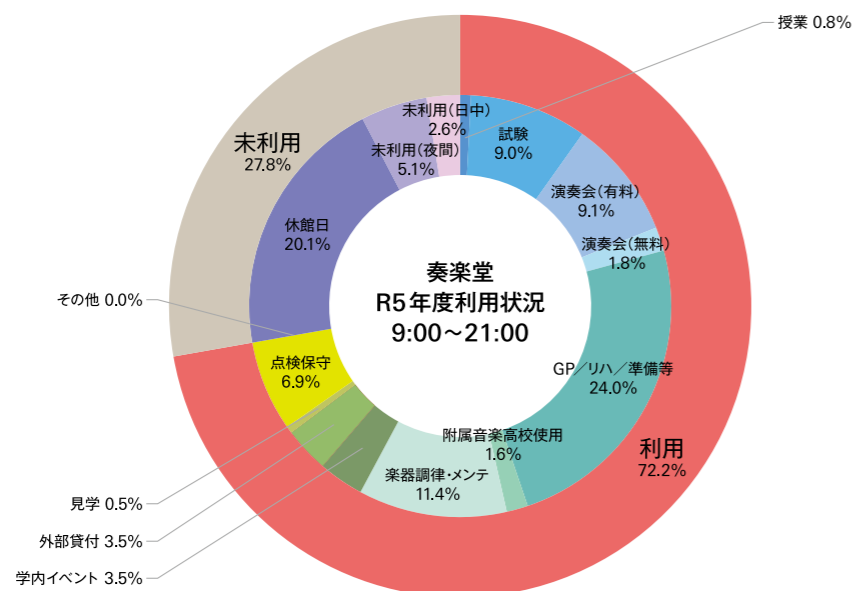
正木記念館1F

1階には、未来創造継承センターが設置されている。令和7年(2025年)に正木記念館改修を実施した。

正木記念館の2階は、日本美術を陳列するための書院造の和室として設計された。また、歴史ある本学を象徴する建築の一つでもある。この和室は特別な空間として利用されることが中心であるため、利用率の観点では低い状況にある。利用は「大学美術館」と「美術学部」によって占められており、展示やその準備・搬出入ではなく、「その他」に分類される使われ方をしていることが読み取れる。今後は、単なる利用率の向上にとどまらず、この象徴的空間の特性を活かしたさらなる有効活用が求められる。

奏楽堂

■ 授業 ■ 試験 ■ 演奏会(有料) ■ 演奏会(無料) ■ GP/リハ/準備等 ■ 附属音楽高校使用 ■ 楽器調律・メンテ ■ 学内イベント ■ 外部貸付 ■ 見学 ■ 点検保守 ■ その他 ■ 休館日 ■ 未利用(夜間) ■ 未利用(日中)



奏楽堂の現状の使い方

平日・休日等関わらず、9:00~21:00 計12時間の稼働
 [朝] 9:00~13:00 [昼] 13:00~17:00 [夜] 17:00~21:00

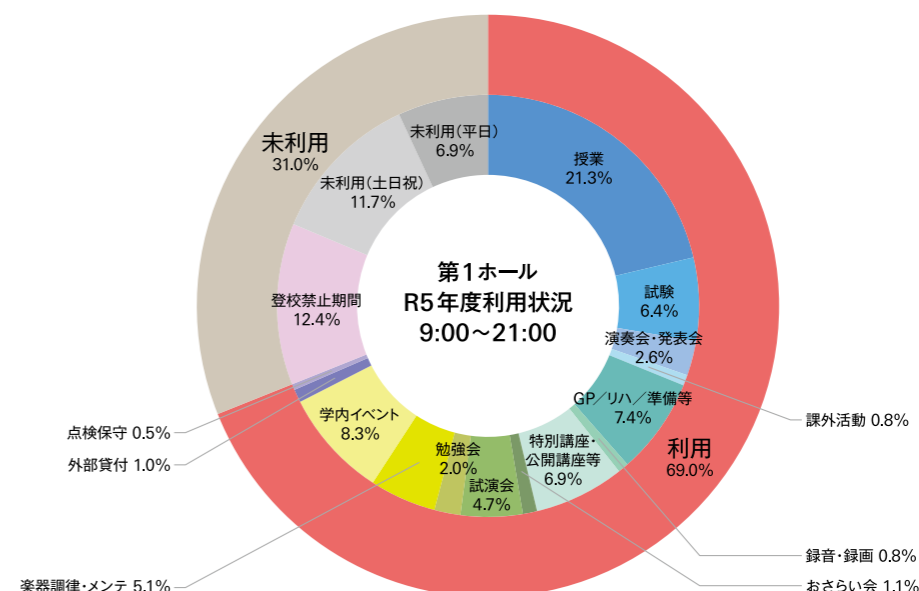
内訳

- ・ 授業：オルガン授業、集中講義（ホール音響概論）
- ・ 試験：学内演奏会、入試試験、卒業・修了演奏会
- ・ 演奏会（有料）：モーニングコンサート、藝大フィル、同声会、シンフォニーオケ、プロジェクト 等
- ・ 演奏会（無料）：修士・博士リサイタル、退任演奏会
- ・ GP/リハ/準備等：各種演奏会リハ・準備・練習 等
- ・ 附属音楽高校使用：実技試験、演奏会、学校説明会
- ・ 楽器調律・メンテ：ピアノ・オルガン調律、オルガンオーバーホール（17日間）
- ・ 学内イベント：入学式、卒業式、オープンキャンパス、藝祭 等
- ・ 外部貸付：東京春音楽祭、レクサスコンサート、メサイア、台東区第九 等
- ・ 見学：朝日新聞、文部科学省 等
- ・ 点検保守：舞台機構、可変天井、舞台照明、空調設備修理、消防設備点検 等
- ・ 休館日：予定のない土日祝日は休館日に充てている
- ・ その他：なし

利用率は72.2%と非常に高い水準である。利用内容の内訳を見ると、「GP/リハ/準備等」が24.0%、「楽器調律・メンテナンス」が11.4%、「演奏会（有料）」と「試験」がそれぞれ約9%を占めている。一方、「未利用」の内訳にある「休館日」は、運営受託者の休日確保や保守点検、工事などの日程調整に充てられる必要な期間である。よって外部利用を大幅に拡大する余地は大きくない。多様な演奏会等の企画は存在するが、実現に向けた人的リソースが不足している。施設は音響特性に優れ、演者や来場者にとって高い利便性を備える一方、ホワイエや地下スペース、奏楽堂前広場における来場者サービス機能が不足している。ホワイエと前広場は、小規模な展示空間・演奏空間としての活用が見込まれる。音楽学部側正門からのアプローチに距離があり、夜間時の足元が暗い。教育ゾーンに位置しているが、一般向けコンサート等の公開機能も含まれている。

第1ホール(音楽学部練習ホール館)

■ 授業 ■ 試験 ■ 演奏会・発表会 ■ 課外活動 ■ GP/リハ/準備等 ■ 録音・録画 ■ 特別講座・公開講座等 ■ おさらい会 ■ 試演会 ■ 勉強会 ■ 楽器調律・メンテナンス ■ 学内イベント ■ 外部貸付 ■ 点検保守 ■ 登校禁止期間 ■ 未利用(土日祝) ■ 未利用(平日)



第1ホールの現状の使い方

平日・休日等関わらず、9:00~21:00 計12時間の稼働
 [朝] 9:00~13:00 [昼] 13:00~17:00 [夜] 17:00~21:00
 個人、サークル利用は平日のみ可

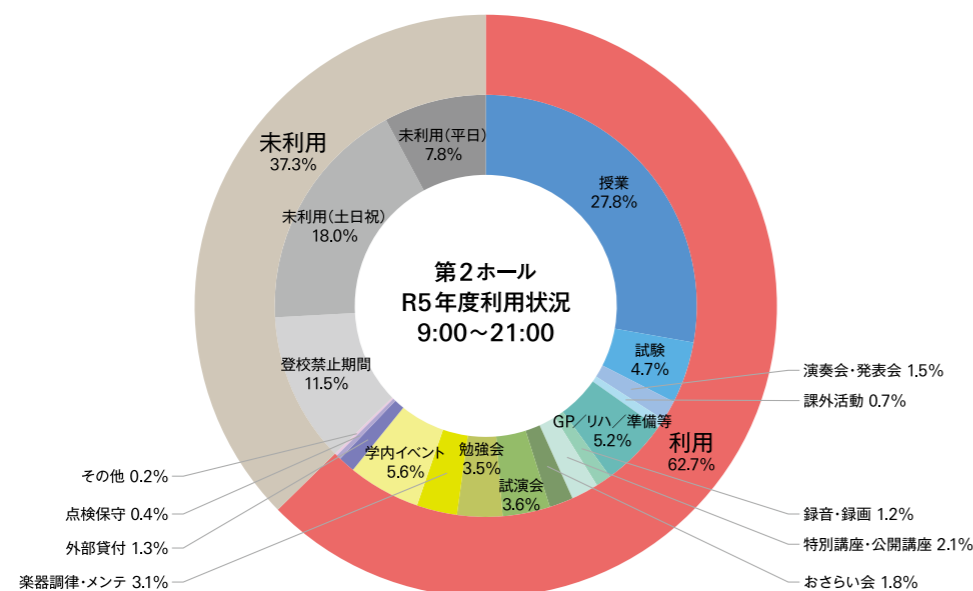
内訳

- ・ 授業：各科授業
- ・ 試験：実技試験、学部入試
- ・ 演奏会・発表会：博士リサイタル、科研費合奏研究発表会、各科発表会、イベント 等
- ・ 課外活動：合唱サークル
- ・ GP/リハ/準備等：各種演奏会リハ・準備・練習 等
- ・ 録音・録画：オーケストラ録音、オーデション録画 等
- ・ 特別講座・公開講座：ジュニアアカデミー、早期教育P、科研費合奏研究 等
- ・ おさらい会、試演会、勉強会
- ・ 学内イベント：入学式、卒業式、オープンキャンパス、藝祭、辞令交付式、共通テスト 等
- ・ 点検保守：ネットワーク工事、消防設備点検 等
- ・ 外部貸付：台東区ワークショップ、伝統音楽指導研修会場、声楽学会
- ・ 登校禁止期間：夏期休業、大学院入試、冬期休業、学部入試（共通テスト）

利用率は69.0%と非常に高い水準である。利用内容の内訳は、「授業」が21.3%、「学内イベント」が8.3%、「GP/リハ/準備等」と「特別講座・公開講座等」がそれぞれ約7%を占めている。一方、「未利用」の31.0%の内訳を見ると、「登校禁止期間」が12.4%を占め、それを除いた場合、「平日」が6.9%、「土日祝日」が11.7%で、合計18.6%となる。

第2ホール(音楽学部練習ホール館)

■ 授業 ■ 試験 ■ 演奏会・発表会 ■ 課外活動 ■ GP/リハ/準備等 ■ 録音・録画 ■ 特別講座・公開講座等 ■ おさらい会 ■ 試演会 ■ 勉強会 ■ 楽器調律・メンテナンス ■ 学内イベント ■ 外部貸付 ■ 点検保守 ■ その他 ■ 登校禁止期間 ■ 未利用(土日祝) ■ 未利用(平日)



第2ホールの現状の使い方

平日・休日等問わず、9:00~21:00 計12時間の稼働
 [朝] 9:00~13:00 [昼] 13:00~17:00 [夜] 17:00~21:00
 個人、サークル利用は平日のみ可

内訳

- ・ 授業：各科授業、補講
- ・ 試験：実技試験、学部・博士入試
- ・ 演奏会・発表会：合奏発表会、イベント等
- ・ 課外活動：合唱サークル
- ・ GP/リハ/準備等：各種演奏会リハ、準備、練習、合わせ等
- ・ 録音・録画：録音・録画、演奏記録等
- ・ 特別講座・公開講座：ジュニアアカデミー、早期教育P、レッスン等
- ・ おさらい会、試演会、勉強会学内イベント：オープンキャンパス、藝祭、共通テスト等
- ・ 点検保守：ネットワーク工事、消防設備点検等
- ・ 外部貸付：台東区ワークショップ、伝統音楽指導研修会場、NHK収録等
- ・ その他：オーディション

利用率は62.7%と非常に高い水準である。利用内容の内訳は、「授業」が27.8%、「学内イベント」が5.6%、「GP/リハ/準備等」と「試験」がそれぞれ約5%を占めている。

一方、「未利用」の37.3%の内訳を見ると、「登校禁止期間」が11.5%を占め、それを除くと「平日」が7.8%、「土日祝日」が18.0%で、合計25.8%となる。

第3・4・5ホール(音楽学部練習ホール館)

第3・4・5ホールは、外部貸し出しはせず、学内使用に特化している。

第3・5ホール(オペラ)の現状の使い方

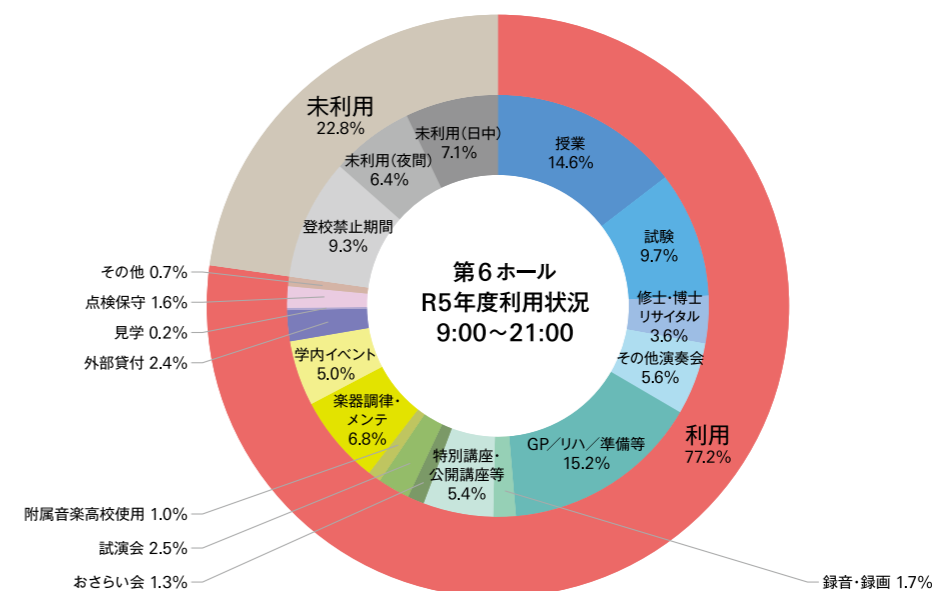
基本的にオペラ専攻が使用。
 年に数回、学部入試や藝大フィルのオーディションで他科が使用。
 外部貸出しはしていない。

第4ホール(能ホール)の現状の使い方

基本的に邦楽科が、レッスンや試験、専攻生の自主稽古の場として使用。
 他科・専攻の利用申し出があった場合、利用可否を精査。
 文部科学省や行政機関、大学組織の見学希望があった場合のみ対応し、それ以外は通常非公開。

第6ホール(音楽学部4号館)

■ 授業 ■ 試験 ■ 演奏会・発表会 ■ 課外活動 ■ GP/リハ/準備等 ■ 録音・録画 ■ 特別講座・公開講座等 ■ おさらい会 ■ 試演会 ■ 附属音楽高校使用 ■ 楽器調律・メンテナンス ■ 学内イベント ■ 外部貸付 ■ 見学 ■ 点検保守 ■ その他 ■ 登校禁止期間 ■ 未利用(夜間) ■ 未利用(日中)



第6ホールの現状の使い方

平日・休日等問わず、9:00~21:00 計12時間の稼働
 [朝] 9:00~13:00 [昼] 13:00~17:00 [夜] 17:00~21:00
 個人、サークル利用は平日のみ可。有料コンサートの開催は不可

内訳

- ・ 授業：各科授業
- ・ 試験：実技試験、学部・修士・博士入試、演奏審査
- ・ 修士・博士リサイタル
- ・ その他演奏会：各種コンサート、外部貸出演奏会等
- ・ GP/リハ/準備等：各種演奏会リハ、準備、練習等
- ・ 録音・録画：オーケストラ録音、動画撮影等
- ・ 特別講座・公開講座：ワークショップ、ジュニアアカデミー、早期教育P、勉強会等
- ・ おさらい会、試演会
- ・ 附属音楽高校使用：授業
- ・ 学内イベント：入学式、卒業式、オープンキャンパス、藝祭、五藝祭
- ・ 点検保守：舞台機構、可変天井、舞台照明、空調設備修理、消防設備点検等
- ・ 外部貸付：コンクール会場、伝統音楽指導研修会場
- ・ 見学：日本芸術文化振興会等
- ・ その他：オーディション
- ・ 登校禁止期間：夏期休業、大学院入試、冬期休業、共通テスト、学部入試

利用率は77.2%と非常に高い水準である。利用内容の内訳は、「GP/リハ/準備等」と「授業」がそれぞれ約15%、「試験」が9.7%を占めている。

一方、「未利用」の22.8%の内訳を見ると、「登校禁止期間」が9.3%を占め、それを除くと「日中」が7.1%、「夜間」が6.4%で、合計13.5%となる。

01-6

キャンパス全体の主な行事

卒業・修了制作展

美術学部では、学生生活の集大成として「卒業・修了作品展」を毎年開催している。各科、各専攻が上野に集い、東京都美術館や大学美術館、校内のアトリエや屋外スペースを活用し、キャンパス全体が展示空間として機能する。全員参加の本展は、個人の自由な創作を基軸とする教育環境の成果であり、切磋琢磨の中で培われた独創的な研究と、芸術文化の振興に寄与する社会的創作活動の新たな試みでもある。

卒業演奏会

音楽学部では、学生生活の集大成として「卒業演奏会」を毎年開催している。奏楽堂、第6ホール、第4ホール(能ホール)など本学上野キャンパスにある多様な音楽施設を会場とし、専攻ごとの特性を活かした演奏が繰り広げられる。全公演は無料で一般公開され、学内で培われた教育研究の成果を広く社会に発信する機会となっている。「卒業演奏会」は、キャンパスの施設が生きた発表の場として機能し、未来の音楽家たちの歩みを社会と共有する重要な取り組みである。

藝祭

本学学生の成果を披露する「藝祭」は、学生主体の大学祭であり、未来の芸術家たちによる芸術祭、さらに上野の街を盛り上げる地域祭でもある。演奏会や作品展示、1年生による御輿や法被等の展示が展開され、藝大さくら通りや上野公園にも広がる。キャンパスと道、公園が一体となり「開かれたキャンパス」を形成している。

展覧会・演奏会

教育研究の現場を併せ持つ総合芸術大学の特性を生かし、展示や発表、演奏会などを通じて研究成果を公開している。大学美術館や奏楽堂、各学部・研究科・センターが主催する展覧会やコンサート、藝大フィルハーモニア管弦楽団による演奏会など、多様な成果発表が日々行われている。

公開講座

教育研究の成果を社会に開き、芸術の魅力と学びを広く共有するための取り組みである。美術・音楽をはじめ多彩な分野の講義や実技、ワークショップを通じて、本学ならではの創造的な学びを社会に発信している。

入試

本学の入試は、専門的な実技力と創造性を重視し、芸術家としての資質と表現力を総合的に評価するため、各分野の特性に応じて筆記に加え実技などを複数日程で実施している。また、本学キャンパスの専門性の高い設備や空間を活用した試験を行う点も特徴である。

02

上野キャンパス
マスタープラン
2013の検証

- 02-1 | 上野キャンパスマスタープラン 2013
アップデートへの取り組み方
- 02-2 | 上野キャンパスマスタープラン 2013の検証
- 02-3 | 上野キャンパスマスタープラン 2013策定後に
顕在化した事象
- 02-4 | 変えてはいけないもの、変えていくもの
- 02-5 | 引き続き取り組むべき課題と新たな課題の提示

上野キャンパスマスタープラン2013 アップデートへの取り組み方

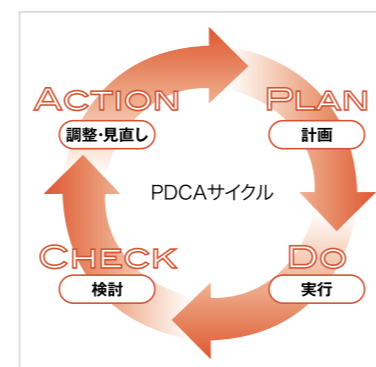
これまで、上野校地に関しては、『上野キャンパスマスタープラン2013』に即した改善の取り組みが行われ、キャンパス全体を視野に入れた計画が実施されてきた。しかしながら、マスタープラン策定から13年を経て、その間に、国際芸術リソースセンター(IRCA)や国際交流棟などの建設が進むと同時に社会動向にも変化が生じたために、『上野キャンパスマスタープラン2013』の見直しが求められている。本計画は、『上野キャンパスマスタープラン2013』の評価をベースにしつつ、新たな現代的な課題を加えてアップデートを目指すもので、以下のような作成の手順をとりたい。

- 〈1〉— 上野キャンパスマスタープラン2013の検証
- 〈2〉— 上野キャンパスマスタープラン2013作成以後に顕在化した事象
- 〈3〉— 引き続き取り組むべき課題と新たな課題
- 〈4〉— 計画目標と4つの基本軸

このうち〈1〉は『上野キャンパスマスタープラン2013』が掲げたPDCA (Plan-Do-Check-Action) サイクルの「Check (検討)」及び「Action (調整、見直し)」に該当する部分であり、〈2〉は『上野キャンパスマスタープラン2013』の段階では想定されていなかった事象の提示である。続く〈3〉は〈1〉及び〈2〉を総合した課題の提示であり、〈4〉はそこから導き出された新たな計画目標の提示である。

——『東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン2013』| p.17参照

fig.06 | PDCAサイクル



「東京藝術大学キャンパスマスタープラン2025 上野キャンパス編」の位置づけ

キャンパスマスタープランは、本学の長期的な発展を支える総合的な指針である。大学の使命や目標に基づき、キャンパス内の建物や植物など自然要素を含む物理的環境やインフラの整備・発展を図る計画であり、単なる施設配置にとどまらず、大学の将来像や戦略を具現化し、学術・教育環境を向上させるための基盤である。これらを実現するためには、本学全体でこのキャンパスマスタープランを遵守し、実行していくことが求められる。前回のキャンパスマスタープランを振り返り、未解決の課題が残されている点もふまえ、今後のキャンパスの更新に関するすべての施策は、この新たなキャンパスマスタープランに基づいて遂行されなければならない。また同時に、時代や戦略的状况に応じてマスタープランを更新し、適宜対応することも求められる。



上野キャンパスマスタープラン2013の検証

ここでは『上野キャンパスマスタープラン2013』についての検証を行う。今までの施設整備成果を客観的に見つけ直し、検証結果を本マスタープランに反映することを目的とする。『上野キャンパスマスタープラン2013』では「上野キャンパスの課題」が全体計画、内部空間、外部空間、施設整備全体のマネジメントとして下記のように分類されている。これらに沿って、現時点のそれぞれの達成度を確認する。

〔※は『上野キャンパスマスタープラン2013』に記述がないもの／斜体は記述されているそのままの言葉〕

[1] 全体計画における課題

1-A: 総合的なキャンパスを構成するハードの不足

- 完成**
- ・ Crossing 構想 Stage1 →国際芸術リソースセンター (IRCA) の完成
 - ・ Crossing 構想 Stage2 →Arts&Science LAB. の完成
 - ・ Crossing 構想 Stage2 →国際交流棟の完成
 - ・ 持続可能性を高める改修計画 →『インフラ長寿命化計画 (2019年度版)』の完成
- 進行中**
- ・ 『東京藝術大学キャンパスデザインガイドライン (上野キャンパス編)』
 - ・ 「変えてはいけないもの」の明確化
景観資源として、東京都選定歴史的建造物である赤レンガ1・2号館、陳列館、正木記念館、旧東京美術学校本館玄関／DOCOMOMO 選定建築物の附属図書館、絵画棟、彫刻棟／音楽学部側正門、岡倉天心六角堂を設定
 - ・ キャンパスの一体化 (多軸的につなぐ)
旧東京美術学校本館玄関、旧美術学部側正門の活用開始
 - ・ キャンパスグランドデザイン推進室の明確な位置づけ、植栽計画ガイドライン、サイン、ファニチャー、照明計画
- 未着手**
- ・ 景観審議会、デザインコミッティーの設置

1-B: 施設プログラムでの問題

- 完成**
- ・ 国際化への対応 →招聘教員宿泊施設、国際交流棟の完成
 - ・ 収蔵庫の拡張、保存 →取手収蔵棟の完成
- 進行中**
- ・ 交流空間、図書閲覧室、学生会館の不足
国際芸術リソースセンター (IRCA) の完成／国際交流棟の交流スペースの策定
 - ・ 大学美術館・奏楽堂の大規模修繕への備え
インフラ長寿命化計画、予防保全型修繕による長寿命化サイクル
大学美術館設備改修、大学美術館運営方針の策定、奏楽堂外壁改修
 - ・ 自習スペース、ゼミ室、ちょっとした交流空間、帰宅前までに過ごす第3の場の不足
国際芸術リソースセンター (IRCA) 内ラーニングコモンズ (ソフトは未完)
- 未着手**
- ・ 分散している専攻、科の存在の可視化
 - ・ 4つのキャンパスのセンターとして、各キャンパスのサテライトスペースの確保

1-C: 都市的スケールの中でのキャンパス

- 完成**
- ・ プロムナードの完成 →旧美術学部側正門、藝大アートプラザのリニューアル、旧東京美術学校本館玄関の開門
(新型コロナウイルス感染症の流行により閉鎖 2020年4月～2023年4月)

- ・ 南門の利用開始
- ・ 閉鎖的なキャンパスから開かれたキャンパスへ
- ・ 護国院側西門の利用開始 (新型コロナウイルス感染症の流行により閉鎖 2020年4月～2023年4月)
- ・ 藝大ヘッジ: 大学周囲の塀や柵を緑による境界へ置き換える取り組み
- ・ 地域と連携: アートクロス構想、上野文化の杜新構想の連携
- ・ 安全と安心: 東京藝術大学震災対応マニュアル2017、防災訓練、備蓄、セキュリティ、音楽学部側正門再生による耐震化、万年塀対策2019* ([fig. 07]参照)
→p.063
- ・ 国、都、区などのマスタープランと連携 →今後の上野公園方面のキャンパス景観づくりに連動
- ・ 都道452号線都市計画道路補92号の計画廃止に伴い、更なるキャンパスの一体化 (多軸的につなぐ)
- ・ 季節や時間に対応して変更可能な公開ゾーンの設定

未着手

[2] 内部空間における課題

2-A: 老朽化と狭隘化による機能不全、最適化の必要性

- 完成**
- ・ 彫刻棟改修、彫刻棟差し掛けの完成
 - ・ 全ての耐震化完了、国際芸術リソースセンター (IRCA) の完成
 - ・ 収蔵庫の拡張、保存 →取手館収蔵棟の完成
- 未着手**
- ・ 改修では解決できない専門性の高い最適な空間
美術学部中央棟: 天井が低く部屋割りが狭いため、必要とされる機能に答えられていない
地下にある専従空間 (写真センターなど) の劣悪な環境
絵画棟: 現行法規では高さ制限を超過
音楽学部1・2号館: 天高が低く改修しても良好な音響環境が得られない
音楽学部3号館: 狭小な構造スパンと低い天井高

[3] 外部空間における課題

3-A: キャンパスは人々の活動の場であるという再認識

- 完成**
- ・ プロムナード (Crossing 構想 Stage1)、旧美術学部側正門の開門、藝大アートプラザ
 - ・ 保存林、藝大ヘッジ、屋外デッキ
 - ・ 環境の最適化、外来者動線の整理、整備
- 未着手**
- ・ 駐車スペースのルール化、A地区側グラウンドのあり方 ([fig. 07]参照)
→p.063

3-B: 歴史や自然環境の魅力をさらに生かす必要性

- 完成**
- ・ キャンパスマップの作成と公開
 - ・ 音楽学部側正門の整備およびライトアップ
- 未着手**
- ・ 歴史的建物、胸像、銘板、門柱の耐震化および魅力ある整備

[4] 施設整備全体のマネジメント

4-A: ファシリティマネジメントの転換の必要性

- 達成**
- ・ 全学的な視点で活動するキャンパスグランドデザイン推進室
- 未達成**
- ・ 内部組織への適切な空間配分
 - ・ 経営的視点に基づいた適切な情報提供 (コストと効果)

4-B: 戦略的視点とデータベースの構築の必要性

- 達成**
 - 学内スペースのデータベース化
- 未達成**
 - 概念としての共有空間の定着。新たな教育研究活動に対するフレキシブルな対応

4-C: 持続可能性の追求の必要性

- 達成**
 - インフラ長寿命化計画(2019年3月)／老朽化・狭隘化に関する現状の定量的な調査と把握*
 - SDGs推進室の設置(2021年6月)／SDGsの達成に貢献するための取り組みを推進*
- 進行中**
 - ファシリティマネジメント・エネルギーマネジメント(PDCAサイクルとマスタープランの継続)

『上野キャンパスマスタープラン2013』の検証のために、2013年以降の上野キャンパス内での変遷を、各フィールドごとの施設整備に関わる出来事、その他キャンパス整備に関わる出来事、教育研究に関わる出来事に分類すると以下の通りになる。

[※は『上野キャンパスマスタープラン2013』に記載されていない出来事(想定していなかった出来事)]

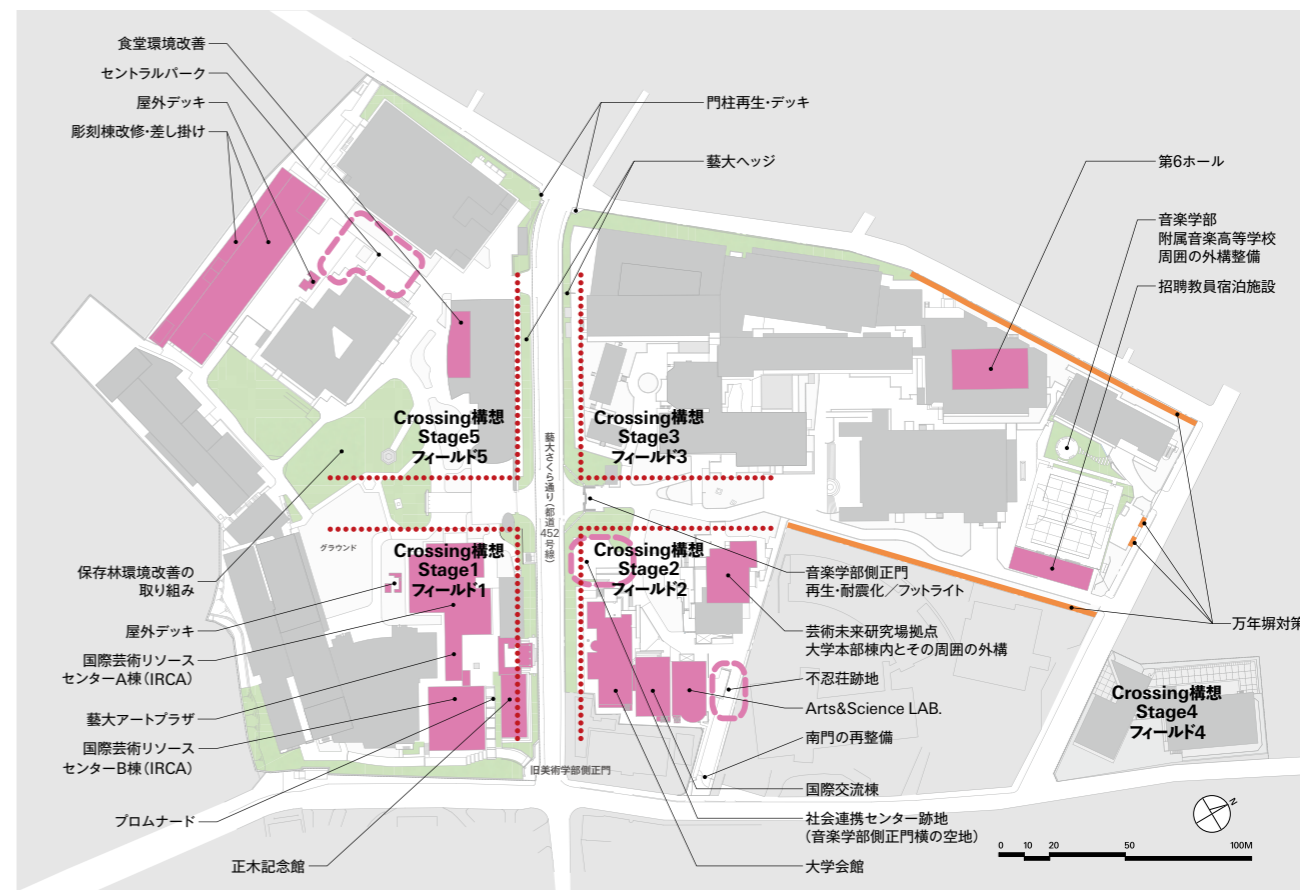
各フィールドごとの施設整備に関わる出来事

	新しくできたもの	なくなったもの
フィールド1 Crossing構想 Stage1	<ul style="list-style-type: none"> 国際芸術リソースセンターB棟(IRCA) 2017 国際芸術リソースセンターA棟(IRCA) 2018 : 附属図書館 耐震改修、全ての耐震化完了 プロムナードの形成 旧美術学部側正門、旧東京美術学校本館玄関の開門 2017 藝大アートプラザ リニューアル* 2018 正木記念館改修* 2025 	<ul style="list-style-type: none"> 旧芸術資料館
フィールド2 Crossing構想 Stage2	<ul style="list-style-type: none"> Arts&Science LAB.* 2015 国際交流棟(大学会館の増築) 2022 芸術未来研究場(大学本部棟内)* 2023 変化し続けるパブリックアート* 2023 南門の再整備* 2023 	<ul style="list-style-type: none"> 社会連携センター解体* 2020 不忍荘の解体* 2023
フィールド5 中央棟エリア	<ul style="list-style-type: none"> セントラルパーク* 2019 (2020年から新型コロナウイルス感染症の流行により、整備および活用が限定的なものとなった。) 	
その他のエリア	<ul style="list-style-type: none"> 第6ホール改修 2014 招聘教員宿泊施設* 2017 音楽学部附属音楽高等学校周囲の外構整備* 音楽学部側正門 耐震化*、フットライト設置 2019~2021 万年堀対策* 2019 彫刻棟改修 差し掛け* 2022 保存林再生実験* 藝大ヘッジ* 屋外デッキ 食堂環境改善* 	

*「施設整備に関わる出来事」とは、計画通知を行ったもの。施設整備費によるもの

上記の各フィールドごとの施設整備に関わる出来事を配置図に示すと下図となる。

fig.07 | 施設整備に関わるフィールドごとの出来事



その他キャンパス整備に関わる出来事

- 都道452号線 都市計画道路補92号の計画廃止*、名称が藝大さくら通りとなる(2025年)*
- アートクロス構想、上野「文化の杜」新構想との連携*
- 万年堀対策(2019年)*
- 大学美術館収蔵スペースの不足に伴い2015年より外部倉庫の利用開始*
- 収蔵品は毎年増加 全学的問題
→ 取手館収蔵棟の完成(2024年)*
- 『東京藝術大学キャンパスデザインガイドライン(上野キャンパス編)』
- 外来者のためのキャンパスマップ(2019年)*
- 東京藝術大学震災対応マニュアル(2017年)、防災訓練・備蓄
- 食堂環境改善
→ 食堂の事業者変更と、キッチンカー導入に伴う食事環境のあり方*
- SDGs推進室の設置(2021年6月)*
- オンライン授業、リモートワークの導入*
- 環境報告書(2021年) 導入開始*
- 藝大さくら通り谷根千方面の門柱耐震化と新規ベンチの設置(2024年)*
- 上野桜木地域連携棟の設置(2024年)* → p.033
- 未来創造継承センターの拡充(2024年)* → p.044

教育研究に関わる出来事

- 美術学部先端芸術表現科1年生が取手から上野キャンパスへ移転*
- 大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻(GAP)修士課程・博士課程の設置*
- 大学院音楽研究科オペラ専攻修士課程・博士課程の設置*
- 大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻(GA)修士課程・博士課程の設置*
- 大学院映像研究科ゲーム・インタラクティブアート専攻の設置(2026年)*

※は『上野キャンパスマスタープラン2013』に記載がないもの

上野キャンパスマスタープラン2013 策定後に顕在化した事象

ここでは『上野キャンパスマスタープラン2013』策定以後に顕在化した事象を列記する。これまでのキャンパス計画においては、教育研究組織の効果的な活動を評価の中心的な項目として扱ってきたが、より広域の都市的な視点（これに関しては2013年プランで言及済み）に加えて、近年、持続可能な社会の中でのキャンパスのあり方が問われる状況となっている。2019年に策定した取手キャンパスマスタープランにあっては持続可能な教育研究環境を大きな柱としたが、上野キャンパスマスタープランのアップデートにおいても、この視点を重視する必要がある。また2020年以降の新型コロナウイルス感染症がもたらした影響についても重要な課題となっている。ここでは、この2点に加え、『上野キャンパスマスタープラン2013』策定以降に学内で行われた教育研究組織の改編など、キャンパスマスタープランのアップデートのための前提となる事象を拾い上げて列記する。

【※は『上野キャンパスマスタープラン2013』に記述がないもの】

[1] キャンパスのあり方を評価する上での新たな視点

- 活動及び評価指針としてのSDGs
 - SDGs 開発目標17の内、6・7・11・13・15をキャンパスマスタープランの中で重視
 - 特に施設建設におけるカーボンニュートラルの必要性／施設維持におけるRE100を目指した目標設定（RE100とは、企業などが使用電力を100%再生可能エネルギーで賄うことを目指す、国際的な取り組みである）
- 使用者の多様な価値観への対応：広義の視点によるバリアフリーの必要性
 - LGBTQ+環境整備／学生のメンタルヘルスに対する場の提供／職員の執務環境
- 外来者を迎え入れる視点：キャンパスマップ(2019)の拡充
- 利用率：著しく利用率の低い施設が存在
- 大学経営からの視点：持続可能なキャンパス計画
- 防災拠点としての大学
 - 東京藝術大学震災対応マニュアル(2017)のアップデート／防災訓練・備蓄
 - 災害時においても有効に活動できるインターネット環境の確立

[2] 新型コロナウイルス感染症禍によって顕在化した課題

- オンライン講義、リモートワークへの施設整備的な対応
- 対面とオンラインのハイブリッド化への対応
- 保健管理センターの間取りや診察の仕組み
- 通風や換気量の改善とその見える化
- 入構者の正確な把握
 - カードリーダーを活用した管理／適切な管理単位の設定（地区・建物・部屋・時間）
 - 入退構手続きによる心理的分断の軽減
 - （新型コロナウイルス感染症の位置づけが令和5年5月8日から「5類感染症」となり廃止となった）
- 入構者数に対応した適切な場の設定

[3] 新たな教育研究組織への対応

大学改革が進行した近年、本学においても下記のような教育研究機関の改変が行われた。これらは取手、千住、横浜を含めたキャンパスマスタープラン策定の前提条件となる。

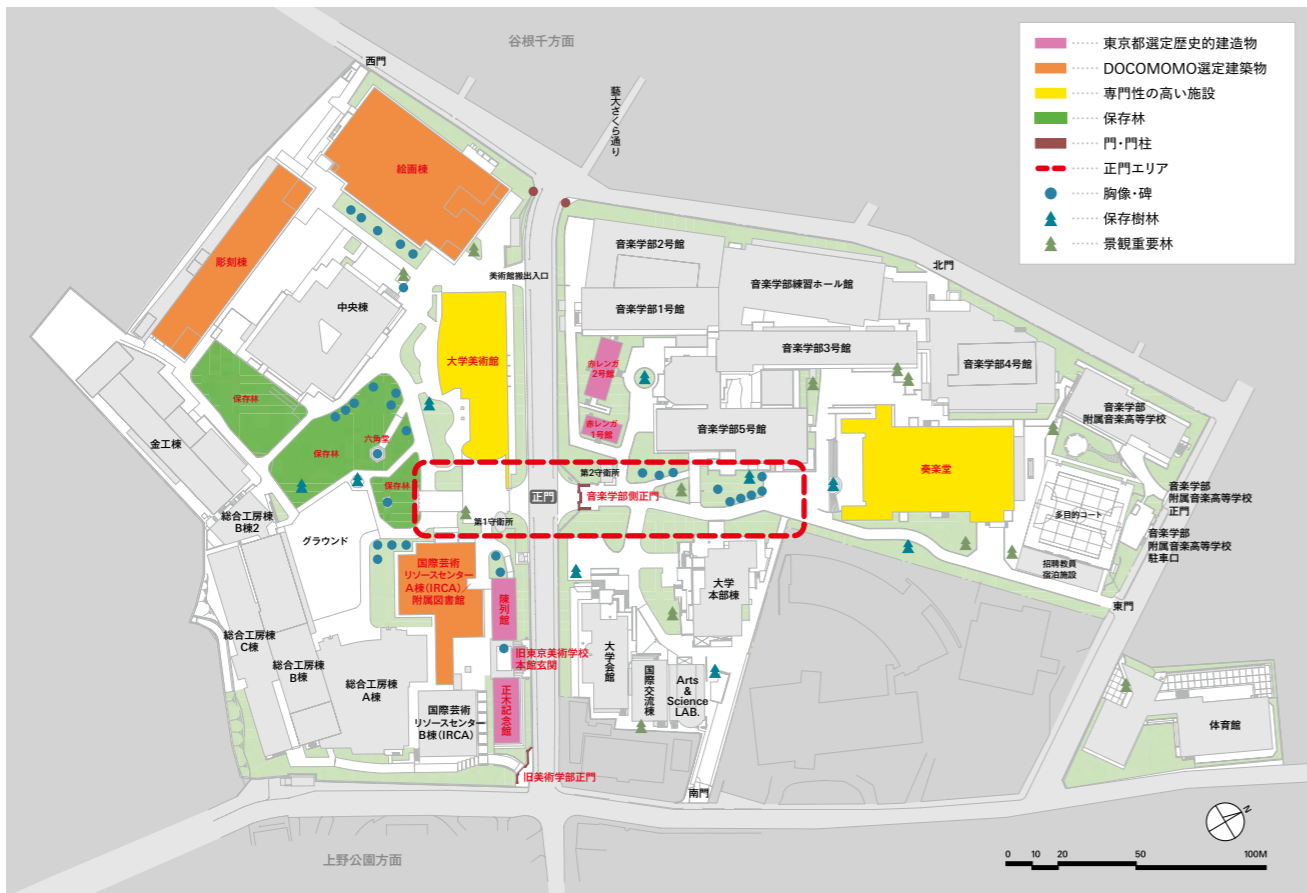
- 東京藝術大学COI拠点(COI研究推進機構)2013年～継続中。2023年から本格化※
 - Arts&Science LAB. の建設
 - ポストCOI事業：全学的公募による社会との共創の場としてのスペース
 - Arts&Science LAB. は、最先端の研究活動のスタートアップを期間限定で支援する施設である
- 美術学部1年生が取手から上野キャンパスへ移転(2016年)
- 絵画棟1階の一部スペースを先端芸術表現科1年生、教員室の利用へ変更(2016年～)
 - 絵画棟の公開展示スペースの消滅
- 大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻(GAP)修士課程・博士課程の設置※
- 大学院音楽研究科オペラ専攻 修士課程・博士課程の設置※
- 大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻(GA)修士課程・博士課程の設置※
 - 国際交流施設への展開
- SDGs 推進室の設置(2021年)
- 芸術未来研究場の設置。同時に上野桜木地域連携棟の設置(2023年)※
- 大学院映像研究科ゲーム・インタラクティブアート専攻の2026年度設置※
 - 全学的かつ産学官連携を推進していく新たな教育研究組織である「ゲーム・インタラクティブアート専攻」を中心に、社会との共創の場として、Arts&Science LAB. で期限を設定し活動展開を開始。その後の活動拠点となる場所については、今後の課題である。
- 未来創造継承センターの組織再編によるキャンパス内の位置づけ(2024年)※
 - 大学史史料室(旧音楽学部大学史史料室+GACMA+新制東京藝術大学部門)+小泉文夫記念資料室が加わった未来創造継承センターの適正な場所とあり方

[4] その他キャンパス計画の特記事項

- 広域計画と関連する事項
 - 都道452号線 都市計画道路補92号の計画廃止※、名称が「藝大さくら通り」(2025年)となる
 - A地区、B地区側の空間的な分断の緩和
 - 道も含めた一体的な活動や、キャンパス計画への積極的な提起
 - 藝大ヘッジ
 - 大学を取り囲む塀や柵を、緑によるやわらかい境界へ置き換える取り組み
 - 藝祭、卒業・修了作品展や、アートクロス構想、上野「文化の杜」新構想の連携※
 - 藝大さくら通り、上野公園との空間の一体的整備を推進
- キャンパスの施設計画に関連する事項
 - 一般への公開・非公開ゾーンの明確化と、入試期間に対応した公開ゾーンの整備※
 - 施設ごとのセキュリティの強化※
 - Arts&Science LAB. の今後の方向性、位置づけ
 - 社会連携センターの跡地利用について(残余の建ぺい・容積の確認)※
- その他
 - 国際芸術リソースセンター(IRCA)におけるラーニングコモンズの管理および使用方法※
 - 食堂の事業者変更と、キッチンカー導入に伴う食事環境のあり方※

変えてはいけないもの、変えていくもの

fig.08 | 変えてはいけないもの



上野キャンパスの特徴となる核を定め、今後の持続的なキャンパス整備を行うために、「変えてはいけないもの」を明確にする。同時に、大学機能強化のため長期的視野に立って「変えていくもの」を明確にし、学内で共通認識を持つことで、より魅力的なキャンパス構築のための合意形成を図る。これらは開かれたキャンパスとして機能し、公開されるものである。

02-4-1 | 変えてはいけないもの

- 本学を象徴する価値のある資源（歴史的建築物、門柱、胸像、碑、専門性の高い施設）
- キャンパスの骨格を形成する空間構成要素（正門エリア、藝大さくら通り沿い）
- 「緑豊かな大学」を形作る保存すべき樹木やそのエリア

歴史的に重要な建築物

東京都選定歴史的建造物
赤レンガ1号館／赤レンガ2号館／陳列館／正木記念館／
旧東京美術学校本館玄関

DOCOMOMO 選定建築物

附属図書館／絵画棟／彫刻棟

歴史的に重要な像、他

岡倉天心六角堂／岡倉天心像／正木直彦像／バルザック像／
アーネスト・フェノロサ碑 他

歴史的に重要な門・門柱

旧美術学部側正門（旧東京美術学校美術部正門）／
音楽学部側正門（旧東京美術学校工芸部正門）

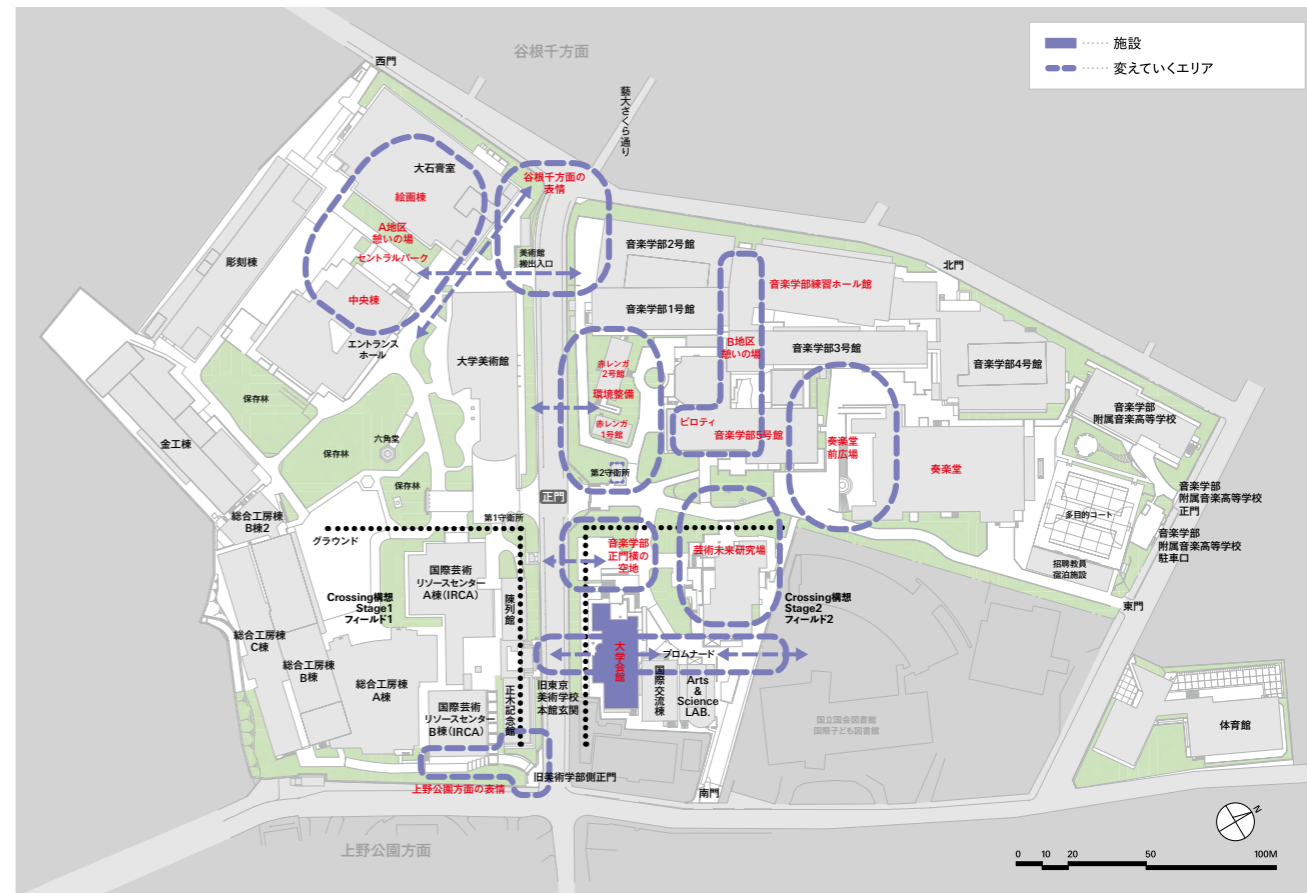
本学に特徴的な専門性の高い建物

大学美術館／奏楽堂

屋外環境・樹木等

保存林／保存樹／景観重要樹林／A・B地区側の2つの正門の連続した開放的であり良質な屋外空間（赤破線エリア）

fig.09 | 変えていくもの



02-4-2 | 変えていくもの

- A地区とB地区につながりを与える。多軸的につなぐ。道も含めた一体的なキャンパス
- 上野公園の導入口としての表情（藝大さくら通り沿い、谷根千方面、上野公園方面）
- 共創の場へと整備する施設や屋外環境（セキュリティ、Crossing構想stage2エリア、第2守衛所）
- 全てのゾーン、エリアにおける学内外者（様々なステークホルダー）のコミュニティスペース（屋内・屋外の大小多様な憩いの場）

Crossing構想 stage1エリア

上野公園方面に向けた表情
ライトアップ／大学美術館展覧会用掲示サイン／
奏楽堂コンサート掲示サイン

Crossing構想 stage2エリア

知の拠点・共創の場としての機能強化
芸術未来研究場拠点機能と更なる運動
• stage1と連続する開かれたプロムナード
• 大会会館と周辺の環境整備（第2守衛所を含む）
• Arts&Science LAB.の全学的かつ産学官共創の場事業（期限付き最先端教育研究）
• 音楽学部側正門横の空地

その他のエリア

谷根千方面に向けた表情
大学美術館展覧会用掲示サイン／
奏楽堂コンサート掲示サイン

- 赤レンガ1号館、2号館周辺の屋外環境
- 奏楽堂前広場の周辺
- B地区憩いの場：5号館プロティと5号館から練習ホール棟に連続するエントランスロビー空間
- A地区憩いの場：中央棟のエントランスホールから、絵画棟の大石膏室までを含む

その他の項目

- 引き続き、各施設において適正なセキュリティ設備

引き続き取り組むべき課題と新たな課題の提示

ここでは前項の[02-2 | 上野キャンパスマスタープラン2013の検証]^{→p.060}、[02-3 | 上野キャンパスマスタープラン策定後に顕在化した事項]^{→p.064}で取り上げた事項より、「引き続き取り組むべき課題と新たな課題」を抽出し、従来の下記4項の分類に対応して提示する。

[新たな課題はアンダーバーで表記]

[1] 全体計画における課題

1-A: 総合的なキャンパスを構成するハードの不足

- ・引き続きキャンパス全体を捉えた総合的計画
- ・都道452号線 都市計画道路補92号の計画廃止に伴う藝大さくら通りの新たな位置づけおよびキャンパスの一体化、多軸的につなぐ整備
- ・新しい教育組織の設置
(オペラ・GA・GAP・COI研究推進機構・映像研究科ゲーム・インタラクティブアート専攻・未来創造継承センター・芸術未来研究場)
- ・社会連携センターの跡地、Arts & Science LAB. の今後の方向性

1-B: 施設プログラムでの問題

- ・学内の交流を促進する小規模の憩いの場・創作・展示発表など自由な場

1-C: 都市的スケールの中でのキャンパス

- ・社会との交流／上野公園を含む地域や企業との連携や貢献／キャンパスの安全と安心の確保

[2] 内部空間における課題

- ・自由な空間、および柔軟に公開できる場の設定
- ・内部空間の適正配分と、使われ方の把握
- ・専門性の高い教育研究活動に必要な、適正な空間と環境の整備
- ・新型コロナウイルス流行下におけるオンライン授業、リモートワークへの適切な対応／保健管理センターの空間の最適化
- ・空調不具合(未改修)の明確化、通風や換気量の見える化の促進／安全で安心できる空調更新の計画
- ・学生、教職員の多様な価値観への対応：LGBTQ+環境整備／広義のバリアフリーへの対応
- ・学生、教職員の快適な学修執務空間の追求(SDGsゴール8目標)

[3] 外部空間における課題

- ・外来者動線の整備。駐車スペースのあり方
- ・歴史的建物、胸像、自然環境、照明、門柱、銘板の耐震化および魅力ある整備
- ・保存林の環境改善活動と、藝大ヘッジの維持管理、活動継続の仕組み
- ・公開・非公開ゾーンの明確化、及び建物毎のセキュリティ強化

[4] 施設整備全体のマネジメント

- ・安全で安心できる防犯強化、管理体制の仕組みの整備
非常時の備え／台東区や上野公園の各施設の防災整備と連携しながら検討していく
- ・ファシリティマネジメント
PDCAサイクルとマスタープランの継続／経営的視点に基づいた適切な情報提供(コストと効果)
- ・SDGsの評価視点の適用
- ・RE100を目指すエネルギーマネジメントとカーボンニュートラルへの取り組み
- ・インフラ長寿命化計画の活用と更新／老朽化・狭隘化に関する定量的な調査と把握
- ・概念としての共有空間の定着。新規研究や教育活動に対してフレキシブルな対応
- ・資産の更なる有効活用
収蔵品／歴史的建築物／知的資産／スペースチャージ
大学経営の視点に立った土地、建物の外部貸付等の検討



03

将来の キャンパスに 向けて

- 03-1 | 「4つの基本軸」と上野キャンパスの方向性
- 03-2 | 上野キャンパスが目指す「イノベーション・commons」
- 03-3 | 「共創」のための「場」と「人」との関係

「4つの基本軸」と上野キャンパスの方向性

前項の「02-5 | 引き続き取り組むべき課題と新たな課題の提示」をふまえて、全キャンパスに共通する「4つの基本軸」に基づき、上野キャンパスの将来の方向性（整備方針）を整理すると以下のようになる。

【1】芸術系に特化した教育と創造のためのキャンパス

- ・ 専門性の高い最先端設備や空間（美術館・演奏堂・ホール・アトリエ・窯・専門機器）の保有と適切な維持管理
- ・ 新しい芸術表現の制作や研究、発表に柔軟に対応。あらゆる芸術的可能性に開かれた教育研究の環境
- ・ 教育資料館的機能の更なる強化（収蔵品の積極的活用（発表・研究・保存））

【2】創造性を広げる交流の場としてのキャンパス

- ・ 4つのキャンパスの中心的役割としての場の設定
- ・ 多様な価値観が共存し、日常の様々な芸術的活動が交錯する場の設定
- ・ 施設内外問わず、あらゆるステークホルダーとの出会いとなる自由な場
- ・ 多くの文化施設が集まる上野公園の立地を活かした環境形成

【3】地域社会の核としてのキャンパス

- ・ 都や区、地域住民、周囲の文化施設との協力、国際化、学外連携の強化
- ・ 歴史的な建造物、胸像、門柱、豊かな緑などの資源を、地域の景観や地球環境の向上のために寄与
- ・ 地域社会と協力し更なる開かれたキャンパスとする。災害時における地域への貢献を果たす

【4】持続可能な総合芸術拠点としてのキャンパス

- ・ SDGs、カーボンニュートラル、RE100を取り入れた建物と外構の計画的整備と維持管理
- ・ 多様な創作活動や発表に柔軟に対応できる共有空間と、それを支える各施設のセキュリティの設定
- ・ 建物・部屋・専門設備の集約化と最適化および有効活用、スペースチャージ（部屋の関係、各科の活動の見える化、快適な学修執務空間）
- ・ 『東京藝術大学キャンパスデザインガイドライン（上野キャンパス編）』の更新

上野キャンパスが目指す「イノベーション・コモンズ」

前項の「方向性」を前提として、上野キャンパスが「イノベーション・コモンズ（共創の場）」として目指す目標は、以下のようになる。

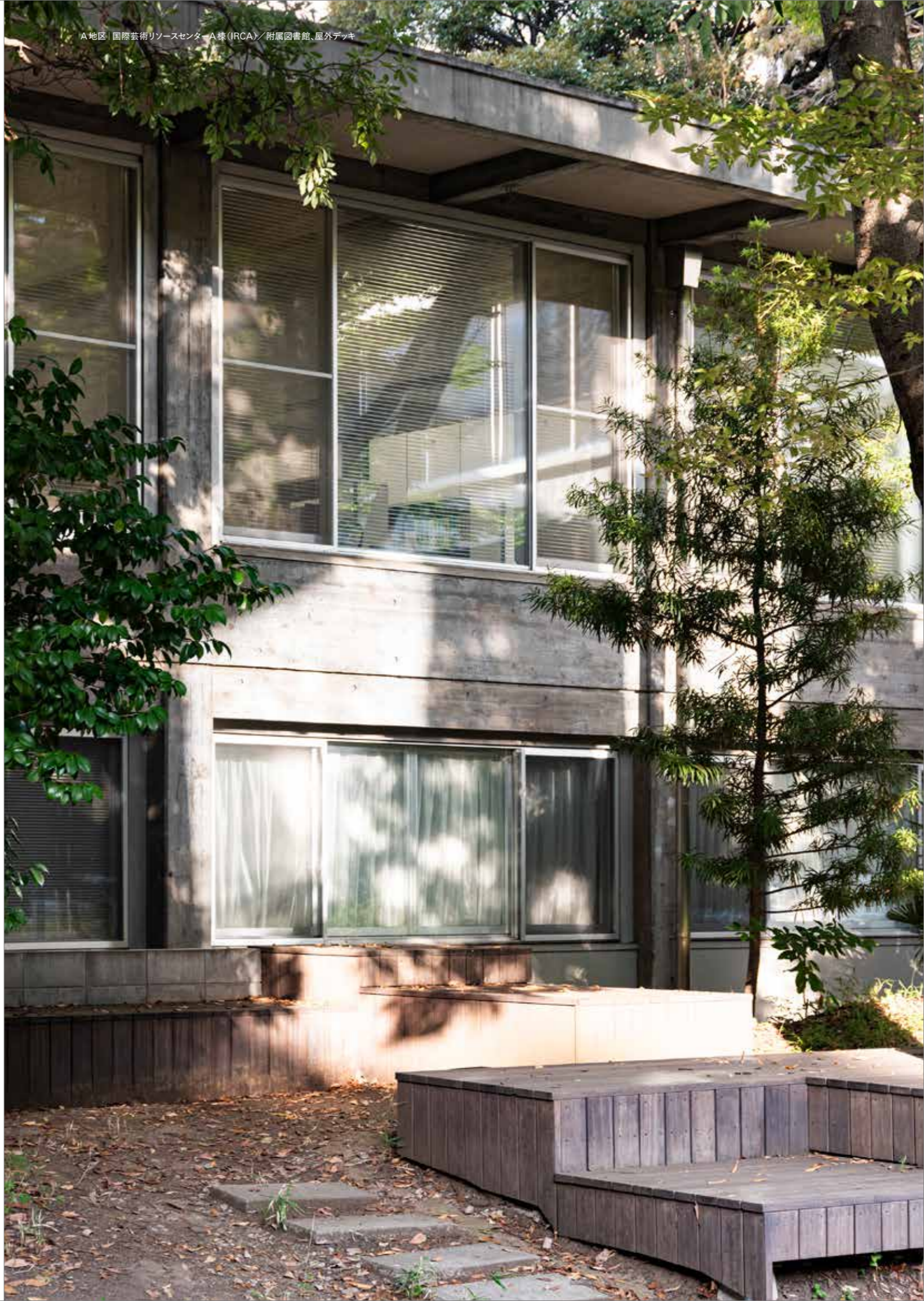
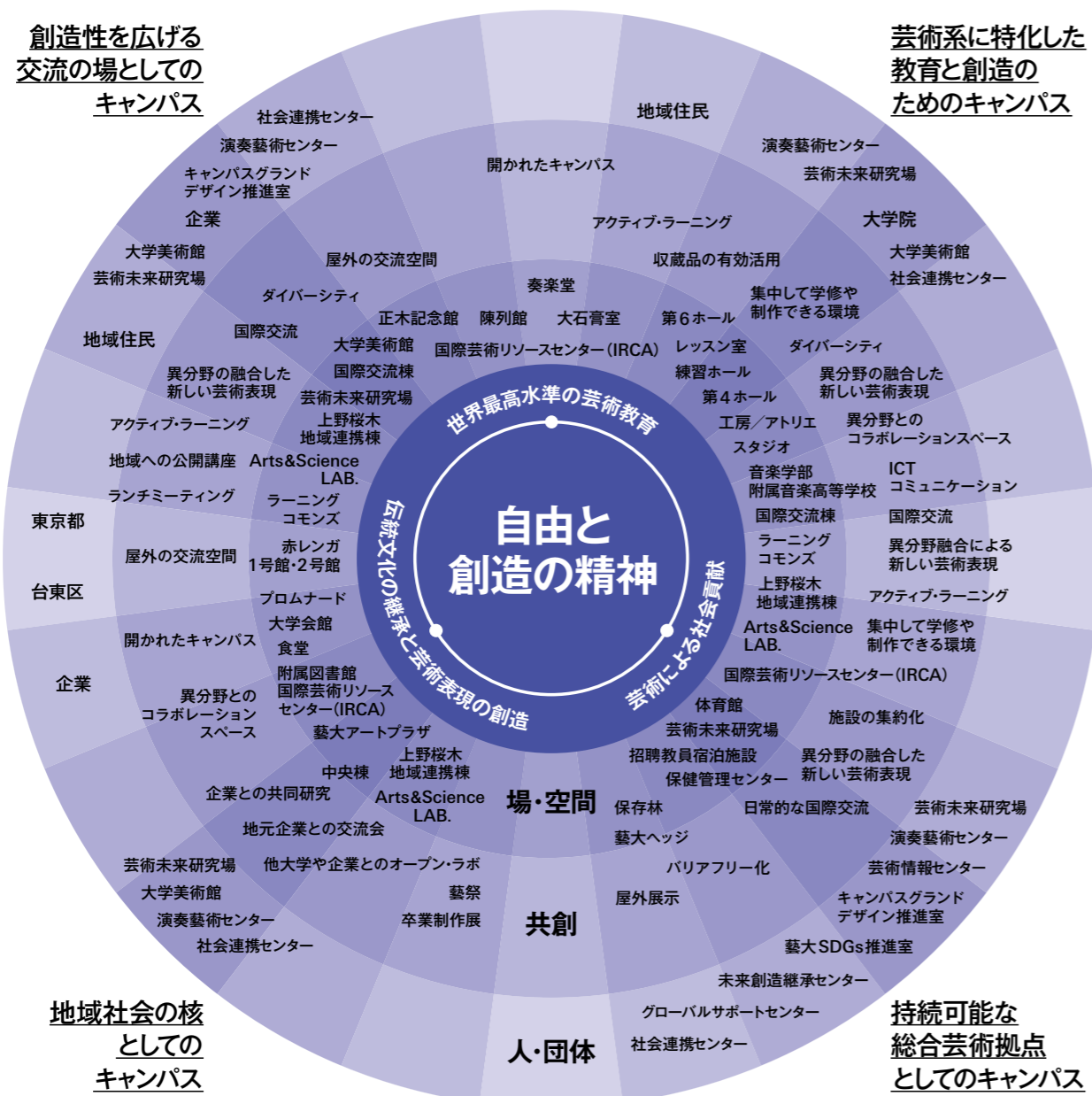
「自由と創造の精神を尊重し、伝統文化の継承と芸術の発展に寄与し、
芸術によって社会問題に取り組むための創作拠点」の実現

- ・ キャンパス全体での他科との交流に加え、学内外の多様な人々が共に活動を展開し、「共創」できる研究や創作の発表、拠点の創出
- ・ キャンパス全体が有機的に連携し、教育研究活動と空間、専門設備、屋外空間が一体となった「共創」の場のネットワークの構築
- ・ 教育研究の高度化、多様化、国際化に応じた、地域や産業界との連携、協力の推進に貢献する場の形成

「共創」のための「場」と「人」との関係

前項の[03-1 | 「4つの基本軸」と上野キャンパスの方向性]、[03-2 | 上野キャンパスが目指す「イノベーション・コモンズ」]を基に、具体的に上野キャンパスの「場と空間」「共創」「人・団体」の関係を図にすると、以下のようになる。

fig.10 | 「4つの基本軸」と上野キャンパスの「場・空間」「共創」「人・団体」の関係





04

4つの 計画目標と 全体計画

- 04-1 | 計画目標
- 04-2 | ゾーニング計画
- 04-3 | 動線計画
- 04-4 | ランドスケープ
- 04-5 | コミュニティスペース
- 04-6 | 全体計画

計画目標

前項の[02-5 | 引き続き取り組むべき課題と新たな課題の提示]から導かれる上野キャンパスの計画目標は、以下の新たな4項となる。下記[2]~[4]の計画目標は、[1] 持続可能な教育研究環境の追求に基づくものであり、各指標と目標設定に連動したキャンパスの形成を目指す。

また右側には、公開・交流・教育研究の3つのゾーンを縦軸に併記し、4つの計画目標との関係性を示している。

[1] 持続可能な教育研究環境の追求

- ・ 大学経営の視点からの評価
- ・ SDGsの観点からの評価を継続して実施
- ・ カーボンニュートラルやRE100を目指す取り組み
- ・ 持続可能な教育研究環境の追求に基づく施設全体のマネジメント

[2] 広く社会に開かれたキャンパスの展開

- ・ キャンパスの一体化、多軸的につなぐ
- ・ 上野公園方面・谷根千方面の導入口のあり方
- ・ 保存林、藝大ヘッジ
 - 今後の展開と維持管理
- ・ サイン、胸像、門柱、銘板の適正な配置
- ・ 赤レンガ1・2号館周辺の環境整備
- ・ 柔軟に対応できる公開の場の設定
- ・ 施設の有効活用(施設、空間、収藏品、知的資産、設備機器)

[3] 社会との共創

- ・ フィールド2: Crossing 構想 Stage2の計画
 - 芸術未来研究場の共創拠点を中心とした、国際交流活動と、日本の芸術の「知の拠点」としての環境整備/フィールド1と連続する交流空間としてのプロムナード/音楽学部側正門の横の空地、Arts&Science LAB.の今後の方向性/セキュリティの検討
- ・ アーカイブゾーンの設定
- ・ 展示空間・演奏空間を多方面から検討
 - 大学美術館/奏楽堂

[4] 多様な教育研究活動と快適な環境に向けて

- ・ 各棟・施設ごとの個別管理とセキュリティ
- ・ 学内のコミュニティスペース
 - 屋内外の小さな単位の発表の場・憩いの場の整備
- ・ 執務スペースの充実
- ・ オンライン授業、テレワーク導入に対応したネット環境の向上
- ・ 広義の視点によるバリアフリー
 - LGBTQ+環境整備の推進/プライバシーに配慮した健康管理センターの環境づくり
- ・ 安心できる空調計画と換気の見える化の実施

公開
ゾーン

交流
ゾーン

教育研究
ゾーン



ゾーニング計画

上野キャンパスは3つの敷地(A地区・B地区・C地区)で構成されている。敷地面積約69,500㎡、高さ規制もあり分割された敷地の中で一体感のある高度利用のキャンパスを目指している。特にA地区側とB地区側の中央を縦断する道路都道452号線(藝大さくら通り)は、上野公園と谷中・根津・千駄木方面を結ぶ唯一の道であり、地域においても極めて重要なルートである。『上野キャンパスマスタープラン2013』では、この道を中心に開放的な空間の広がり进行交流空間とし、その奥に教育研究活動が見え隠れする緩やかな空間構造として、教育研究・交流・公開の3つのゾーンを定めて奥行きのある豊かなキャンパス空間を目指すとともに、機能強化の必要な施設を含んだ戦略的整備フィールド(1~5)を設定した。既存施設を含む多角的なつながりによって、キャンパスに空間的連続性をもたらす計画としている。

前項[01-2 | 施設と取り組みの現状]に基づき、新たに前項の「04-1 | 計画目標」をふまえてゾーンとフィールドを最適化する。まずは現状に合わせて修正を行うと下記の通りとなる。

3つのゾーン

公開ゾーン

- ・「開かれた大学」としての顔となり、上野公園方面、谷根千方面への導入口としての役割
 - ・教育研究活動の成果を社会へ発信
 - ・一般の人でも通り抜け可能な空間として、本学の芸術活動と歴史的建造物が織り込まれた都市に開かれたプロムナードを形成する。「多軸的につなぐ」もこのゾーンに属している
- 大学美術館や図書館機能、未来創造継承センター、アーカイブ、展示、コンサート、ショップ機能

交流ゾーン

- ・学内と学外が交流するゾーンであり、社会との共創の場も多くはこのゾーンに整備される
- 芸術未来研究場、各センターや国際交流、研究開発プロジェクト
学内外共に利用する施設として講義室、体育室、ギャラリー、ホール、シアターなどの共用スペース
キャンパスライフをサポートする学生会館、学食、ショップ、大学事務局機能 等

教育研究ゾーン

- ・教育研究活動に集中できる環境を整備する
- ・公開が求められる施設もあるが、教育研究ゾーンにあるため、今後も慎重に検討していく

5つのフィールド — Crossing 構想

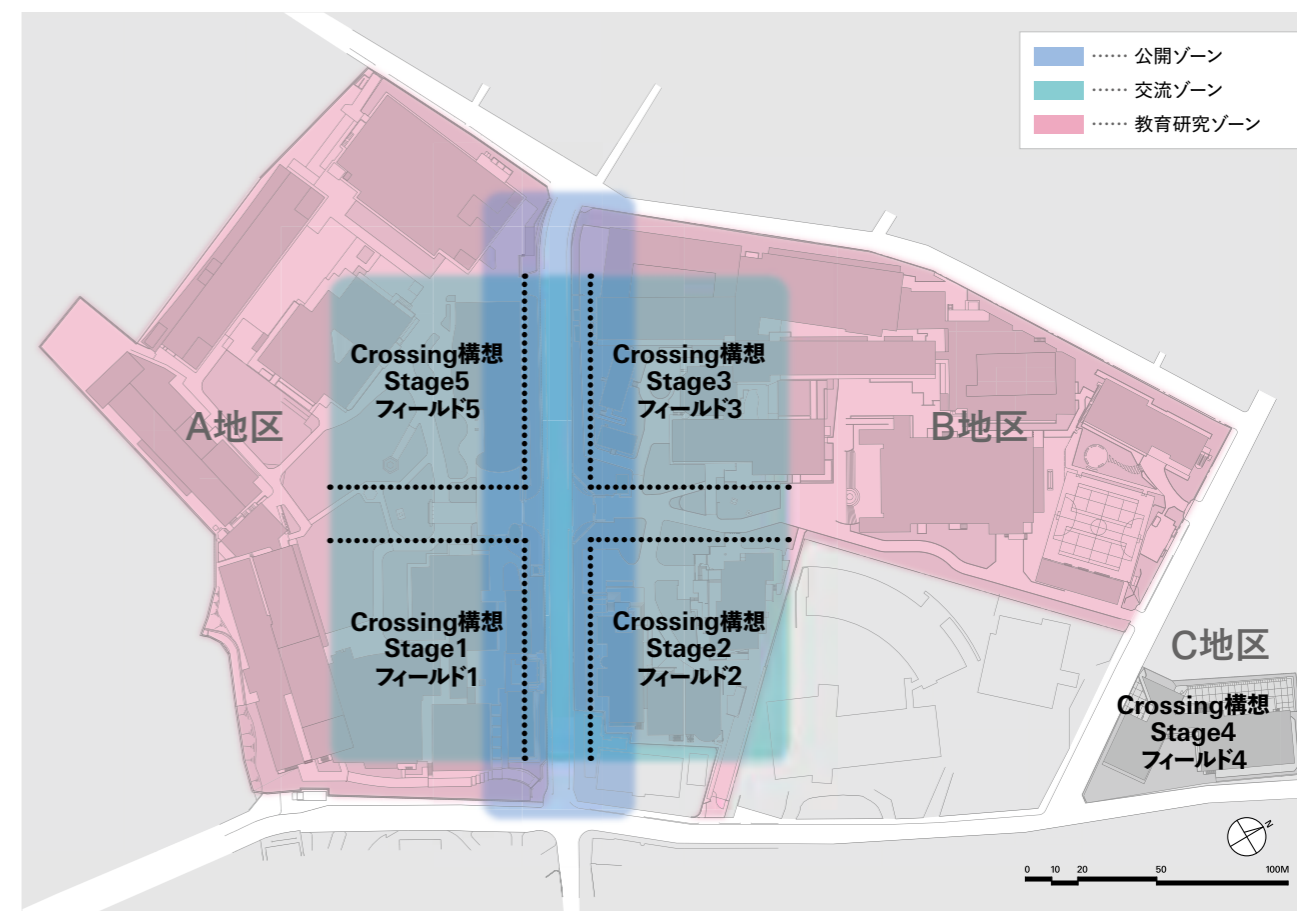
フィールド1: 都市へ開かれたプロムナードの形成(キャンパスと都市の融合)

国際芸術リソースセンター(IRCA)の竣工(平成30年)をもってフィールド1は概ね完成した。国際芸術リソースセンター(IRCA)/附属図書館(藝大アートプラザ)、正木記念館、陳列館、旧東京美術学校本館玄関、正木直彦像等による建築群と像によって形成されたプロムナードには、学生の場所や人の流れの仕掛けとして屋外テラスやキッチンカー、テーブル、椅子が設けられ、様々な人が自由に行き来できる。今後は正木記念館の公開スペースの拡張と未来創造継承センターの適正な場所の設定、さらに上野公園方面に向けた本学の表情づくりを形成していく。

フィールド2: 知の拠点、国際・社会との共創の場としての機能強化

日本の芸術の「知の拠点」の完成を掲げている。Arts&Science LAB.の竣工(平成27年)、社会連携センター建物解体、大学会館の改築(令和3年)、国際交流棟の竣工(令和4年)、不忍荘の解体(令和5年)、さらに令和6年には芸術未来研究場の本部が大学本部棟に設置され、それと連動して南門の活用が始まった。Arts&Science LAB.は、最先端の研究を期限付きで支援するスペースとして機能し、令和8年からゲーム・インタラクティブアート専攻が展開する。今後は胸像や銘板の配置、新たなサイン、保存樹、国際交流棟の「変化し続けるパブリックアート」とともに人と車の動線計画も含め、全体計画の再設定を行う。A地区側のプロムナードによる人の流れをB地区側へ導き、芸術未来研究場と連動し都市へ開かれた芸術と知の拠点をさらに展開していく。

fig.11 | 3つのゾーン、5つのフィールド | 『東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン2013』より



フィールド3: 音楽学部1号館・2号館の建替えによる教育ゾーン、交流ゾーンの拡充と、公開ゾーンとしての赤レンガ1号館・2号館の屋外環境整備

- ・建築基準法の建ぺい率と風致地区の制限により、新たに建てることのできる建築面積は残り少ない。そのため将来の音楽学部の建替え方法や場所が課題となっている。現時点の検討によって導き出された方向性を、
[08-4 | 音楽学部施設建替え] ^{-p.148} でまとめている。
- ・音楽学部5号館の出入口は音楽学部のメインエントランスである。そして5号館から練習ホール棟までラウンジ的な空間が続いて人々の憩いの場、インフォメーション、交流の場として機能しているが魅力的な空間とは言えない。またその横のピロティは駐輪場であり、音楽学部の主要なエントランスとして最適に活用するため、このエリアのより良い環境改善の整備を推進していく。
- ・赤レンガ1号館・2号館は公開ゾーンに位置し、東京都選定歴史的建造物に選定され景観的にも優れており、藝大さくら通りも含めた一体的な屋外環境整備を行う。

フィールド4: 新しい藝大の表出

C地区の体育館エリアは資産価値が高く、独立した立地にある。また東京国立博物館、台東区立上野中学校、国立教育政策研究所といった教育研究の色濃い施設に隣接し、体育館の機能を残しつつ新たな藝大の表出を戦略的に仕掛けることが可能な場所である。また東京都美術館、東京国立博物館、国際子ども図書館を経て寛永寺や鶯谷へ抜ける通りに面しているため、国や都と連携しながらこの通りに新たな魅力を加えていくことも課題のひとつである。以上をふまえて今後の可能性は以下の通りである。

- ・他キャンパスのサテライト施設や24時間稼働可能な教育研究活動拠点などの機能
- ・PFIを取り入れた建替え(体育館+芸術に特化した集合住宅等)
- ・企業との賃貸契約等

フィールド5: 教育研究ゾーンと交流ゾーンの交わり、セントラルパークを中心とした交流の場の環境整備

既存の中央棟のエントランスホール、セントラルパーク、大学美術館の食堂との繋がりを強める環境整備。さらに藝大さくら通りからの「多軸的につなぐ」を意識して計画することで、公開、交流、教育・教育ゾーンの景観が保存林まで見え隠れする緩やかな空間構造となる環境整備が可能となる場。また中央棟の改築時にはこれらをふまえ、周辺の絵画棟、彫刻棟、金工棟、大学美術館をはじめ、保存林との関係性が強まる計画として、教育研究ゾーンに良質な屋外環境の拡充が期待される。



動線計画

上野キャンパスは、JR上野駅、鶯谷駅、日暮里駅、そして地下鉄上野駅や根津駅から徒歩圏内に位置し、交通の利便性は高い。そのため通学方法としては、徒歩が主流である。

一方、本学の特徴である材料や作品、楽器などの搬出入には自動車の利用は必要不可欠である。それでありながら本キャンパスの敷地面積は広いとは言えず、所有する駐車スペースは限られていて33台と少ない。さらに歩道と車道の動線経路が重なっている現状にあり、安全性が確保されているとは言い難い。これらは引き続きの課題となっている。

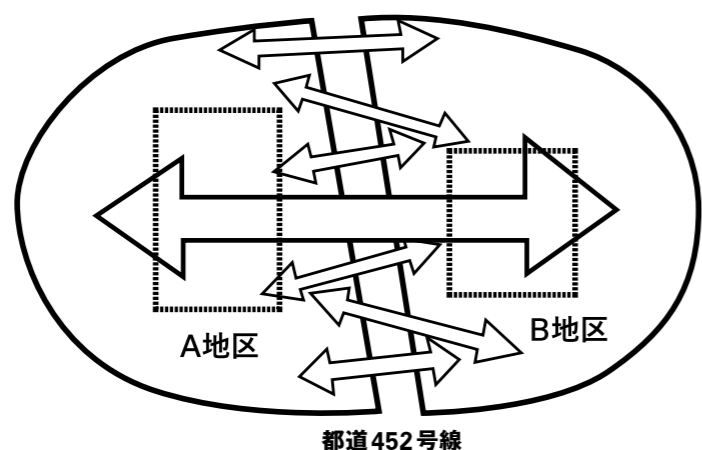
2013年以降の動線計画に関わる学外の大きな変化は、以下の2点である。

- ・都道452号線 都市計画道路補92号線の計画廃止、名称が「藝大さくら通り」となる
- ・台東区が運営する路面バス「めぐりん」は、本学の中央を縦断する「藝大さくら通り」を迂回している

『上野キャンパスマスタープラン2013』には動線計画の大きな方針として以下のように示されている。

キャンパスの中央を縦断する都道452号線によって、上野キャンパスはA地区とB地区に分断されている。そのため本学の総合力や一体感を推進すべく「A地区とB地区を多軸的につなぐ」を掲げ、接続箇所を多発的に色々な交流を誘発するような空間づくりが本学の活動には適しているとしている。

fig.12 | 動線イメージ | 『東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン2013』より

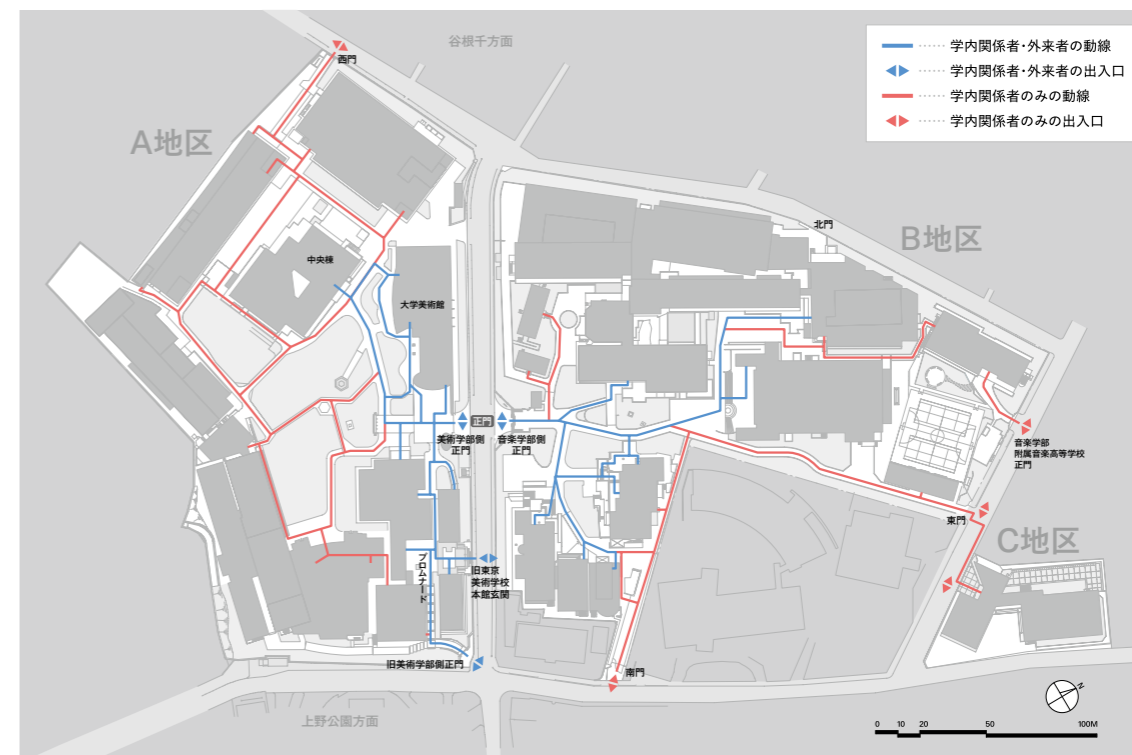


2013年から2025年までの変化

上記の『上野キャンパスマスタープラン2013』の方針に基づき、フィールド1では2018年の国際芸術リソースセンター(IRCA)竣工時と同時に、リニューアルされた藝大アートプラザと旧美術学部側正門、旧東京美術学校本館玄関が一般開放され、本学の教育研究活動のシーンと、キャンパス内の歴史的建造物が織り込まれた景観によって、都市に開かれたプロムナードが形成された。それは今後のA地区からB地区への多軸的につなぐための接続箇所(旧東京美術学校本館玄関)も含まれている。そこは公開ゾーンに位置し、学内外の関係者問わず、誰でも自由に行き来できる場となっている。また、入試時の開放範囲など、季節によって変わるセキュリティも同時に導入している。

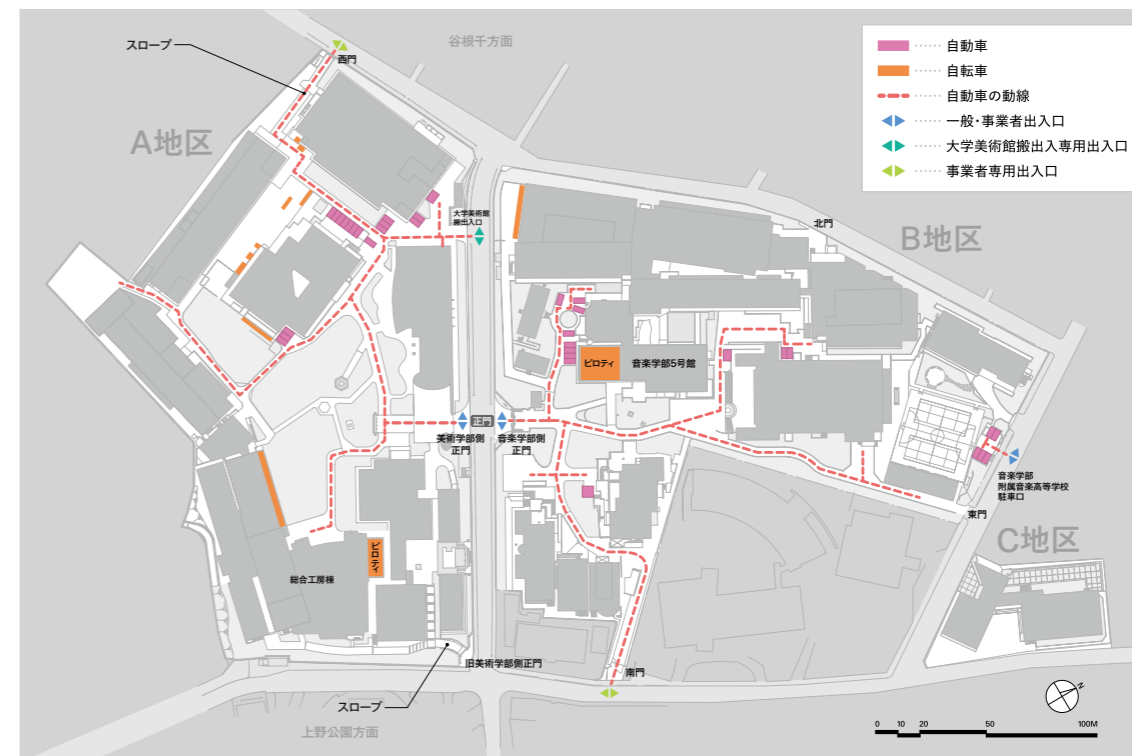
ここではまず、人の動線と自動車の動線を明確化し、現状の把握と課題を整理する。

fig.13 | 人の動線(現状)



A地区側:学内外者の動線は、美術学部側正門、旧東京美術学校本館玄関、旧美術学部側正門からプロムナードを通り抜けるルートがつくられた。一方大学美術館、中央棟付近では境界線はなく目的の施設へ行き、帰る動線(往復)のみとなっている。西門はカードキーによる学内関係者専用出入口である。/B地区側:音楽学部側正門が唯一の出入口となっており、各目的の施設へ行き、帰る動線(往復)のみであったが、2024年から学内関係者による南門の活用が始まっている。

fig.14 | 自動車の動線(現状)



A地区側:主要な出入口は正門からとなる。大学美術館搬出入口は美術館専用となっている。西門からは専門業者が利用することもあるが、スロープの傾斜が強く利用しにくい。/B地区側:主要な出入口は正門からとなる。東門は奏楽堂への楽器等の搬出入時に活用している。南門は工事や資材の搬出入口に利用し、一時駐車や資材置場等に活用されている。主な駐車場は総合工房棟と音楽学部5号館ピロティに置かれて、他は各施設の傍らに分散して配置されている。

以上をふまえて、今後の動線計画を検討する上での大きな課題は以下の通りである。

- A地区側、B地区側ともに、人と自動車は同じ正門から重なって出入りしている
 - 安全性の確保
- 歩行者と車両の分離、動線計画が不明確である
 - 実態として分離は不可能
- A地区側の乗り入れ可能な出入口の場所は物理的に限られている
- 決められた駐車台数が少ない。実際はグラウンドに駐車することも日常的に行われ曖昧になっている
 - 前提として限られた敷地面積のため、駐車場に補填できる十分なスペースの物理的不足
- 有効に活用されていない門(出入口)がある(西門・東門)

これらを念頭に、3つのゾーンと5つのフィールドのそれぞれの場の特性を考慮し、動線計画は以下の通りとする。

全体

- キャンパス内では歩行者を優先し、自転車と自動車との共存を図る
- 藝大さくら通りの両端に位置する上野公園方面と谷根千方面の表情「藝大の顔」づくりに連動し、公開ゾーンは一般開放した歩きやすい空間とする

人の動線(学内関係者、一般者)

- 引き続き「A地区とB地区を多軸的につなぐ」を推進し、公開ゾーンに位置するフィールド2の大学会館、谷根千方面、赤レンガ1・2号館、大学美術館搬出入口付近に接続部を設けて、連続したプロムナードを形成する
- 公開ゾーンは地域住民、様々な人に利用しやすい空間とする
 - (同時に新たな誘導サイン・解説板の設置、各棟個別管理のセキュリティを推進する)
- 教育研究活動と切り離すための柔軟に対応できるセキュリティを整備する
 - (※詳細は「05 | 具体的な整備計画」参照)
- 教育研究ゾーンに属する西門は、引き続き学内関係者のみの出入口とする

自動車の動線(作品・楽器の搬出入経路)

- 当面は引き続き正門を自動車の出入口とするが、各施設の改築などを契機に、将来的には自動車の出入口を正門以外に転換する予定とする(西門、大学美術館搬出入口、南門、東門の有効利用)
- キャンパス内の道路は1方向、2方向等も含めて交通計画を再検討する
- 守衛所の配置や門扉の管理についても、ソフトの導入も含めて上記と同時に見直しを行う
- 駐車スペースの有料化も視野に入れて検討する

fig.15 | 人の動線(将来)

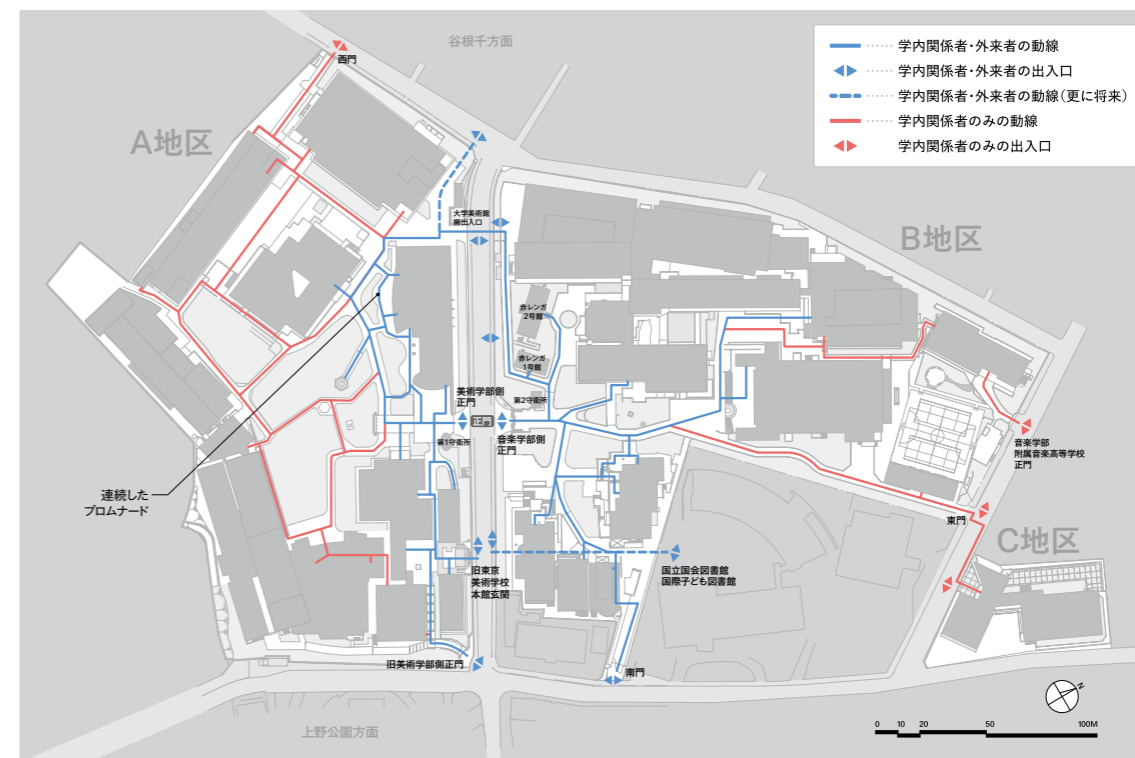
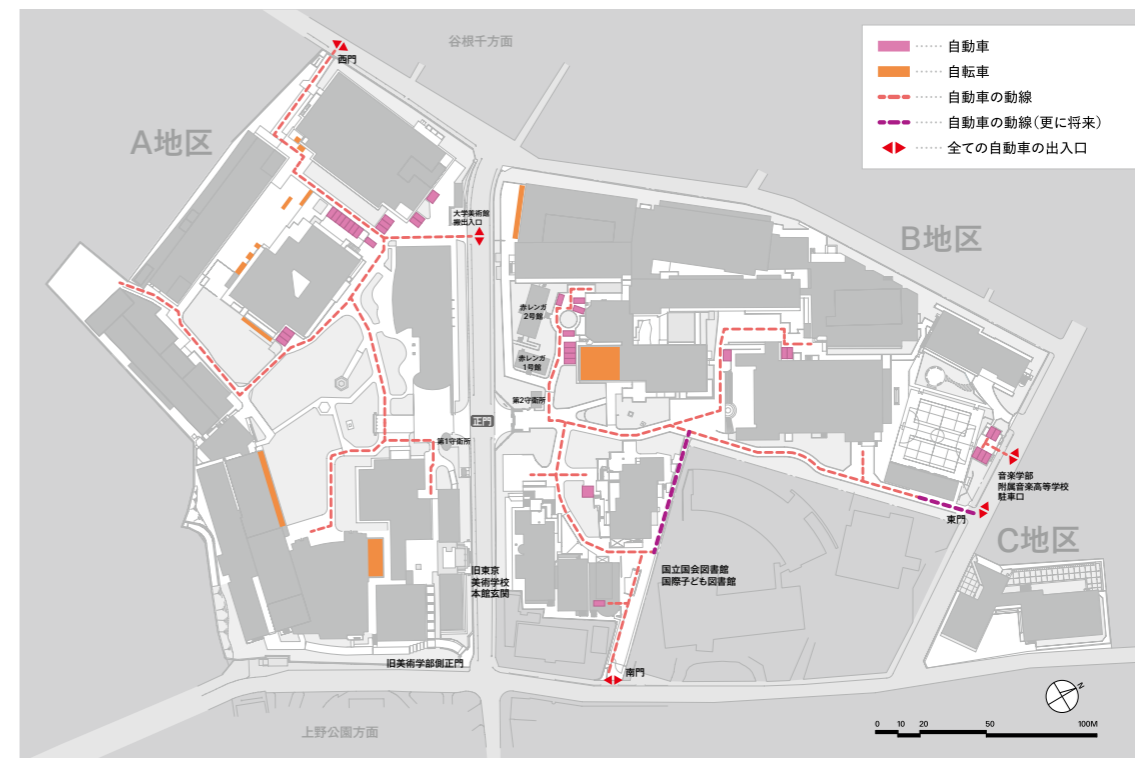


fig.16 | 自動車の動線(将来)



ランドスケープ

ランドスケープは、キャンパス内で展開される多様な活動を景観として可視化する重要な要素である。本キャンパスは、上野の土地が有する歴史的背景のもと、自然豊かな上野公園の一部として、その北西端に位置する都市型キャンパスである点がまず挙げられる。

さらに、上野公園は不忍池や上野動物園などがある市民の憩いの場であると同時に、総合芸術大学である本学をはじめ、東京国立博物館、国立西洋美術館、東京都美術館、上野の森美術館、国立科学博物館など、世界的にも稀有な文化・芸術関連施設が集積するエリアとして特徴づけられる。

『上野キャンパスマスタープラン2013』では、景観について以下のように掲げられている。

景観整備の理念

芸術教育のための環境：日本の自然に身近に接する

本学の学生生活および芸術教育にとって最も必要なものは「本物の日本の自然にふれる」「四季の変化を感じる」つまり「教材としての自然環境」の創出である。

東京藝術大学の“the Arts”に込められた意味：各地区が一体となった景観

A・B・C地区における景観はすべてがそれぞれ異なっていながらも、あるテーマのもとに一体化したものとしていく。

既存の空間をつなげ、新たな空間を秩序づけていく

スケールもそれぞれ異なる空間や要素がパッチワークのように存在しながら、歩行する際にシーケンス豊かに感じられるような屋外空間。

地域に向けた顔づくり

「開かれたキャンパス」として、景観整備による藝大さくら通り沿い、及び上野公園方面と谷根千方面に向けての藝大の顔のあり方。

記憶に残る風景をつくる

キャンパスの景観は時代変遷のなかで次第に変化していくが、そのなかでも芯となる部分は変わらず存在しているような風景を目指していく。

これらに基づき、景観の課題と方針では以下のようにまとめられている。

景観の課題と方針

建物内部の空間と外部の空間が一体となった計画と整備の必要性

キャンパスの外部環境（植栽環境）は、建築計画と一体に検討する。

芸術教育としてのキャンパス・日本人が日常接してきた環境をここに取り戻す

キャンパス内には日本の四季を日常的に感じられ、観察の対象になるべきものとする。

fig.17A | ランドスケープ

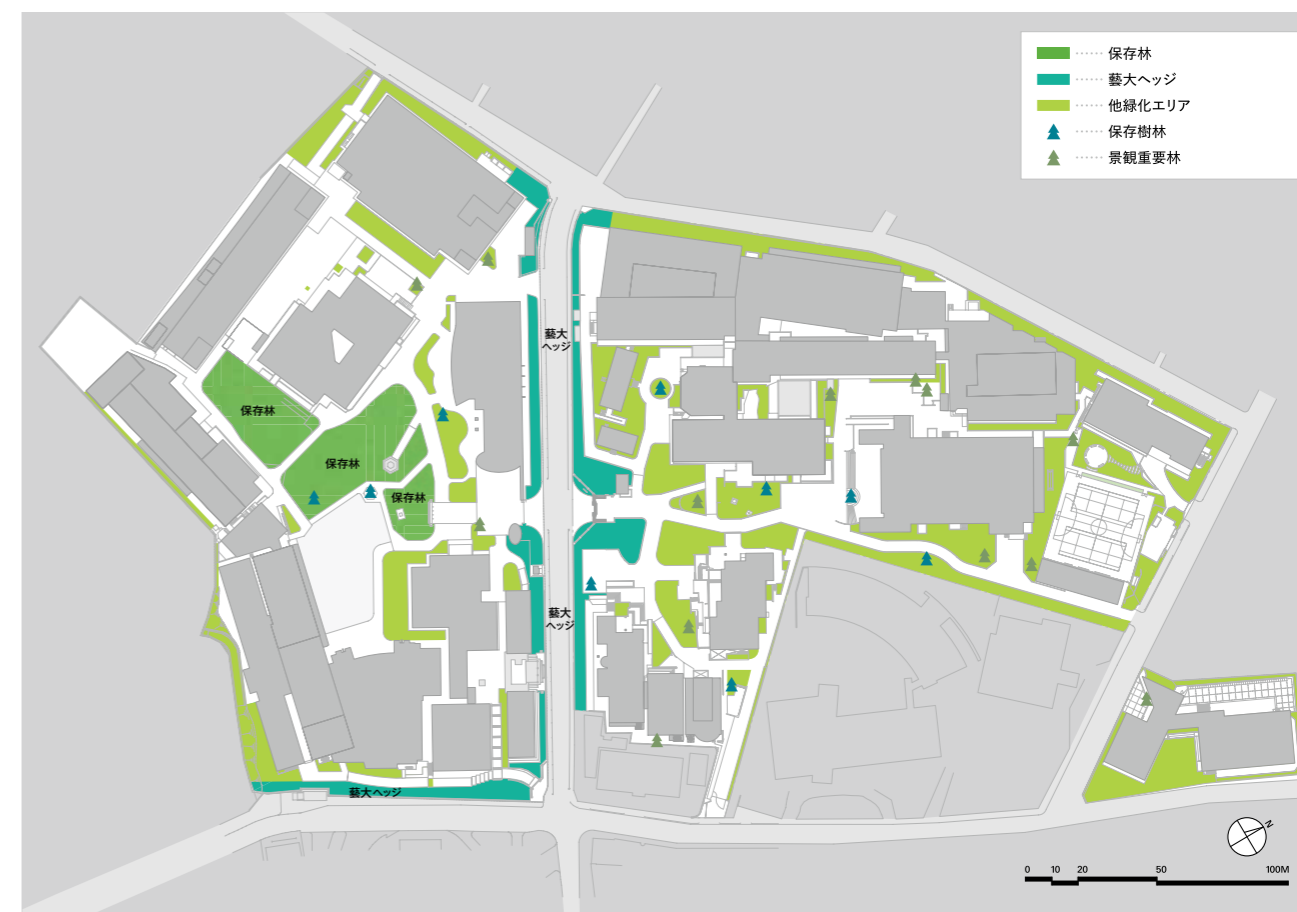
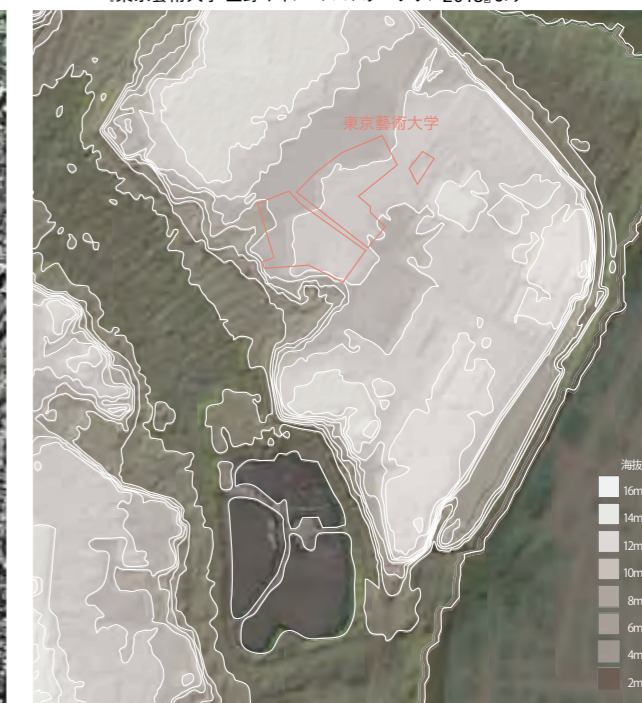


fig.17B | ランドスケープ | 緑と水面の分布 (2012)
『東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン2013』より



fig.17C | ランドスケープ | 地形 (2012)
『東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン2013』より



都市における歴史性のあるキャンパスの役割

上野キャンパス内には建築や彫刻・碑などの歴史的要素と、古くからこの地に生息している動植物種も多く、上野の台地に土地の記憶を今に伝えている。これら動植物種も含めた歴史的な環境要素を保存し、次世代に繋げていく。

デザインガイドラインの設置

継続的にキャンパス整備を実行するためにはデザインガイドラインの設置と、計画および運営のための景観審議会的な審議する場が必要とされる。

そこで本キャンパスでは、本学ならではの共創(制作・発表・展示・研究)活動と、これらの環境との結びつきが見えてくるランドスケープを目指し、上野キャンパスイノベーション・commonsから導き出される景観形成を推進する。以下にはランドスケープ形成のあり方として、3つのコンセプトを提示する。

[1] 地域の風土との調和

- ・上野公園と他周辺地域との連続し、一体化した景観づくりにより、地域との環境・景観の調和を図る。特に上野公園との連続性に基づく教育研究活動が展開できる、地域性にも加味した特徴的な景観づくりを行う
- ・上野の杜の立地を活かした自然環境と、この地の歴史的背景、および周囲の世界でも珍しい数多くの文化芸術施設との関係など開かれたキャンパスとして、この場の潜在力を最大限引き出した景観を形成する

[2] 自然との多様な接点の創出

- ・各棟・ホール・展示スペース・歴史的資源・緑地環境など、キャンパスの全ての要素を駆使し、多様で有機的な関係の構築を図り、あらゆる場所を制作や発表・研究活動の場として、自然との接点を持った豊かで複合的な共創の場を創出する
- ・既存の保存林・保存樹と藝大さくら通り沿いの新たな緑など、緑豊かな環境を維持していく

[3] 創造性を誘発する屋外交流空間の創出

- ・制作・研究・発表等のさまざまなアクティビティや日常のコミュニケーション、創造性の誘発に資する「有機的で連続した魅力ある」屋外交流空間づくりを行う
- ・公開ゾーンに沿って上野桜木地域連携棟までキャンパスが拡張し、地域と連動した活動によって上野公園と谷中方面のアクセス、地域環境の向上に貢献し、歩きやすい道空間を展開する

コミュニティスペース

教育研究ゾーンの憩いの場から、共創の場としての芸術未来研究場というコミュニティスペース

本キャンパスには屋内外を問わず、日常の動線上に大小さまざまなパブリック空間が、独立した単位としてブドウの房のように存在し、キャンパスの公開・交流・教育研究の3つのゾーンにランダムに広がっている。これらの空間を各ゾーンや施設の内外の機能にふさわしいコミュニティスペースとして定義し、日常の連続したシーンの中に再設定する。

それらは全て、憩いの場、各科の教育研究の発表の場、共創の場であり、あらゆるステークホルダーと結びつき、芸術未来研究場と連動して新しい芸術研究や表現領域を生み出す「場」となる。

同時に、『上野キャンパスマスタープラン2013』の「3-3-2 | 景観についての整備計画」に示されている「小スケールの有機的連動による多彩な織物状のフィールドづくり」の方針を取り入れ、自然や環境のつながりを強めることで、本学の特性を活かした多様なコミュニティスペースの形成を目指す。

各コミュニティスペースの新たな方向性は様々であるが、大きくは下記の通り想定することができる。

公開ゾーン

- ・開かれた大学、キャンパスと都市の融合
- ・本学の顔としてのパブリックスペース
- ・上野公園と一体となった公園的スペース
- ・一般の人が別の目的でも通過する際の「みち広場」的なパブリックスペース
- ・本学の研究成果などの発表や展示・演奏等のイベント情報を発信する場
- ・学内外に貸出し可能な場やスペース
- ・上野桜木地域連携棟を中心に谷中方面に向けた地域交流の場の拡張

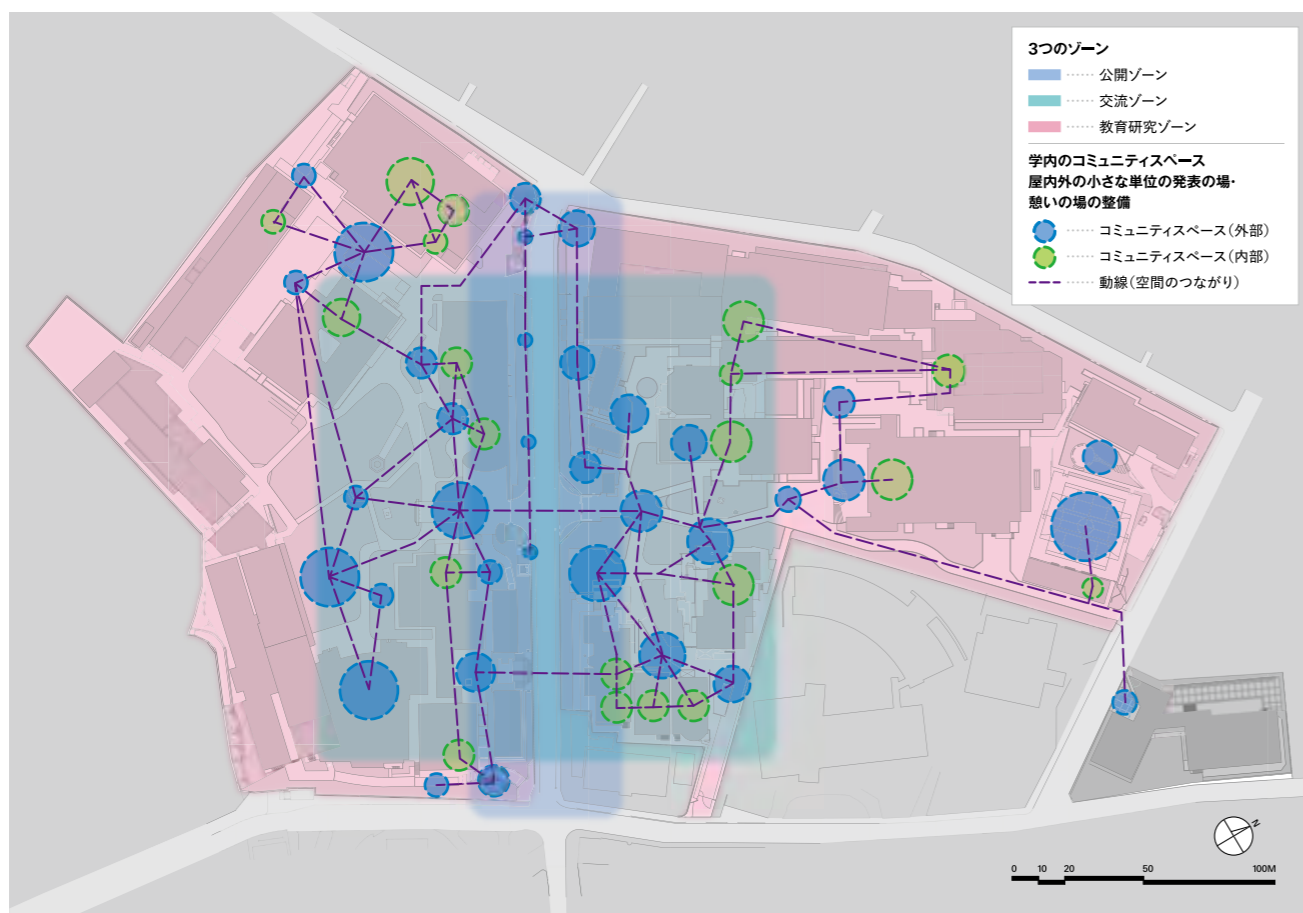
交流ゾーン

- ・産学官の共創の場としての芸術未来研究場
- ・人と人、人とコンテンツを繋ぐ場所
- ・地域の人々も含めた憩いの場
- ・展示、演奏、発表、図書スペース、ショップ、食事スペース
- ・異分野のプレーヤーなど、未知なる出会いが日常的に得られる場
- ・価値創造を加速させる場

教育研究ゾーン

- ・教職員、学生の憩いの場
- ・ショーケース的役割としての各科の活動の可視化の推進
- ・各科の成果発表の場(展示・演奏・発表)
- ・教育研究に特化したラーニングcommons
- ・学内同士で異分野のプレーヤーが集まる、コミュニケーションの場
- ・議論し検討する場

fig.18 | コミュニティスペース



[05 | 具体的な整備計画] では、このコミュニティスペースの展開に関して以下の2つの項目で方向性を示している。

- [05-3-3 | 展示空間・演奏空間を多方面から検討]
 - [05-4 | 多様な教育研究活動と快適な環境に向けて]
- 学内のコミュニティスペース

全体計画

計画目標に沿って導き出されたゾーニング計画、動線計画、ランドスケープ、コミュニティスペースの計画を、キャンパス全体計画として構築すると[fig.19]に示すように整理される。各計画相互の関係性は以下のとおりである。

青色の破線で囲まれたエリアは、今後の主要な整備対象範囲を示している。まず、キャンパスの顔となる藝大さくら通り沿いでは、両端に位置する上野公園方面および谷根千方面、赤レンガ1・2号館周辺の屋外環境、さらに音楽学部側正門横の空地が挙げられる。これらの場所には青色の破線矢印が示され、「多軸的につながる」ための公開ゾーンの出入口として位置づけられている。この矢印は大学会館にも示され、フィールド1からフィールド2へと連続するプロムナードとして展開していく。

さらに、交流ゾーンと教育研究ゾーンにまたがる青色破線で囲まれたエリアは4か所設定されている。A地区側では、セントラルパークとその周辺建築群による内外一体となった環境整備を行う。具体的には、中央棟ホール、絵画棟1階の大石膏室およびその周辺空間を含めたエリアを一体的に整備し、A地区側の憩いの場として位置づける。B地区側では、5号館のピロティおよびエントランスホールから練習ホール館へと連続するラウンジの空間を、B地区側の憩いの場として整備する。加えて、奏楽堂ホワイエを含む前広場、大学本部棟の周辺についても、一体的な環境整備を行う。

これらの空間は、公開ゾーン、交流ゾーン、教育研究ゾーンのそれぞれに位置づけられ、各ゾーンにおいて求められるコミュニティスペースとして機能するよう設定されている。具体的には、学生と教職員のための憩いの場や発表の場、さらには学外者とのコミュニティスペースとしての役割を担う。

これらの計画により、キャンパス全体はラーニングコモンズとして、人と人、人とコンテンツをつなぐ場となり、「開かれた大学」として交流の誘発や活動の可視化を促すことが期待される。また、大学本部棟に設けられた芸術未来研究場の拠点と連動し、屋内外を問わず多様なスケールの空間が共創の場として展開される整備計画となっている。

これらを実現するためには、芸術未来研究場が全体計画の要として機能することが不可欠である。さらにそれぞれの場は、周辺に接するエリアおよびゾーンごとの施設整備の方向性と極めて重要な関係にある。そのため、これらのコミュニティスペースは、関連する施設整備と連動しながら一体的に整備されなければならない。そこで各施設において着手すべき具体的な整備内容については、[05 | 具体的な整備計画]に提示する。

また、新たに設定した全体計画における多様な共創の場とアクティビティの将来像を、[fig.20]に示した。

fig.19 | 全体計画



4つの計画目標と全体計画

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

4つの計画目標と全体計画

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

fig.20 | 将来のイメージ図



A地区 憩いの場/セントラルパーク
教育研究ゾーンと交流ゾーンの境に位置する屋外の共創の場



藝大食業部
食事の場であり、展示・演奏・様々な活動ができる学生にとっての自由な共創の場



大石研究室 (絵画棟1階)
展示・演奏・様々な活動ができる学生にとっての自由な共創の場



谷根千方面門柱まわり
上野公園方面からのプロムナードが連続し、ベンチと木立、藝大ヘッジの緑豊かな谷根千方面の導入口。本学と上野公園の顔となる



大学美術館エントランスホール
展示・演奏・パフォーマンス空間にも活用可能な社会との共創の場



藝大ヘッジのお世話
本学学生のお世話隊を中心に、教職員と地域住民参加のワークショップ実施による取り組み



みち広場と赤レンガ
中央の道路(藝大さくら通り)は歩行者優先となり、キャンパスが有機的に繋がった公開ゾーンの共創の場



B地区 憩いの場
音楽学部メインエントランスから音楽学部練習ホール館まで連続し、あらゆる情報が共有される。展示も可能な共創の場



中央棟1階ホール
憩いの場、展示・演奏・発表の場。異分野交流としても活用される共創の場



グラウンド
憩いの場であり、屋外の実験的作品、発表としても活用される共創の場



総合工房棟A棟屋外デッキステージ
様々な発表・制作などの取り組みがダイナミックに展開される共創の場



プロムナード
旧美術学校本館玄関、藝大アートプラザ、正木記念館、陳列館に囲われ、公開ゾーンの共創の場



国際芸術リソースセンター(IRCA)
図書館機能と同時に、最先端のラーニングコモンズ(空間・壁面を利用したコンサート、展示、ワークショップ等のイベントにも対応)の空間。プロムナードの導入口



正木記念館 和室
本学の象徴的な建築の1つである。貴重な和室空間を活かした展示・演奏空間では、伝統的芸術の探求とともに、新しい芸術領域を切り開く



旧美術学部側正門
みち広場(藝大さくら通り)に沿ったプロムナードの導入口。重要な建築群に囲まれ、本学の歴史や芸術活動が垣間見える空間。上野公園側の本学の顔である



陳列館
従来の展示に加え、演奏や新しい芸術表現の発表の場。本学での教育研究活動の成果を日常的に発信し続けている



南門と屋外広場
学内外憩いの場。Arts&Science LAB.1階ホールや芸術未来研究場と連動し、異分野交流による屋外の共創の場としても展開



Arts&Science LAB. 球形ホール
展示・演奏・パフォーマンス、映像による学内外共創の場。最先端の芸術表現の追求や異分野交流を推進する場



Arts&Science LAB.1階
屋外展示・演奏の学内外共創の場。最先端の芸術表現や異分野交流による総合芸術の実験と創出の場



「変化し続けるパブリックアート」と国際交流棟の前広場
屋外展示・演奏の学内外共創の場。新しいアートの実験と創出



第6ホール前ホワイエ
展示空間にも活用。音楽・美術等の異分野の交流が深化する共創の場



奏楽堂ホワイエ
前広場も一体に学外者も含め音楽・美術等の異分野による共創の場



芸術未来研究場の拠点(大学本部棟1階)
藝大ショーケースとして機能し学内外の異分野交流の中心となる共創の場



音楽学部側正門横の空地
屋外展示・演奏の学内外共創の場。貴重な予備スペース



05

具体的な 整備計画

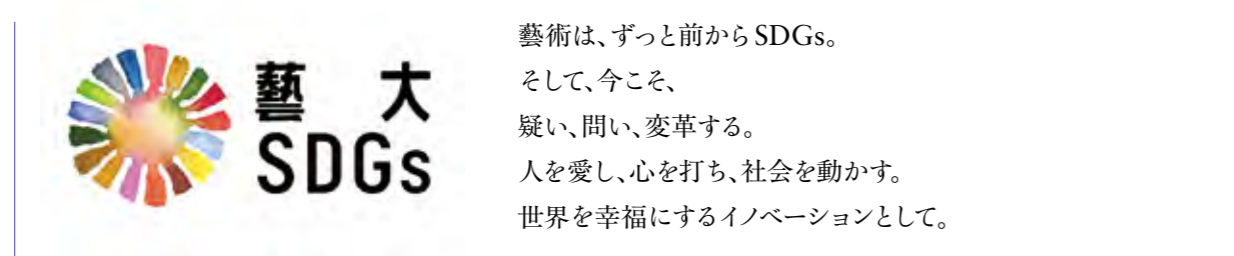
- 05-1 | 持続可能な教育研究環境の追求
- 05-2 | 広く社会に開かれたキャンパスの展開
- 05-3 | 社会との共創
- 05-4 | 多様な教育研究活動と快適な環境に向けて

持続可能な教育研究環境の追求

これまでに示した各項目の計画や方向性を実現するため、前項 [04 | 4つの計画目標と全体計画]^{→p.077}に準拠し、各施設・各場所に対して、取り組み内容に即した具体的な整備計画を提示する。

SDGsの観点からの評価を継続して実施

本学では2021年6月にSDGs推進室を設置し、その下に環境系専門委員会を立ち上げ、SDGs(持続可能な開発目標)の達成に貢献するための取り組みを推進している。そして本学のSDGsビジョンは以下の通りであり、引き続き実施していく。またSDGsは、2030年までに全世界での達成を目指す国際的な目標であるため、それ以降については状況に応じて適宜対応していく。



東京藝術大学は、SDGsが掲げる社会変革に貢献します。独創的な視点からイノベーション生み、人の心を動かす藝術の力によって

- ・東京藝術大学は、社会との結びつきを強化します。SDGsを共に目指すことで新たな連携の広がりを
- ・東京藝術大学は、持続可能な大学を目指します。学内の自然の“美”と多様性の“鮮やかさ”を守ることで
- ・東京藝術大学は、藝術と社会の架け橋となる人材を育成します。藝術によって社会課題の扉を開くことを目指して

SDGsが掲げる17の目標の中に、「芸術」の文字は、ひとつもありません。それは、17の目標すべてに藝術が接続すべき必要と出番があるということ。

大量生産・大量消費・大量廃棄が引き起こす地球の悲鳴。そして貧困、差別、暴力による人間の悲鳴。すべてのアーティストは、遥か以前から、その悲鳴に心を向け作品を生み続けて来ました。ダヴィンチも、ベアト・ヴェンも、ピカソも、シュパンも、黒澤明も、バンクシーも。

藝術活動は、人間が人間たる所以。そして人間はこの10年で、既存の価値観を大きく転換させなくてはなりません。

社会変革の種を“藝(う)”える“術(すべ)”を持つ東京藝術大学。「世界を変える創造の源泉」として、豊かで幸福、持続可能な社会を実現する役割を果たします。

上記のビジョンに基づき、本学ではSDGsのグローバルな17のゴールを本学の特徴である芸術領域の課題に即した形にローカル化し、ゴールごとにテーマと指標を設定してSDGsの取り組みを進めている。また毎年、進捗を計測しつつ、取り組みを拡大している。

この取り組みにおいて、キャンパスグランドデザイン推進室と施設課では、SDGsゴール6・7・11・13・15を担当している。またカーボンニュートラルやRE100を目指す取り組みについては、SDGsゴール7と13の中で具体的な目標と取り組みを設定している。さらにこれらに連動し、環境負荷の低減及び自然環境の維持・保全に向け、2021年より「東京藝術大学環境報告書」を継続的に更新している。^{→p.157}

上記の5つのゴールへの具体的な取り組みについては、[10 | 付属資料]に記載する。

カーボンニュートラルやRE100を目指す取り組み

本学の持続可能な教育研究環境の追求に向けた、カーボンニュートラルとRE100を目指す取り組みに関する大きなキーワードは以下となる。

- ・再生可能エネルギーの導入
- ・持続可能な交通手段の推進
- ・キャンパスのグリーン化
- ・エネルギー効率の向上
- ・廃棄物の削減とリサイクル
- ・持続可能な食事の提供
- ・カーボンオフセットの活用
- ・グリーンビルディング認証の取得
- ・教育と啓発活動の実施 等

持続可能な教育研究環境の追求に基づく施設全体のマネジメント

以上の項目に本学のSDGsの観点を取り入れると、持続可能な教育研究環境の追求に向けた施設全体のマネジメントは以下の5つの項目となる。これらを複合的に取り組むことで、本学の施設マネジメントはより持続可能な方向に向かい、SDGs、カーボンニュートラル、RE100へ貢献することができる。

1: エネルギー効率の向上と再生可能エネルギーの導入

本学施設内のエネルギー使用効率を引き続き改善し、再生可能エネルギーを積極的に導入する。具体的な取り組みとしては、省エネルギー設備の導入、LED照明の利用、断熱材の改善、エネルギーマネジメントシステムの導入などが挙げられる。また新規施設整備においては、木材利用拡大を推進させる。これにより、SDGsゴール7(エネルギーへの普遍的アクセスを確保し、エネルギー効率を向上させる)とRE100の目標に貢献していく。

2: カーボンニュートラルなキャンパスおよび施設の実現

施設全体のカーボンニュートラル化を目指すため、温室効果ガス(GHG)排出量の評価と監視を引き続き行う。主要な排出源を特定するため、可能な範囲で施設ごとの個別計測を目指す。その後、省エネルギー対策や再生可能エネルギーの導入によって排出量を削減。さらに、残った排出量を相殺するために、カーボンオフセットの導入や、環境改善プロジェクト(保存林、藝大ヘッジの維持管理)の取り組みを継続していく([06 | エネルギー管理とCO2削減に向けた計画]^{→p.127}を参照)。

3: 持続可能な資源調達と廃棄物管理

大学の資源調達においては、環境に配慮した製品やサービスの選択を促進していく。例えば、リサイクル製品や再生可能資源を使用した製品や材料、素材の優先採用、地元の持続可能な農産物の利用などが挙げられる。また、廃棄物管理ではリサイクル、リユース、廃棄物削減の取り組みを強化し、廃棄物の最小化を図る。

4: 環境に配慮した交通手段の促進

持続可能な通学通勤手段として、原則的に公共交通機関の利用とし、自転車など環境に配慮したものとする。同時に充電ステーション等の整備も検討する。これにより、SDGsゴール11(包摂的かつ持続可能なキャンパス化)と他関連目標に貢献していく。

5: 教育と啓発

大学の施設マネジメントにおける取り組みを学生や教職員に広報し、持続可能性に関する教育と啓発活動を展開する。持続可能性に関する授業やセミナーの開催、キャンペーンやイベント、芸術的視点による課題解決のアイデアコンペの開催、学生や教職員の参加を促すなどの取り組みを通じて、持続可能な意識と行動を醸成していく。

広く社会に開かれたキャンパスの展開

はじめに、この章に関係するキャンパス計画に、大きく影響を与えた出来事について改めて整理する。

まず、キャンパスの中央を縦断している都道452号線の都市計画道路補92号の計画が2020年に廃止され、さらに2024年には名称が「藝大さくら通り」になったことが挙げられる。これにより、従来の「車が主体の幹線道路」としての性格が、「人が歩きやすい道」へと変わることになった。この変更により、『上野キャンパスマスタープラン2013』に掲げられている「A地区とB地区を地上で多軸的につなぐ」という目標を、さらに強く推進することが可能となり、2つの地区を分断していた道路が『上野キャンパスマスタープラン2013』の目標である「社会交流のエリア」として、さらには一体化した「みち広場」として実現する可能性が高まった。

ここで一旦、近年の「広く社会に開かれたキャンパスの展開」に関する取り組みを振り返る。

藝大さくら通り沿いの「公開ゾーン」に設置している本学の施設（大学美術館本館・陳列館・正木記念館・国際芸術リソースセンター（IRCA））は、2018年にその周囲の門（旧美術学部側正門・旧東京美術学校本館玄関）が開くことによって、道とキャンパスが連続する都市へ開かれたプロムナードが形成された。さらに、キャンパスの環境改善の1つである「藝大の森」プロジェクトでは、大学を取り囲む塀や柵を緑によるやわらかい境界へと置き換える活動（藝大ヘッジ）を、2016年から2024年まで9回にわたり地域との協力で着手し、道に沿って緑のキャンパスをつくり出した。

これらにより、上野キャンパスは上野公園全体における開かれた芸術文化都市として貢献している。さらに上野公園と谷根千方面とのアクセス、地域環境の向上、歩きやすい道への取り組みなど地域に寄与している。

一方、今後の展開として、この公開ゾーンには、東京都選定歴史的建造物に認定されている赤レンガ1号館と2号館の周辺や、音楽学部側正門横の空地など、キャンパスの一体化に連動しうる要素が残されている。

以上を念頭に、ここでは、公開ゾーンから交流ゾーンに関連し、学外者との共創の場を視野に入れた広域な整備計画を取り上げる。同時に、オープン化や、外部との接続を推進するために必要なセキュリティ整備も含まれている。

05-2-1 | キャンパスの一体化、多軸的につなぐ

05-2-2 | 上野公園方面と谷根千方面の導入口(大学の顔)のあり方

05-2-3 | 保存林、藝大ヘッジ：今後の展開と維持管理

保存林、藝大ヘッジの2013年から現在までの活動

保存林と藝大ヘッジの維持管理（現状）

その他の重要な景観要素（樹木、樹林）

その他の重要な景観要素の維持管理（現状）

05-2-4 | 胸像、碑、門柱、銘板、サインの適正な配置

05-2-5 | 赤レンガ1・2号館周辺の環境整備

05-2-6 | 柔軟に対応できる公開の場の設定

fig.21 | みち広場のイメージ



上野公園方面からの眺め



谷根千方面からの眺め

fig.22 | フィールド1の都市へ開かれたプロムナード



開かれた旧東京美術学校本館玄関

開かれた旧美術学部側正門

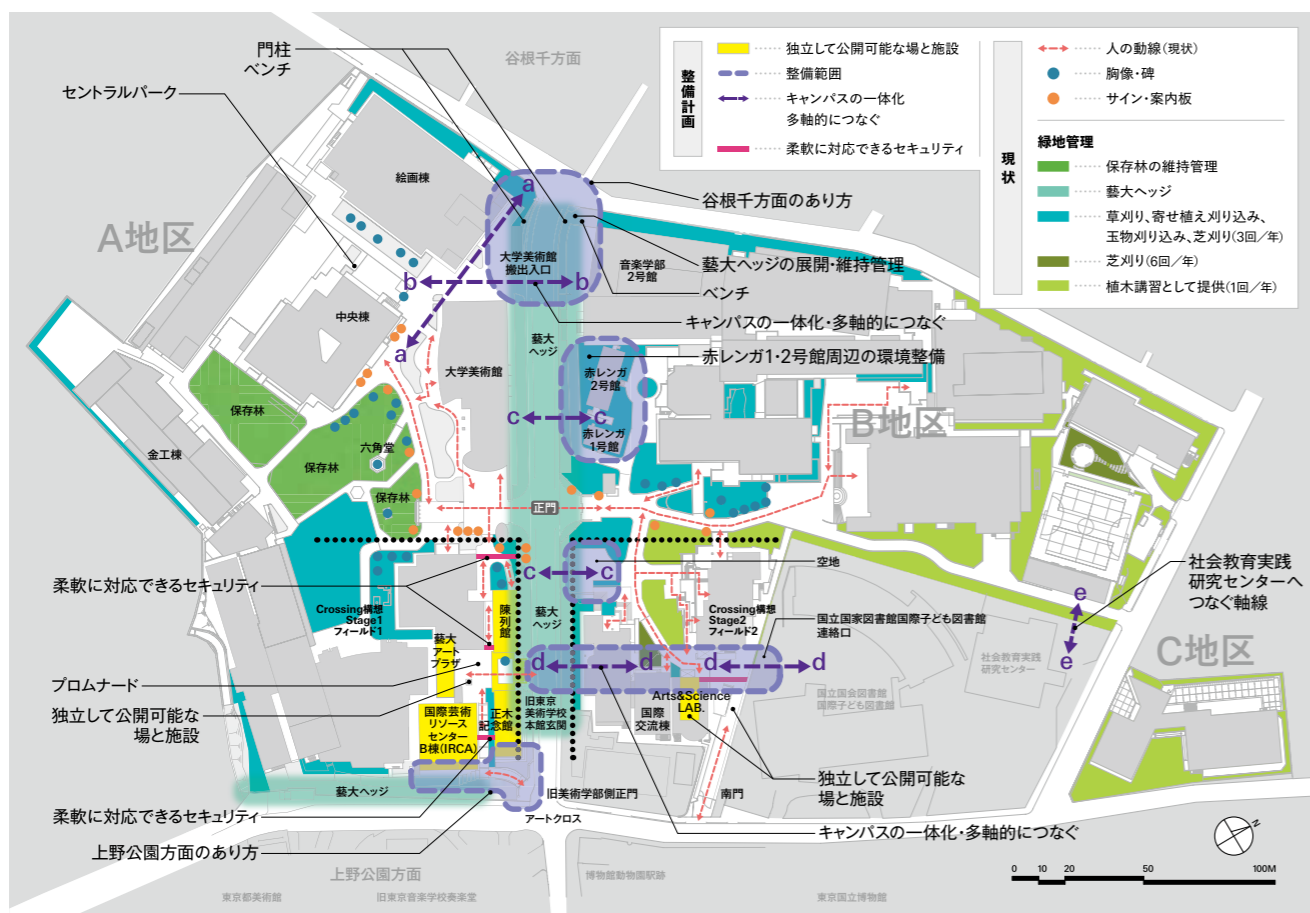


道に沿った緑の境界(藝大ヘッジの活動)

fig.23 | 上野キャンパス周辺の主要施設と立地環境 | 『東京藝術大学 上野キャンパスマスタープラン2013』より



fig.24 | 広く社会へ開かれたキャンパスの整備計画



05-2-1 | キャンパスの一体化、多軸的につなぐ

藝大さくら通りに沿って設定された公開ゾーンでは、A地区とB地区からの視線(3つのゾーンの見通し)と施設の配置、利便性に基づき、景観とアクティビティに配慮した軸線を取り入れ、新たな動線を形成する。具体的には、以下のaからe [fig.24]の通りである。

- a:** 藝大さくら通りの谷根千方面から絵画棟・中央棟・大学美術館に沿って保存林まで延びる軸線
- b:** セントラルパークからの視線の抜けを意識して、大学美術館の搬出入口や音楽学部2号館への軸線
- c:** 公開ゾーンに位置する赤レンガ1・2号館と、音楽学部側正門横の空地。敷地から道路へ直接アクセスが可能な軸線
- d:** フィールド1から2へ連続するプロムナードの形成
藝大アートプラザ、旧東京美術学校本館玄関、国際交流棟、Arts&Science LAB.の前面を通過し、国立国会図書館国際子ども図書館まで貫く、社会との共創の場の軸線
- e:** 社会教育実践研究センターへつなぐ軸線

05-2-2 | 上野公園方面と谷根千方面の導入口(大学の顔)のあり方

藝大さくら通りは、本学キャンパス中央を縦断する道路であり、上野公園と谷根千方面を結ぶ唯一の道であるため、本学の顔となる場である。同時に地域においても、極めて重要なルートとして機能している。ここではこの2箇所のあり方を提示する。

谷根千方面

道路両端の門柱の構えが本学の顔となり、同時に上野公園の導入口となる重要な場所である。2024年に実施された環境整備では、両端の門柱を再生してシンボルとし、周辺には植物やベンチ等を備えた、地域に開かれた屋外空間を配置して、地域住民にも親しまれる場となっている。今後はA地区側は保存林までの視線の抜けを取り入れた景観整備を行うと同時に、セントラルパークから音楽学部2号館への視線の抜け(軸線)にも配慮し、公開・交流・教育研究の3つのゾーンの奥行きを感じられる場として形成していく。更にフィールド1から連続するプロムナードの出入口や、一般自動車の出入口も想定範囲とし、通り抜けが可能で広く利用されるキャンパス空間を目指す。

fig.25 | 谷根千側門柱まわり



上野公園方面

上野公園方面の交差点(アートクロス)では、東京国立博物館、東京都美術館、国立国会図書館国際子ども図書館、博物館動物園駅跡、旧東京音楽学校奏楽堂など多くの歴史的、文化的施設が隣接している。そして2018年、国際芸術リソースセンター(IRCA)が完成し、旧美術学部側正門や正木記念館の建築群はプロムナードの導入口として機能している。また上野公園内の旧奏楽堂に面する公衆トイレは2021年に撤去されて開放的な景観となり、上野公園から本キャンパスの姿が樹木の間越しに見えるようになった。さらに2024年には、旧奏楽堂の前広場の舗装等が新たに整備された。本学も連動して、国際芸術リソースセンター(IRCA)や正木記念館の壁面、旧東京美術学校本館玄関の軒天等を照らすライトアップの整備や、学内の情報発信板等のサインを適正に配置することが求められている。

fig.26 | 旧美術学部側正門



05-2-3 | 保存林、藝大ヘッジ: 今後の展開と維持管理

保存林、藝大ヘッジの2010年から2025年までの活動

キャンパスグランドデザイン推進室では前項[04-4 | ランドスケープ]で述べている、『上野キャンパスマスタープラン2013』の「景観整備の理念」「景観の課題と方針」に基づき、以下の取り組みを通じて多様で豊かな環境づくりを展開してきた。

- 2010年 A地区側の中央に位置する武蔵野の照葉樹林の面影を残す雑木林(保存林)の環境調査。その結果、外来種の侵略により、多様性が失われつつある雑木林の現状を把握し、在来種から形成される多様な生態系を再生するため、270種の関東在来種を選定し、まずは150種まで増やすことを目指すこととした。
- 2014年 保存林再生実験としての苗木植樹ワークショップの開始と外来種の駆除をスタート。苗木の生育を見守る「お世話隊」も発足し定期的に活動を行う。
- 2016年 藝大ヘッジを開始。大学を取り囲む塀や柵を緑の境界へ徐々に置き換え、在来種を増やし多様で持続可能な環境をつくる取り組みを行っている。また、まちづくりの一環として、学生、教職員、卒業生だけでなく、地域の人々とともにワークショップを展開し、2024年までに9回の活動を実施。
- 2018年 第3回台東区景観まちづくり賞を受賞
- 2019年 第30回緑の環境プラン大賞では国土交通大臣賞を受賞
- 2024年 国際子ども図書館との一部境界において、藝大ヘッジの手法による植栽帯の設置。藝大ヘッジによる藝大さくら通り沿いの緑化活動の完成。谷根千方面の門柱の再生と新規ベンチの設置。

これらの活動によって、『上野キャンパスマスタープラン2013』に示されている2010年当時の調査では保存林の樹種が78種だったものが、2024年には110種増え189種まで達成し、植樹の本数としては1,836本になった。

現状は淘汰と増殖をしながら、既存樹木との交代していく育成の段階である。一方、藝大ヘッジでは9回の活動で植えた本数は9,500本に達している。

保存林と藝大ヘッジの維持管理(現状)

現状実施している費用対効果があり実施可能な管理は以下の通りである。

- ・本学学生のお世話隊を中心に、教職員と地域住民参加のワークショップによる維持管理作業を実施
- ・3回/月を目安に定期的な手入れを行う。剪定/水遣り/剪定の枝や落ち葉による腐葉土づくり

その他の重要な景観要素(樹木、樹林)

キャンパス内の重要な景観要素(樹木、樹林)として『東京藝術大学キャンパスデザインガイドライン(上野キャンパス編)』には以下の内容が具体的に示されている。

[樹木]	保存樹木:	歴史的、個体的価値が高く、景観形成に大きく寄与し、その価値を継承すべき樹木
	景観重要樹木:	景観形成の上で重要であり、必要に応じて更新することも含め、良好な状態の維持管理に努める樹木
[樹林]	保存樹木:	関東在来種を基本とした植生の里山を形成・維持すべく適切に維持管理をしながら積極的に保存すべき樹林
	景観重要樹木:	景観形成の上で重要であり、適切な時期に更新を行いながら、良好な状態の維持管理に努める樹林

その他の重要な景観要素の維持管理(現状)

これらの事項を念頭に置き、費用対効果があり実施可能な緑地管理の整備計画は以下の通りである。

- ・植え込み内の草刈り、寄せ植え刈り込み、玉物刈り込み、芝刈り(3回/年)
- ・国際交流棟の前庭及び音楽学部附属音楽高等学校前庭の芝刈り(6回/年)
- ・東京しごと財団の中低木を対象とする植木講習の場所として提供(1回/年)
- ・その他は、台風等の自然災害で被害が生じそうな部分について適宜、伐採等の処置を行う(範囲は[fig.24]参照)

これらをふまえ、[05-1 | 持続可能な教育研究環境の追求]に基づき、今後の方向性は以下となる。

ハード面

- ・現状の保存林の範囲は、金工棟と中央棟の間および岡倉天心六角堂の周囲の2か所に加え、保存林に準じてバルザック像が置かれた周囲の1か所となっている([fig.24]参照)
- この保存林の範囲については固定化せず、定期的に議論を重ね、更新していくことが望ましい
- ・引き続き3つのゾーン(公開・交流・教育研究)の特性を施設整備に連動させて、屋内外が一体的かつ有機的繋がり景観形成を推進する

ソフト面

- ・保存林の定期的な観察の具体的方法の策定

在来種の増加目標の再設定、および評価のための客観的定量化の方法(藝大SDGsの観点に連動)

- ・景観整備の理念に基づく、長期的かつ持続可能な維持管理の仕組みづくり
- 具体的メンテナンスのマニュアル化(剪定/水遣り/落ち葉の管理等/害虫駆除等)
- ・まちづくりの一環として、本学の関係者や地域住民とのワークショップを引き続き推進する

05-2-4 | 胸像、碑、門柱、銘板、サインの適正な配置

胸像、碑、門柱、銘板、サインは、本学の歴史や研究成果、または所縁のある人物や場を現代に伝える重要な役割を担っている。銘板は本学の活動にご寄付を頂いた皆様のご芳名を掲げ、顕彰するものであり、サインは特に学外の方へキャンパス内の施設の位置やルートを示すものとして必要不可欠な要素である。以上をふまえ、以下の点に配慮して、適正な位置に配置する。

- ・胸像、碑、銘板は、公開ゾーンや交流ゾーンに、それぞれ関係のある場所へ引き続き効果的に配置する。同時に、像などを見やすく引き立てる周辺環境改善を行う
- ・門柱は引き続き耐震化を推進し、当時の原型を可能な限り継承するため、設置場所や素材を活かしたものとする。必要に応じて、説明板を併用する
- ・サインは施設の場所を示す機能と、上記の胸像、碑、門柱、銘板の位置や歴史的情報を伝達する機能も備える
- ・国際化、ダイバーシティに対応し、外国語併記とする

05-2-5 | 赤レンガ1・2号館周辺の環境整備

赤レンガ1・2号館は、東京都選定歴史的建造物であり、音楽学部側の正門横に位置している。現状も教育研究活動の場として活用されているこの建物は、藝大さくら通りに面しており、夜間にはライトアップされることで、正門とともに本学の歴史を象徴する景観を作り出している。今後は以下の点について整備を検討していく。

- ・「多軸的につなぐ」および「公開ゾーン」方針に基づく、建物周辺の屋外環境整備
- ・公開ゾーンに位置する展示スペースとしての機能拡張施設([05-3-2 | アーカイブゾーンの設定]と連動して整備)
- ・直接出入り可能な仕組み/安全と安心のためのセキュリティ整備/舗装、ベンチ、説明板の設置。樹木の手入れ

05-2-6 | 柔軟に対応できる公開の場の設定

この計画の意義は、学内外の人々が季節を問わず1年中キャンパスを利用できるように、柔軟に対応できる公開の場を設定することにある。具体的には、フィールド1のプロムナードを囲む施設(国際芸術リソースセンター(IRCA)、正木記念館、陳列館、藝大アートプラザ)と、フィールド2のArts&Science LAB.の屋外に開閉が容易にできる「柔軟なセキュリティ」を導入することで、外からの出入りを段階的に制限することができる仕組みを設けることである。教育研究活動と切り離れた施設として、入試期間中も展示やイベント、学外者との共創研究活動などが可能となり、学内外の人々がいつでも利用することができる。

[fig.24]で示されている通り、フィールド1では旧美術学部側正門と旧東京美術学校本館玄関を引き続き利用する。また、フィールド2では2024年の改修を期に南門の活用が開始され、芸術未来研究場や社会との共創などの活動は、独立した運営が可能となっている。

fig.27 | みち広場と赤レンガ



→p.113

fig.28 | プロムナード



社会との共創

ここでは、本学での研究の蓄積や成果の情報発信を推進する、フィールドや施設整備について取り上げる。まず近年に施設整備が進み、大きく変化しているフィールド2の整備計画である。敷地の特徴として公開ゾーンと交流ゾーンに属し、「藝大の顔」となり、「知の拠点」としての国際交流拠点が設置されている場である。2024年には、これらの機能を包括する芸術未来研究場の拠点が大学本部棟に設置され、本学とあらゆるプレイヤーとの共創による活動や研究、それらの成果を情報発信する場所となっている。また、2026年にはゲーム・インタラクティブアート専攻が設置される。全学的かつ産学官連携による最先端の研究組織として位置づけられ、スタートアップ支援としてArts&Science LAB.での教育研究活動が展開される。このようなフィールド2の整備計画と連動しながらアーカイブゾーンの設定、大学美術館と奏楽堂の今後の方向性を提示する。

こうした整備計画のために、本マスタープランと『東京藝術大学キャンパスデザインガイドライン(上野キャンパス編)』に基づいて進めていく。また、[05-3-3 | 展示空間・演奏空間を多方面から検討]の、大学美術館および奏楽堂の大規模改修を遂行するには、キャンパスランドデザイン推進室の特任教員等の人的拡充が必要不可欠である。

05-3-1 | フィールド2: Crossing 構想 Stage2の計画

- 日本の芸術の「知の拠点」・国際交流活動の拠点
- フィールド1と連続する交流空間としてのプロムナード
(音楽学部側正門横の空地、Arts&Science LAB.の今後の方向性、大学会館の今後の検討)

05-3-2 | アーカイブゾーンの設定 ([fig.31]参照)

- 未来創造継承センター
- 今後の方向性

05-3-3 | 展示空間・演奏空間を多方面から検討

- 憩いの場に寄り添った小さなスケールの展示空間と演奏空間
- 専門性の高い展示空間と演奏空間
- 拡張する展示空間と演奏空間

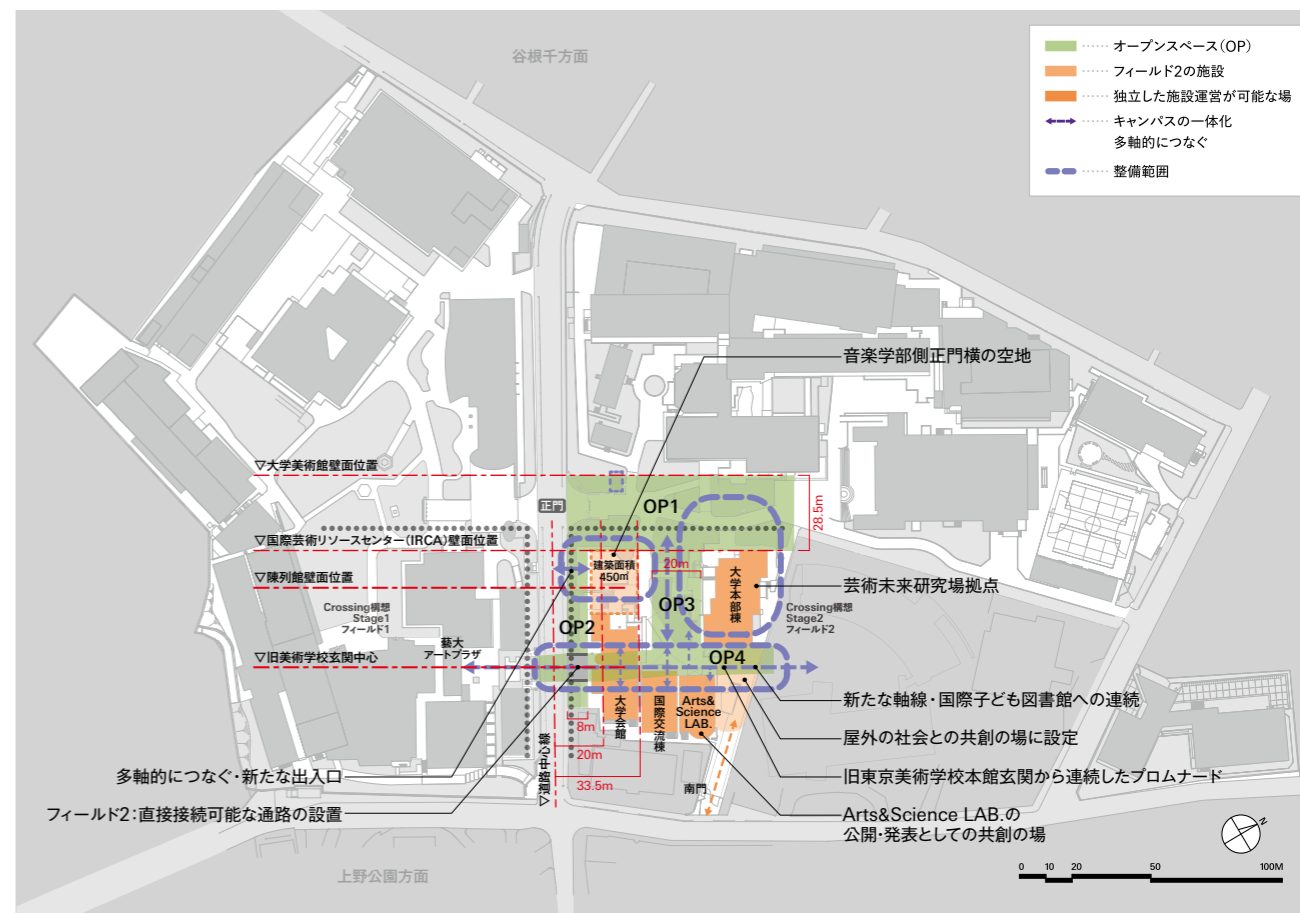
05-3-4 | 東京藝術大学大学美術館

- [1] 大学美術館の歴史と概要
- [2] 大学美術館の基本理念と活動
- [3] 25年間の変化
- [4] 大学美術館の課題と整備の方向性

05-3-5 | 東京藝術大学奏楽堂

- [1] 奏楽堂の歴史と概要
 - [2] 東京藝術大学奏楽堂の基本コンセプト
 - [3] 使用状況
 - [4] 奏楽堂の課題と整備の方向性
- 大学美術館、奏楽堂 大規模修繕への備え

fig.29 | 社会との共創に向けた整備計画



05-3-1 | フィールド2 : Crossing 構想 Stage 2 の計画

芸術未来研究場の共創拠点を中心とした、日本の芸術の「知の拠点」・国際交流活動の拠点

『上野キャンパスマスタープラン2013』では、このフィールド2については、「日本の芸術の「知の拠点」の核を形成する」が掲げられている。具体的には以下の通りである。

- ・フィールド1と連続し、図書館とアーカイブを中心とした整備
- ・大学会館・大学本部棟・社会連携センター・不忍荘の建替え、改修や解体
- ・他キャンパスのサテライトとしての機能
- ・交流ゾーン東部に当たる総合工房棟から大学会館までの横軸の交流空間の完成
- ・黒田記念館をはじめ東京国立博物館や国際子ども図書館と隣接している好立地をいかし、これらと連携を深め、産学連携や国際交流活動を行う
- ・上記によって上野公園に面しての「藝大の顔」づくりの完成

fig.30 | 芸術未来研究場の拠点 (大学本部棟1階)



前項 [02-2 | 上野キャンパスマスタープラン2013の検証] で整理された内容に基づき、2013年以降の施設に関する変遷は以下の通りとなる。また、フィールド2「知の拠点」は、具体的には国際交流と社会との共創の場として拡充され芸術未来研究場へと発展している。

2015年	Arts& Science LAB.	竣工	産学連携及び異分野融合による価値創造・社会改革の研究開発及びその支援を行うための、東京藝術大学アートイノベーションセンター施設
2020年	社会連携センター	解体	将来のための予備地 (音楽学部側正門横の空地)
2022年	大学会館一部	改築	展示スペース
	国際交流棟	竣工	国際交流の場/生協・食堂・コモンスペース・GAの活動拠点 / コミュニティサロン / 変化するパブリックアート
2024年	不忍荘	解体	芸術未来研究場の屋外共創の場
	大学本部棟	改修 (減築)	芸術未来研究場の拠点としての機能拡充
	南門	活用開始	

フィールド1と連続する交流空間としてのプロムナード (音楽学部側正門横の空地、Arts&Science LAB. の今後の方向性、大学会館の今後の検討)

[fig.29] の青矢印に従い、旧東京美術学校本館玄関の中心軸から藝大アートプラザまでのプロムナードが形成される。この軸線には国際交流棟、Arts& Science LAB.、そして大学本部棟が面している。また2024年には不忍荘は解体され、屋外の共創の場の再整備とともに、南門も改修され、活用が始まっている。一方、Arts& Science LAB. はスタートアップの活動の支援として、2026年度よりゲーム・インタラクティブアート専攻が活用を開始する。音楽学部側正門横の空地は、藝大さくら通りに面し、独立した運営が可能な本学の新しい顔となる場所で、高さ制限やオープンエアーの確保などの本学独自に設けた基準を守った上で、建設が可能となる貴重な予備地である (但し建築基準法上、残り建築可能な建築面積は約550㎡(不忍荘解体後の100㎡含む))。この貴重で僅かな建築面積は、B地区側の敷地全体の整備方針に関連しており、音楽学部の教育研究施設 (音楽学部1号館を含む全施設) の建て替え計画に影響を与えることになる。以上によりキャンパスの計画上、貴重な予備地として原則新たに建てないことを推奨する。またB地区側の施設整備については、[08-4 | 音楽学部施設建替え] の中で方向を示すこととする。

さらに、今後の大学会館の建替え時によっては、旧東京美術学校本館玄関の道路を隔てた向かい側のフィールド2に新しい出入口が設置される。今後の具体的な整備は以下の通りである。

- 大学会館の再整備 : ・フィールド1側からフィールド2へ公道に直接接続可能な通路を設置
・音楽学部側正門横の空地も含んだ一体的な計画も可能
- 音楽学部側正門横の空地 : ・独立した施設運営が可能な場
・将来の予備地として現状維持
- Arts&Science LAB. : ・アートイノベーションセンター施設 (産学連携及び異分野融合による研究開発と支援)
・独立した施設運営が可能な場の特徴を活かし、1階エントランスホールは公開空間、上階は全学的な視野を持って新たな教育研究の場
・将来の音楽学部建替え時の予備スペース
※いずれも期間限定付きで、最先端研究を支援するスタートアップ的施設
- 2026年度からゲーム・インタラクティブアート専攻の活動の場として、期限付きで活用開始する
- セキュリティの検討 : ・守衛所の最適な位置とセキュリティ機能の強化

以下に『東京藝術大学キャンパスデザインガイドライン(上野キャンパス編)』の一部を掲載する。

高さ制限

高さ制限は以下による。

高さ制限1..... 都道452号線道路中心線から20m未満の範囲は、最高高さをTP+26.5m (黒田記念館別館最高高さ) 以下とすること。

高さ制限2..... 都道452号線道路中心線から20m以上、33.5m未満の範囲は、最高高さをTP+30.35m以下とすること。

高さ制限3..... 都道452号線道路中心線から33.5m以上、47m未満の範囲は、最高高さをTP+34.15m以下とすること。

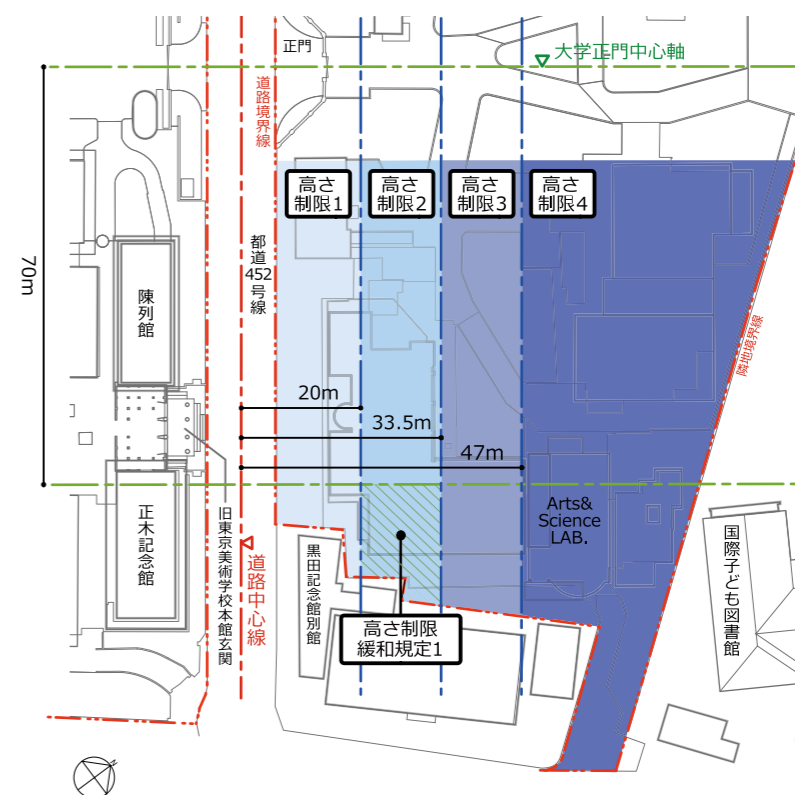
高さ制限4..... 都道452号線道路中心線から47m以上の範囲は、最高高さをTP+36.15m以下とすること。

高さ緩和規定1..... 大学正門中心線から70m以上の範囲については、制限2の範囲について、最高高さをTP+34.15m以下としてよい。

※ただし法規制が存在する場合は法規制を優先すること。

フィールド2

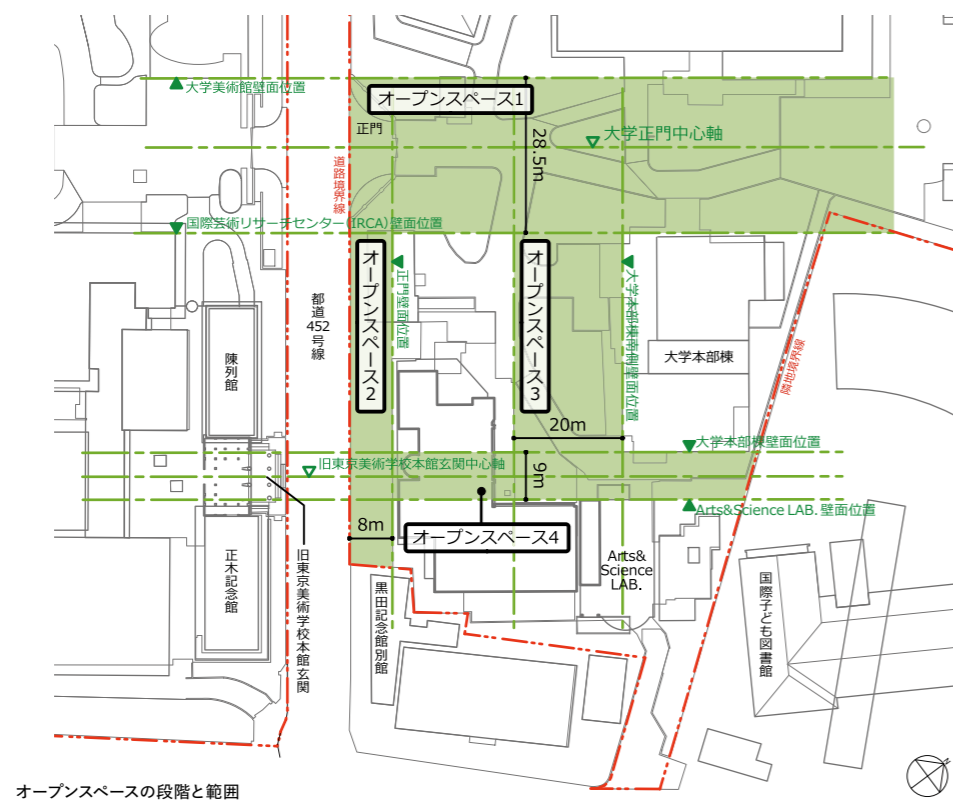
高さ制限と範囲



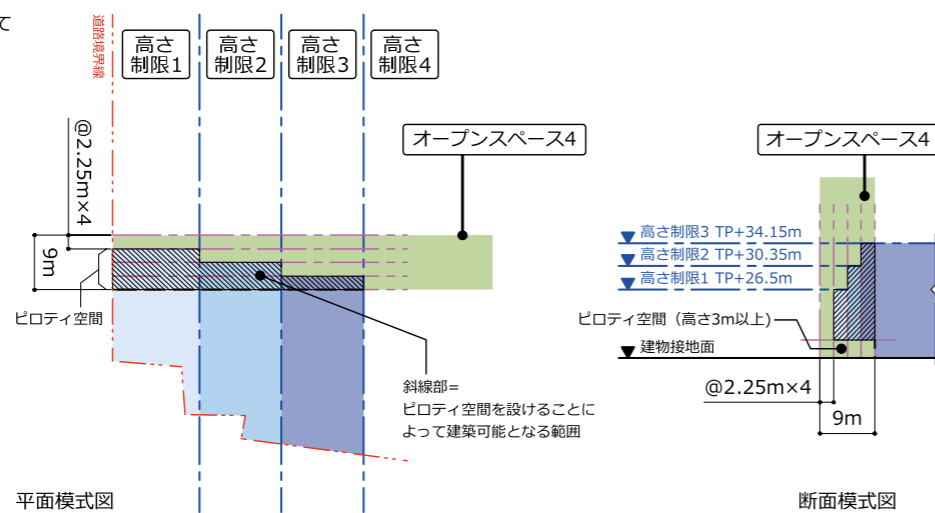
オープンスペース

以下のオープンスペースを配置すること。

- オープンスペース1.... 大学正門中心軸(幅は大学美術館、国際芸術リソースセンター(IRCA)位置を参照)をオープンスペースとして確保し、建築を配置してはならない。
- オープンスペース2.... 都道452号線道路境界線から大学正門位置までの範囲はオープンスペースとして確保し、建築を配置してはならない。
- オープンスペース3.... 大学本部棟南側壁面から20mの範囲はオープンスペースとして確保し、建築を配置してはならない。ただし地下は除く。
- オープンスペース4.... 旧東京美術学校本館玄関中心軸をオープンスペースとして確保し、地上部に建築を配置してはならない。ただし下記の条件でピロティ空間(高さ3m以上)を設ける場合、及び地下を除く。
 - 高さ制限1の範囲の建築物については6.75mの範囲内
 - 高さ制限2の範囲の建築物については4.5mの範囲内
 - 高さ制限3の範囲の建築物については2.25mの範囲内



オープンスペース4においてピロティを設ける場合



※今後の課題として、『東京藝術大学キャンパスデザインガイドライン(上野キャンパス編)』をキャンパス全体にアップグレードすることが求められている

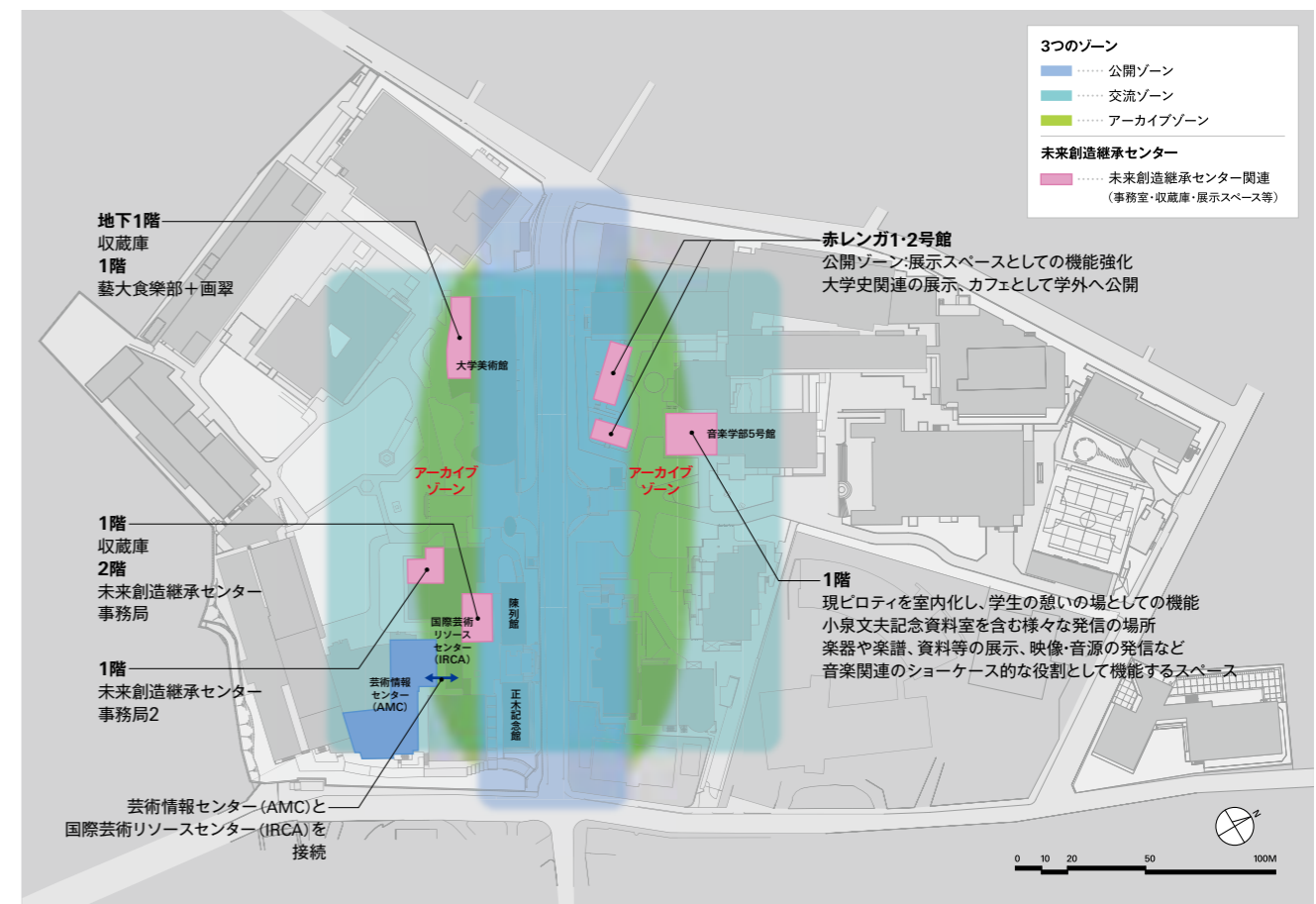
05-3-2 | アーカイブゾーンの設定

公開ゾーンと交流ゾーンの間に、新たにアーカイブゾーンを設ける。

作品や資料収集を行う大学美術館、国際芸術リソースセンター(IRCA)、芸術情報センター(AMC)に連なるエリアをアーカイブゾーンと位置づけ、将来的には未来創造継承センターもこのゾーンに配置する。これにより、資料収集や収蔵庫(保存)の共有と効率化が期待できる。

またアーカイブゾーンを設定することで、4つの機関の主な機能である「公開・収蔵・研究」と、キャンパスの3つの「公開・交流・教育研究」ゾーンの関係性が明確になる。同時に、公開ゾーンには既存の大学美術館、陳列館、正木記念館に加えて、大学史関連の展示スペースとして赤レンガ1・2号館を用いることや、交流ゾーンにある音楽学部5号館のエントランス横のピロティを室内化して学生の憩いの場とするとともに、音楽関連のショーケース(例えば楽器や資料等)にすることで、音楽学部の展示公開スペースとすることができる。

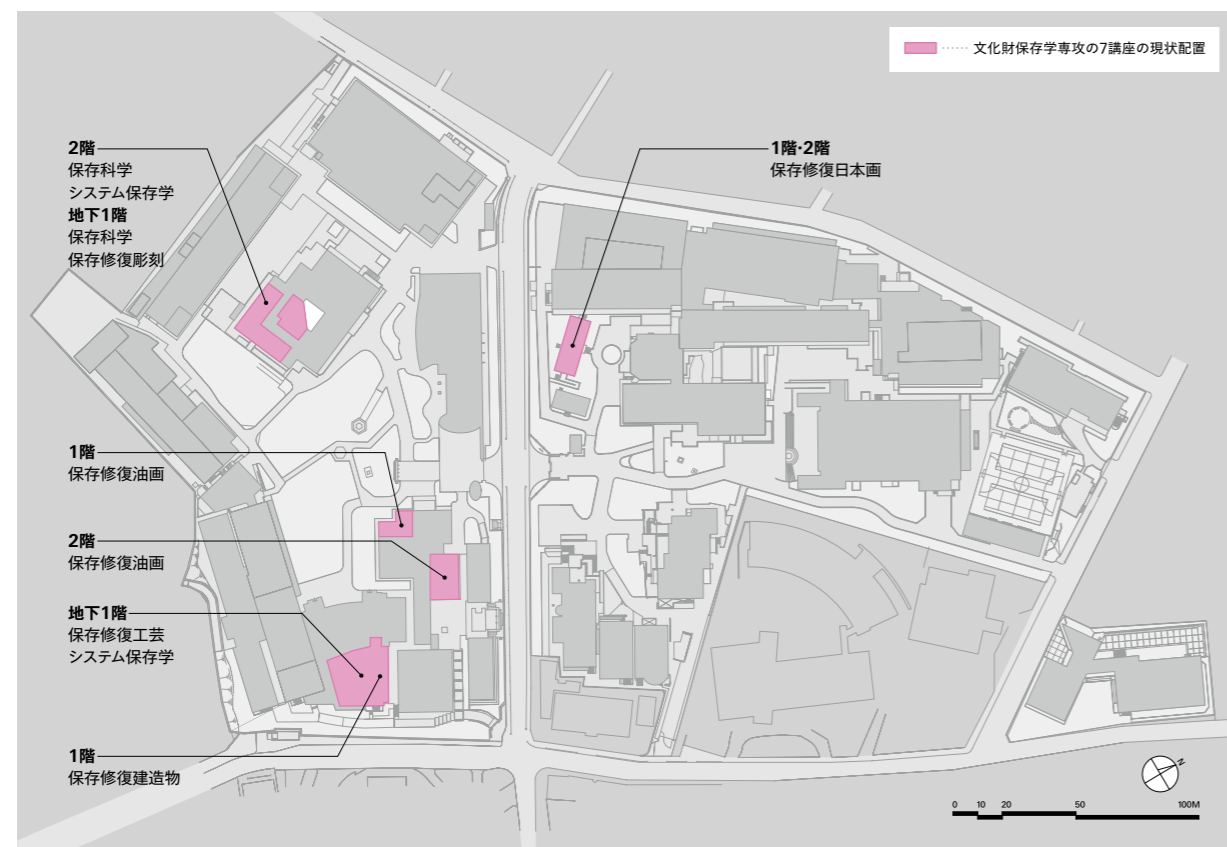
fig.31 | アーカイブゾーンの設定と未来創造継承センターの配置



未来創造継承センター

本学には、美術学部に近現代美術史・大学史研究センター(GACMA)¹、音楽学部に音楽学部大学史資料室²と小泉文夫記念資料室³がそれぞれ設置されていた。2024年、長年の祈願であったこれらの組織を統合し、新設の東京藝術大学部門を加えた新たな未来創造継承センターが再編された。それに伴い、分散していた各施設の配置を最適化するための見直しを行い、上野キャンパスの限られた施設内で可能な範囲で調整を行った結果、現状の配置となっている。そのため、将来的な組織の理想的なあり方を検討し、未来創造継承センターの将来計画が求められた。また、未来創造継承センターの現段階でのミッションは、東京藝術大学150年史をまとめることであり、芸術情報センター(AMC)⁴と連携しながら、大学美術館や附属図書館とともにアーカイブ、研究、公開

fig.32 | 文化財保存学専攻の配置(現状)



を推進することである。

ただし、大学院文化財保存学専攻の保存修復油画と保存修復日本画の移転先が課題となる。文化財保存学専攻の各講座は、上野キャンパスに設置されているが、教育研究活動の場がバラバラでまとまっていない。そのため専攻全体としての活動が見えにくくなっているが([fig.32]参照)、本キャンパスには、それを改善するためのスペース的な余裕がないため、抜本的な解決策が必要である。以上のように、大学院文化財保存学専攻の教育研究活動の場所を含めた、今後のあり方が課題となっている。

- 1 近現代美術史・大学史研究センター(GACMA) | 旧資料編纂室芸術資料館から移転。1887年(明治20)に設立した東京美術学校から東京藝術大学美術学部に関係した記録文書、教職員・卒業生および関係者から寄贈された大学史関連資料を保管。これらは本学の歴史にとって貴重であり、日本の近現代美術史を研究するための重要な基礎資料でもある。ここでは資料の維持管理と研究の活動拠点としての役割を担っている。
- 2 大学史資料室 | 音楽取調掛、東京音楽学校、東京藝術大学音楽学部で作成された公文書等の大学史史料や寄贈資料を保存・公開する施設である。大学史史料および日本近現代音楽史資料を中心に収集・保存、公開する、文化の発信拠点をめざしている。
- 3 小泉文夫記念資料室 | 1985年6月6日、東京藝術大学音楽学部に開設。所蔵資料の中心は、83年に急逝した故小泉文夫本学元教授が収集した音楽資料のコレクションである。
- 4 芸術情報センター(AMC) | コンピュータと表現に関する様々な講義を行うほか、美術・音楽・映像分野に特化した周辺機器を設置し、学生の創作を支援するとともに、情報メディアに関連した研究活動を行っている機関である。

今後の方向性

こうしたキャンパスの現状をふまえ、今後の方向性としては、例えば以下の2つが考えられる。

- ・ 大学院文化財保存学専攻の各講座が集合し、教育研究活動を行う場を検討する
この場合、上野のみならず、取手キャンパスも視野に含める
- ・ 大学院文化財保存学専攻の各講座を、既存の関連する科のスペースに配置する

05-3-3 | 展示空間・演奏空間を多方面から検討

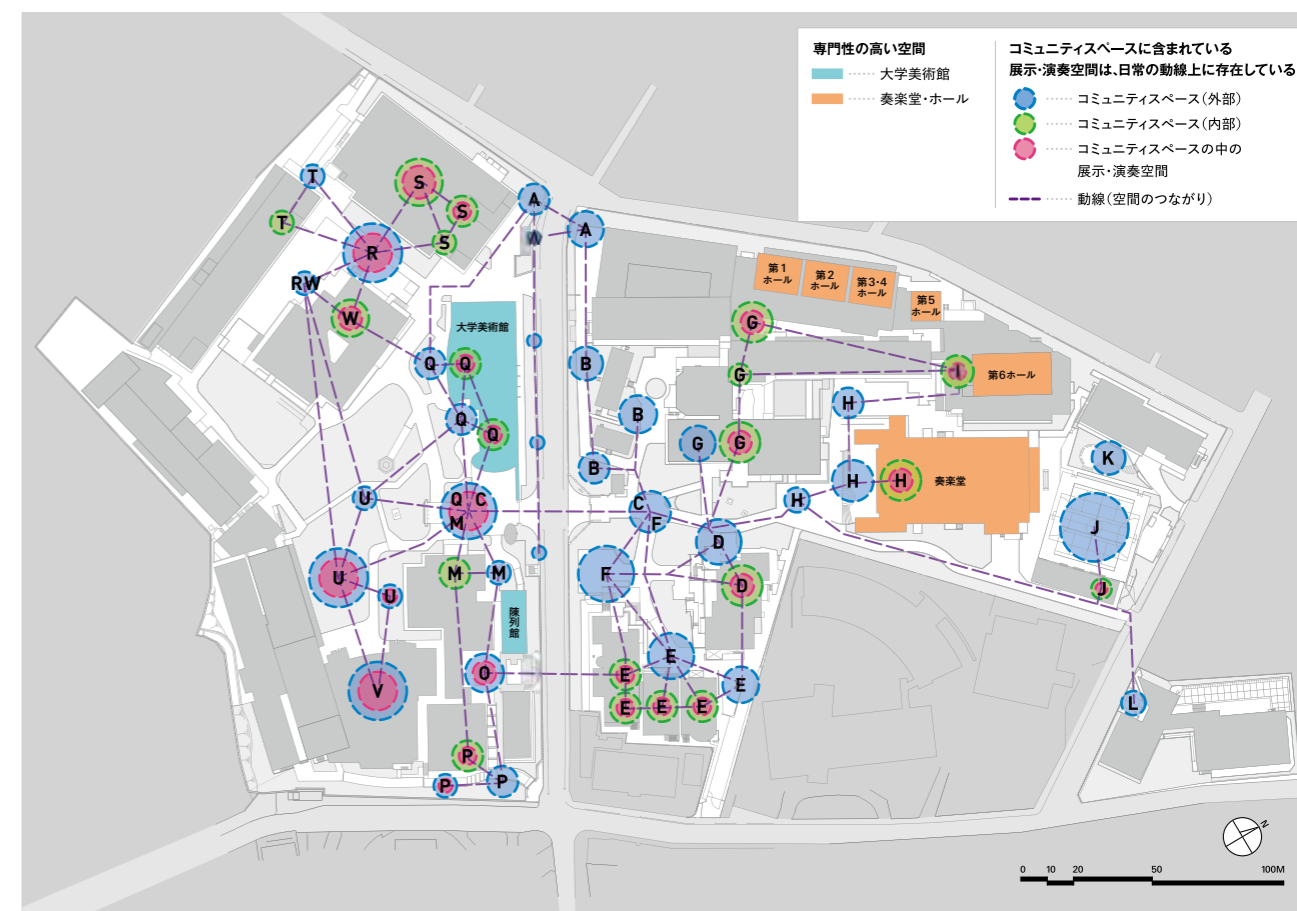
本キャンパスの屋内外には、日常の動線上に大小さまざまなパブリック空間が独立した単位でキャンパス全体にランダムに広がっている。[04-5 | コミュニティスペース]では、これら全てが憩いの場、各科の教育研究の発表の場、共創の場として機能し、あらゆるステークホルダーと結びつき、芸術未来研究場と連動して新たな芸術研究や表現領域を生み出す「場」となること、さらに自然や環境との調和を深めることで、本学特有の多様なコミュニティスペースを形成することを目指すとして述べている。

これらの空間には下図の通り、本学の特徴である展示空間と演奏空間も含まれており、憩いの場に寄り添った小さなスケールの展示空間と演奏空間から、大きいスケールでは専門性に特化した空間である大学美術館や奏楽堂まで展開されている。さらに他の3つのキャンパス(取手・千住・横浜)との連携や、各キャンパス周辺地域との取り組みも含めたキャンパス外部への広がりも増加している。

ここでは、これらを3つの要素に整理して、整備計画の方向性を示すことにする。

- ・ 憩いの場に寄り添った小さなスケールの展示空間と演奏空間
- ・ 専門性の高い展示空間と演奏空間
- ・ 拡張する展示空間と演奏空間

fig.33 | 専門性の高い展示・演奏空間とコミュニティスペースの関係



憩いの場に寄り添った小さなスケールの展示空間と演奏空間

ここでは前頁図[fig.33]のコミュニティスペースのうち、代表的な展示空間・演奏空間(D, E, F, G, H, I, O, P, Q, R, S, U, V, W)を取り上げる。なお、藝祭の時は、キャンパス全体のあらゆる空間が表現の場となり展示空間・演奏空間に変貌している。このように小さなスケールの展示空間と演奏空間は、新しい芸術表現の拡張や実験的な場として必要不可欠な空間となっている。

D：大学本部棟、芸術未来研究場本部周辺

E：Arts&Science LAB.、国際交流棟、大学会館周辺

F：音楽学部側正門横の空地

G：音楽学部5号館ピロティからエントランスホール、
音楽学部練習ホール館までのラウンジ的空間

H：奏楽堂ホワイエと前面広場

I：第6ホールホワイエ

O：旧東京美術学校本館玄関、藝大アートプラザ前広場周辺

P：国際芸術リソースセンター(IRCA)ラーニングcommonsと
その周辺の屋外スペース、旧美術学部側正門

Q：美術学部側正門と大学美術館エントランスホール、学食スペース周辺

R：セントラルパーク

S：絵画棟大石膏室とその周辺

U：総合工房棟前グラウンド

V：総合工房棟A棟屋外デッキステージ

W：中央棟ホール空間

これらの空間には、必要に応じて、以下の整備や環境が必要である。

展示装置：スポットライト、ピクチャーレール、展示壁、モニタ、コンセント 等

舞台装置：スピーカー、マイク、カメラ、簡易的な舞台になる家具などの什器、吸音パネルやカーテン、電源、高速無線LAN 等

専門性の高い展示空間と演奏空間

大学美術館と奏楽堂は、本学における最も専門性の高い施設であり、あらゆる分野のプレーヤーが共創の場で活動する中でも、特に芸術における教育研究活動の公開など、成果発表の場として極めて重要な役割を果たしてきている。そのため、大学美術館と奏楽堂の大規模改修は教育研究活動に大きく影響を及ぼすことになるため、十分な計画と備えが必要である(詳しくは[05-3-4|東京藝術大学大学美術館]と、[05-3-5|東京藝術大学奏楽堂]で触れている)。同時に大規模改修については、『インフラ長寿命化計画(2019年度版)』と連動して進めていく。また、関連する施設は以下の通りである。

展示空間：大学美術館本館/陳列館

演奏空間：奏楽堂/第1・2・3・4・5・6ホール

fig.34 | S:大石膏室(絵画棟1階)



fig.35 | V:総合工房棟A棟屋外デッキステージ



fig.36 | 陳列館



拡張する展示空間と演奏空間

展示空間と演奏空間は、上野キャンパスに留まらず、他の3つのキャンパスやその周辺地域との連携など、キャンパスから外部へと広がり、地域社会と接続し、新しい芸術表現や研究が実践されている。

上野地区 上野桜木地域連携棟/上野公園

取手地区 東京藝術大学大学美術館取手館/取手収蔵棟(魅せる収蔵庫)/たいけん美じゅつ場VIVA

千住地区 第7ホール/スタジオ/仲町の家

横浜地区 エントランスホール/スタジオ

その他の地区 有楽町藝大キャンパス/藝大アーツイン丸の内/藝大浦安キャンパス/芸術未来研究場せとうち

05-3-4 | 東京藝術大学大学美術館

[1] 大学美術館の歴史と概要

本学の芸術資料収集は、明治20年(1887年)の東京美術学校設置に先立つ時期から行われてきた。当時これらの芸術資料は文庫と呼ばれた図書館内に納められていた。当初から、これらの芸術資料は、教育と創作に不可欠な重要なものとして位置付けられており、その性格は今日まで維持継承されている。昭和24年(1949年)には東京美術学校と東京音楽学校が統合され、東京藝術大学が設置された。その後も収蔵品は附属図書館が管理し、教育研究に供していたが、昭和45年(1970年)に芸術資料部門が独立し、音楽学部保管されていた音楽学校時代の楽器資料等を加えて芸術資料館が発足し、美術・音楽両学部の共同利用機関となり、教育と創作に加えて研究・保存・公開のための拠点として位置付けられた。

東京藝術大学大学美術館取手館は、上野キャンパス内の芸術資料館の収蔵庫不足を解消することを最大の目的として、平成6年(1994年)に、芸術資料館分館として取手キャンパスに建設されたものである。老朽化した芸術資料館の改善やコレクションの規模に見合った十分な展示空間への要望が学内外から高まったことから、平成10年(1998年)には、公開施設としての機能を拡充するため、これまでの組織を改組して、芸術資料館を大学美術館と改称し、平成11年(1999年)に新しい美術館本館を開館した。以後、大学美術館は、東京美術学校以来収集されてきた芸術資料を基盤とした教育・研究・保存・公開活動、そして大学各科の教育成果を発表する展示活動の場として機能してきた。本学では、新たな芸術分野の動向を反映した研究科等が新設される中(大学院映像研究科(2005年)、大学院国際芸術創造研究科(GA,2016年)、大学院美術研究科グローバルアートプラクティス(GAP,2016年)、大学院映像研究科ゲーム・インタラクティブアート専攻(2026年))、大学美術館は、各種芸術活動の拠点として使用し続けられている。また令和2年(2020年)には、取手駅ビル「アトレ」附属アートスペース「たいけん美じゅつ場VIVA」内に、本学とJR等による産官学連携のアートスペースとして、市民に開かれたギャラリーとアーカイブを併設し、そこで本学収蔵品の定期的な展示をしている。一方、収蔵スペース不足の問題を解決するため、また収蔵のあり方そのものを社会に開いた魅せる収蔵庫として、令和6年(2024年)には取手収蔵棟が竣工し、同年から運営を開始している。

[2] 大学美術館の基本理念と活動

大学美術館が果たすべき役割、基本理念は以下のように規定される。

1: 芸術資料の継承拠点としての大学美術館(アーカイブの拠点としての大学美術館)

本学大学美術館の収蔵品には、国宝・重要文化財など指定文化財を含めた、日本及び東アジア美術史で高い評価を得ている作品・資料が多く、同時に、毎年の卒業制作品や自画像、退任教員より寄贈いただいた作品など現在

進行形の作品も収蔵し続けている。これは大学の枠組みを超え、国内外の美術全体からみても重要な財産である。こうした作品・資料の活用アーカイブと保存機能は、わが国を代表する芸術教育にとって必須条件であり、良好な環境で保存され、未来へ継承するための収蔵施設の保持が求められる。

2: 教育・研究共同利用施設としての大学美術館

東京美術学校創立以来、芸術資料館や大学美術館は、教材の活用場として、そして展示活動の場としての役割を果たしてきた。大学美術館が所蔵する多種多様な美術作品から直接学ぶこと、学生・教員による研究の素材として活用できる教育環境の意義は極めて大きい。同時に、学生・教員が創作した作品を展示し、大学内外から評価・批評を受けることで、彼らの教育研究はより充実する。近年には新たな芸術分野に注目が集まる中、大学美術館にも新たな芸術表現の探求の場としての役割が求められる。

3: 社会への発信拠点としての大学美術館

教育・研究の成果を、展覧会などで広く公開することは、その成果を再確認すると同時に、芸術の社会還元としても大きな意味を持つ。本学が立地する上野公園は世界的にみても、博物館や美術館といった文化施設が集積しており、その中で年間を通じて、大学美術館が展示公開していることの意味は大きい。今後は、様々な芸術領域の展示に、十分対応できる展示空間と設備及び人材の充実が求められる。

[3] 25年間の変化

本館オープンから25年の間に芸術を巡る様々な変化が顕在化している。そのうち、大学美術館のあり方と関係する部分での大きな変化は以下の3つである。

- ・近年の芸術領域の多様化・国際化により、作品が多様化・大型化したことで、開館当初予定されていた収蔵能力を超えるペースで収蔵品が増加してきたこと
- ・近年の芸術領域の拡張・変質と、それに伴う新たな人材育成の対応、教育研究の成果を社会に還元するための充実した展示空間が求められていること
- ・2022年4月の博物館法改正に伴う博物館・美術館の現場で働く学芸員養成の充実・高度化

[4] 大学美術館の課題と整備の方向性

大学美術館の課題と今後の整備への方向性は以下の通りとなる。

- ・収蔵品を活用した芸術教育の充実
 - 学内の各教育研究組織との更なる連携による収蔵品の展示のみならず、調査研究・閲覧・模写・修復を通じた芸術教育
 - 学芸員課程教育の高度化へ対応した環境整備
- ・新しい芸術領域や地域貢献に対応した展示・収蔵機能の拡充
 - 本館・陳列館・取手館・国際芸術リソースセンター(IRCA)の役割分担の明確化
 - 従来のホワイトキューブに加え、メディア・インスタレーション、映像、パフォーマンスなど、新しい表現に対応する展示空間の創出
- ・2025年の組織改革で設置された学芸第四研究室が中心となり、「社会との共創の場」としての新たな役割を担うとともに、学外の美術館・博物館・企業等との協働を推進する
- ・2029年に築30年を迎える大学美術館は、大規模改修の時期にある。改修の具体化に向けて、プロジェクトチームを立ち上げ、大学美術館の整備計画を行う

fig.37 | 大学美術館エントランスホール



05-3-5 | 東京藝術大学奏楽堂

[1] 奏楽堂の歴史と概要

明治23年(1890年)に創設されて以来、音楽教育の練習、発表の場として永く使用されてきた旧東京音楽学校奏楽堂は、建物の老朽化が進み、また音楽の演奏形態の拡大等に対応できなくなってきたため昭和59年(1984年)に解体され、その後、上野公園内に移築再建された。

現状の東京藝術大学奏楽堂は、コンサートホールとして新しく建設されたものである。ホール全体が一つの優れた楽器として、調和のとれた響きを生むものとして考え、音響特性を使用目的に応じて変えられるよう、客席の天井全体を可動式にして音響空間を変化させる方法を採用している。また、古典から現代作品まで演奏できるフランスのガルニエ製オルガンを設置している。

[2] 東京藝術大学奏楽堂の基本コンセプト

- 1: 音楽教育・研究の場としての機能と音響効果・設備を重視し、特に音響特性において卓越したものとすること
- 2: 音楽教育の研究の現状および将来における発展を考慮したものとすること
- 3: 我が国の芸術文化の発展に寄与するため、日本音楽界のシンボルとなり、後世まで誇り得るものとすること
- 4: ただし、教育・研究の場に徹し、いたずらに華美になることを避け、上野校地の要となり、周囲の環境と調和した格調ある施設を目指すこと
- 5: ホールは、パイプオルガンを備えたコンサートホールを主体とし、管弦楽、弦楽合奏、管打合奏、オペラ、合唱、邦楽、室内楽、器楽、声楽ソロ、パイプオルガン演奏、試験等の用途に対応でき、それぞれの使用目的に合った最適な音響特性(残響時間・初期反射音)を持つものとすること

[3] 使用状況

- ・音響特性を使用目的に応じて変えられる可変式のホールのため、稼働率は非常に高く、練習や公開発表まで広く多様に活用されている
- ・第6ホールの大規模改修の実施(2014年)

[4] 奏楽堂の課題と整備の方向性

2027年に築30年を迎える奏楽堂では、大規模改修を計画するとともに、民間ノウハウを活かした外部利用の可能性を探るため、コンセッション手法の導入を検討している。文部科学省「令和7年度 国立大学法人等における共創拠点の実現を目指したPFI・コンセッション推進事業」を活用し、外部利用の方向性を整理している。今後の教育研究活動を見据えて、施設整備の方向性は以下の通りである。

- ・ホワイエ
 - 軽食やドリンクが提供できるカウンターとサービス
 - 前広場とホワイエの一体的な活用
- ・ホール空間
 - 安全面の配慮と老朽化した設備の更新: 舞台、袖、床、側反、天井、座席、扉、照明、舞台設備機器、空調
 - 可動式天井: 必要とされる可動部機構の見直し
 - その他備品の見直し

fig.38 | 奏楽堂ホワイエ



- ・バックヤード
控室の防音室化：日常の練習室として活用できる部屋とする
- ・アプローチ
外部動線の明度向上：音楽学部側正門から奏楽堂までのアプローチは夜間に足元が暗く、一般来場者を含めた安全確保のため照明による明度向上を図る
- ・前広場
前広場の有効活用：日常における学生の溜まり場、コンサート開催時の快適な待合いスペースとしての環境づくり(日よけ、雨除けのための庇)、キッチンカーの利用も含めた広場の計画
- ・大規模改修期間中の教育研究活動の展開方針
学外に代替施設を借りる。既存の第1～6ホールで活動する
千住キャンパス第7ホールも含めた教育研究活動を展開
- ・大規模改修の予算の確保
藝大基金：奏楽堂大規模改修プロジェクトによる呼びかけ
座席ネームプレートの掲示、特設板による寄付者名の刻印、ネーミングライツの実施

大学美術館、奏楽堂の大規模修繕への備え

大学美術館、奏楽堂の大規模修繕への備えについては、[08 | 大規模修繕と改築時期]でインフラ長寿命化計画ともに方向性を明示する。

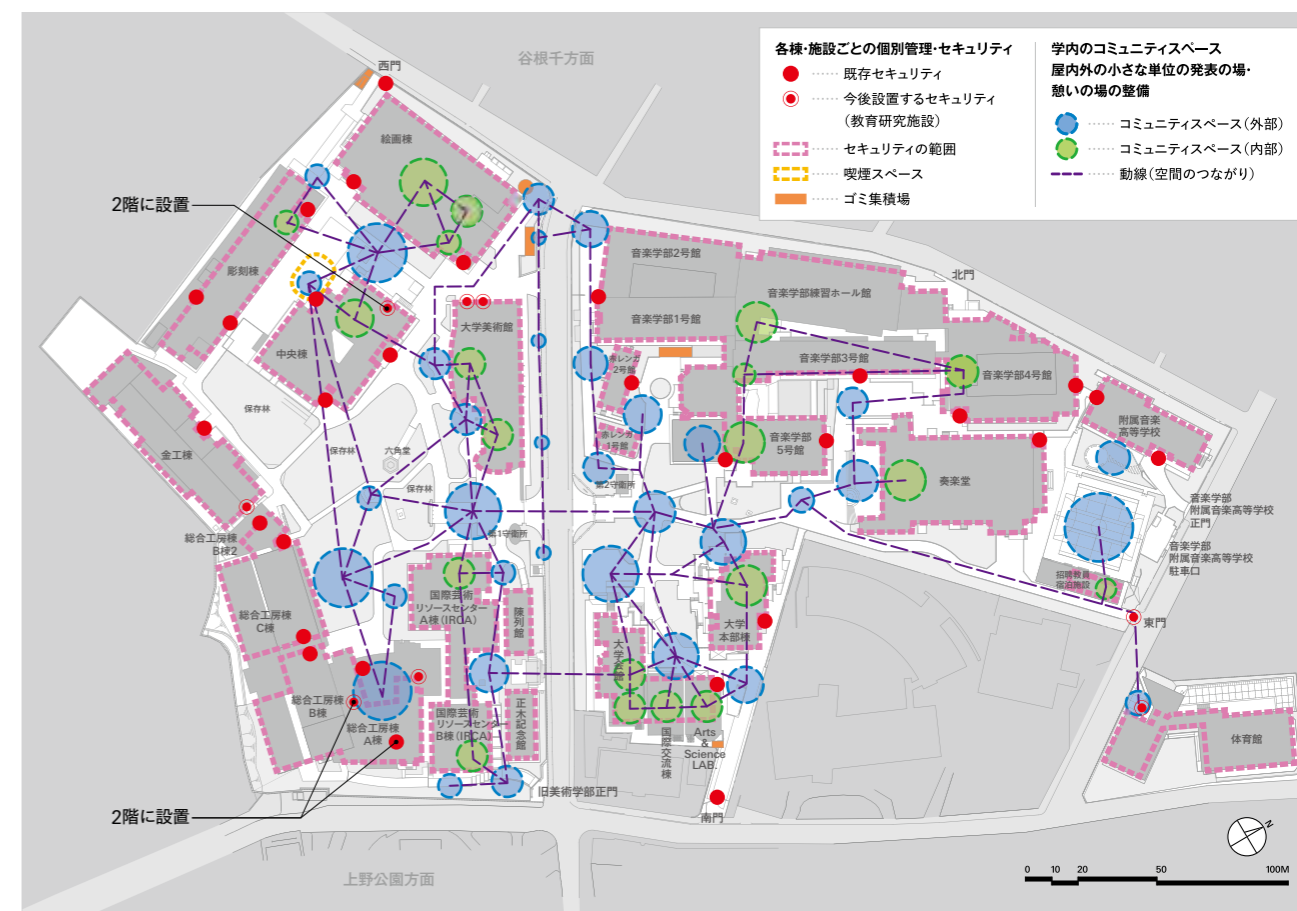
→ p.137

多様な教育研究活動と快適な環境に向けて

ここでは、教育研究ゾーンを中心に集中して活動できる環境の整備計画とともに、学内のコミュニティスペースとしてのそれぞれの場の特徴と可能性について検討する。また新型コロナウイルス感染症を経験したことで顕在化した課題に対処するため、空調の改善やオンライン授業のあり方、さらにはバリアフリー、LGBTQ+に関連する環境整備までを対象としている。一方、今後のゴミ集積場の位置については、リサイクル・リユースの視点も考慮しつつ課題となっている。

- ・各棟・施設ごとの個別管理とセキュリティ
- ・学内のコミュニティスペース
屋内外の小さな単位の発表の場・憩いの場の整備
- ・執務スペースの充実
- ・オンライン授業、テレワーク導入に対応したネット環境の向上
- ・充実した学食の提供
- ・広義の視点からのバリアフリー
建物や施設のバリアフリー化
LGBTQ+環境整備の推進
プライバシーに配慮した保健管理センターの環境づくり
- ・空調・換気の見える化の実施
- ・その他

fig.39 | 多様な教育研究活動と快適な環境を築く施設整備



各棟・施設ごとの個別管理とセキュリティ

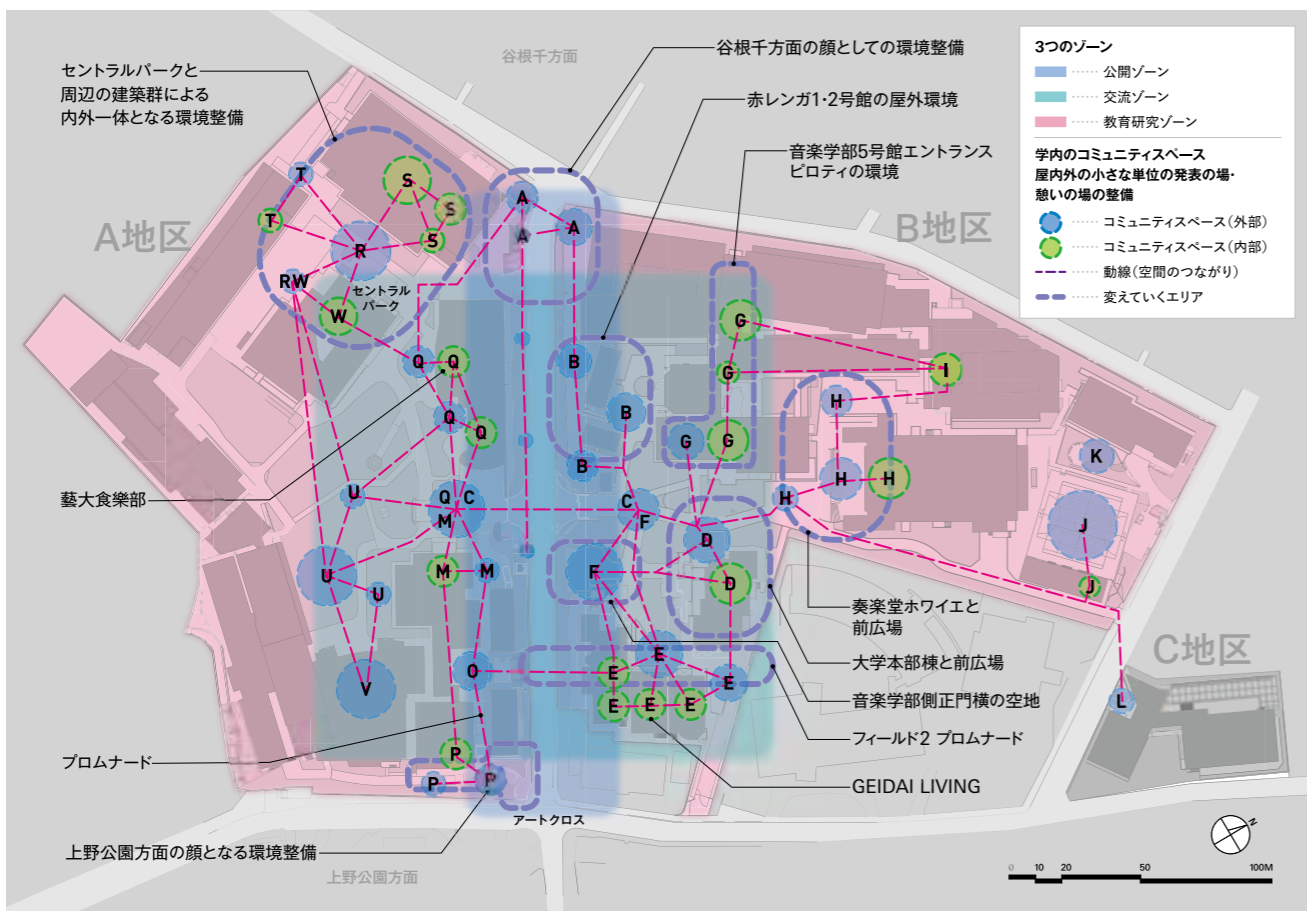
「開かれた大学」として、学外者も含めたあらゆるプレーヤーがキャンパス内に入出入りするためには、特に教育研究ゾーンでは安全で安心なセキュリティの整備が求められる。今までA地区ではカードキーによる各棟の個別セキュリティが導入され、B地区は5号館エントランスのセキュリティチェックを行っている。今後は[05-2-6 | 柔軟に対応できる公開場の設定]とともに学内の活動を促し、人々が安全で安心感を持って共創できる場が引き続き求められるため、各棟・施設ごと、さらに必要に応じて各部屋ごとの個別管理を推進していく。

学内のコミュニティスペース

屋内外の小さな単位の発表の場・憩いの場の整備

ここでは、[04-5 | コミュニティスペース]で、「日常の動線上には、大小さまざまな空間が内外問わずブドウの房のような単位」として記述された、それぞれの場の特性を検討する。3つのゾーンと各施設の配置に基づき、キャンパス全体がラーニングコモンズとして機能し、憩いの場であると同時に、活動が可視化された空間が連続し、芸術未来研究場と連動する場へと環境整備を進める。これらに整備の順番はなく、原則、必要に応じて環境整備を行うが、優先すべき交流空間は、[02-4-2 | 変えていくもの]と重複する下図青破線の9箇所である。

fig.40 | 屋内外の小さな単位の発表の場、憩いの場



1: A地区側 憩いの場 (R・S・T・W)

中央棟と絵画棟の間の屋外空間(R)を中心に、中央棟ホール(W)、絵画棟大石膏室/入口ホール(S)、彫刻棟ピロティ/玄関ギャラリー(T)までを範囲とする。大学美術館の食堂「藝大食楽部」(Q)や大学美術館搬出入口(A)まで連続する場であり、公開ゾーンから視線が通り、交流ゾーンと教育研究ゾーンに属する学生、教職員の憩いの場である。

fig.41 | A地区 憩いの場/セントラルパーク



2: 奏楽堂 前面広場 (H)

奏楽堂ホワイエ、前広場、第6ホールへのアプローチ(H)までを範囲とする。正門から奏楽堂・第6ホール(I)へのアプローチの空間であり、内部のホワイエとの一体的な活用のための整備。学生、教職員の憩いの場としての拡充、演奏会が行われる際の学外者のたまり場となる。教育研究ゾーンに属しているため発表会、講演会等の開催時では、学外者が行き来し、特に開催後に生じる学外者の滞留が課題として挙げられている。このように教育研究ゾーンにおける公開の場であるため、適切な管理が必要である。

fig.42 | 奏楽堂ホワイエ



3: B地区側 憩いの場 (G)

音楽学部5号館のピロティと、エントランスホールから練習ホール館まで連続するアプローチ空間(G)であり、音楽学部5号館のピロティは駐輪スペースとして使用されている。また音楽学部5号館から練習ホール棟まで連続するアプローチ空間は、音楽学部のメインエントランス空間であり、様々な人が必ず行き来する極めて重要な動線である。インフォメーション、ラウンジ、休憩、情報発信の場として機能し、音楽学部の「顔」としての場であるため、最適化することが求められている。

fig.43 | B地区 憩いの場



4: 赤レンガの環境整備 (B)

[05-2-5 | 赤レンガ1・2号館周辺の環境整備]では、赤レンガ周辺の屋外環境整備について提示している。現在1号館は福利厚生と同窓会事務局として用いられ、2号館は大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復日本画が展開している。この2つの建築は東京都景観条例に基づく、都が選定した東京都選定歴史的建造物であり、公開ゾーンの藝大さくら通りに面し、「多軸的につなぐ」に関わる場所にある。近年、道路境界の鉄柵を撤去し緩やかな境界をつくる植物に置き換えられた。今後は道に面した立地を更に活かした、交流空間として様々な人が利用できる憩いの場として屋外環境整備が期待されている。

5: B地区側 正門横の空地 (F)

ここでは前項の[05-3 | 社会との共創]で述べている、音楽学部側正門横の空地の可能性について下記に列挙する。B地区の新規建設可能な残りの建築基準法上の建築面積は、約550㎡であり、貴重な予備地である。この僅かな建築面積は、B地区側の敷地全体の整備方針に関連しており、音楽学部の教育研究施設(音楽学部1号館を含む全施設)の建て替え計画に影響を与えることになる。以上によりキャンパスの計画上、貴重な予備地として温存する。

fig.44 | 音楽学部正門横の空地



以上を念頭に、想定している機能は以下となる。

- ・ 既存校舎の建て替え時の予備地として利用

- ・日常的な屋外の広場として、あらゆる人々の憩いの場
- ・屋外の展示スペース、演奏スペースとして活用
- ・大学会館の前広場として活用
- ・芸術未来研究場の前広場として展開

6: 大学会館、国際交流棟、Arts&Science LAB.、大学本部棟の軸線(E)

前項の[05-3-1 | フィールド2: Crossing 構想 Stage 2の計画]と重なる。本項上記の音楽学部側正門横の空地(F)とも連動して整備を行う。学内外者が利用可能な交流空間・憩いの場とし、その可能性について下記に列挙する。

- ・教育研究活動と切り離された独立したエリアとして展開
 - 南門に柔軟なセキュリティを導入して、展示・イベント・研究活動の独立した運営が可能な場とする
- ・芸術未来研究場と連動しあらゆるプレーヤーが自由に行き来する「国際・社会・研究」の共創の場
- ・Arts&Science LAB.は、期間限定付きで、最先端研究を支援するスタートアップ的施設
 - 2026年4月より大学院映像研究科ゲーム・インタラクティブアート専攻が活用開始
- ・国際交流棟は、留学生とともに学び、共に交流できる国際交流の拠点として、国際化を推進する施設
- ・フィールド1の旧東京美術学校本館玄関から連続するプロムナードの形成
 - 国立国会図書館国際子ども図書館とつながり、さらには周辺の東京国立博物館、東京都美術館、黒田記念館と連携するためのより良い環境づくり

fig.45 | 「変化し続けるパブリックアート」と国際交流棟の前広場



fig.46 | Arts&Science LAB. 球形ホール



以下のAとPについては、前項の[05-2-2 | 上野公園方面と谷根千方面の導入口(大学の顔)のあり方]の計画と重なる。

7: 藝大さくら通りの谷根千方面(A)

道路両端の門柱の構えが本学の顔となり、同時に上野公園の導入口となる重要な場所である。両端の門柱を再生してシンボルとし、周辺には植物やベンチ、学内の情報発信板等を備えた、地域に開かれた屋外空間を配置して、地域住民にも親しまれる場となった。今後はA地区側は保存林までの視線の抜けを取り入れた景観整備を行うと同時に、セントラルパークから音楽学部2号館への視線の抜け(軸線)にも配慮し、公開・交流・教育研究の3つのゾーンの奥行きを感じられる場として形成していく。更にフィールド1から連続するプロムナードの出入口や、一般自動車の出入口も想定範囲とし、通り抜けが可能で広く利用されるコミュニティスペースを目指す。

fig.47 | 谷根千方面門柱まわり



8: 藝大さくら通りの上野公園方面(P)

本キャンパスは上野公園方面の交差点に位置し、東京国立博物館、東京都美術館、国立国会図書館国際子ども図書館、博物館動物園駅跡、旧東京音楽学校奏楽堂に隣接している。そして2018年、国際芸術リソースセンター(IRCA)が完成し、旧美術学部側正門や正木記念館の建築群はプロムナードの導入口として機能している。また上野公園内の旧奏楽堂に面する公衆トイレは2021年に撤去されて開放的な景観となり、上野公園から本キャン

パスの姿が樹木の間から見えるようになった。

さらに2024年には、旧奏楽堂の前広場の舗装等が新たに整備された。本学も連動して、国際芸術リソースセンター(IRCA)や正木記念館の壁面や旧東京美術学校本館玄関の軒天等を照らすライトアップの整備や、学内の情報発信板等のサインを適正に配置することが求められている。ふらっと立ち寄りやすい歩行空間として、ベンチや椅子を置くなどの工夫を行う。

fig.48 | 旧美術学部側正門



9: 大学本部棟 芸術未来研究場の周辺(D)

ここでは前項の[05-3-1 | フィールド2: Crossing 構想 Stage 2の計画]との関係を調整しつつ計画する。

大学本部棟の1階に位置する芸術未来研究場では、本学における「共創の場」としての取り組みや成果の発信、プレゼンテーション等を行う、いわば藝大のショーケースと言える空間が整備されている。そこでは、実験・展示・演奏といった活動が、日常的なキャンパスの風景として展開されている。これらの活動は外部空間へと連続し、キャンパス内の自然環境と調和しながら、芸術未来研究場ならではの憩いの場へと発展している。

fig.49 | 芸術未来研究場の拠点(大学本部棟1階)



執務スペースの充実

快適で生産性の高い執務スペースが求められている。オンライン授業やテレワークも含めて、以下の要点に留意して充実させることが考えられる。

- ・部署によっては固定決められた場所、机ではなく、フリーアドレスで作業できる自由で新鮮な環境を創出し、ペーパーレス化を計る。同時に個人ロッカーの設置にも配慮する
- ・デスクと椅子: 適切な高さで座り心地の良い椅子と、作業に適したサイズのデスクとする
- ・照明: 自然光を利用することができる明るい優しい環境をつくる
- ・静かで自然を感じる場: 上野の自然豊かな環境を感じられ、集中できる空間を提供する
- ・快適でリフレッシュできる、休憩スペースや憩いの場をつくる
- ・事務倉庫や収納スペースの最適化: 不要な資料や備品の整理を行い、さらにデジタル化を推進することで、適正な倉庫スペースを確保する
- ・行政書類について、管理ルールや保管場所などが検討課題として挙げられている

オンライン授業、テレワーク導入に対応したネット環境の向上

オンライン授業やテレワークを円滑に行うためには、高速で安定したインターネット接続が必要である。光ファイバーなどの高速回線の利用や、Wi-Fiの設置などを検討し、信頼性の高いネット環境を整えることが重要である。また、データ通信量や通信制限にも留意することが望ましい。さらに、クラウド環境の充実が挙げられる。これらの要点を考慮し執務スペースを充実させることで、快適なオンライン授業やテレワーク環境を実現する。

充実した学食の提供

食に関する学生サービスは、GEIDAI LIVINGと藝大食楽部、キッチンカーである(ホテルオークラも大学美術館に併せて営業)。新型コロナウイルス感染症の流行を経て、これらの利用率はコロナ禍前の半分程度に留まっている。

食の多様化や弁当などの持ち込みが進んだ影響も考えられるが、食堂の立地や規模、メニューの内容・質・ボリューム、価格設定などを含めた全体的な見直しが必要であり、学生サービスの向上という観点からも今後の課題となっている。

fig.50 | 藝大食楽部



広義の視点からのバリアフリー

建物や施設のバリアフリー化

車椅子での移動や身体的な制約のある人々が円滑に移動できるよう、建物や施設にはバリアフリー整備を引き続き取り入れる。車椅子用のスロープやエレベーターの設置、手すりの設置など、アクセシビリティを向上させる取り組み全般を必要な個所に設置していく。特に主要動線や福利施設など多様な人が利用する公共性の高い場所は重点的に整備する。

LGBTQ+環境整備の推進

誰もが利用できる多目的トイレやシャワールームを、必要に応じて引き続き適正な場所に設置する。全ての人が安心して利用できる環境を提供する。

プライバシーに配慮した保健管理センターの環境づくり

新型コロナウイルス感染症の流行を通じて、診療所の施設構成に改善の余地が明らかとなった。具体的には、発熱患者と他の患者を分ける空間や仕組みが不足しており、待合室も現状では数人が収容できるのみで、個別の待合室や各専用の出入口が整備されていない。また、プライバシーを確保できる診察室のバリエーションが不足していることも課題となり、立地や規模に関して今後の検討が必要である。

空調・換気の見える化の実施

感染症対策の一環として、換気は重要な要素である。換気によって室内の空気を新鮮な外気と入れ替えることで、ウイルスや病原体の拡散を抑えることができる。そこで、換気の日安となるのが「CO2濃度、温度、湿度」の数値である。

これらの数値を把握すること＝「換気の見える化」となる。換気の見える化をするCO2モニター等を導入することで、得られる効果は以下の通りである。

- ・感染症対策と快適な環境の両立が可能となる
- ・適正な窓の開放時間を知り、換気を行うことができる。同時に適正な窓の開放時間で、必要な冷暖房の調整を行いつつ、感染症対策とエネルギーの節約を両立する

その他

- ・ゴミ集積場の位置については、リサイクルやリユースの視点もふまえ、最適な配置計画が求められている
- ・喫煙スペースについては、現在1か所に仮設置[fig.39]^{→p.121}されているものの、適正な設置場所および管理・運営方法の検討が必要となっている

06

エネルギー 管理と CO2削減に 向けた 計画

06-1 | 取り組みの現況

06-2 | 今後の方向性

取り組みの現況

2023年上野キャンパスエネルギー管理状況およびCO2排出削減への取り組み状況について

環境負荷低減に配慮したエネルギー計画・管理を目指した施設整備や、その使用者による省エネルギーの取り組みのための管理体制が確立され、現時点でエネルギーの使用量は全体的には減少しているが、近年で見ると横ばいとなっている。今後もさらなるエネルギー使用量削減に向けて計画を推進し省エネルギー化を図る。

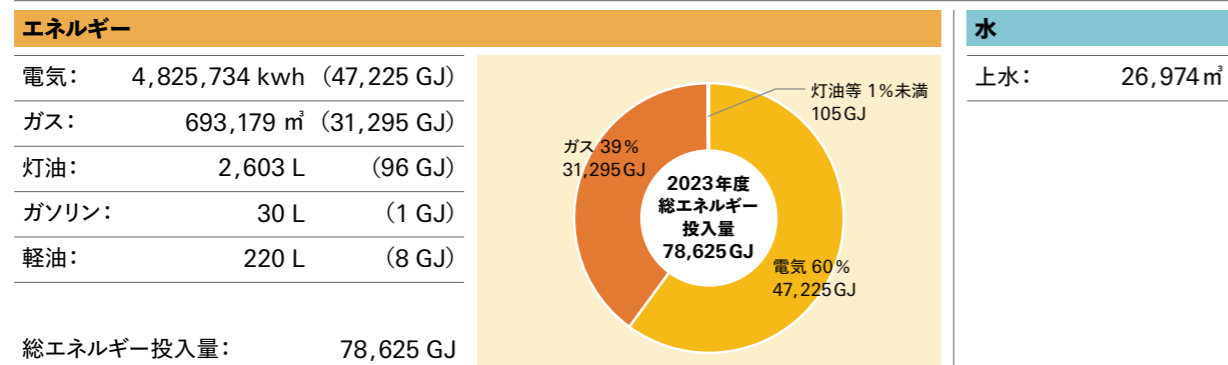
- ・現時点のCO2排出量の把握および省エネ法に基づく、大学全体としての削減目標を設定している
※目標値：基準排出量(6,662(CO₂-t))基準年2013年)×▲50% = 3,320(CO₂-t)(目標年2030年)
- ・照明や空調の不要な運転もなく、昼休み等の消灯も実施している
- ・LEDの一部導入も開始している

大学施設は、電気、ガス、水などのエネルギーや資源を消費しながら教育研究活動を行っており、廃棄物や二酸化炭素の排出など、様々な形で環境へ負荷を与えている。

そこで本学では、過去5年の推移を確認し、増減の原因等を分析している(主にエネルギーの使用の合理化等に関する法律に基づき報告した数値を採用している)。以下は、上野キャンパスを対象としたデータである。

[1] 令和5(2023)年度のエネルギー・資源の消費と排出

■ エネルギー・資源の消費



■ エネルギー・資源の排出

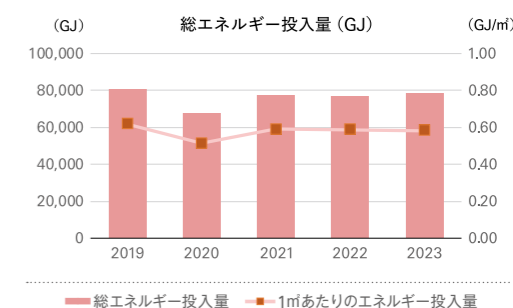
温室効果ガス CO ₂		排水	
温室効果ガス:	3,728 t-CO ₂	下水:	24,294 m ³

※上水と下水の数値の差は、空調機の冷却塔において蒸発し、下水道へ排出されない水量によるものである

[2] エネルギー・資源の消費と排出の推移

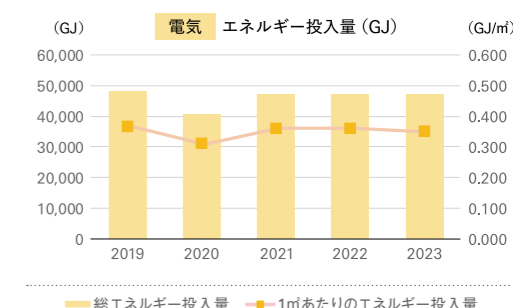
総エネルギー投入量

総エネルギー投入量は、78,625 GJで、前年度比+2.3%の微増となっている。2019年度比では△3%で、全体としてはほぼ横ばいと言える。



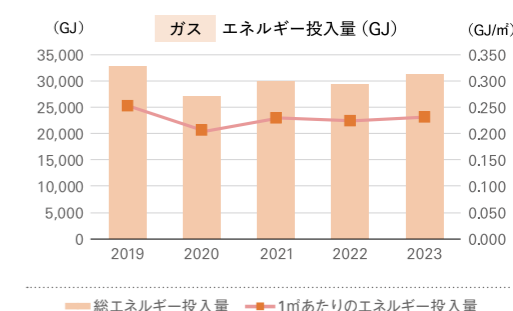
電気使用量

電気使用量は、4,825,734kwhで前年度比△0.1%、2019年度比では△1.8%の微減で、全体としてはほぼ横ばいと言える。



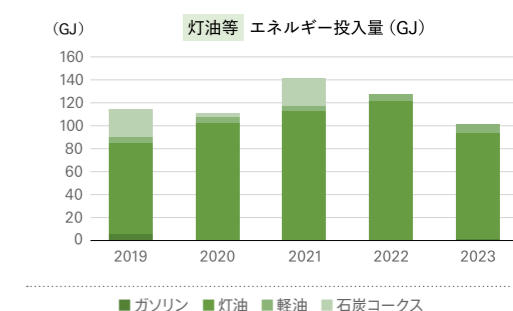
ガス使用量

ガス使用量は、693,179 m³で前年度比+6.3%増、2019年度比では△5.0%の減となっている。これは夏の猛暑によるエアコン使用量が影響している。



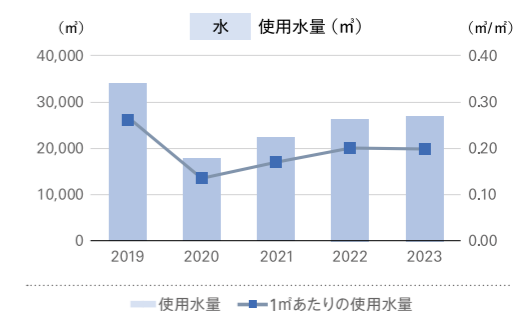
灯油等使用量

作業車両や重機、暖房器具等で使用されるガソリン、灯油、軽油、石炭コークスの使用料は、2018年以降増加傾向にあったが、2021年以降は減少傾向となっている。



水資源使用量

水資源使用量は、全体としては減少傾向にあるが、2023年度は、26,974 m³で前年度比+2.5%の増である。2010年代よりは減少しているものの、近年増加傾向となっている。

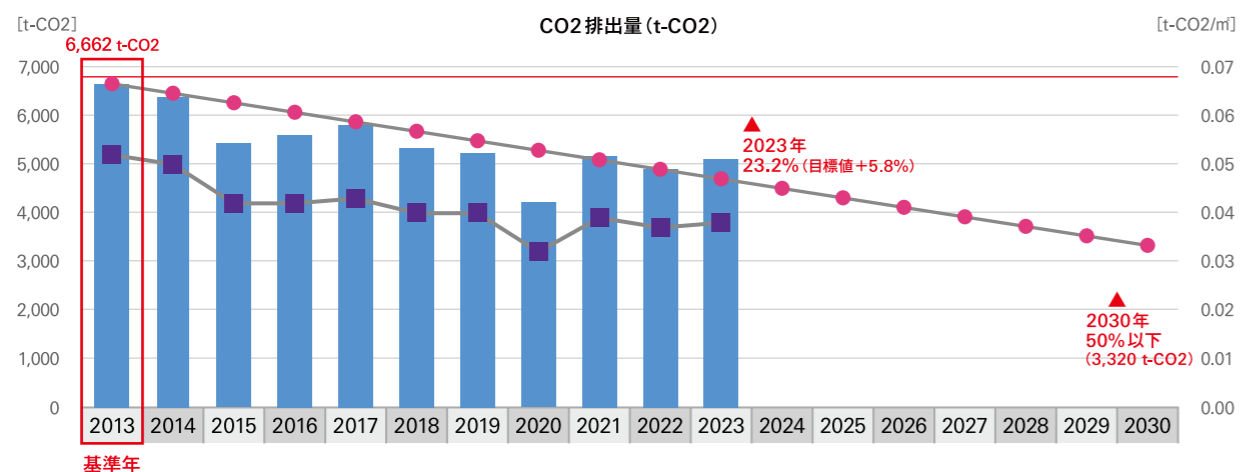


※令和2(2020)年度は、新型コロナウイルス感染予防措置として入構禁止や遠隔授業を実施していたため、各エネルギーの使用量が少なくなっている

温室効果ガス(CO2)排出量(全キャンパスを対象としたデータ)

昨今、CO2排出量の削減が世界規模での課題となっているが、本学でもCO2排出量の抑制に努めている。2023年度のCO2排出量は、2030年目標である2013年度比50%削減のカーボンハーフ達成に向けた当年度目標値より+5.8%多い5,115t-CO2に達した。夏季の気温上昇に伴い空調設備を昨年度より稼働させたことが要因と推察される。引き続き省エネに向けた取り組みが必要である。

■ 総CO2排出量 ■ CO2排出目標 ■ 1㎡あたりのCO2排出量



今後の方向性

主な課題と対策

- 実施可能な運用改善、老朽化した設備の更新、稼働率が高く投資回収年が短い設備の更新を行う
- 空調機：効率を見定めながら、最新の室外機に更新
- 新規施設が稼働すると、必然的に総エネルギー投入量が増加し、温室効果ガス(CO2)排出量も増加するため、以下の対策を念頭に、施設整備を計画することが必要となる

CO2排出量削減目標(2030年)を見据えた施設整備、キャンパス計画とする(安易に面積増をしない)
更なる設備の効率化・省エネルギー化を進めつつ、カーボンオフセット、非化石証書*の購入も視野に入れて検討する

今後取り組むべき事項

今後、取り組むべき検討事項は以下の通りである。

- LED化や断熱性能の向上への更なる促進
- 井水導入や太陽光発電設備等(一部実施)による、省エネルギー化・再生可能エネルギーへの積極的取り組み
- 光熱水費等維持管理費の縮減効果を検討し、大規模修繕整備時の計画への活用
- 施設の木質化(国際交流棟で一部実施)によるCO2ストック建築の推進
- 対症的な「事後保全型」から、劣化が進む前に補修する「予防保全型」への転換を図り、建物の長寿命化によるコスト削減への展開

※非化石証書とは、太陽光発電や風力発電などの再生可能エネルギーや原子力発電といった非化石電源で発電された電力が持つ「二酸化炭素(CO2)を排出しない」という環境価値の部分を分離して、取引ができるように証書化したものこと



07

防災と 安全対策

07 | 防災と安全対策

- 00
- 01
- 02
- 03
- 04
- 05
- 06
- 07**
- 08
- 09
- 10

防災と安全対策

上野公園と一体的な開かれたキャンパスとなったことにより、日常の安全（防犯・セキュリティ等）の見直しとともに、災害などの非常時の整備は台東区や上野公園の各施設と連携しながら検討を進め、人々が安全で安心感を持って共創できる場を形成する必要がある。なお、[05-2-4 | 胸像、碑、門柱、銘板、サインの適正な配置]のサインや[05-4 | 多様な教育研究活動と快適な環境に向けて]のセキュリティと併せて整備を推進していく。

日常の延長としての安全安心への備え

- 各棟、工房、ホールの個別管理、セキュリティの強化
 - カードキー等を用いた建物の個別管理。必要に応じて各部屋ごとの個別管理を徹底し日常的に防犯を行う防犯カメラを適切な位置に整備
- 専門性の高い設備機器の安全管理、メンテナンス
 - 怪我や事故の予防対策の徹底
 - 各工房の作業空間での安全確保の徹底
- 樹木の管理、外灯の更新時の見直し
 - 死角をなくす、犯罪への予防対策
- 守衛所の配置見直し
 - 現状に合った管理方法の見直し、日常の案内所としての機能から防犯対策までをカバーする各門の役割と、適正なセキュリティの導入
 - 正門2か所：守衛所の人による管理
 - 旧美術学部側正門、旧東京美術学校本館玄関：日時による開閉
- その他
 - カードキーによる関係者のみの出入口、関係業者または資材搬出入専用出入口の整備
- サイン計画
 - わかりやすいサインとし、誰でも利用しやすい環境をつくる
 - 国際化、ダイバーシティに対応し、外国語併記とする

非常時の備え：台東区や上野公園の各施設の防災整備と連携しながら検討する

- 避難経路の把握
 - 災害時に迅速かつ安全に避難するため、全員が経路を理解しておく必要がある。日常的な掲示や訓練を通じて、避難行動が円滑に行えるよう徹底することが重要である
- 災害時の一時避難所
 - 体育館：体育館は空調が整備されておらず、近年の夏季の酷暑に対応できる避難所として、緊急に改善する必要がある
- 備蓄（学内向け）：招聘教員宿泊施設の防災倉庫の備え
- 防災訓練：1回/年実施
- 簡易トイレ、防災釜戸の整備

fig.51 | 防災と安全対策

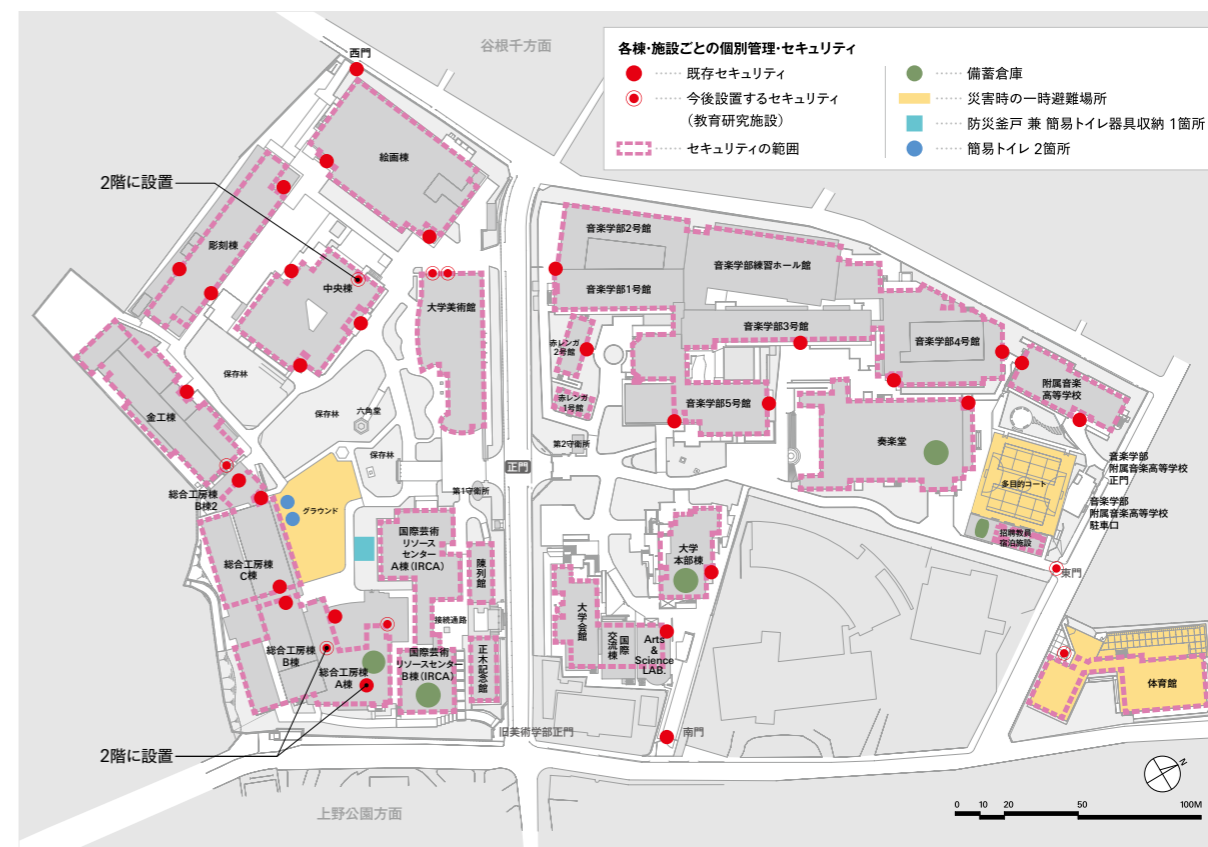


fig.52A | 防災訓練 | 炊き出しの様子



fig.52B | 防災訓練 | 簡易トイレ設置





08

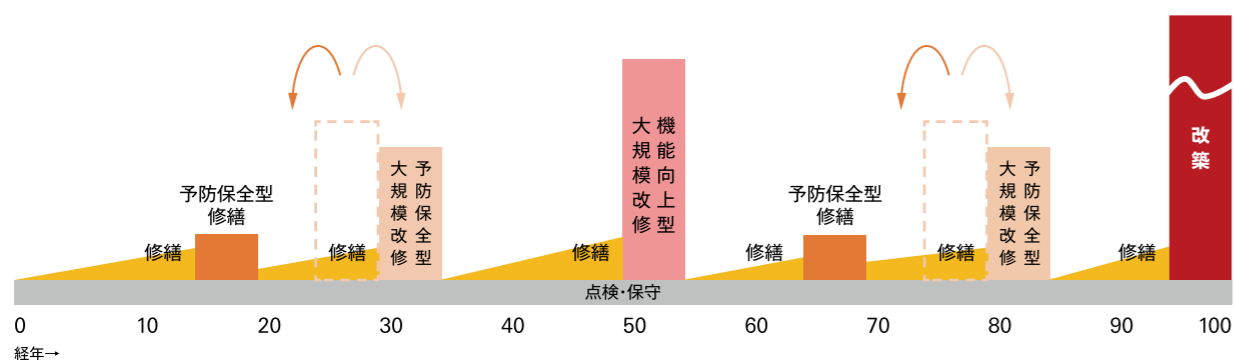
大規模改修と 改築時期

- 08-1 | 流れと優先順位
- 08-2 | 大規模改修と改築時期の明確化
- 08-3 | 各施設の整備履歴
- 08-4 | 音楽学部施設建替え

流れと優先順位

大学の経営戦略や「中期目標・中期計画」と連動した機能的改修と『インフラ長寿命化計画(2019年度版)』をふまえ、整備の優先順位を決める必要がある。原則としては下図の通り、大学経営戦略と教育研究施設の横軸と、建物点検チェックにより事務的に判断し決定する。その際、本キャンパスで特に考慮することは以下の項目である。

fig.53 | 『インフラ長寿命化計画(2019年度版)』より



大規模改修後を見据えて、建物・部屋・専門設備の最適化と選定

- ・各科の方向性、使いやすい部屋の関係とその見直しの準備

fig.54 | 整備計画優先順位の決定

建築点検チェックなどにより事務的に判断

ハード面	安全面・機能面において重大な支障があるもの	3	2	1
	安全面・機能面においてやや支障があるもの	6	5	4
	安全面・機能面において軽微な支障または支障のないもの	9	8	7
		教育研究活動以外を主目的とする施設	大学経営戦略において直接的影響のない教育研究施設	大学経営戦略において改修・改築が必要不可欠な施設
		ソフト面		

大規模改修の工事期間は、教育研究活動を行う代替施設(部屋)が必要となる(一時的な移転)

- ・ A地区側では予備地としての新施設建設可能な建築基準法上有効な建築面積は残っていない
そのため、取手キャンパスの使用等を想定して備える必要がある
- ・ B地区側では、新しい施設を建設するための予備地として、建築基準法上有効な建築面積：約550㎡は残っている。ただし、この予備地の利用方法は[08-4 | 音楽学部施設建替え]の方向性^{→p.148}に関わる内容であり十分な議論が必要である。また、千住キャンパスの使用なども同時に検討することも必要とされる

以下の施設や棟は、近年大規模改修の時期を迎える。費用対効果を念頭に置き、各施設・棟ごとに下記の項目を重点的に計画する。

附属音楽高等学校

- ・ 既存の老朽化した建物の機能改善および最適化
- ・ 老朽化した設備の更新
- ・ イノベーションコモンズを推進する場の形成

大学会館

- ・ フィールド2構想に基づき、芸術未来研究場と連動した共創の場としての機能拡充
- ・ フィールド1から延びるプロムナードの連続性を考慮したゾーニング計画
- ・ 教育研究活動から独立した運営が可能となる、新たな導入口とセキュリティの設置
- ・ 『東京藝術大学キャンパスデザインガイドライン(上野キャンパス編)』に準じてキャンパス景観に配慮したボリュームと配置計画

大学美術館、奏楽堂

大学美術館および奏楽堂については、いずれも竣工時期が同時期であることをふまえ、大規模改修は『インフラ長寿命化計画(2019年度版)』と連動して進めるものとする。中長期的な基本方針として、以下を掲げている。

- ・ 故障リスクの回避および財政需要の平準化を目的に、予防保全型修繕等を組み合わせたサイクルによる長寿命化を図る

なお、具体的な個別の課題および整備の方向性については、[05-3-4 | 東京藝術大学大学美術館]および[05-3-5 | 東京藝術大学奏楽堂]^{→p.119}を参照されたい。^{→p.117}

大規模改修と改築時期の明確化

ここでは、各施設の竣工年から、築年数による老朽化の順番を把握し、大規模改修、建替え時期を明確化する。それによって各大規模改修と、とりわけ2060年前後の7棟の施設建替え[fig.55]について、全学的課題として共通認識を持つことを目的としている。

『上野キャンパスマスタープラン2013』では、建物の寿命を竣工から70年としていたが、ここでは竣工年から100年に再設定して整理した。この寿命100年については、文部科学省の方針により更新されることも想定し、今後の動向を注視する必要がある。

2025年から2055年の30年間

大規模改修(築50年の施設)

- A 地区 中央棟、総合工房棟 A・B2・C 棟、大学美術館
- B 地区 音楽学部4号館、5号館、音楽学部附属音楽高等学校、大学会館、大学本部棟、奏楽堂、第2守衛所
- C 地区 体育館

PFI事業修了

- 藝心寮 2044年3月(30年間)

以上が30年先の施設に関する改修時期である。

2055年から2067年までの12年間

大規模改修(築50年の施設)

- Arts & Science LAB.

改築(築100年の施設)

- A 地区 金工棟、総合工房棟 B 棟、国際芸術リソースセンターA 棟(IRCA) 3棟
- B 地区 音楽学部1・2・3号館、練習ホール館 4棟

借用期間終了

- 千住キャンパス 2064年(借用期間50年・更地にして返却)

2055年から2067年までの12年間は、このようにキャンパスが大きく変化する時代を迎える。

A地区側は、建設可能な予備地としての残りの建築面積が既になく「建て詰まり」となっている。つまり既存の施設を解体し、新たに建設することになる。この工事期間は、上野キャンパスに代替スペースはないため、取手キャンパスの活用も視野に入れて教育研究活動を行うこととなる。

B地区側については、次項の[08-4 | 音楽学部施設建替え]で触れる。

千住キャンパスについては2064年に借用期間が終了するため、そこでの教育研究活動を展開している教育研究組織の新たな活動スペースが課題となる。

これら将来の教育研究活動とキャンパスのあり方に対して、全学的問題として多くの議論と検討が必要である。

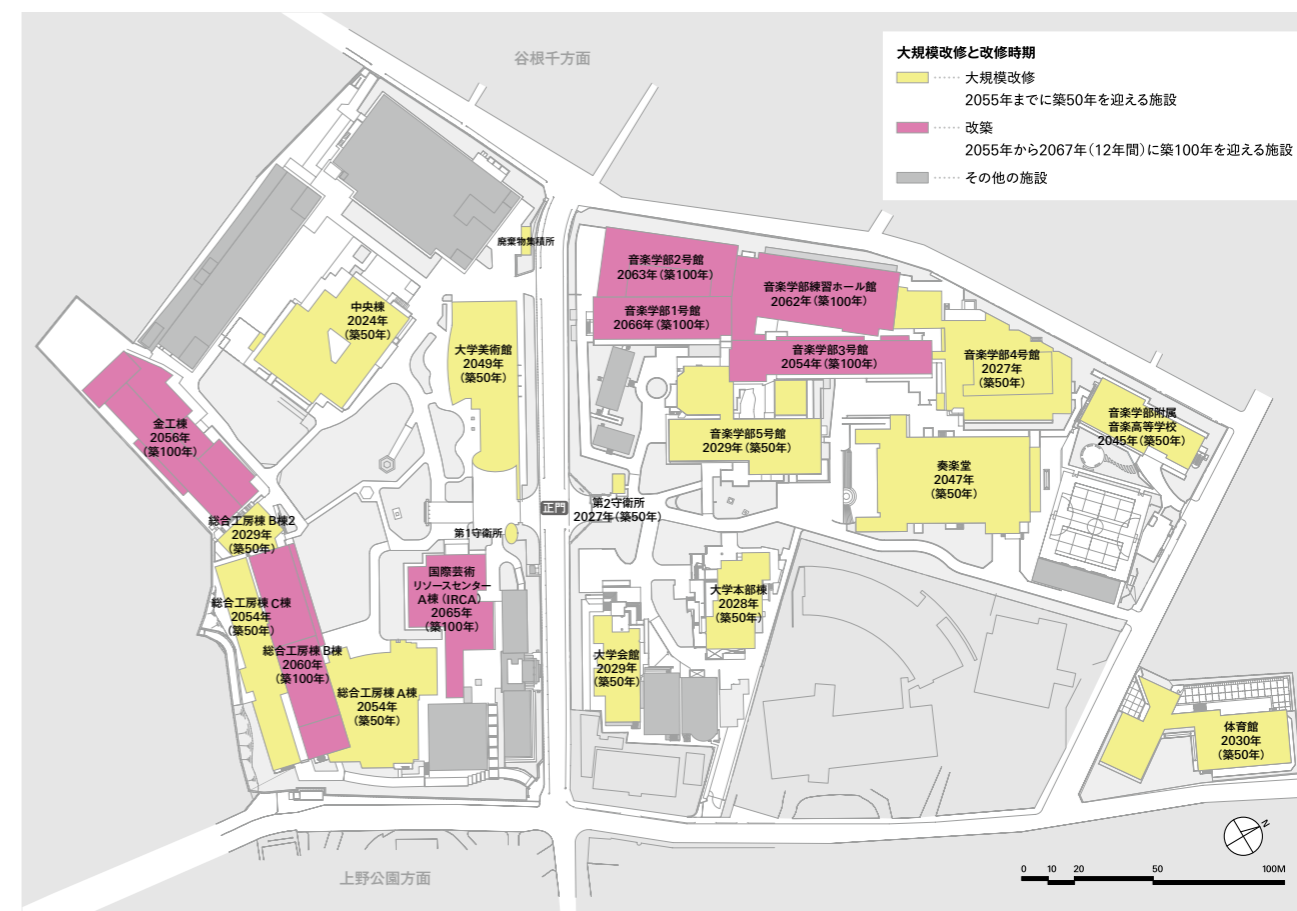
各施設の整備履歴

上野キャンパス施設棟別棒グラフ

次ページ以降の図表は前項の[01-4 | キャンパス面積表]における「上野キャンパス A・B・C 地区」を棒グラフ化したものである。この分析グラフでは、各棒の高さは延床面積をあらわす。途中で増築をすると高さが高くなる。また各棒の長さは、新築後100年と再設定している(『上野キャンパスマスタープラン2013』では70年)。色は1981年の建築基準法で新耐震基準が示される以前に新築した棟は黄緑色で、81年以降新築であれば青色である。黄緑色の建物は81年に基準を満たしていないことになると一旦緑色に変わるが、耐震改修工事をすれば青色になる。現状は全て耐震改修工事を終了していることが読み取れる。

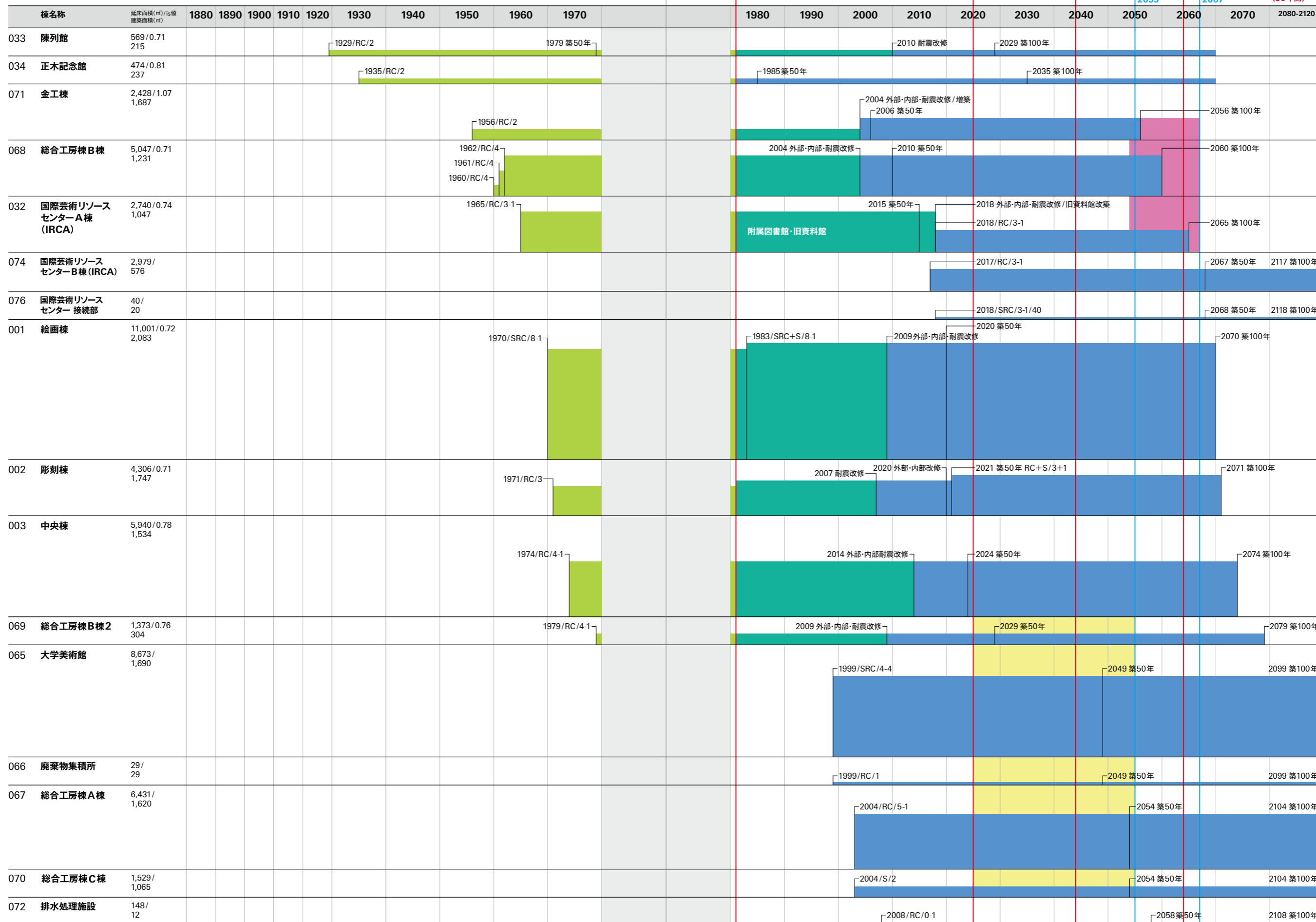
目印の赤い縦線では、1981年の新耐震、2025年、2044年藝心寮PFI事業終了、2064年千住キャンパス借用期間50年終了の時期を示している。また、2025年から30年後の2055年までを黄色、その後の12年をピンク色で塗りつぶしている。この部分は、下図の黄色とピンク色の建物に該当していることを示している。

fig. 55 | 大規模改修と改築時期



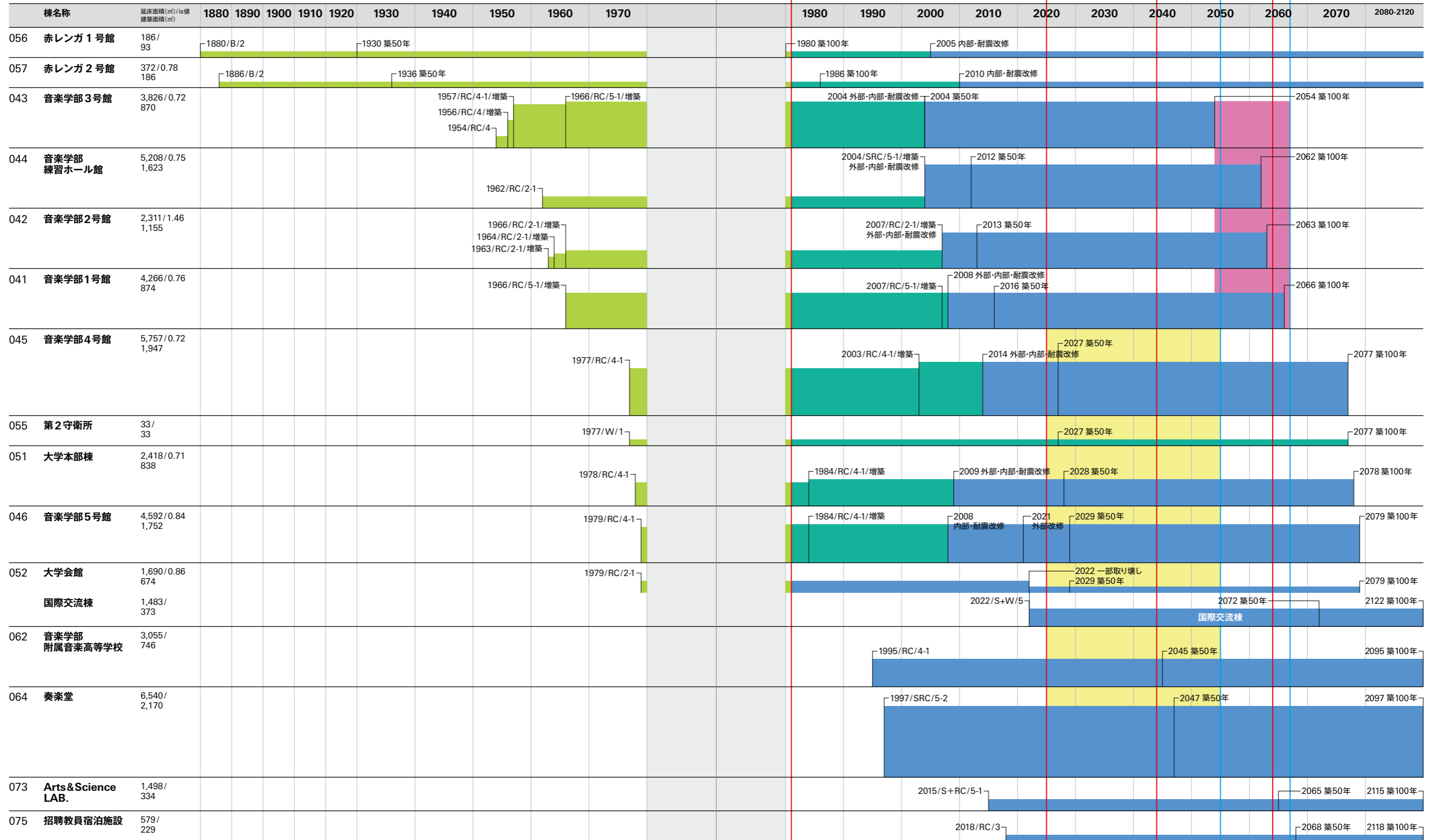
■ A地区

竣工年 / 構造 / 階数



■ B地区

竣工年 / 構造 / 階数



■ C地区



■ 上野桜木地区





音楽学部施設建替え

建替えの考えと方向性について

音楽学部施設建替えは、全学的に極めて重要な課題であり、その時期に向けて十分な議論と検討を重ねるべき事項である。そこで以下には、2025年時点で将来的に行える現実的かつ実行可能な音楽学部施設建替えの流れを一例として提示する。

改築の順番として、音楽学部2号館から開始（音楽学部3号館 築100年=2054年頃想定）

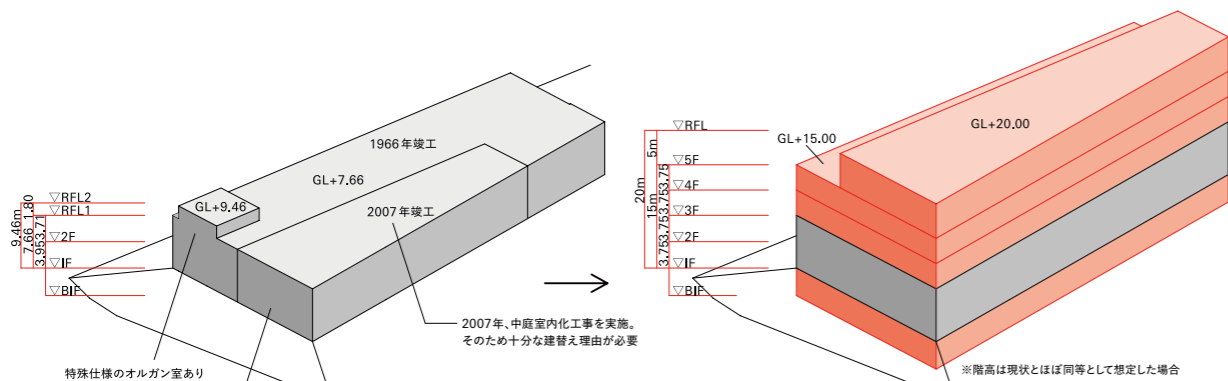
音楽学部2号館は地階+上階へ階数を増やし増床が可能（日影図暫定検証による）。その後、音楽学部1号館の建替え。音楽学部1号館の床面積はほぼ音楽学部2号館に納まるため音楽学部1号館の敷地（建築面積分）の予備地としての活用が可能となる。

音楽学部1号館は既存高さと同じ20mに建替え（地下1階+地上5階）※日影では25mまで建築可能

新音楽学部1号館は、既存の床面積4,325㎡から新規約5,000㎡〜700㎡の増床が可能。

[最上階：約200㎡ 地階：約500㎡]

音楽学部2号館 ポリウム検討図



音楽学部2号館 現状

規模	地上2階+地下1階(機械室のみ)
地階	60
1階	1,171
2階	1,106
合計	2,337㎡

建替え後

4,238㎡ 増床見込み
現状の2.8倍となる

音楽学部2号館 建替え後

規模	地上2階+地下1階(機械室のみ)
地階	1,171
1階	1,171
2階	1,171
3階	1,171
4階	1,171
5階	720
合計	6,575㎡

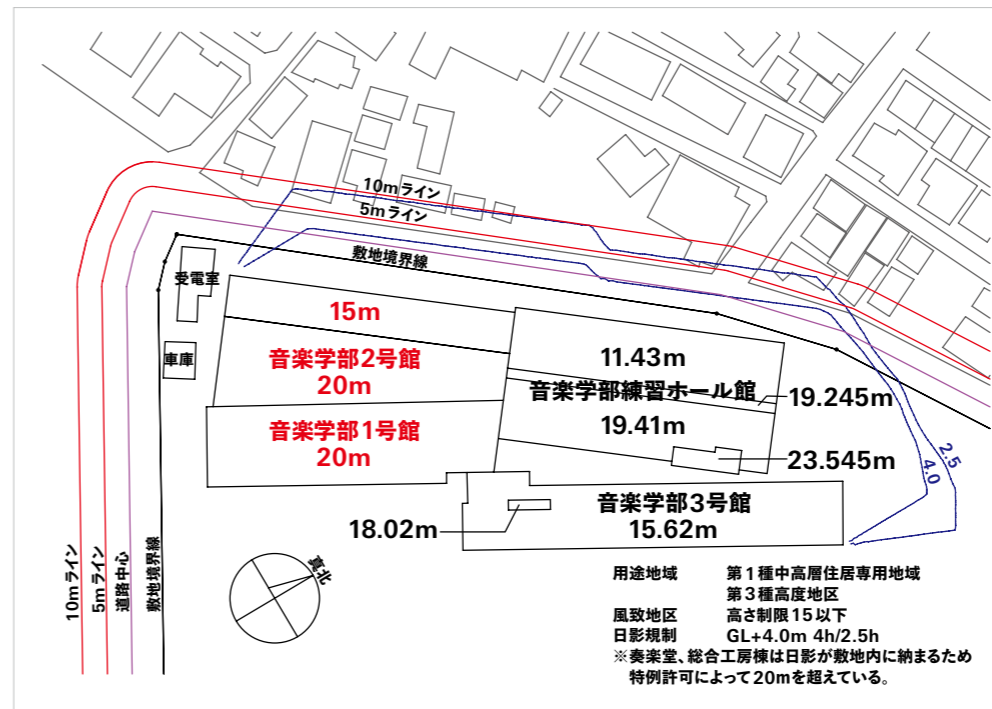
音楽学部1号館	: 4,325㎡
音楽学部2号館	: 2,337㎡
音楽学部3号館	: 3,826㎡
音楽学部練習ホール館	: 4,874㎡
音楽学部4号館	: 5,767㎡
音楽学部5号館	: 4,224㎡

既存の音楽学部2号館は、他の棟に比べて延べ面積が少なく、また2階建てであるため建物の高さが低い。日影図検討により、地上5階地下1階として増床できる可能性が高い。よって音楽学部2号館を先行して建て替えを行い、その後の建替えに備えて、既存音楽学部1号館の建築面積(854㎡)を予備スペースとして確保することができる。(改築後音楽学部1号館跡地は、地上5階・地下1階:5,000㎡の延床面積想定)ただし、現時点で文部科学省は増床を認めていないため、完成後は全体として面積を同じにするなどの調整が予想される。

前提として

- ・ 既存と同じ階高で算定したものである
- ・ 建替えで4,000㎡相当の増床が認められるか
- ・ 現時点では、増床は文部科学省に認められていない
- ・ 音楽学部5号館について：天井が低いため、高性能の防音室にはできない
- ・ 音楽学部2号館について：中庭の室内化工事(2007年)を実施しているため、建替え理由が必要
- ・ 音楽学部3号館について：大学全体の電気設備室を備えている
- ・ 音楽学部4号館について：特殊仕様のオルガン室を備えている

fig.56 | 日影検討図(参考)



工事期間中、音楽学部2号館のスペースをどこで補うか

防音室は学外で借りることは困難なため、学内での確保を想定。

- ・ 既存音楽学部2号館防音室：802㎡/教員室、研究室、練習室
- ・ 既存音楽学部2号館一般仕様室：851㎡/各センター、会議室
- ・ 改築時期が最後の音楽学部5号館講義室等を防音室に改修：802㎡/講義室・演習室、初めに工事着手
- ・ 音楽学部5号館の講義室がなくなるため、以下を講義室として活用
 - 音楽学部1号館：289㎡/講義室
 - 音楽学部5号館：320㎡/1階スペース、ピロティ等(新規改修が必要)
 - 千住キャンパスの活用：436㎡/展示室、講義室、演習室
 - A地区中央棟：736㎡/講義室
 - オンライン講義の活用

- ・ 各センターの床面積をどれだけ圧縮できるか
- 千住キャンパスの利用：上記、面積計上
- Arts&Science LAB.：941㎡

音楽学部1号館・2号館 建替えの流れ(案)

[1] 音楽学部5号館の講義室を防音室にする工事を行うため、音楽学部5号館講義室の利用を別棟等で行う(下記一例)

- ・ 音楽学部1号館：289㎡／講義室
- ・ 音楽学部5号館：320㎡／1階スペース、ピロティなど(新規改修が必要)
- ・ 千住キャンパスの活用：436㎡／展示室、講義室、演習室
- ・ A地区中央棟：736㎡／講義室
- ・ オンライン講義の活用



[2] 音楽学部5号館講義室の防音室化工事 ⇒ 完成

- ・ 音楽学部2号館から各室や機能、各センターの一時的な移転



[3] 音楽学部2号館の改築工事 ⇒ 完成

- ・ 各地に分散していた機能を音楽学部2号館へ再移転
- ・ 音楽学部1号館から音楽学部2号館へ一時的移転(次の音楽学部1号館建替えのための一時的移転)
※今後の改築工事のための種地が確保された状態となる。



[4] 音楽学部1号館の改築工事 ⇒ 完成



[5] 音楽学部1号館の竣工後、音楽学部3号館、音楽学部練習ホール館等の建替えに着手

課題・検討メモ

- ・ 音楽学部練習ホール館の改築
音楽学部練習ホール館には4つのホールが設置されている。そのため音楽学部練習ホール館の改築時にはこれら4つのホールが全て使用できなくなる。それを回避する方法として、音楽学部1・2・3号館建替え時に新たな3棟それぞれにホールの機能を1室ずつ組み込んで改築することも考えられる。

スペースマネジメントの基本的な考え方と方針

持続可能な教育研究環境の追求に基づき、本学の施設全体を包括的にマネジメントするとともに、既存の施設や空間・設備などの資源を最大限に活用する。これらのリソースを効果的に維持・管理することに加え、さらなる有効活用を図る。また、空間と設備の最適化を進め、戦略的な管理運営を実施する。以下に、スペースマネジメントの基本的な考え方とプロセスを示す。

スペースの学内配分の最適化

本学の機能強化や各科の特色を更に促進するため、スペースの弾力的活用を目的とする。全学の施設の実態調査を引き続き計画的に行い、スペースマネジメントによる既存施設の有効活用を検討していく。

空間や配置の最適化

教育研究活動の更なる進展を図るため、効率の悪い空間や配置となっている科や組織、専門設備については、戦略的に積極的な改善を行い、教育研究活動の活性化と最適化を推進させる。

機能強化や各科の特色を更に促進するための弾力的なスペース

・共有スペース

以下の通り、共有スペースには幾つかのレベルを設定している。
また各共有空間を円滑に運営するためには、必ず管理者を定めなければならない。

共有スペースのあり方

- ① 全学的共有スペース（例：講義室、多目的スペース、体育館、グラウンド、食堂など）
- ② 各学部単位の共有スペース（例：防音練習室、ホール、工房、アトリエ、展示空間など）

上記①と②は、さらに以下のように分類される

- ・共有スペースであるが、事実上専有されているスペース
- ・1年ごとに使用者を決める共有スペース
- ・限定された2科程度によって交代で使用する共有スペース
- ・年度初めに使用者と時期を取り決めて使用する共有スペース
- ・常時オープンなスペースで、自由に利用可能な共有スペース

なお一定期間の専有は、スペースチャージ[※]を視野に入れる。またこれらの共有スペースは、施設の改修時の予備スペースとしても機能する。

※スペースチャージとは、施設を利用する際に発生する使用料のことである。スペースチャージを導入することで、利用者がその施設利用に応じた費用を負担する仕組みが構築され、大学全体の資源が効率的に管理・運用されるようになる。

・新たな専門性のためのスペース

新しい科の設置や研究開発等のため、戦略的に必要な専門性の高い空間や設備を備えるためのスペース

・外部資金を獲得できるスペース

外部資金の獲得を目的とするスペース（企業、店、研究機関への一定期間の貸付）

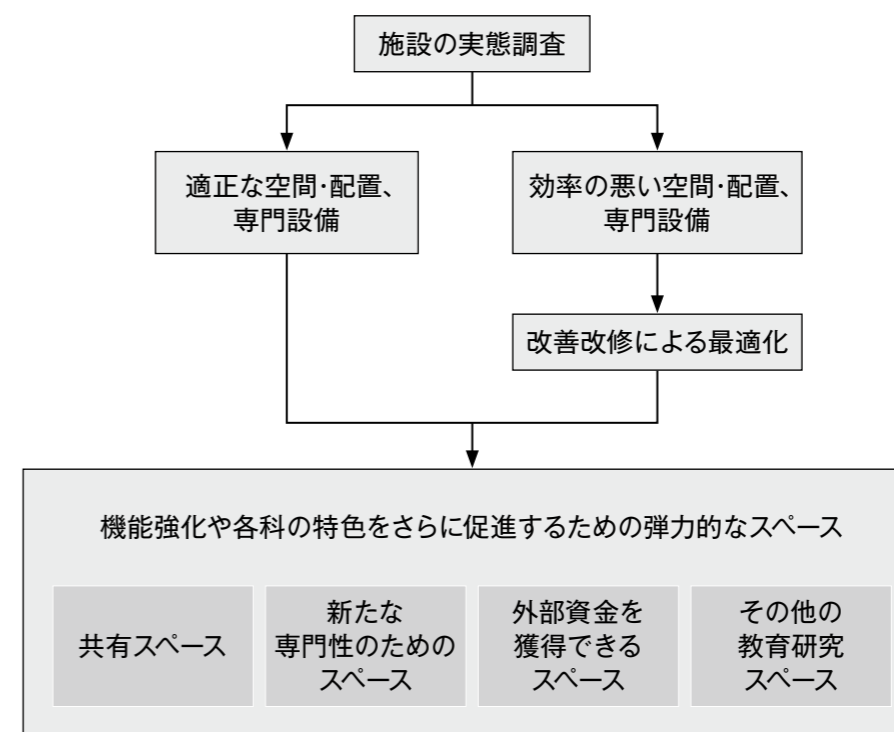
学内の貸付の場合は、スペースチャージを行う

外部貸付の具体的な施設やスペースに関しては、[09-2 | 施設の有効活用] ^{→ p.154}を参照

・その他の教育研究スペース

上記以外で、必要とされる教育研究に関連するスペース

スペースマネジメントの基本的な考え方とプロセスは以下の通りとなる。



施設の有効活用

ここでは、広く社会に開かれたキャンパスの展開として、外部貸付に関する有効活用の可能性について検討する。本学の施設や空間は、どれも教育研究活動を中心に稼働率が高く、しかも限られたスペースの中で展開している状況であるが、その状況下でも外部貸付による有効活用を積極的に推進していく。まず、現状行われている主な外部貸付は以下のとおりである。

[年間貸付]

画翠

[一時貸付]

奏楽堂、音楽学部第1～6ホール、GEIDAI LIVING座席エリア、藝大食楽部食堂座席エリア、中央棟講義室、音楽学部大講義室、国際交流棟コモンスペース等、Arts&Science LAB.1・4階、体育館、テニスコート、上野桜木地域連携棟(藝大部屋) 他

[その他現状]

生協、ホテルオークラ、各厨房：適正な品質とサービスを保つため貸付料の徴収をしていない

藝大アートプラザ：教育研究の一環として提携しているため、貸付料の徴収をしていない

今後の方向性としては以下の通りである。同時に外部貸付の明確化のため、用途等の分類を提示する。

本学の正門付近に位置し、利便性と象徴性のある外部貸付の空間

それに相応しい内容が求められる空間：本学の歴史的建築物・公開ゾーンに位置している

正木記念館／陳列館／赤レンガ1・2号館

学内の成果発表、及び教育研究活動が優先されるため、一時貸付について慎重な検討が必要な施設や部屋

大学美術館／陳列館／奏楽堂／音楽学部第1～6ホール

要検討が必要な施設：C地区 体育館

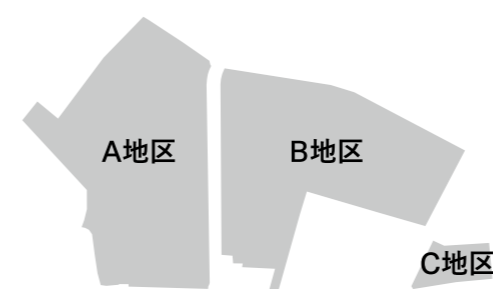
前項の[04-2 | ゾーニング計画]^{p.080}でも触れたとおり、C地区の体育館は資産価値が高く独立した立地にある。

そのため、有効利用の方法は全学的かつ経営的視点をふまえて十分に検討する必要がある。

その他、各部屋の一時貸付の用途とセキュリティを明確化すると以下の通りとなる。

地区・施設名	展示	演奏	講義	運動	宿泊
A地区					
大学美術館 各展示室	●				
陳列館 [※]	●	●	●		
正木記念館2階 和室 [※]	●	●			
国際リソースセンター-B棟(IRCA) ラーニングcommons [※]	●	●	●		
中央棟 第1～9講義室			●		
B地区					
奏楽堂 [※]		●			
音楽学部 第1～6ホール		●			
音楽学部5号館 大講義室			●		
赤レンガ1・2号館	●	●	●		
大学会館2階 展示室	●		●		
Arts&Science LAB. エントランスホール [※]	●		●		
Arts&Science LAB. 球形ホール	●	●	●		
招聘教員宿泊施設 [※]					●
大学本部棟1階 ホール	●	●	●		
多目的コート [※]				●	
C地区					
体育館 第1～3体育室 [※]				●	
上野桜木キャンパス					
上野桜木地域連携棟 [※]	●	●	●		

※は独立した運営が可能なセキュリティあり



ここでは、以下に2025年度建物一時貸付料として、各施設の面積および単価を提示する。

NO.	区分・貸付建物等名	面積[m ²]	単価	1時間当たりの積算単価	NO.	区分・貸付建物等名	面積[m ²]	単価	1時間当たりの積算単価
1	赤レンガ1号館2階 談話室(1部屋)	38	18.5	800	45	2-2-3 邦楽囃子	60	18.5	1,200
2	GEIDAI LIVING	385	18.5	7,200	46	2-2-4 邦楽囃子研究室	30	18.5	600
3	GEIDAI LIVING(教職員専用)	75	18.5	1,400	47	2-2-6 邦楽合奏室	60	18.5	1,200
4	国際交流棟3階 コミュニティサロン	134	18.5	2,500	48	4-110 練習室(指揮科)	75	18.5	1,400
5	国際交流棟4階 和室	47	18.5	900	49	5-109 大講義室	256	18.5	4,800
6	国際交流棟4階 コモンスペース	78	18.5	1,500	50	5-212 講義室	49	18.5	1,000
7	大学美術館1階 食堂	185	18.5	3,500	51	5-213 講義室	51	18.5	1,000
8	体育館 第1体育室	607	18.5	11,300	52	5-301 講義室	79	18.5	1,500
9	体育館 第2体育室	347	18.5	6,500	53	5-311 講義室	51	18.5	1,000
10	体育館 第3体育室	333	18.5	6,200	54	5-401 特別講義室	121	18.5	2,300
11	男子更衣室	64	18.5	1,200	55	5-406 講義室	51	18.5	1,000
12	女子更衣室	65	18.5	1,300	56	5-407 講義室	53	18.5	1,000
13	中央棟 第1講義室	207	18.5	3,900	57	5-408 講義室	75	18.5	1,400
14	中央棟 第2講義室	94	18.5	1,800	58	5-409 講義室	77	18.5	1,500
15	中央棟 第3講義室	174	18.5	3,300	59	5-410 講義室	53	18.5	1,000
16	中央棟 第4講義室	91	18.5	1,700	60	H-205 練習室	20	18.5	400
17	中央棟 第5講義室	91	18.5	1,700	61	H-206 練習室	20	18.5	400
18	中央棟 第6講義室	88	18.5	1,700	62	H-207 練習室	20	18.5	400
19	中央棟 第7講義室	44	18.5	900	63	H412 大合奏室	152	18.5	2,900
20	中央棟 第8講義室	41	18.5	800	64	H413 アンサンブル練習室2	100	18.5	1,900
21	中央棟 第9講義室	69	18.5	1,300	65	H414 アンサンブル練習室3	92	18.5	1,800
22	中央棟 第1演習室	44	18.5	900	66	H416 アンサンブル練習室	123	18.5	2,300
23	中央棟 会議室1	118	18.5	2,200	67	H511 アンサンブル練習室	42	18.5	800
24	中央棟 会議室2	61	18.5	1,200	68	H512 アンサンブル練習室	42	18.5	800
25	中央棟 会議室3	44	18.5	900	69	H513 アンサンブル練習室	42	18.5	800
26	絵画棟 407日本画アトリエ	222	18.5	4,200	70	H514 アンサンブル練習室	42	18.5	800
27	総合工房棟A棟 オープンアトリエ	242	18.5	4,500	71	附属音楽高校201ホール	323	21.64	7,000
28	総合工房棟A棟 A-301ゼミ室	213	18.5	4,000	72	奏楽堂 ホワイエ	439	22.32	9,800
29	総合工房棟B棟 多目的ラウンジ	219	18.5	4,100	73	Arts&Science LAB.1階	104	18.5	2,000
30	音楽学部 大会議室 5-B03	145	18.5	2,700	74	Arts&Science LAB.4階	258	18.5	4,800
31	第1ホール	316	21.64	6,900	75	大学本部棟 第1会議室	67	18.5	1,300
32	第2ホール	228	21.64	5,000	76	大学本部棟 第2会議室	111	18.5	2,100
33	第4ホール	210	21.64	4,600	77	大学本部棟1階 ホール	104	18.5	2,000
34	第5ホール	146	21.64	3,200	78	1-3-8 講義室	83	18.5	1,600
35	第6ホール	548	21.64	11,900	79	招聘教員宿泊施設 多目的ホール	66	18.5	1,300
36	第6ホール 楽屋兼4-108	29	18.5	600	80	テニスコート1面	1	1100	1,100
37	4-111 調整室	55	18.5	1,100	81	テニスコート2面	1	2200	2,200
38	3号館+5号館 ロビー	197	18.5	3,700	82	上野桜木地域連携棟1階	143	18.5	2,700
39	4-101 練習室兼楽屋	58	18.5	1,100	83	上野桜木地域連携棟2階	136	18.5	2,600
40	4-218 調光室	14	18.5	300	84	上野桜木地域連携棟3階	61	18.5	1,200
41	4-219 調光盤室	6	18.5	200	85	附属音楽高校 アンサンブル室1	101	18.5	1,900
42	1-3-28 邦楽合奏室	82	18.5	1,600	86	附属音楽高校 アンサンブル室2	63	18.5	1,200
43	1-3-30 講義室	84	18.5	1,600	87	附属音楽高校2階 ロビー	155	18.5	2,900
44	1-4-22 講義室	54	18.5	1,000	88	附属音楽高校 レッスン室12	38	18.5	800

※1時間当たりの決定単価は、面積×単価(100円未満は切り上げ)とする

※1時間当たりの決定単価は、面積(テニスコート1面)×単価(100円未満は切り上げ)

※水道光熱費・消費税等含む

※貸付料については、定期的に見直しを行う

10

付属資料

10-1 | 藝大SDGsへの取り組み

10-2 | 主要棟現状平面図

10-3 | キャンパスグランドデザイン検討組織と名簿

藝大SDGsへの取り組み

ここでは、[05-1 | 持続可能な教育研究環境の追求]^{→p.100}で示されている藝大SDGsのビジョンに関し、キャンパス
ランドデザイン推進室および施設課が担当しているゴール6・7・11・13・15の具体的な取り組みを掲載する。

ゴール6	すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する
------	-------------------------------

テーマ 放流水による水質汚染の抑制

指標 放流水の水質

関連部署 施設課

関連SDGsターゲット

6.3 2030年までに、汚染の減少、投棄の廃絶と有害な化学物・物質の放出の最小化、未処理の排水の割合半減及び再生利用と安全な再利用の世界的規模で大幅に増加させることにより、水質を改善する。

指標・目標の設定背景

本学の教育研究活動の中でも、主に美術学部での制作現場等において有害な化学物質の使用は避けられない。それらの有害物質を適正な処理方法で処理することにより、現状の放流水は基準値以下の水質を保っている。今後も、放流水の水質が基準値以下となるよう、適正な処理を徹底して行う。

テーマ 水利用の削減を通じた水不足への対処

指標 水道水の利用量

関連部署 施設課

関連SDGsターゲット

6.4 2030年までに、全セクターにおいて水利用の効率を大幅に改善し、淡水の持続可能な採取及び供給を確保し水不足に対処するとともに、水不足に悩む人々の数を大幅に減少させる。

指標・目標の設定背景

潤沢な水資源がある日本では世界的な水不足の問題は意識されにくい。しかし、人口増加や工業化による水利用の増加により水不足が問題となっている。さらに、本学の教育研究活動では、多くの水を必要とするものがある。そのような活動をしつつ、世界の水不足問題に意識を向けるためにも、水道水の利用量を指標として設定する。

ゴール7	すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する
------	--

テーマ 再生可能エネルギーの普及

指標 再生可能エネルギー比率

目標 再生エネ電力100%(藝大RE100)

関連部署 施設課

関連SDGsターゲット

7.2 2030年までに、世界のエネルギーミックスにおける再生可能エネルギーの割合を大幅に拡大させる。

指標・目標の設定背景

社会全体として再エネ比率の拡大は喫緊の課題であり、本学も一翼を担うべきである。しかしながら、本学の現状は、一部の建物に設置している太陽光発電の利用に留まっている。本学の敷地面積や規模を考えると、自家発電で再エネ化を目指すのは物理的な困難があるため、さまざまな選択肢を視野に入れながら、将来的に学内の使用電力の再生エネルギー電力100%を目指す。ゴール13の達成目標に掲げる藝大カーボンハーフとも密接に関わるため、連動して検討を進めていく。

ゴール11	まちづくり「都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靱かつ持続可能にする」
-------	-------------------------------------

テーマ コミュニティに開かれたキャンパス

指標 良好な公共スペース、安全・快適な環境形成

関連部署 キャンパスランドデザイン推進室／施設課

関連SDGsターゲット

11.7 2030年までに、女性、子ども、高齢者及び障害者を含め、人々に安全で包摂的かつ利用が容易な緑地や公共スペースへの普遍的アクセスを提供する。

11.a 各国・地域規模の開発計画の強化を通じて、経済、社会、環境面における都市部、都市周辺部及び農村部間の良好なつながりを支援する。

指標・目標の設定背景

上野キャンパスは自然豊かな上野公園の一部としてその北西の一角に立地する都市型キャンパスである。また上野公園は不忍池や上野動物園など人々の憩いの場であるとともに、総合芸術大学である本学を含め、東京国立博物館、国立西洋美術館、東京都美術館、東京文化会館、上野の森美術館など世界でも珍しい数多くの文化芸術施設が集まっており、これら上野公園の文化芸術資源の有効活用に対し高い関心が寄せられている。こういった背景から、本学の様々な芸術教育研究活動と上野公園が連続するような、開かれたキャンパスが計画された。

キャンパスランドデザイン推進室では本学のミッションに基づいた教育研究活動を行うためのキャンパスのあり方を検討し、歴史的建築物や門扉、胸像の保存活用、さらにショップなどによる都市に開かれたプロムナードを形成し、キャンパス内の様々な資源を地域に提供している。また大学を取り囲む塀や柵を緑の境界へと置き換える取り組み(藝大ヘッジ)では、まちづくりの一環として学生、教職員、卒業生だけでなく、地域の人々とのワークショップを幾度にわたり着手し、道に沿った緑のキャンパスが徐々に作り出されてきている。また学内外者問わず本学利用者の多様な価値観への対応として、広義の視点によるバリアフリーの必要性が求められており、LGBTQ+対応トイレや憩いの場の整備を進めている。学内の公共的スペースへの普遍的なアクセスを推進するために、建物ごとのセキュリティ強化を進め、必要に応じて段階的に対応するセキュリティの設置を推進している。

ゴール13	気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る
-------	---------------------------

テーマ CO2排出量の削減

指標 CO2排出量

目標 2030年度までにCO2排出量を2013年度比50%削減する(藝大カーボンハーフ)

関連部署 施設課

関連SDGsターゲット

13.2 気候変動対策を国別の政策、戦略及び計画に盛り込む。

指標・目標の設定背景

国は気候変動サミット等において、「2050年カーボンニュートラルと新たな2030年目標」として、2030年に2013年比で△46%のCO2排出量の削減、2050年に実質ゼロを目指すことを表明しており、本学は、2030年50%削減(カーボンハーフ)を目指す。また、この目標を目指すことで、東京都の大規模事業所に課せられている総量削減義務も履行することができる。ゴール7の再エネ比率の拡大は使用電力のCO2排出量削減につながり、このゴール13と密接に関わるため、ゴール7の目標値設定と連動し検討していく。

ゴール15	陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る
-------	--

テーマ 生物多様性のある環境作りと在来種(武蔵野の植生)の生態系の再生

指標 上野校地の在来種の樹種数目標／在来種の保護、環境改善、外来種の駆除

関連部署 キャンパスランドデザイン推進室／施設課

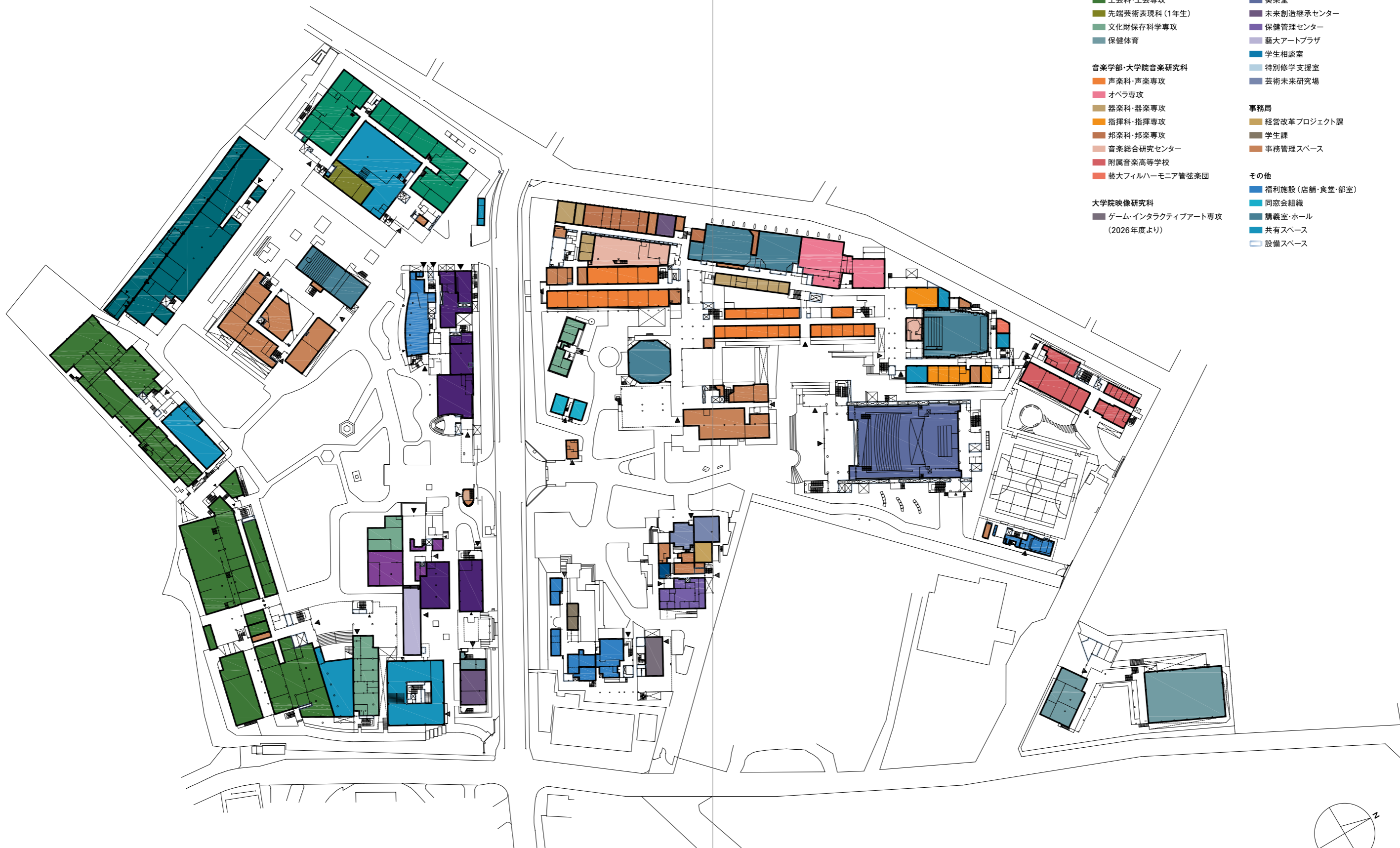
関連SDGsターゲット

15.8 2020年までに、外来種の侵入を防止するとともに、これらの種による陸域・海洋生態系への影響を大幅に減少させるための対策を導入し、さらに優先種の駆除または根絶を行う。

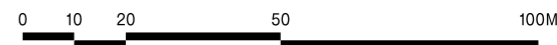
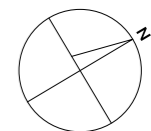
指標・目標の設定背景

『上野キャンパスマスタープラン2013』に「景観整備の理念」として、「本物の日本の自然にふれる」「四季の変化を感じる」「教材としての自然環境」が掲げられている。キャンパスランドデザイン推進室ではこの理念に基づく多様性豊かな環境づくりを目標として、A地区側の中央に位置する武蔵野の照葉樹林の面影を残す雑木林の環境調査(2010年)を行った。その結果、外来種の侵略により、多様性が失われつつある雑木林の現状を把握し、在来種から形成される多様な生態系が育まれる自然環境を再生するため270種の関東在来種を設定し、まずは150種まで増やすことを目指している。そこで保存林再生実験としての苗木植樹ワークショップの開始と外来種の駆除をスタートし(2014年)、同年より苗木の生育を見守る「お世話隊」も発足し定期的に活動を行っている。一方、藝大ヘッジでは、2016年から2025年まで6度にわたり大学を取り囲む塀や柵を緑の境界へ置き換えながら在来種を増やし、多様であり持続可能な環境をつくり出している。

主要棟現状平面図



- 美術学部・大学院美術研究科
 - 絵画科・絵画専攻(油画)
 - 彫刻科・彫刻専攻
 - 工芸科・工芸専攻
 - 先端芸術表現科(1年生)
 - 文化財保存科学専攻
 - 保健体育
- 音楽学部・大学院音楽研究科
 - 声楽科・声楽専攻
 - オペラ専攻
 - 器楽科・器楽専攻
 - 指揮科・指揮専攻
 - 邦楽科・邦楽専攻
 - 音楽総合研究センター
 - 附属音楽高等学校
 - 藝大フィルハーモニア管弦楽団
- 大学院映像研究科
 - ゲーム・インタラクティブアート専攻(2026年度より)
- 附属機関・センター等
 - 附属図書館
 - 大学美術館
 - 奏楽堂
 - 未来創造継承センター
 - 保健管理センター
 - 藝大アートプラザ
 - 学生相談室
 - 特別修学支援室
 - 芸術未来研究場
- 事務局
 - 経営改革プロジェクト課
 - 学生課
 - 事務管理スペース
- その他
 - 福祉施設(店舗・食堂・部室)
 - 同窓会組織
 - 講義室・ホール
 - 共有スペース
 - 設備スペース

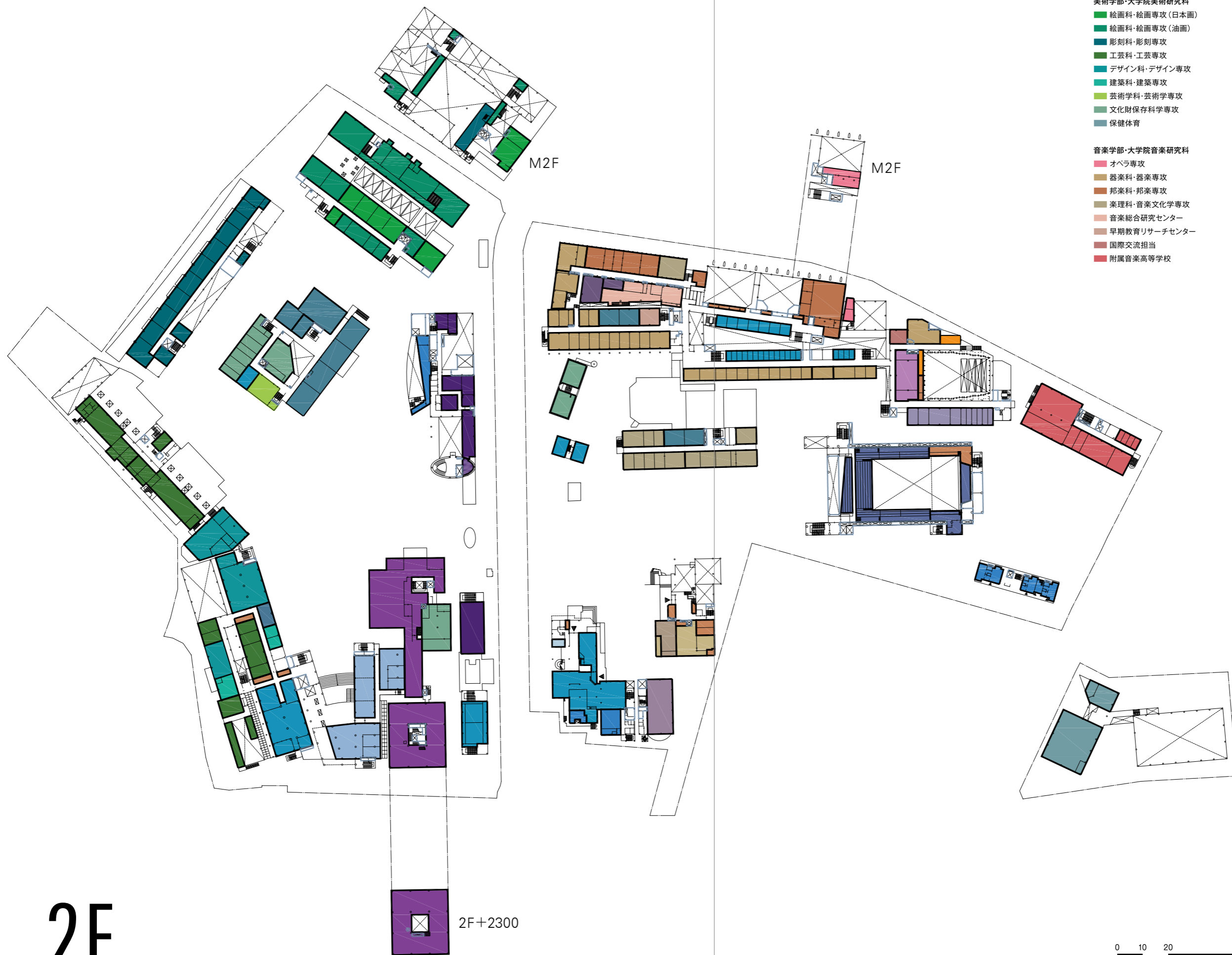


00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

1F

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

161

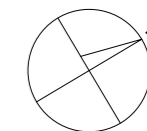


- | | | |
|--|--|--|
| 美術学部・大学院美術研究科
■ 絵画科・絵画専攻(日本画)
■ 絵画科・絵画専攻(油画)
■ 彫刻科・彫刻専攻
■ 工芸科・工芸専攻
■ デザイン科・デザイン専攻
■ 建築科・建築専攻
■ 芸術学科・芸術学専攻
■ 文化財保存科学専攻
■ 保健体育 | 音楽学部・大学院音楽研究科
■ オペラ専攻
■ 器楽科・器楽専攻
■ 邦楽科・邦楽専攻
■ 楽理科・音楽文化学専攻
■ 音楽総合研究センター
■ 早期教育リサーチセンター
■ 国際交流担当
■ 附属音楽高等学校 | 附属機関・センター等
■ 附属図書館
■ 大学美術館
■ 奏楽堂
■ 未来創造継承センター
■ 言語・音声トレーニングセンター
■ 演奏芸術センター
■ 芸術情報センター(AMC)
■ 特別修学支援室
■ キャンパスランドデザイン推進室
■ 共創拠点推進機構 |
| 事務局
■ 財務会計課
■ 社会連携課
■ 事務管理スペース | | その他
■ 福利施設(店舗・食堂・部室)
■ 講義室・ホール
■ 共有スペース
■ 設備スペース |

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

2F

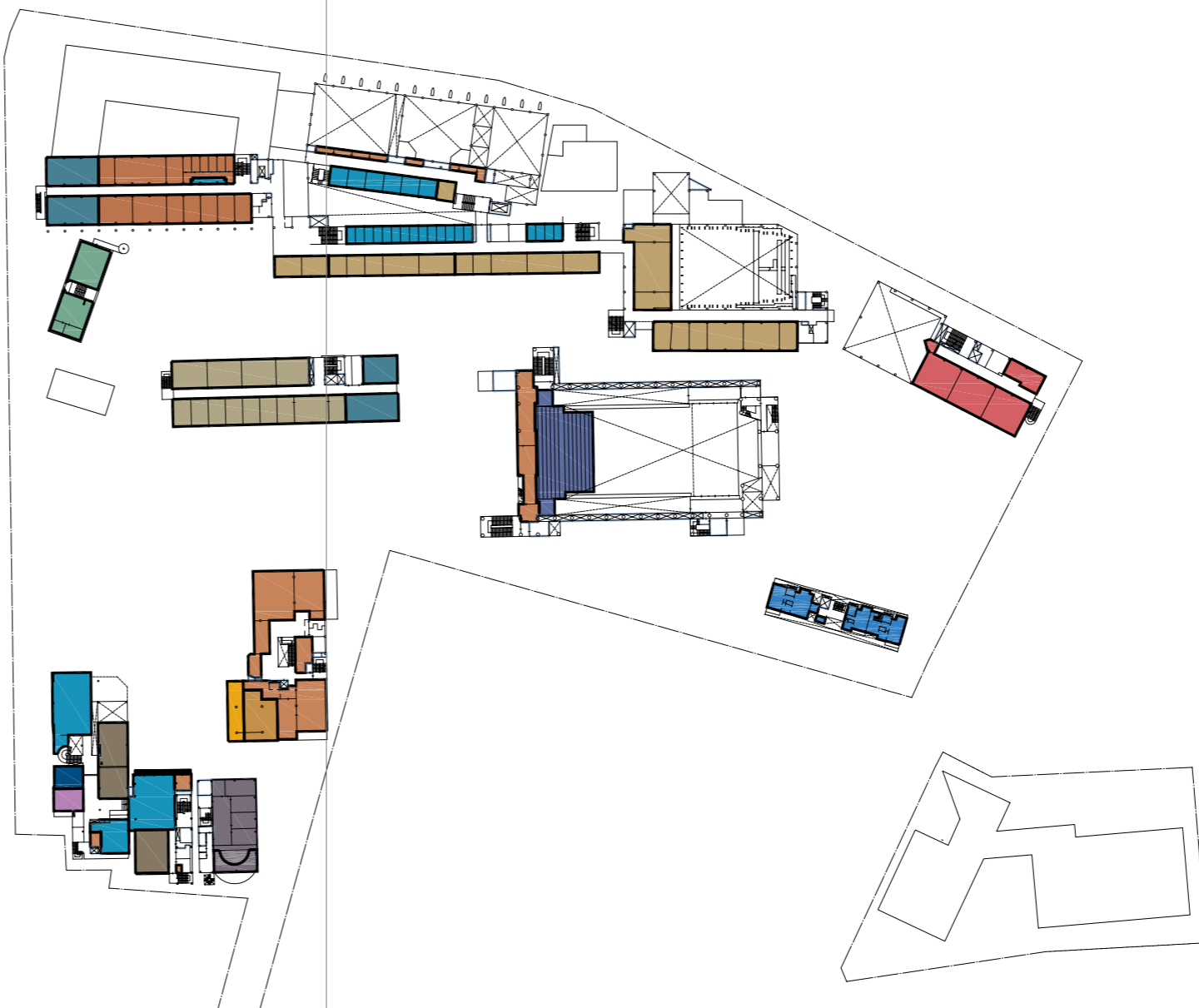
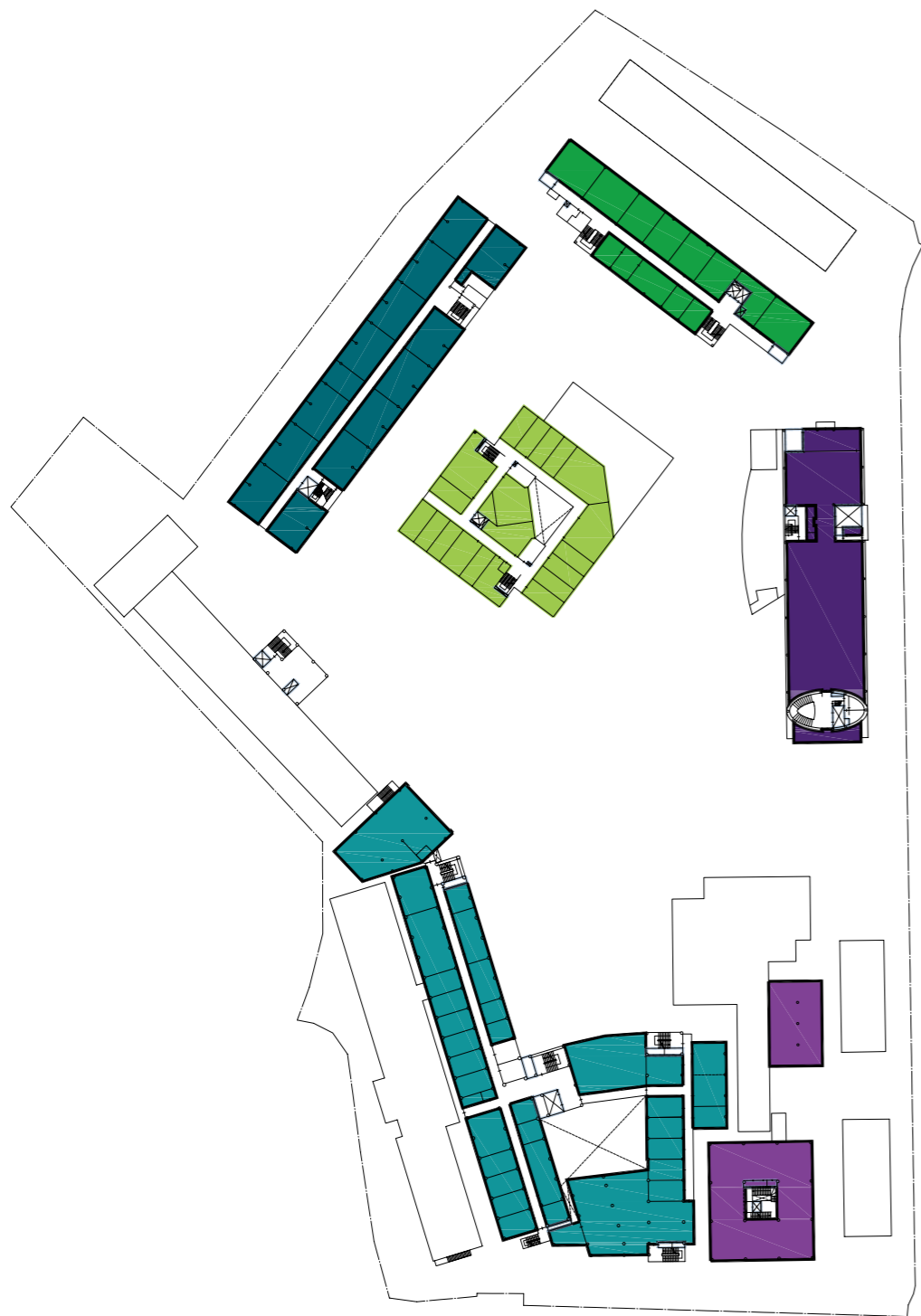
2F+2300



0 10 20 50 100M

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

163

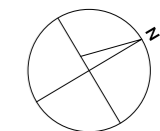
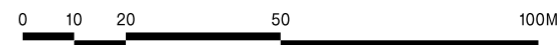


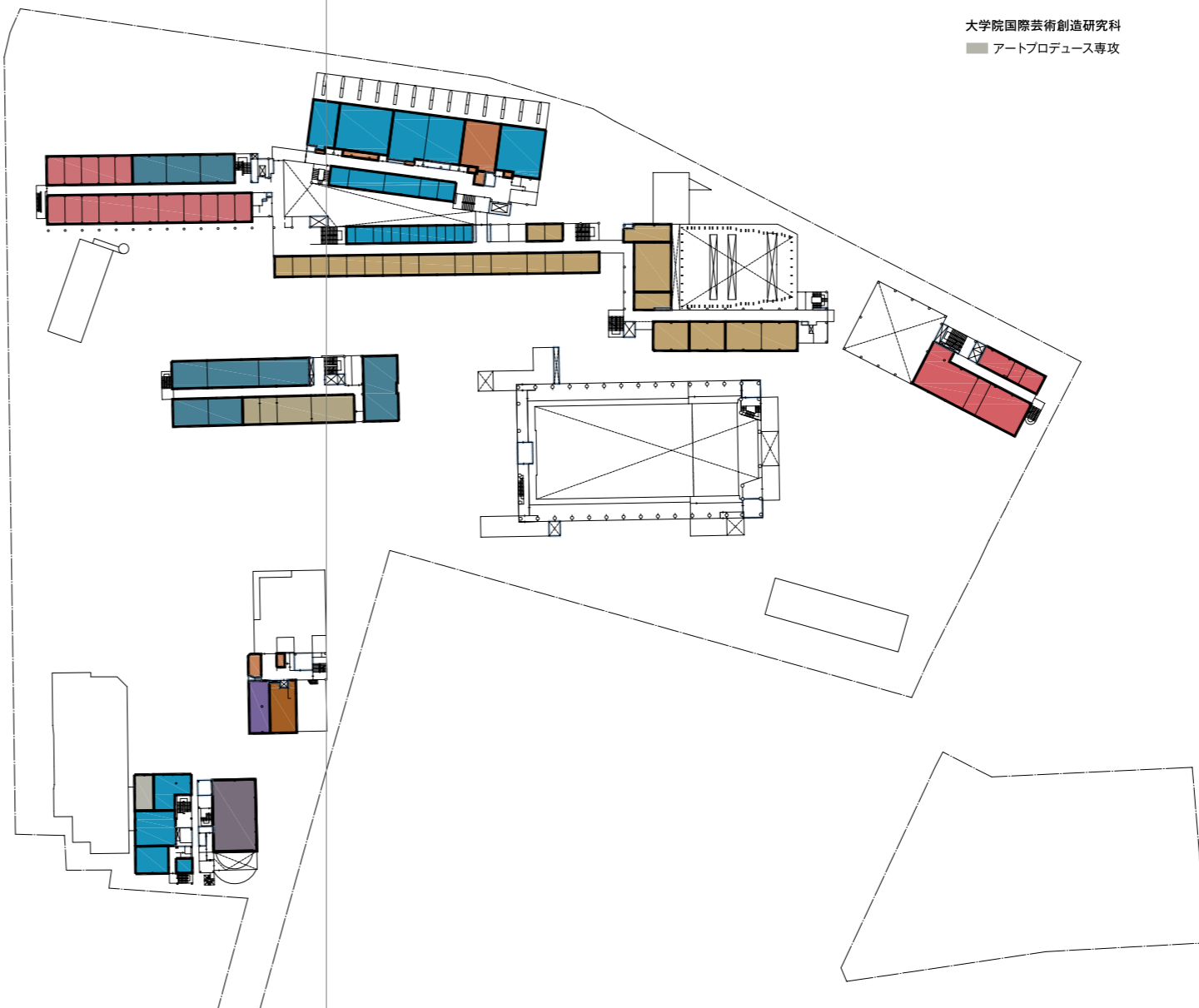
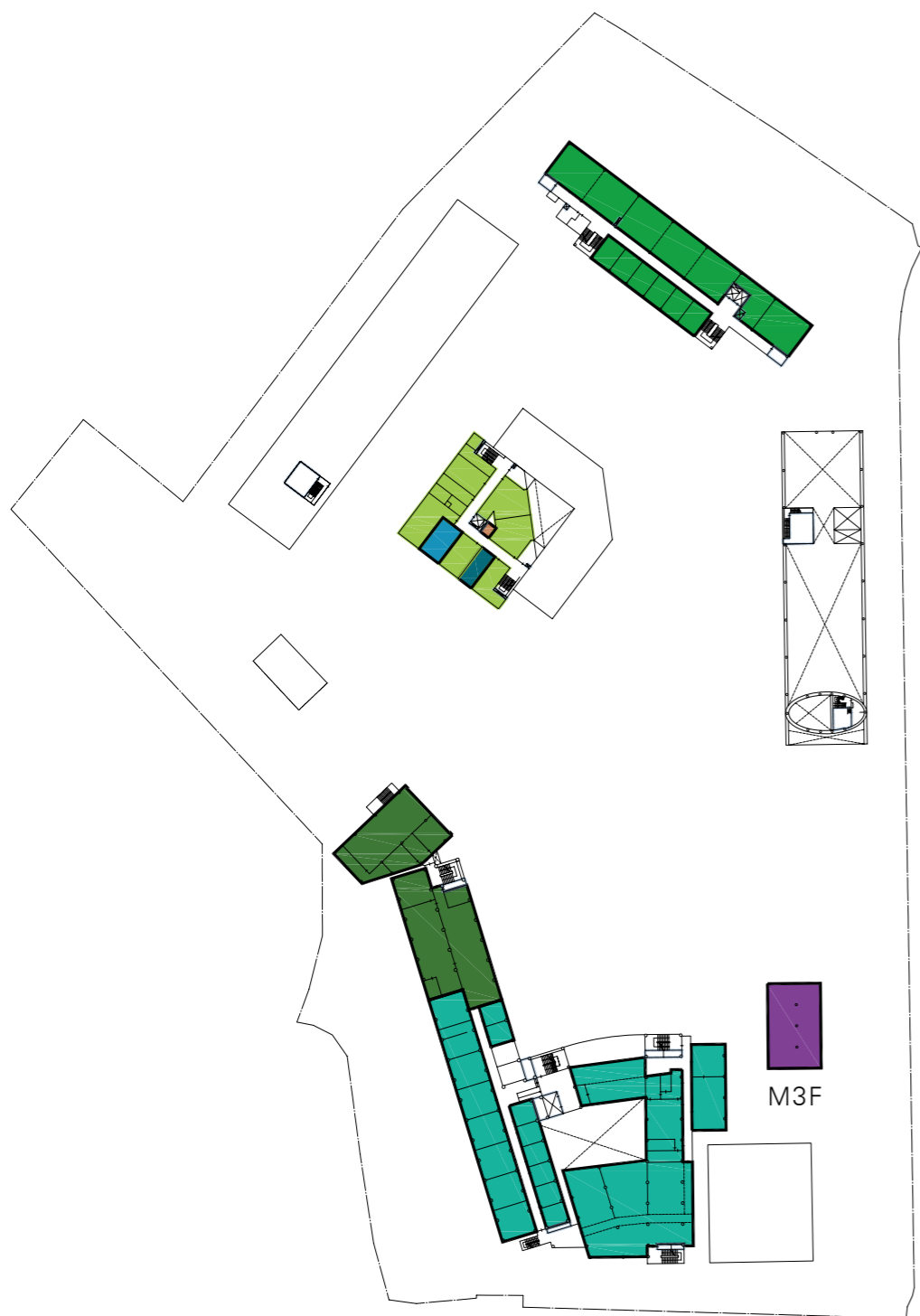
- 美術学部・大学院美術研究科
 - 絵画科・絵画専攻(日本画)
 - 彫刻科・彫刻専攻
 - デザイン科・デザイン専攻
 - 芸術学科・芸術学専攻
 - 文化財保存科学専攻
- 音楽学部・大学院音楽研究科
 - 器楽科・器楽専攻
 - 邦楽科・邦楽専攻
 - 楽理科・音楽文化学専攻
 - 附属音楽高等学校
- 大学院映像研究科
 - ゲーム・インタラクティブアート専攻 (2026年度より)
- 附属機関・センター等
 - 附属図書館
 - 大学美術館
 - 奏楽堂
 - 学生相談室
 - グローバルサポートセンター
- 事務局
 - 企画総務課
 - 人事労務課
 - 学生課
 - 事務管理スペース
- その他
 - 福利施設(店舗・食堂・部室)
 - 講義室・ホール
 - 共有スペース
 - 設備スペース

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

3F



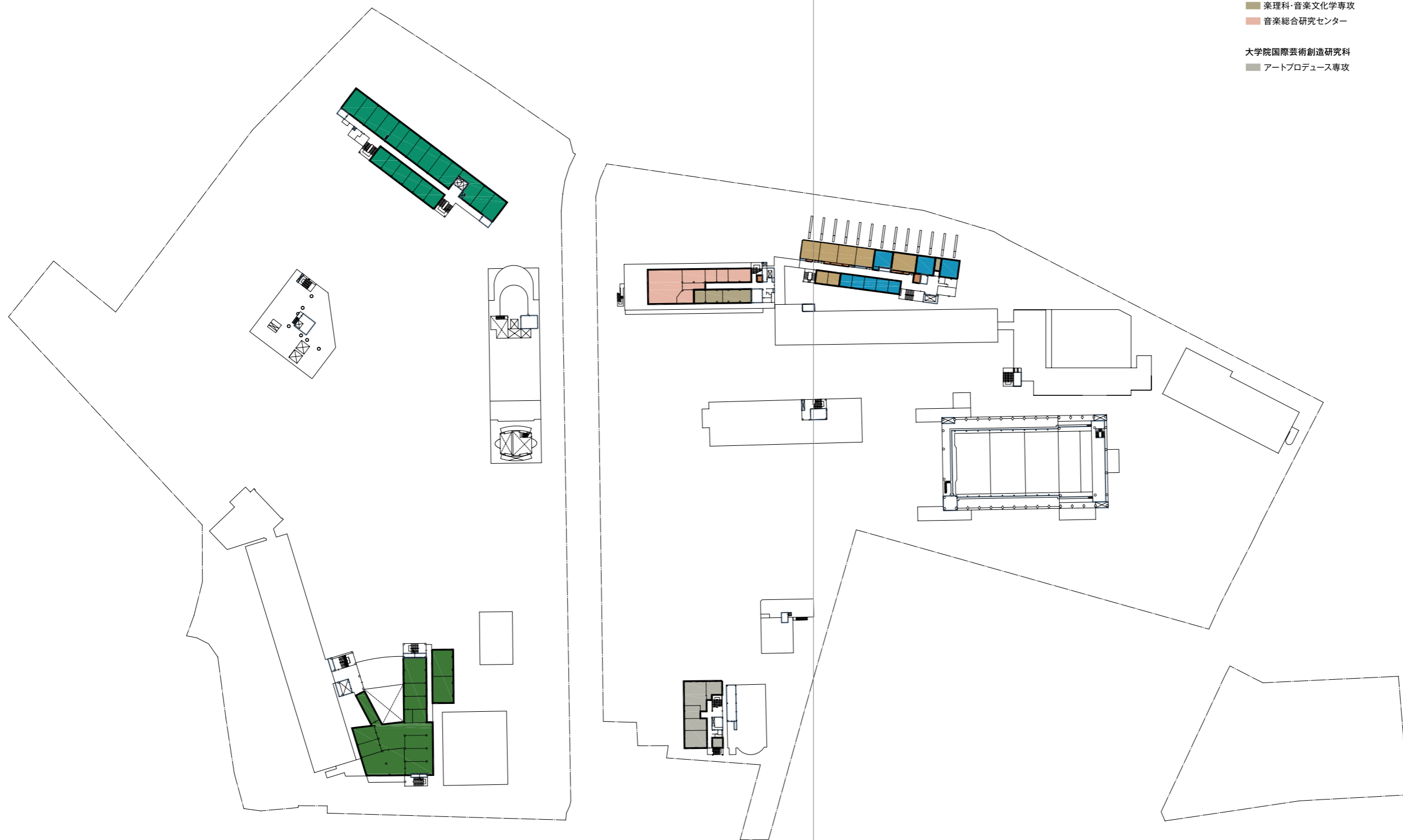


- 美術学部・大学院美術研究科
 - 絵画科・絵画専攻(日本画)
 - 工芸科・工芸専攻
 - 建築科・建築専攻
 - 芸術学科・芸術学専攻
- 音楽学部・大学院音楽研究科
 - 作曲科・作曲専攻
 - 器楽科・器楽専攻
 - 邦楽科・邦楽専攻
 - 楽理科・音楽文化学専攻
 - 附属音楽高等学校
- 大学院映像研究科
 - ゲーム・インタラクティブアート専攻 (2026年度より)
- 大学院国際芸術創造研究科
 - アートプロデュース専攻
- 附属機関・センター等
 - 附属図書館
 - 社会連携センター
- 事務局
 - 施設課
 - 事務管理スペース
- その他
 - 講義室・ホール
 - 共有スペース
 - 設備スペース

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

4F

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

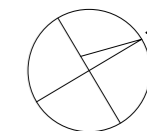


- 美術学部・大学院美術研究科
 - 絵画科・絵画専攻(油画)
 - 工芸科・工芸専攻
- 音楽学部・大学院音楽研究科
 - 器楽科・器楽専攻
 - 楽理科・音楽文化学専攻
 - 音楽総合研究センター
- 大学院国際芸術創造研究科
 - アートプロデュース専攻

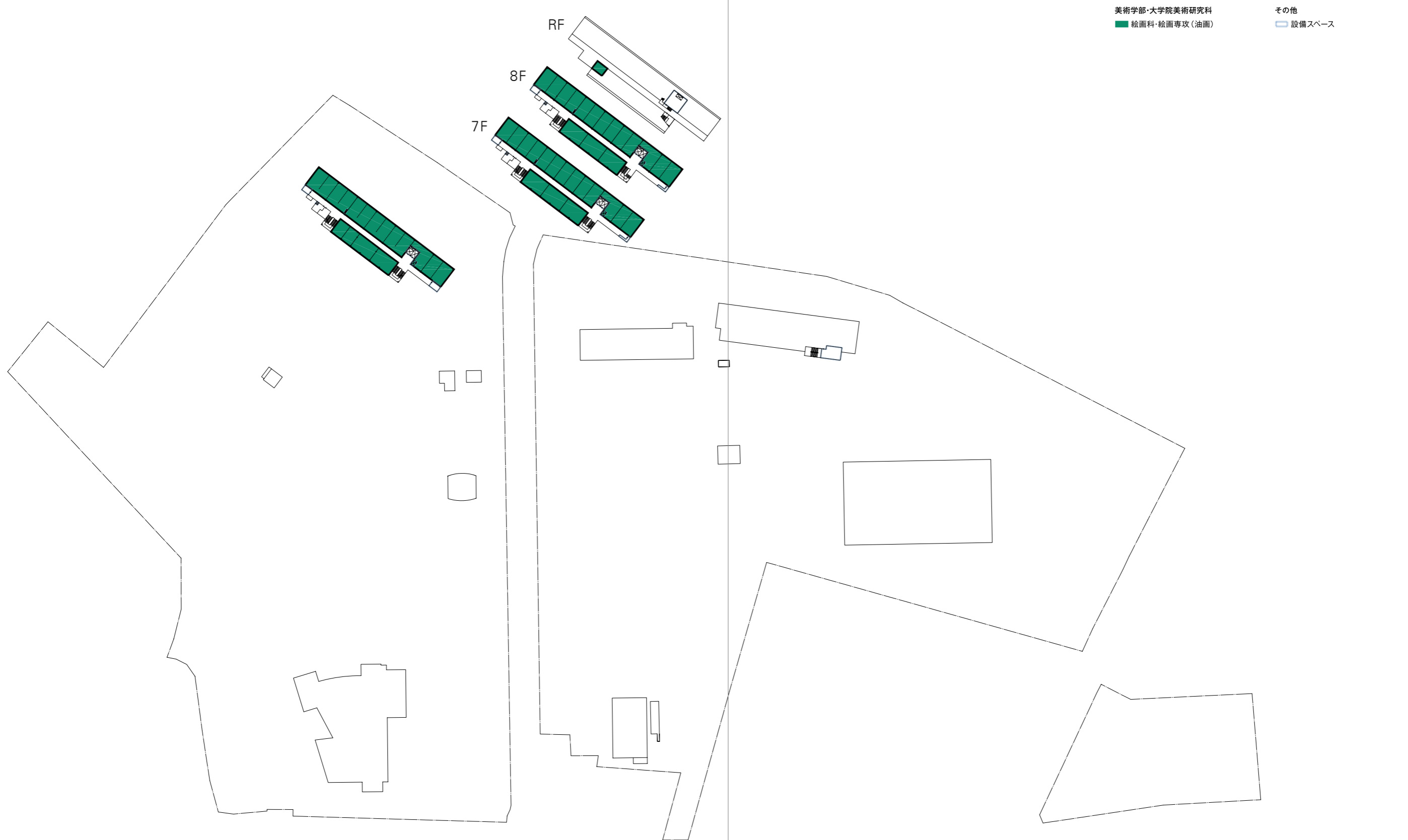
- 事務局
 - 事務管理スペース
- その他
 - 共有スペース
 - 設備スペース

00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10

5F

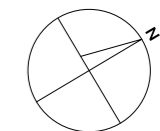
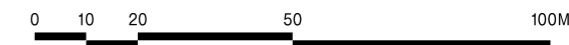


00
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10



美術学部・大学院美術研究科
 ■ 絵画科・絵画専攻(油画)

その他
 □ 設備スペース



6F 7F 8F RF

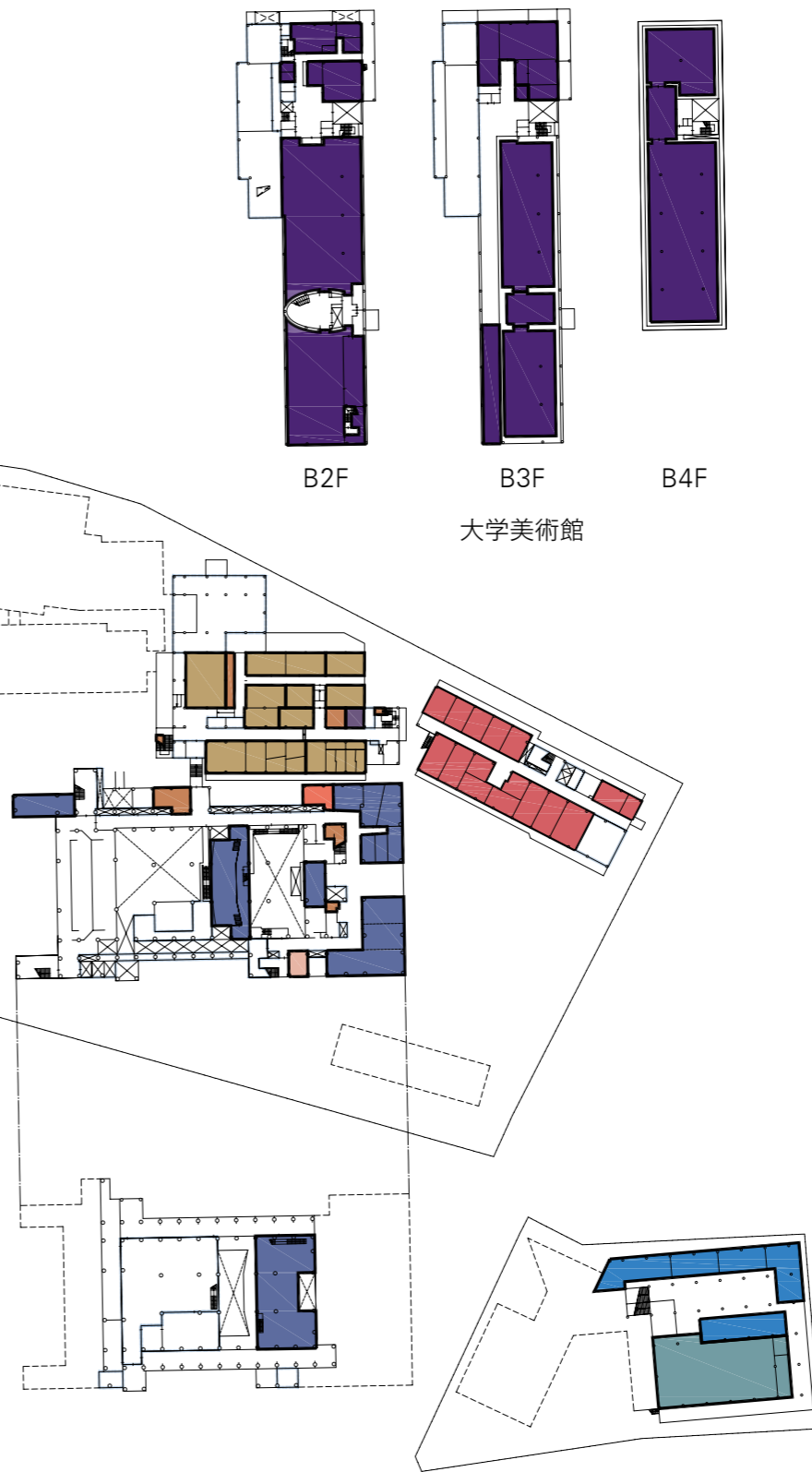


MBF

MBF

MBF+2300

BF



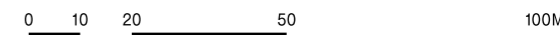
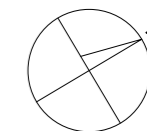
B2F

B3F

B4F

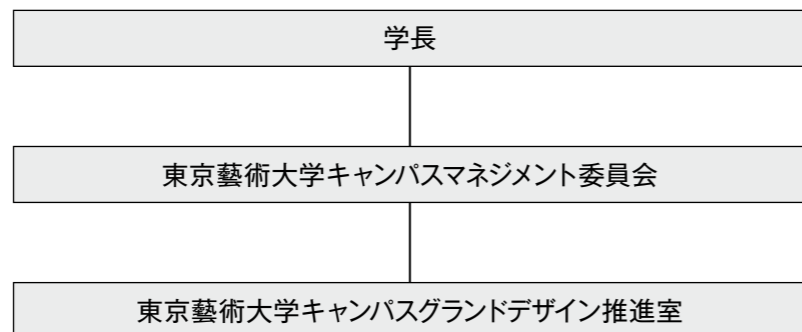
大学美術館

- 美術学部・大学院美術研究科
 - 建築科・建築専攻
 - 文化財保存科学専攻
 - グローバルアートプラクティス専攻
 - 附属写真センター
 - 保健体育
- 音楽学部・大学院音楽研究科
 - 器楽科・器楽専攻
 - 音楽総合研究センター
 - 藝大フィルハーモニア管弦楽団
- 大学院映像研究科
 - ゲーム・インタラクティブアート専攻 (2026年度より)
- 附属機関・センター等
 - 附属図書館
 - 大学美術館
 - 演奏堂
 - 未来創造継承センター
- 事務局
 - 事務管理スペース
- その他
 - 福利施設(店舗・食堂・部室)
 - 講義室・ホール
 - 共有スペース
 - 設備スペース



キャンパスグランドデザイン検討組織と名簿

組織図



キャンパスマネジメント委員会 (2025年4月)

役割	所属・役職等	氏名
委員長	学長	日比野克彦
委員	理事(教育担当)	大塚直哉
	理事(研究担当)	岩田広己
	理事(経営改革・財務担当)	武藤弘和
	事務局長	君塚 剛
	副学長(教育担当)	光井 渉
	副学長(研究担当)	福中冬子
	副学長(国際連携担当)	今村有策
	副学長(伝統継承・150周年担当)	海老 洋
	副学長(伝統継承・150周年担当)	藤原道山
	美術学部長	橋本和幸
	音楽学部長	杉本和寛
	大学院映像研究科長	桐山孝司
	大学院国際芸術創造研究科長	毛利嘉孝
	附属図書館長	松下 計
大学美術館長	黒川廣子	
社会連携センター長	伊藤達矢	
演奏芸術センター長	亀川 徹	
美術学部教授	齋藤芽生	
音楽学部教授	櫻田 亮	

キャンパスグランドデザイン推進室 (2025年4月)

役割	所属・役職等	氏名
室長	理事(総務・財務・施設担当)	君塚 剛
室長代理	副学長(教育担当)	光井 渉 ★
室員	美術学部教授	中山英之
	美術学部准教授	丸山素直
	演奏芸術センター准教授	楠田健太 ★
	大学院映像研究科教授	桐山孝司
	大学院国際芸術創造研究科教授	住友文彦
	美術学部教授	ヨコミゾマコト ★
	美術学部教授	橋本和幸 ★
	美術学部教授	松下 計
	音楽学部教授	杉本和寛 ★
	音楽学部教授	亀川 徹 ★
	キャンパスグランドデザイン推進室特任准教授	結城光正 ★
	キャンパスグランドデザイン推進室特任助教	君塚和香
	施設課長	櫻井秀浩
施設課長補佐	東海林憲生	
協力者	美術研究科デザイン専攻2022年度修了生	島田智世
	美術研究科デザイン専攻2024年度修了生	江原若菜
	美術研究科先端芸術表現専攻修士1年生	島村 凜
	美術学部デザイン科2年生	福原明葉

★：キャンパスマスタープラン策定プロジェクトチーム

東京藝術大学キャンパスマスタープラン2025

上野キャンパス編

-

-

-

企画

東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室

東京藝術大学施設課

-

編集

結城光正

編集補助

小屋竜平

-

デザイン・編集協力

川越健太

デザイン補助

島村凜

-

イラストレーション

島田智世

pp.096-097

江原若菜

pp.096-097

福原明葉

pp.096-097, p.103

-

写真

東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室

川越健太

p.008,011,013,021,035,059,070,075,076,079,083,098,132,136, pp.146-147

-

-

-

発行日

2026年3月31日

-

発行

国立大学法人 東京芸術大学

-

印刷・製本

株式会社 八紘美術

-

-

-

本書の図版および文書の無断転載を禁ずる

